女人藝術

九月号

別冊附録「女人大衆」



MARVEL
登録商標
貴下の御満足を
全ふする蓄音器は
國產蓄音器
の最優秀品
マーヴェル
音色明快
音量强大
堅牢耐久
本器を試聴せずに蓄音器
を求めらるゝは早計なり
專賣特許・新案登録
No.1-¥60
No.2-¥75
No.3-¥95
No.4-¥150
MARVEL



最も新らしい個性的な化粧とは！

あなたの美しさを一層引きたゝせる役目のお化粧で御座います。お化粧下、おしろいのとき水にヘチマコロンをお使ひになれば、お肌はかがやくばかりなめらかに美しくなり、お化粧したとは思はれないお化粧が出來上ります。ヘチマコロンをお擦込になつた上にヘチマクリームをお使ひになれば日やけ肌あれを防ぎ殊に粉おしろいのつきを非常によく致します

お髭剃のあとによい

ヘチマコロン

姉妹品

ヘチマクリーム

定價

ヘチマコロン	大瓶	五十錢
	小瓶	三十錢
ヘチマクリーム	大瓶	七十五錢
	中瓶	五十錢
	小瓶	三十錢



本舗 天野源七

東京日本橋横山町

女人藝術九月號 目次

—[illegible]—



秋にあつた小話



別册附錄
女人大衆
婦人と社會主義運動
時の問題
聯盟員二回發表
小說パン一片



教育は藝術から——。完全な教育は、學校と、書籍と、劇場の三つによつて施されるといふ觀念の下に、學問と情操との男女共學をされこゐうロシヤの學生達。



“ウツリ・ク・ムオツリ”



各方面の專門家を組織の中に網羅した事は、ソビエットの大きな力だと云はれてゐます。殊に政策に宣傳に科學的方面の活用は最も盛んで、都會の生活を農村へ、農村の生活を都會の人達に理解させるために、活動寫眞の應用されてゐることは素晴らしいものです。

寫眞の右は農村生活の一場面、右は、未組織者を組織する指導者の教育。



この婦人達の愛す可き眞面目な顔付きを御らんなさい！

リツオム・ク・リツウとはロシヤ語で「顔と顔」――（都會の顔を農村の顔へ）――とでもいふ意味です。都會勞働者と、農民とが眞に結合することは、ソビエツトの大きな成功を意味するものであるとされて、多大の努力を拂つてゐるソビエツト・ロシヤでは、これを一つのスローガンに揭げて、「都會の面」と「農村の面」とを接合させる事に骨折つてゐます。外に第何次かの新經濟政策を施いて資本主義と妥協しながら、除々に内政を整理しつつあるソビエツトは都會對農村の問題にも漸次明るい成功を收めつゝあるといふ事です、

寫眞は都會で發行された雜誌類が直ちに農村に配布され、婦人達がそれを手にしてゐるところです。





鬪ひ——藤田嗣治畫—巴里に於ける日本畫展覽會出品（記事參照）

馬糞と星

田中清

その詩句は簡明清楚、日常眼前に介在して而かも凡人の情感に觸れ得ざる、消えゆく物を捕へ來つて生命を與ふ。著者の筆緻と感情の動きはその短章のうちに躍動して、讀者の胸に新らしき力を以つて迫るものあるは既に周知の事實――その新著の出づる度詩壇にセンセイシヨンを起せる氏は今、最近の作を蒐めて二百餘頁の一卷を上梓せんとす、田中氏の詩を愛する士の嬉びは大いならむ、著者の詩集「**馬糞と星**」に期待を以つて俟つてほしい

（**定價一圓**）

發行所
東京市日本橋區通三丁目
振替東京一六一七番

第一輯

時雨脚本集



發行所 女人藝術社

振替東京七五八二五

——ある時期を一轉機として、彼女らしい甦生が努められた。そこに夢の床から離れようとするものの苦しさと惱ましさとがあり、それを生き拔かうとするものの煩ひと惑ひとが來た。僕は彼女のこの蹉跌を見て來た。そして彼女はかなり十分に內省と認識とに月日を費やしたのだつた。その効果はこの數年間に徐々に現はれ、若し、性格的な疳癖に、內なるものを傷けられることがなくば、今後自然な發展を示すことが出來るであらうと信じてゐる、此の集に盛られたものは、多くこの再生期——展開期の作だ。一個の女性が、いかに生活の望みと空しさとのすがたを見たか、光りと無知との交錯を見たか、ここに讀者の興味を繋けることは慥かに出來る——

三上於菟吉氏序

內容

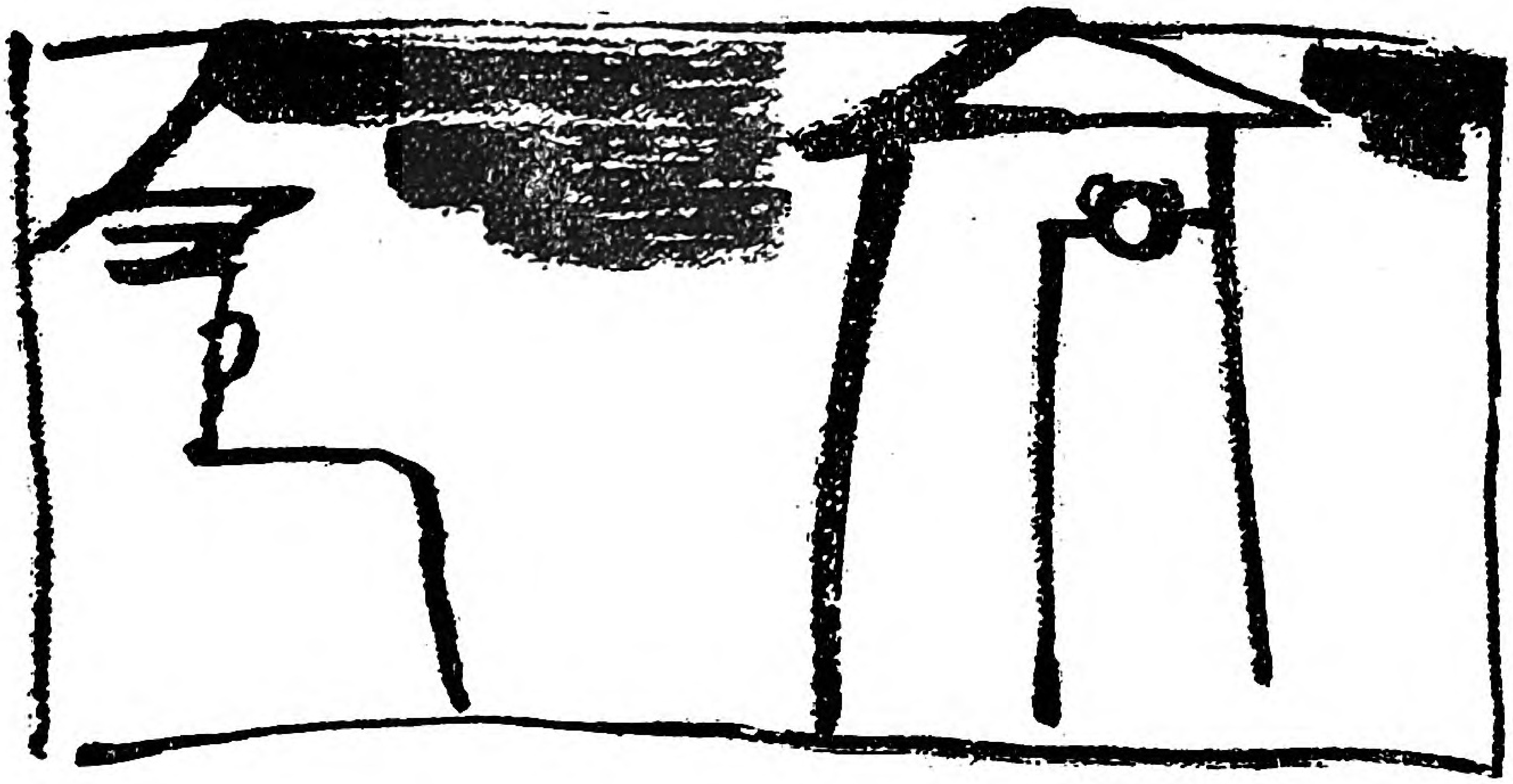
- ミイの生れた朝
- 月に住む人
- つくしの空
- 業火の洗禮
- 北國藥研谷
- 暗夜
- 氷の雨
- 犬
- 手兒奈
- 西の空

定價金貳圓

女人藝術

九月號





お巡査さんと花

森　三千代

わたしの片方のフェルトはきれてゐた。
わたしの片手にはくたくたになつたバットが殘つてゐた。

—オイ　どうした、夫はあるのか。
—えゝ。
—オイ　その蟇口はでつかいな。
—これはハンドバッグ、バニテイバッグとおなじです。
—なに？　ハンドバッグ？　洋食ぢやないか。
—アハ、、、、、。
—馬鹿!!!

白い夏服のお巡査さんの心の中に、一輪の花を投げたかつた。



酔つてることの嫌ひなお巡査さん。
キッスや、夜あるきの嫌ひなお巡査さん。

うぶらしくしようかしら、
泣いてみようかしら。
それとも傳法に出ようかしら。

時々うんと睨みつけながら
笑つてゐるお巡査さん。

白い手帖がすつかりうづまると
俸給が昇りますか？

調べがすむと、いやにていねいに
歸り道を教へてくれるお巡査さん。

お巡査さんの首に花を挿さう。
お巡査さんは、直立の姿勢で擧手してゐた。

交番に立つてゐる×××さんは
丁度いゝ花挿です。

第二巻第九号、四頁から十七頁は、高群逸枝著「小ブル藤森成吉に與ふ」が掲載されておりましたが、同氏の著作権継承者の了解が得られませんでしたので、本復刻版では割愛致します。

(龍溪書舎)



簡單な質問（藤森成吉氏へ）

八木秋子

「曇り日の獨白」と題して前々號に私の書いた公開狀に對して極めて簡單ではありますがあなたから回答を頂いた事は愉快でした。それは至つて簡單に不用意に表はされる言葉やしぐさによつて人間は、最もよくその人の全幅を物語るものであるといふ單純な理屈が裏書されて、あの小文はあなたの觀方なり理解なりの上に藏された誤謬や獨斷が明かにされ從つてそれを通して私の見解の上に一つの示唆を與へて下さつたものであつたからです。

小ブル的な見解――この言葉には何の說明もないのですが、凡てのマルキストが自分達以外の者等に對して投げる一つの常套語だと通俗的に解しても、この小ブルといふ言葉はこのまゝそつくり貴方にお返しすべきものではあるまいかと私には思はれるのです、然し人の生活態度やイデオロギーを側面的に觀ることによつて小ブル的であるとかないとか、そんな言葉のとりやりは何處まで行つても下らない水掛論でしかない事が明かであつて見れば、私は今更貴方に說明を求めやうとする熱意も興味もないのです。

しかし、貴方は尠くとも「あなた方は」といふ複數の文字によつて私以外の他の人々を指し示された。して見れば私としては一應の說明を求めやうとするのは當然ではないでせうか。どういふ意味で吾々を小ブル的と斷定なさるのか？……

非常に完全に小ブル的である危險があるから勉强せよ、とあなたは親切にもいはれる、しかも私は勉强することによつて殘念ながら愈々マルキシズムに對する疑念と誤謬を拾ひ出して行かなければならないのです、私の知り得たことはすべてのマルキストがあまりにも本統のアナキズムを「知らなさすぎる」といふ一事でした。何時でしたか貴方がマルクスとイプセンを比較してその現代に持つ新らしさに就て論じられた時、中村吉藏氏が「個人主義的アナキズムと共產主義的アナキズムについての區別も知らずに得々としてゐる」と嗤つた言葉のやうに――。

あなたがたの考へ方は非常に單純です。ブルジョアとプロレタリアの區別を單に生產機關を所有するものと、所有せずして自己の勞働力を賣る事によつて生活の手段とする者、とに片づけてゐる。同じプロレタリアートの間にさへも相剋しあふ關係のある複雜な社會の諸相をそれほど簡單に理解して、人間の自由とプロレタリアートの自由の相違を將來社會に結びつけやうとする。しかし私は今こゝでそれ等のことやブルヂョア政權とプロレタリア政權の差異や、貴方の訂正なさつた二つのイズムが究極において同じだといふ言葉を批判するひまがありませんので、改めて稿を起し、あなたがたのいはれる「ロシア農民の小ブル性と反革命的要素」について、それとプロレタリア政權との關係についても來月號に書きます。

玆ではたゞ簡單に、あなたが私達に與へた小ブル性といふ言葉をどういふ意味に受けとつて可いか、それに就いての示敎を乞ふに止めませう。



演劇時評

―新劇の進路に關して―

上田文子

1

昨年二月の國會議員普通選擧に於いて無産黨に對する極端な彈壓の火蓋を切つた田中前內閣は、所謂三・一五、四・一六事件以後、去月彼等が骸骨を乞ふに至る迄の過去一年間に於いて、殆ど、週期的に××黨檢擧に痲痺し、無産者運動の組織に完膚なき迄の迫害を加へた。それは實に、鎖國當時に於ける德川幕府が、キリスト敎徒に加へた彈壓を想起せしめる程、嚴酷な暴壓であつた。「今にマルクスやレニンの踏繪が初まるかも知れない」とあるプチブル・インテリゲンチヤアが冷嘲したが、今後新內閣は凡らくこの献案を冷嘲することなく、備考事項として入念に記述するであらう。それとも、もつと現代的な、唯物論的な踏繪を彼らは考究し、或ひは既に、案出してゐるかも知れない。反動時代の爲政者は、往々、思想的に少年期へ逆行し、失笑に値ひする勇敢な政策を眞面目に實行するものだから。

ところで、前內閣が警察力を擧げ、暴力團をさへ利用して、沈壓し剿滅に努めた努力の結果はどうであつたか？無産者運動は事實、後を絕つたか？これを傍觀する社會は果して彼らの國粹主義に唱和し、雷同したか？斷じて否。

彼らは燃えあがる火を消さうとして液體を注いだ。しかし不幸にして彼等の狼狽した目には、水と油とを見極める餘裕がなかつた――といふより、彼らの周圍には油以外の液體はなかつたと言ふ方がより辯證法的に適確な表現であるかも知れない――兎も角彼らは水を注ぐべき火へ油を加へてしまつたのだ。組織を破壞された表面の政治運動についてはこゝに言はない、あらゆる地下運動に於いて、或ひは社會の不況と契機して頻發する工場乃至大商店の爭議に於いて、所謂「學生事件」のこれも頻發に於いて、テロリストの橫行に於いて、普選以後、三・一五事件以後の過去一年間を鳥瞰視する時政府は實に全力を擧げて、階級鬪爭の尖銳化白熱化を助成し、同時に曾て、階級意識を有さなかつた大衆にその自覺を促す「進步的」

な役割を努めた結果になるのである。灰色の面紗を透しては、黑白は辨じ難いかも知れない、しかし一度、面紗の落ちた時、强い光線に眞面した時、われ〳〵は斷じて白と黑とを見誤らないであらう。そして、さういふ明瞭な狀態に於いてのみわれ〳〵は、色盲となることを免れ、不可避的に眞理を言明するであらう――反動政府の彈壓に依る階級爭鬪の尖銳化はわれ〳〵を色盲の境に置くことをゆるさない强い、嚴しい眞晝の光線である。

この尖銳な光線を最も多く呼吸し、最も明確に投影した敏感な層は、社會のどの方面に多くみられたか？必然的に自覺し、或ひはしつゝあるプロレタリア大衆を別としてわれ〳〵はその最も烈しい反影を、求眞的な妥協をゆるさない若き學研と、殆ど同じ意味から、若き藝術家、（主として文學演劇に從事する）の層にみるのである。

プロレタリヤ文學、プロレタリア演劇主張はこゝ一兩年漸くジヤアナリズムの主流に出で、廣義な批判の對象となり得た。概念に於いて、それはすでにずつと以前さうなるべきであつたに拘らず、既成ブルジヨア文壇の唯心的藝術觀が存外に深く讀書階級、觀劇階級の間に浸透してゐた爲、白蟻のついた壯麗な樓閣は中々崩壞しなかつたのであるが、社會の實際運動が尖銳化されて來た爲、「存在は意識を決定する」定義通り、藝術家自身も、そのジレツタントも、漸く、唯物論的眞理を獲得し、藝術の巧利性を容認するに及んで、（中には、隨分唯心的なヒロイズムや、好奇的な雷同性に支配されて、プロレタリヤ藝術に向ふものもあるが）初めてプロレタリア藝術は、今日の流行的とさへ見られる隆盛に到來し得た。作者としても、この兩三年、漸く過去の唯心的藝術の殘滓を、內容にも、表現にも全然止めない、唯物論的な、――卽科學的な純粹なプロレタリア藝術が生じる樣になり――又、現に續々生じ樣としてゐることは慶賀に耐えないが、これらの作者が如何なる社會狀態の下に産れたかを必然的に知悉すればする程、われ〳〵は今日の社會に藝術の「巧利性」を運用する必要をいよ〳〵益々痛感せずには居られない。

一見、不必要の如き序論に紙數を費した私は、こゝに、プロレタリア藝術の巧利性の運用に關して、近時左翼的色彩を多少に具備する樣になつた新劇――これには左翼劇場の如き純左翼の團體をも加へて――の進路を討究してみたいと思ふ。

2

これを論じるに當つて、私は先づ便宜上、今日普通新劇と稱呼されてゐるもの丶種類を次の樣に分別して置きたいと思ふ。

1、プロレタリヤ・イデオロギーに立脚して演劇を階級爭鬪の武器として巧利的に運用せんとするもの、（左翼劇場の如き團體。）

2、衆性を自覺することによつて演劇の大藝術至上主義より轉換し、プロレタリア演劇へ向はうとしてゐるもの。（新築地、築地殘留組、新劇協會、心座の如き。）

3、從來の唯心的藝術觀を固守するもの。（喜劇座の如き。）

第三のものに對してはこゝに論じる必要を認めない。

第一のグループは、プロレタリア文學の精銳と同じく、最近著しく發育し成長して、漸く內容外形具備したプロレタリア演劇の一定形を造らうとしてゐる。正月の「ダントンの死」の興行成績によつて、六月末の「全線」の煽動的効果に於いて左翼劇場はたしかに、他のすべての新劇運動者を瞠目せしめ、新劇界に一のエポックを作つて果然、新劇團の中心勢力となつた。（春以來、既成の新劇團が續

寢左傾する傾向の一因を私は左翼のダントンの死の好況にみてゐる。）藝術の巧利性を標榜するプロレタリア・イデオロギーに立脚するこの種類の劇團が、今日の社會の狀態に於いて、諷刺劇よりも煽動劇を好んで上演する理由も明解されるし、先月の全線の如き、實際に於いて傑出したものを演出してゐる以上、今後の進路に於いてもこのグループが社民的なサチリック・プレーを避けて、主として煽動劇を取るであらうこと容易に豫測される。私は勿論その傾向を歡迎し度いと思ふ。他の新劇團の場合とは異つて左翼劇場のみはさういふ傾向をとることが、彼らの屬する集團のイデオロギーに合せて些の矛盾も發生しないからである。彼らの進路に於いて最も戒心すべき障害は、レニンの所謂「小兒病的傾向におちいり、イデオロギーを誇張することによつてイデオロギーを歪曲し、狹義な、彈力を伴はない固定したものとなる點にあると思ふ。その點に於いて、この種のグループは、議會に參加し、反動的勞働組合に入る程の戰術を利用して、決定的に大衆をリードしてゆかなければならないと同時に、社會認識のバロメーターを片手に握つて、他のすべての實際運動と等しく片時たりともその所謂現狀――經濟狀態、政治狀態によつて規定される刻下の社會相を――等閑し、乃至輕視してはならない。彼らは實に相場師の如く、機敏に、大膽に、あらゆる社會狀態の――反動的な、進歩的な、經濟的好況の、或ひは不況の、消極的な、或ひは進取的な――段階に投機し、これを前進せしめる歴史的役割を有してゐるのであるから。プロレタリアイデオロギーを神化し、實踐上唯心的傾向へ後退することなく、イデオロギーを何處迄も、能動的な、人間的な狀態に於いて批判し、清算して邁進してゆくことこそ、彼らの最も、愼重な前衞的任務であらねばならない。この打算をさへ過らないでゆくならば、このグループは、傾向的にも、技術的にも正しい新興大衆に訴へる今日の――或ひは明日の演劇として今後最も優秀なものを社會に賦與するであらう。同様の意味に於いて民衆藝術としての演劇本來の役目も、イデオロギーの一致に根源して、今後、このグループの運動の中に、その發展の過定を取るべきことを私は深く信じて疑はない。

3

次に第二のグループの進路については、――實は私が論究し度いと思つたのはこの種類の劇團のコースに外ならないのだが――第一のものに對する如き、樂觀的な期待をもつ事はゆるされない、彼らに對しては多くの複雜な不安な豫期がわれ〱を支配する。これは何故であるか？。ある人々はいふかも知れない。彼らは今、斷然進歩的な過定にある。彼らの上演目録を見給へ、悉く、左翼イデオロギーの鮮明な作品に滿されてゐるではないか。彼らの興行政策を見給へ、著しく大衆的に進出して來てゐるではないかと。表面の事實は全くその通りである。私自身、二三ヶ月以前は、たしかにこの表面的事實を歡迎して、新劇の方向轉換を祝福したのであつた。しかし、今日――去月新築地の「蟹工船」をみ、築地小劇場の「故郷」の脚色を見るに至つた今日、冷靜に思惟してみると、われ〱は決してこれら新劇團の轉換に迎合して、輕卒な拍手を送るべきでないことを痛感する。それどころか、これらの劇團が（こゝには比較的定期的な劇團、新築地、築地小劇場を引例とする。）重大な危機に相遇してゐる事實を看過することは出來ない。問題は、これは何故であるか？に戻る。勿論、これは、彼らがその轉換に於いて、その行

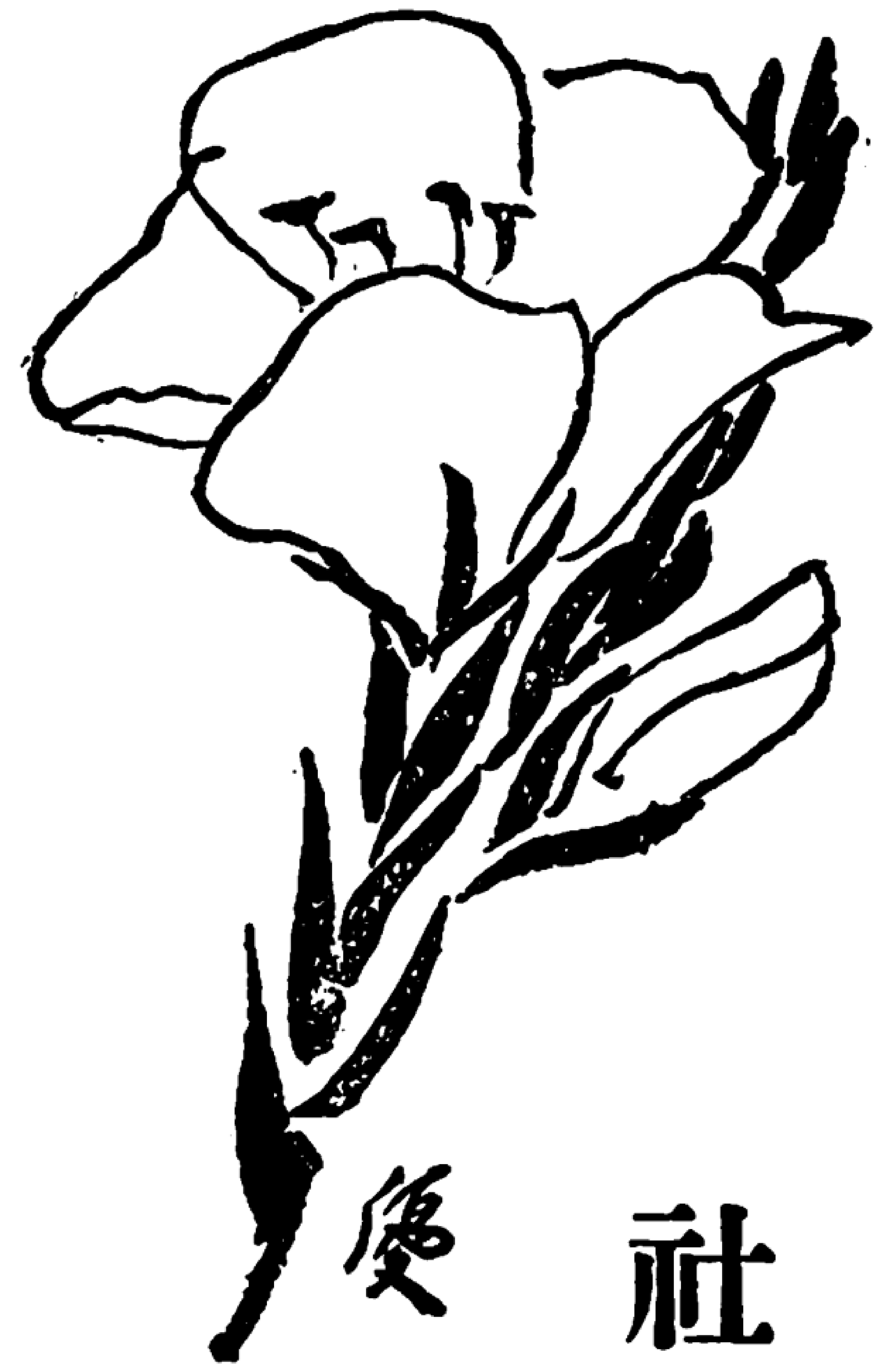
動に先行すべきイデオロギーの把握を不確實のまゝに止め、漠然、新興階級にアッピールする演劇を第一義的の演劇として——即ち、イデオロギーよりも演劇それ自身を重大視したプチ・ブル的誤算に起因する當然の歸結と見るべきである。この點に於いてこれらの劇團は、社民的といふよりむしろ、プチ・ブル・インテリゲンチャァの必然的な苦惱——沒落へか、更生へかの——の其具體化の相として見られる。そして彼らが殼を破り、更生し、前進してゆくと信じてゐる裏に、既に、手足と頭腦の一致しない間隙が生じ、陷穽が胚胎してゐる、六月新築地の母をみた時、私は小説の戲曲化の弊害が今後必ず蔓延するであらう豫覺を感じたのであつたが、不幸にしてその豫覺は七月の築地の故鄕の戲曲化及び新築地の蟹工船の脚色に露骨に適中したのであつた。前者については劇場當事者が、あの小説の何處に戲曲化する程の演劇的魅力を見出したか私には殆ど解らなかつた。それ丈にあの小説を如何に解體し、如何に演劇として再構成するかといふ點について私は可成りの期待と同時に多分の危惧を抱いて舞臺に向つた。しかしその舞臺は單に私の豫覺し、危惧したところのものを餘りに適確に反影したにすぎなかつた。先月の新築地の母に原作の逐字譯を不滿に思つた私は、こゝで、第二の驚くべき平面的な逐字譯に出あつてすつかり憂欝にさせられてしまつた。そこには戲曲的構成といふべき正確な表現は全然見られないで色彩の稀薄複寫があるのみであつた。そしてその原作自身、實話的な小説としても構成の不充分な迫力の稀薄な作品であるに於いては、われわれは只この戲曲化を如何に好意的に解釋してみても改造の懸賞小説であり、おあつらへ向きに取材が階級鬪爭の挿話である點等一言にしていへばジャーナリズムの利用以上には許價することは出來ない。ジャーナリズムの利用にもとより異議はないが、眞の階級的イデオロギーの見地からこれをなすものは決して、その利用法に於いて築地の如き過誤を犯さないであらう。演劇「故鄕」の如きが社會に促進せしめる今日の演劇であるなどと信じてゐるものがあるとすればそれこそ階級鬪爭を輕視し、社會の現狀を看過してゐる憐れむべきオプテイミストである。かくの如き戲曲を上演して、經濟、思想兩方面の難局から逃れ樣とする劇場當事者、その皮相な流行的「左傾演劇」に迎合して拍手を送る觀客の層、いづれも過渡期のインテリゲンチャァの不可避的な相の代表と見ていゝであらうが、この如き狀態を繼續して、根本的なイデオロギーの把握を等閑視して置くならば、彼らは、時代の激浪に翻弄されて、結局今後のより反動的な時代に於いて極端に反動化するおそれを多分に持つてゐる。同じ傾向は新築地の最近の進路に於いても見られる。「飛ぶ唄」「生ける人形」にスタートを切り「母」「蟹工船」を演出し來つたこの劇團の方向は歷然一定してゐる樣に思はれるが、事實に於いては矢張り、藝術とイデオロギーの問題で可成り唯心論的な矛盾撞着を有してゐる樣に思はれる。尠くとも藝術を社會と切りはなして考へないまでもそれを社會と平行させて考へる程の潔癖はありさうだ。私は一概にかういふ過程を否定するものではないが、さういふ思想的過程にある劇團として、彼らが餘りに猪突的に純左翼の作品に邁進してゆくことはむしろ小兒病的な排すべき傾向であると思ふ。今度の公演での、蟹工船の失敗の如き（私はたしかに失敗だと思つた。）その代表的な範例である。そこには勿論、脚色の不備が——これは逐字譯ではないが——多くの禍ひをなしてゐるが、それにしても、當事者がこの作品を短期に戲曲化しやうとした意圖は、「故鄕」の場合同樣な、

餘りに皮相ではあるまいか。この作品が近時プロレタリア文學の白眉であることを認める點で、私は人後に落ちないつもりだが、今度公演の舞臺をみて、私はつくぐく、完成した小説の戯曲化が至難である點を認識したと同時に、演劇に利用しやうとして小説を讀む特異な場合に於いてのみは小説を單なるストーリーとしてよみ、文學的魅力に誘引されてはならないといふことを學び取つた。從つて文學として優秀でない作品の中にもよき演劇の根はひそんでゐ樣し、傑出した文學の中にはそれを見出しがたい場合もある。この本末を誤つて演劇が文學を利用する時、往々にして今度の蟹工船の如く、羊頭を掲げて狗肉を賣る誹りを受ける結果を産むのは當然である。私はこゝで蟹工船の細評をする事を避けるが、原作が演劇性を有するか否か、或ひは脚色の是非等の問題を別として、演出者、俳優諸氏の側からみても新築地はこの作品を上演するに適した劇團ではない。イデオロギーに於いても生活表現に於いても左翼劇場をのけてこの作品の上演に適した劇團は見あたらない。それならば、純プロレタリア文學の戯曲化乃至プロレタリア戯曲は左翼劇場の如き團體以外では表現し得ないといふのかとある人は問ふであらう。私は勿論、諾と答へる。それならば、左傾的過程にある新劇團は何をすればいゝのか、彼らを時代の潮流のまゝに押し流しても、ゝのかと次の人はいふであらう。私はこれにには勿論否と答へる。

私はこれらの轉換過程にある新劇團に先づ自身の足下をみることを切望する。そしてあらゆる勿體ぶつた假面をすてゝ赤裸の自己の立場を社會狀態に適應させて、進化の方向へゆくことを切望する。その意味に於いて私は、これらの既成劇團が、革命的な純プロレタリア演劇に到達するには未だ多くの過程を要すると思ふ。從つて、煽動劇で正面からアヂすることは當分左翼等のグループに委せて置ゝで彼らは專ら、ブルジョア社會機構の心臓に食ひ入つた辛辣な社會喜劇、或ひはサチリック・プレイの如きを上場すべきであると思ふ。その意味に於いて新築地の「生ける人形」は舞臺と樂屋と觀客席とが眞に融合してゐた點で上乘のものであつたと思ふ。社民的であるといふ批難に神經を尖らせる必要はない。根本原理に於いてその段階に達してゐないものが、身にあはないレデイ・メイドの革命的衣裳を着けて得々と濶歩してみたところで、それは結局孔雀の羽をつけた鴉に過ぎず、眞のプロレタリア藝術の巧利的任務を遂行し得るものでは決してない。われくはあらゆる過程を承認する。問題は所與の過程を常に社會進化の方向に向けて前進せしめてゆく態度如何にある。各々の過程の段階に於いて正しい認識と緻密な清算が行はれる時間が必要であることは論をまたない。

プロレタリア生活及至階級爭鬪を直接扱つた作品によらなければ演劇が階級爭鬪の武器として進歩的役目を果し得ないと考へることはそれ自身、唯物史觀の原理を歪曲し、藝術の巧利的運用を不便にする狹隘な誤謬である。

總ての道はローマへ通ふ――とカトリック教徒はいふ。既成新劇團の人々はこの古い言葉を良い意味に利用することによつて各自社會進化の前衛たるべき正しい進路を見出すであらう。



社會時評

永島暢子

女學生の自殺と教師の責任

ジャン・バルヂャンは姉の子供達の飢ゑに泣くのに耐えかねて一片のパンを盗んで獄に投ぜられた。彼等の一家は決して怠けて居たのでもなく、彼ジャンも日々職を得る爲に奔走して居たのであつた。働いても／＼尚一家を養ひ得ない現狀、更には働かうにも職を得られない、從つていつも空腹を抱えてゐねばならない現今の無産階級の狀態は、幾多のジャン・バルヂャンを孕みつゝあるのだ。腹のすいた者の前においし氣な食べ物を見せつけておいて、それを盜つて食べたとて罰するとは、あまりに苛酷な道德であらねばならぬ。しかしこの苛酷なる道德に責められて、はかなくも魂を狹めて行く人々を目擊する事も私達には少くないのだが、七月十五日、都下の新聞が一齊に掲げた順心女學校生徒の、盜みを悔いての自殺は、今更ながらに我々の前に大きな問題を提供した。

彼女は貧しい一下級吏員の妹であつた。女學校にも行けぬ苦しい境遇なのだが、伯母の援助でどうにか學校に通つてゐた。だが、盜みをした當日は、決して學校に納める金に困つてゐたのではなかつたから、誰にでもよくある出來心から盜つたものだらうといふ事であつた。學校の教師も出來心であらうからあまり叱責せず、單に將來を誡しめたに過ぎない、と辯解してゐる。彼女は純眞な少女である。まさか計畫的に盜みをする程の大膽さはないであらう。けれどその出來心、突嗟にそれを盜らうと欲した心は、常に彼女が、金に不足しがちであり、金の不足によつて起る種々の口惜しさを痛切に受けて居たに因ると解する事は間違ひであらうか。殊に彼女は、勝氣な少女であつて見れば、貧乏を貧乏として平氣でゐるよりも、それに反撥的な心を以てゐたであらう事は、容易に推察出來る事である。

人の物を盜るといふ事の罪惡觀は、現在の我々には既に本能となつてゐる。故に盜つたといふ事實だけでも彼女は、充分自責してゐたであらう。それなのに教師からは強く叱られる、父母の名譽は持

ち出される、友達に對しては恥かしい、世の絶望を一身に擔ふて死を急いだ彼女の姿を思ふ時に、一掬の涙なくしては考へられないではないか。

私達は私達の經驗と、教科書に書かれた修身の材料を金科玉條と信ずる一種の教師型から推して、少女が如何に教師に叱責されたかは、ほゞ想像が出來る。「叱責したのは子供が自白したし、將來を思ふからで云々」（讀賣）とはいふが、私共の教師への詰問は、生徒の將來を思ふより、まづ彼女の現在を愛せよ！である。教師の人生觀に立つて少女の人生をも云爲する所の訓誡？は、どんなにか傷ついてゐた少女の心を痛ましめた事であらうか。こゝに於て私は一つの事實を想起する。私は曾て寄宿舍生活をしてゐた際、一人の生徒も亦近村から出て、同じ寄宿舍に起臥してゐた。所が近村ではあり、その町に親戚もあつたので、その生徒には一度も書留郵便が來た事がない。寄宿舍生活と書留郵便とがつきものと考へてゐた舍監は、この生徒の金錢の出納に疑ひを持つた。たまたま舍內に盜難事件が起つた時に、舍監は何の躊躇する所なく、その生徒に向つて將來を誡めて自白を強要したのである。なんといふ責めても責め足りぬ態度であり教師の越權であらうか。しかしかうした事實は、現在の學校教育には繰り返されてゐるのだが、たゞ今回の如く異常なる事件となつて突發しない限り、表面に浮かび出て來ないのである。

私達はこの事件を、單に少女の出來心の生んだ悲劇として見すごしてはならない。この中に生々しくも貧苦に喘いでゐる無產階級の子の血のにじむ姿を見るであらう。少年少女をして支配階級のよき奴婢たらしめやうとして、彼等の勝手につくつた出世とか、名譽とかの影像を振り廻はし、またそれによつて自分の與へられた權利をそれ以上に誇示する所謂教育家をも見る事が出來るであらう。私達は之等を剔抉し、綜合して考察する時に於てのみ、この悲劇が解釋され、少女の死の齎らした意義が、はつきりと分明されるであらう事を信ずるのである。

御苦勞樣な誤運動

稚氣愛すべき夫婦喧嘩の筋書は、「このおたふく奴！」と怒鳴れば「どうせ私はさうですよ」とすねて見せるが定である。それが少し手強くなれば、「ではあなたはなんです？」と反撥的に出る。こゝで夫婦喧嘩も往々大きくなり、近所の有閑人の退屈しのぎにもなるといふものだが、今度大阪に起つてゐる大阪商業會議所巨頭連とキリスト教婦人矯風會の御連中の、カフエー取締りに關する建議案を中心としての談詰談判は、夫婦喧嘩の烏渡手強い方の感がある。事の起りは、大阪商業會議所の巨頭連が、何を發心してか社會風教のびん亂を氣にし出し、その原因はカフエーの濫設にあり、しかもそこの女給さん達が、盛んに風紀をみだすからであるから、之れ等を嚴に取締れと內務省に陳情する事とし、御苦勞樣にも建議案を携へて上京した事に端を發する。これを聞いた矯風會の御連中は、御自身達の日夜の藝者遊びは棚にあげておいて、カフエー取り締りとは片腹痛い。まづ藝者遊びをやめてから出直して來い、と如何にも尤もらしい、閑な時には立ち止まつても見たい事である。けれどそれは犬も食はぬ夫婦喧嘩以外の何物でもない。第一俺の儲けた金を俺が何に使はふと勝手だとするブルヂョア主義の親玉の商業會議所の御連中の事である。今日の華美の原因は、彼等ブルヂョアが作つたものであり、風教の破壞も、彼等の支配的心理が、人を人とも思はぬ行

爲が原因してゐるのだ。歐洲大戰が齎らした財界の好景氣は、プロレタリアートの虐使と困憊との上に成つたものであるにも拘らず、彼等は、金が自然に目の前に生れて來たかの如く、歡々羅遊びをして、世を驅つて風潮を浮華ならしめた事は、未だ記憶の新たなものがあらう。現在に於ても、搾取の爲に、或は享樂の爲には、婦人の貞操などは顧みない商業會議所の御連中の事だ。かうした人達が、社會風敎のなんのといふ事からしてまづ私達には眉唾ものだ。果して建議案の內容を審さに點檢して行くと、彼等の今度の擧を企てさせた腹が讀めぬでもない。卽ちいふ。カフエーの亂設から風紀びん亂者が出來、市民衞生上にも弊害が少くない。また間接直接に產業の發達に影響を及ぼしてゐる。だから既設のカフエーには女給の風紀びん亂を嚴重に取り締ると共に、營業時間を制限し、將來その增設を一定の區域に限定せよ、と。

　資本家は、婦人勞働者の貞操を提供し、勞働者の移動率を少なくしやうとした事は、我國產業史の物語る所である。また婦人坑內勞働の禁止に反對した彼等の口實は、實に產業の强化と婦人の貞操を結びつけ樣が爲であつた。婦人を勞働によつて搾取するばかりでなく、貞操の上からも搾取しやうと企てゝゐる資本家から見れば、現在のカフエー制度、しかもどんな場末にでも根を張つて、安價な享樂を提供してゐるカフエーは、產業の發達を阻害するものに違ひない。どんな魔窟の樣なダンスホールが出來やうが、密娼的なカフエーが設けられ樣が、自分達の爲ならば、もつと澤山あつても差し支へないのだが、働く人達に安價に享樂を提供されては、利潤の上から云つても彼等には、憂慮すべき現象であらう。殊に彼等の臭さを感じるのは、今度の增設を一定の區域に定めよといふ事である。松島遊廓事件、和歌山遊廓事件、さうした利權の裁判沙汰にならずして、たんまりと甘い汁を吸つたその後味を忘れかねての目論見、さてこそ巨頭連は、社會風敎云々の議を持ち出したのだ。

　婦人は道德的で正しいとは、婦人運動家、殊にはキリスト敎信者の幻想語である。この不合理なる社會制度をも婦人の力で矯正しやうとし、婦人參政權をもその立場から力說してゐる御連中であるが故に、商業會議所巨頭連の片手落ちに厄起となつたものであらう。やぶにらみは時には美人にも見え、愛嬌があるといつても眞面目な鐵砲は打てない。矯風會員の彼等の衿首をつかまへての詰問は、私に言はせれば、やぶにらみだと冷笑するのみである。巨頭連は、ニヤニヤで女房に怒られた程にも感じないだらうし、矯風會も一時の新聞種を蒔いたのみで、また次の問題にうつり、さうして女給さん達のみは、ます〱苛酷な取り締りにます〱身を墮して行くであらう。

　心からカフエー問題を問題視して戰鬪の火蓋を切るならば、夫婦喧嘩式で行くのは、根本の間違ひであらねばならぬ。いつぞや女給さん達が、風紀をみだす廉を以て檢擧された時に、風紀をみださゞるを得ない彼女等の生活狀態、カフエー制度が判明した。その弱點をつかんで雇主は、彼女等の膏血を絞るのであり、それをまた好機として狼連が進出するのである。彼女達の日常の生活は、お伽噺でもなければ詩でもない。食はねばならず。着ねばならぬ世の中であると共に、世の風潮を批判し、自己を省察し、如何に正しく生くべきかを考へるには、あまりに社會から放り出されて居すぎる彼女達である。女給としての職業を私娼化せしめたのは、取り締られる女給さんにあるのではなく、彼女等を搾取する雇主であり、婦人をし

て玩弄物視する封建的遺制である。眞劍に戰ふものは、まづこの封建的遺制、人を搾取する事によつて甘い汁を吸ふ事の出來る資本主義制度に對して戰ふべきである。それが尙且產業の發達、社會風敎の美名を藉り、やがて自身の懷を肥やす導管たらしめやうとするブルヂョア共に對しても、正當なる鬪爭となるのだ。

やぶにらみを美人とし、それを嬉しがり、與味をつながうとする變態的時代は、もう夙くにすぎてゐる――。

明るいとは？

濱口內閣出現以來、明るい政治、明るい社會といふ事は一種の流行語となつた。決定的に、武斷政治彈壓政治で押し切らうとした田中專制內閣が倒壞し、民衆はそれにホットするのあまり、次に來るべきものを吟味する心構へを忘れ、なんとなく嬉しい輕々しい氣分に醉はされてゐるが爲であらう。殊に濱口內閣は自由主義を表面に押し出し、社會政策的施設を人氣取り策として盛んに宣傳するが故に、民心もそれに幻惑されて、世の中が明るくなつたと一時考へるのも無理がないが、さてぢつくりとかれこれと考察する時には、一體何が明るいのか一向に解せない。

濱口內閣成立以來、民衆はどんな餘德を蒙りつゝあるだらうか。彼等の呼び物は財政緊縮だ。一にも緊縮、二にも緊縮、六千萬圓の事業繰り述べと三千萬圓の諸費節約とで、今年の豫算から九千萬圓の剩餘が浮び上つたさうである。これに勢ひを得て、やれ節約の爲に海外視察の人員を減らすとか、官省の自動車を減らすとか、待合政治を洋食政治にするとか、等々ならべたてゝはゐるが、それは狸の化け損なひである事は、勞働者農民を××する戰爭準備に對しては相も變らぬ「國防に差し支へなき程度」を固持し、侵略的政策に對しては、いよ〳〵力を盡してゐる。而して民衆には直接的關係あり、且一枚看板の社會政策的施設には、いつの間にか寢返りを打ち、例へば救貧法の如きは、今議會にも上程されないだらうと云はれてゐる。しかも國民を僞瞞する爲に三大審議會の中に、社會政策をも加へてゐる。日一日と深刻化して行く失業問題に對しては、流石にだまつて放置出來ず、例年季節的失業救援のために設けられた六大都市の事業は、その範圍を廣め、一層の救濟に努むると共に、その爲には、地方債起債を許可するなど、聲だけ大きいが、緊縮政策は各地方の土木事業の中止、繰り延べに誘ひ、その他の一般事業も中絕の形なのでます〳〵失業者續出の傾向にあり、生活難の聲は、お役所の計數をとび越えて巷に浸透して來た。然るに政府は更にこの節約を國費の上のみに限らず、家庭經濟にまで乘り出す計畫があり映畫、ラヂオ、ポスター、講演を利用し、軍事訓練所、女子靑年團婦人會等をも動員せしめたりして、その爲に三十名からの委員を以つて「公私經濟整理委員會」を作り、その宣傳に努むるさうである。けれどこれとても、獵官に洩れた黨員の不平を押へる爲の思ひつきである事は、三大審議會などを設けて、黨員の忠實を慰撫するのと變りがない。だが、生活難を賭けて行はれる緊縮政策は、無產階級にとつては、決して將來の生活の安定を約束するものでない事は、實に明白な事であるのだ。

この緊縮による剩餘は、國債償還、國富の充實に當てられるといふ。井上藏相はいふ。「歐洲大戰當時、我國經濟界は非常に膨脹したその結果として各人の收入は激增した。さうして生活は派手になつた。所がその後、大正九年の經濟界の大變動、震災その他大小の經

濟界動搖のために、我國の經濟界は見る影もなく縮少した。」だから節約せよ、である。歐州大戰に參加し、漁夫の利を占めたのは誰であつたらうか。無論日本であつた。だが、一般民衆もその利得の分け前に預かつたらうか？否。斷じて否だ！世界帝國主義戰爭に參加し、漁夫の利を占めたのは、日本のブルヂョアジーであつて、決して勞農階級無產階級は何等預かり知る事なく、相變らず搾取され、酷使され、飢餓線以上の生活を得る事が出來なかつたのだ。大正九年の金融恐慌、その他種々の經濟界の動搖にした所で、資本主義發展途上に孕む矛盾が、必然的に爆發したものであつて、無產階級はその爲にこれ以上の生活低下を强ひられる理由がない。

即ちこの緊縮政策は、政友會內閣の放漫政策に反する國民への阿諛であつて、これによつて人氣をとり、且支配階級の忠實なる手先きである事を示すに過ぎない。それを如實に物語るものは、かの政府の聲明である。その內容は、田中前內閣の政綱に、多少の手心を加へて目先きを變へてはゐるが、眞實なる無產階級解放運動に對しては、前內閣と同じ步調で行く事を明示した。濱口內閣組閣當時、或社會民主々義的黨の幹部は言つた。「今度は多分勞働運動の演說會にも多少の手心を加へられるだらう」と蓋しそれは、社會民主々義的團體には實現された。濱口首相は、無產運動內を色別し、その種類によつて彈壓の手心を加へよといふ事を命令してゐる。果せるかな「產業勞働事報」更新記念演說會が開會を宣するを待たず解散され、現に會社の賃銀値下げに抗しつゝ戰つてゐる沖電氣爭議團應援の爲に金屬產業協議會準備會主催にて開いた應援演說會も微塵に粉碎されてしまつた更に無產者自ら粒々の金を以て病院を設立し、或は同志の救援等を組織的になさんとすれば、いはれなくしてその責任者をブタ箱に放り込み、且×問にかけて、その阻害に努め、支配階級の奴隷たる事を甘んぜしめ樣と、あらゆる手段を構じつゝある事は、田中內閣と何等變りはないのだ。

明るいとは？　その言葉は、無產階級にとつては、搾取制度の續く限り、單なる抽象語である。明るい社會とは、眞に搾取なき社會をこそ言ふべきである。

東支鐵道問題について

支那政府が突然に、武力的行爲を以て東支鐵道回收を企てた事は、意外なロシヤの强硬なる態度と共に、世界の耳目を衝動した。東支鐵道は、ソヴエート・ロシヤの國外に有する只一つの經營事業である。ツアル帝制時代、支那への侵略によつて、この地に鐵道を敷設し、以て自國の利益に供してゐたが、ソヴエート政府樹立に及び、專制時代の遺物なる侵略によつて得たる一切の權利を放棄すると共に、東支鐵道のみは、一九二四年の露支協定によつて六十ヶ年後には無條件にて支那に返付するが、それまで共同經營に爲すべき事を公約したのであつた。そして若しその前に回收希望のある時には、商議の上決する事を規定してある、それにも拘らず、支那は、突然武力に訴へて奪還の擧に出たのである。この武力的奪還について支那はいふ。「ロシヤは露支協定で規定しながらも、支那に對して赤化運動を猛烈にし、國體を危殆に陷れたが爲にこの擧に出たのである」と。之にロシヤは抗議していふ。「若しソヴエート・ロシヤは、支那に於て共產主義宣傳を行つた事實があるとしたならば、支那政府は東支鐵道を奪取せず、且露支兩國間の條約關係を破棄せずして、充分これを豫防し、若しくは停止せしむる手段を有してゐるのである。」と

この抗議は、支那の白を黒といひくるめやうとする卑怯なる醜名に對して正しい。而してロシヤは、自分の權利を主張し、支那が飽まで不法なる手段を撤回せざる限り、武力に訴へても爭ふ事を辭せずとなし、一切の國交斷絶を宣言した。そして國境に軍隊を出動せしめ、または低空飛行を行つて示威運動をなし、時には兩軍の小衝突があるなど、戰雲濃く、露支國境を覆つた。

支那はロシヤの意外に戰意ある態度に驚いた。一九二七年「北京サヴェート大使館捜索事件」今年五月の「ハルピン領事館襲撃事件」その他の事件にも屈辱的に出る支那のロシヤへの權利侵害に對して、ロシヤはいつも沈默を守つて平和的解決に努力した。東支鐵道奪取をもやはり泣寢入りに終らせ得るとコケおどしの强勢に出たのに、かへつて攻勢に出られ、最初の强がりも何處へやら、東支鐵道は奪還したのではない、單に管理人を取り代へただけだ、戰雲を漲らしたのはロシヤが悪いので、支那は平和的解決を望んだのだと第三者の調停に泣きつかうとしたりした。ロシヤは何故この問題に對してはかくまで强硬に出たか？　東京朝日新聞はいふ、「今回ロシヤの强硬振りは不思議の様でも別段不思議ではない。平素非帝國主義を標榜し、原則としては東支鐵道の還付を聲名しながら、それは無償無代價といふではなかつた。殊に共産系も自ら國政の責任に當つては東支鐵道の經濟的價値は、どうしても重視せねばならなかつた。況や暴力回收の不合法的行爲をさるゝに於ておや！」この觀方は、資本主義的見方である。だからロシヤの强硬振りを肯定すると共に、すぐに本音を吐き。その肯定を攻撃の鉾に代へるのだ。またいふ。「非侵略主義、非帝國主義のロシヤが、如何に支那側から賣られた喧嘩にもせよ、支那の目的が領土侵略を企圖し、もしくは積極的にロシヤの生存權を脅威せんとするものでないに拘らず、自ら兵力に訴へ、戰爭を辭せざらんとするのは、何といつても自家撞着の甚しいものである。」

私達は、ロシヤは世界唯一の××主義國である事を强く深く記憶せねばならない。資本主義國列强は、虎視耽々として、ロシヤの破壞をうかゞひ寄つてゐるのであるし、ロシヤは四面楚歌の中にあつて、歴史的必然性によつて、搾取なき世界、即ち强度の××主義社會への推移を過程しつゝあるのである。だからロシヤの對外的注意は、さう單純にはいかないのだ、東支鐵道に關する露支協定は、決して支那が之を回收する事を拒みはしない、たゞ現在に於て回收せんとする場合には、協議の上相當の代價を以て、支那の資本にて買收する事である。この用意は何を意味するか。帝國主義列强が、支那市場を目がけて殺倒しつゝある今日、その國境近く帝國主義的勢力を近づけしむる事は、ソヴェート國家にとつては望ましい事ではなく、殊に東支鐵道無償還付は、決して支那勞農者の利益でない爲に、ロシヤは强く拒んだのだ、ロシヤの武力の充實は、帝國主義列强の如く、他國侵略を企圖しての事ではなく、搾取なき社會の建設過程の止むなき浪費なのである。

漸次、軟化してある支那には、今回の擧は確に誤算であつた。軍閥と新興ブルヂョアと結びつき、國内に支配的統一の進展をなしつつある支那は、盛んに列强に向つて媚態を振り廻し、勞農搾取の爲の援助を乞はんとしてゐる現狀である。列强も支那のこの態度は自國勢力扶殖には好機であり、最近支那は列强の寵兒の觀があつた。この機を可とした支那は、列國の反ソヴェート氣運につけ入り、ロロシヤの非帝國主義標榜と、革命後のいまだ充分國力の回復せざる

見込み等によりて、まづロシヤへの挑戰を試みたと見る事が出來るけれど支那侵略の爲にこそ列强は甘き言葉も使へ、支那政府の打倒侵略主義には、いづれも痛し痒しの立場にあるので、表面的には、應援をさけるかの形があつた。列强は、しかし干渉の機をうかゞつた。けれどロシヤは、不戰條約その他の干渉口實を拒絶し、露支直接の交渉を提議して止まないので、最近既に準備交渉に入り、それが本交渉に進む傾勢に轉換しつゝあるから、この問題もやがて處女の如く終りを告ぐる事であらう。

ロシヤの强硬振りと共に珍らしかつたのは我軍隊はいつになく大大的に出動しなかつた事である。そればかりでなく政府のうかつに口を開かなかつたのは、滿蒙の利權をフイにしまい腹なので、何も今更大好きな×畧主義を捨てた譯ではない、三度東京朝日の論說を引用するならば、「今回の露支紛爭は、事を東支鐵道に端を發し、我國の滿蒙に於ける地位は、單に國際平和を高調するを以て滿足し得べき列國と同時に論ずべきではない」即ち資本主義國の辭禮は、利權の直接的關係なしに於ては、抽象的正義平和を高調する事が出來るが、事それに及ぶに至つては、正義平和どころでない事を瞭にしてゐる。

社會民衆黨は聲明書によつて、東支鐵道問題は、支那革命途上に於ける一小波瀾にすぎないと云ひ、且、東洋並に世界平和に對して絶大なる關係ある支那問題に對し、我國政府は支那國權と自主權との回收を中心として速に世界列强に呼びかけ、支那及ロシヤを加へた世界會議を東京に開催する事を要求してゐる。

この聲明書は、徹頭徹尾ノンセンスである。現在の支那革命は、眞實の××、即ち勞働者農民の××を極度に彈壓し、外國資本との野合によつて、支配權力を確立しやうとする反革命である。彼の國權、自主權を援助する事は、支那プロレタリアートの×殺を助ける事であつて、我が國プロレタリアートの斷乎として拒絶すべき所のものである。

即ち東支鐵道紛爭は、支那反動政府の、帝國主義列强の反ソヴエートを利用し自己の勢力の過信に踊つたに過ぎないのであるが、私達は尙列强の動きに微細の注意を怠らず、苟しくもプロレタリアートの敵となつて表はれて來るものに對しては、毫も苛責する所なく之を責むる用意を持つ事を必要とする。（二九・七・二）

女人聯盟支部について

女人聯盟の支部は福岡市に成立して尙ほ京阪神、下關市と門司市を併せた關門、及び名古屋市にも設立されんとしてゐます。研究や親睦のためにどんな方法をとつたら可いかといふ事についても今度福岡支部の方々から參考になるべきいろいろな事を伺ひましたが、大體研究を進めるに就ては思想問題、文藝上の問題、婦人問題などゝとても範圍が廣いので、支部の皆樣が最も適當と思はれる題目を選定なさつて本社へ御通告下さいますやう。尙ほ支部設立地に近く住はれる方々は左記へお申込み下さい。

下關市上田中町一三五三　吉田靜代
神戸市楠町七丁目九一日本赤十字社控家内　高橋鈴子
大阪市港區新池田町一丁目四六高瀬氏方　綠川靜枝
名古屋市東區下飯田町南出六九　萩岡ちさ子

文藝時評

中本たか子



「敗北」の文學について

改造（八月號）の當選文藝評論「敗北の文學」（宮本顯治氏）は、近來稀に見る爽やかな評論である。それは丁度三年忌に當る故芥川龍之介氏への、理解あり、同情ある弔詞である。芥川氏の死は、今では遠い歷史の一頁に繰り込まれてゐるが、氏の藝術を考證し、その死因の必然性を探り、併せてその藝術の社會的價値を決定するのも、强ち時代錯誤ではなからう。かゝる意圖のもとになされた「敗北の文學」は、時代的價値から見ても先づ成功と見るべきである。

一九二七年七月芥川氏の死が報ぜられるや、當時の文壇人のみならず同時代人は老若を問はず、凡そ芥川氏の文學に接し、その名聲をきゝ及んでゐた者は齊しく强い衝動に打たれた。何故なら、芥川氏の死は、その時代の死であり、その時代の藝術の死であり、その時代の個性の死であつたから。そして强い衝動に毆られた人々の中では、或青年は遂に殉死を辿り、或者は芥川氏と共通な深い苦悶に引き込まれ、或者は內心に受けたひどい打擊をしひて嘲罵によつて葬り、或者は死の解釋を世俗な三面記事に墮してしまつた。而して一たび芥川氏の世を辭するや、氏と年代を同じうしてゐた文學は俄然形勢を崩して行つた。そして、再び立つ能はざる狀態にまで陷り或者は通俗小說に韜晦し、或者は發狂に近き生理狀態になり、或者は外遊に逃避してしまつた。かくて、沒落した芥川時代の文學に代つて、敢然と起ち上つて來たのがマルキシズム文學である。まことに芥川氏の死は「一葉落ちて天下の秋を知る」程暗示的なものであつた。そして、芥川氏の死は時代の決算であつた。今や、社會的、階級的なイデオロギイに眼ざめつゝある時代に、氏の藝術の投影と社會的價値とを、我々はいかに批判すべきか。

そこで我々は宮本氏の說に耳を傾けて見よう。宮本氏は芥川氏の初期の作品から考證して、そこに顯はれた人生觀と個性とから、必然的に死に到る經路を探求してゐる。宮本氏はいふ『芥川氏の場合我々の受けとるものは、より切迫した陰鬱な空氣である。後に於て

評論するけれども、そこにあるのは、困憊した神經の觸手を通して次第に意識されてゆく「人生に對する敗北」の痛みである。愴然、氏は自分の辿つてゐる路が「敗殘」に通じてゐることを自覺せずにはゐられなかつたのである』と。然り、芥川氏のやうな、ニイチエの流れを受けた貴族的超個人主義者には、既に時代の流れの押し迫つてゐる一九二〇年代が、たゞに蒼白い神經の觸手のみで游ぎ拔かれるものではない。芥川氏の藝術は徹底的に意識の藝術であつた。が、今にして振返つて見れば、その意識も、唯心論に立脚した個人的な、病的で、現象的で、告白的なものであつた。そして、少し許り次の時代の曙光とも見るべき、理智と、分析と、批判と、主智とがほの見えてゐた。この後にあげた要素に、芥川氏は無意識であり、個性的な附屬性位にしか見てゐなかつた。若し之等が、芥川氏の意識の中にあつたなら、氏は決して死を辿る必要はなかつたのである。この後の要素こそ、社會的、階級的なイデオロギイの時代の要素であるから。

死を辿る者の藝術は、又死を辿る藝術である、芥川氏の極端にまで高踏的な藝術は、時にきざとも思はれる程唯心論的な貴族性をみせびらかし、直接人生にたづさはらない白い手の藝術である。かゝる藝術が、今の時代の我々にいかばかりの投影を生ずるだらうか。もはや、我々はかの唯心論的な藝術至上主義を嗤つてゐる。芥川氏に最も同情ある觀察を施してゐる宮本氏でさへも『インテリゲンチヤの肩におかれた致し方のない十字架であるにしろ、我々は芥川氏との間に、おかれた距離を明かにしなければならない。この作家の中をかけめぐつた末期の嵐の中に、自分の古傷の呻きを聞く故に、それ故にこそ一層、氏を再批判する必要があるだらう。いつの間にか、日本のパルナッスの山頂で、世紀末的な偶像に化しつゝある此の文學に向つて、ツルハシを打ちおろさなければならない。』と斷じてゐる。

芥川氏を必然的に死へ赴かしめたのは、氏の社會性の缺乏である。假令、氏が貧困に育ち、上層階級へ極端な嫌厭があつても、氏は徹底的にそのワイシャツを脱いでハンマーをとり上げることの出來ない人間であつた。氏は貧困に唯心論的なプライドを持ち、神經衰弱に自己の才能の過重を誇り、その厭世哲學は意識的な散步用ステッキにしか見えない。氏は才能の英雄主義者であつた。自ら高い山頂に孤立して、激しく吹き當る風に身悶へしては、その響きを悲壯な理性の悲歌（エレジイ）にひゞかせた。氏はあくまで見榮坊だつた。個人主義の堅い貝殼に籠つて內に身悶へし乍ら、その洋服の胸には都會人らしい機智と洒脫の絹ハンカチをほの見せてゐた。

いかに氏が俊敏であり、博學であつても、それは所詮氏のエゴイズムのボンネットに過ぎなかつた。自ら好んで藝術至上主義の塔に籠り、蒼白い小窓を開けて埃を防ぐマスクをはめ、世の俗物を睥睨するのが好きであつた。そこで、我々は『彼の「豐富な智識」が著しく小ブルジョア的狹隘性を含んでゐたことを銳く指摘しなければいけない。』何故に？　それは、一度摩擦を受けたこの「小ブルジョア的狹隘性」が、今では却つて、社會的、階級的なイデオロギイを滅殺し、反撥するからだ。

或人は芥川氏の死は、黎明を境する壁に頭を突込んでその壁に首を締められたのだといふが、私はさうは思はない。氏の死こそ徹底的に自己を隱蔽しすぎた個人主義の自繩自縛である。若し氏が黎明を求めてゐたなら、死に至るといふことは肯定出來ない。そこには

肉體の破滅といふ一大困難もあつたが、氏が死を選んだのは、極めて自然的な認識の沒落である。そこで氏の藝術だ。聰明な氏は、既に藝術の價値はその社會狀態に於て增減するものであるとさとつてゐた。『いつか滅びるであらう――いつか、酷薄な社會的現實は、氏の藝術觀に、悲壯な認識を與へずにはおかなかつた。しかも、芥川氏は「落寞たる百代の後」、氏の作品を愛する誰かに美しい夢を見せることを信じやうとしてゐる。氏の輕蔑してゐた民衆こそ、偉大な創造力をもつて、ゲエテを――そして、氏をも乘り越して突進するものであることを認めた時、芥川氏は、小ブルジョアジイのイデオローグに過ぎない氏の文學も、いつかは沒落しなければならないといふ告知を、新興する階級の中に聽いたであらう。

「藝術は民衆の中に殘つてゐる。」からだ。

民衆が新しい藝術を創造する。これは、事實上氏自身が自らに向けた否定の刄ではないか。あらゆる天才も時代を越えることは出來ないとは、氏の度々繰り返したヒステリックな凱歌であつた。かうした絶望そのものが、「自我」を社會に對立さす小ブルジョア的な魂の苦悶でなければならない。』

この觀察は、非常に同情ある、控へ目な云ひ方である。併し控へ目ながら、宮本氏の指摘は充分に利いてゐる。

芥川氏の藝術を通じて、我々に悲壯（インテリゲンチャの感情としてゝな氣持を起させるのは、その絶えない苦悶である。假令、その作品が洒脫であり、機智に滿ちてゐる場合にも我々は暸きり氏の苦悶を讀み、時代の苦悶を感ずる。併し、こゝで我々は明瞭に區別したい、時代の苦悶は必ずしも社會的、階級的な苦悶とは限らないことを。我々は芥川氏の苦悶を理解はしても、それを崇高に祀り上げる者ではない。我々はそれを冷靜に批判するのである。

理解あり、同情ある宮本氏は、芥川氏の持つ、「人間性」、「道德性」、多角的な才能から來る多元的な矛盾とを親切に指摘してゐる

『我々は、歯と歯を血に滲ませてゐる自身の中の兩棲類をいつまでも同居させておくことは出來ない。矛盾はより高次的な統一によつて救はれない限り、いつ迄も解決され得るものではない。氣質上のロマンチストは人生觀上のリアリストと嚙み合つた。哲學上のスケプチストは、むろん、政治上コムニストと狂つた歯車のやうに永遠に反逆し合つた。それのみではない、この夫々を單位とした組合せは理智の支柱によつて人工的に保たれてゐた氏の姿勢に、不安と苦痛を與へずにはおかなかつた。』

この方面の觀察も、芥川氏を論ずる時忘れてならないことであるが、我々が今日芥川氏を再批判する重心は、氏及氏の藝術の社會的階級的價値である。『一九二五年――氏の文學的生涯の終り頃――は日本プロレタリアートの全線的展開の時代である。「資本と勞働の生み出す一般的混沌は寄生的な小ブルジョアジイの中に强い動搖を與へる。それ自身の階級的地盤を持たないインテリゲンチャの自己解體が、斷然史的な現象として著しくなつて來る。

これらの現實から芥川氏が具體的に何を反映したか、我々は云ふを要しない。我々は必要以上に現象の社會的原因を追究することの徒勞であると同時に、滑稽であることを知つてゐるから。だが、かうした荒々しい現實の中で、氏が所謂「人工の翼」で飛揚することのいかに困難であるかを、痛切に感じたであらうことは考へてもいゝであらう。冷靜な理智に住家を求めて來たことの後悔が、氏の中で激しくなつて行つた。曾ての冷笑的な風流的な生活態度に對する自

己批判がかくして起つて來た。』

そして『この作品（註 或阿呆の一生）は單に芥川氏の全文學の總決算的表現であるばかりでなく、明日の日を望みつゝも、傷つき易き自我と社會的な重壓に堪えずして、苦しまなければならないあらゆる小ブルジョア・インテリゲンチャの痛哭をそこに漲らせてゐる。それは氏の辿つた「敗北」の道程と「敗北」の苦悶を殘酷に綴つた作品である。それは冷然とした情熱の中に、自己の「敗北」を意識して進んだ意味において、文學における「敗戰主義」だと云へるであらう。」

我々は實に、この指摘をこそきゝたかつたのである。いかに芥川氏は時代的に個性的に苦しみ拔いたとは云へ、結局「敗北」の苦しみであつた。そこには光もなく、肯定も出來ない。『虚無的精神も階級社會の發展期においては、ある程度の進歩的意義を持つものであるが、今の我々はさうした役割を氏の文學に尋ねることは出來ない。』と、かゝる認識を持つた宮本氏は、芥川氏の文學に明確な階級的烙印を捺したのは天晴れである。

まことに芥川氏の藝術は、今日の階級社會から價値づければ、唯心論の史的殘存物として、博物館へ納めるべきものである。博物館の存在を、唯物史觀的に觀た價値と同じで。

最後に於て氏は『なるほど我々は最後の凄まじい情熱をたゝえた氏の遺稿等に無關心になり得ない。だが、それは芥川氏の文學我々を內容的には退嬰的なニヒルへ誘ひ、形式的には瑰麗な肌ざはりを持つてゐるといふことより、次の事實によるものでなくてはならぬ。ブルジョア藝術家の多くが無爲で怠惰な一切のものへの無關心主義の泥沼に沈んでゐる時、とまれ芥川氏は自己の苦悶をギリギリに惱みしめた。又他の遁世的な作家達に、風流的安住が無力であるのみならず、究極において自己を滅するものであることを、氏自身の必死的な羽搏きによつて警告した。又氏は多大のブルジョア的狹隘性を內包しつゝも、尙他のブルジョア・イデオローグに比して廣汎な社會的關心を持つてゐた――』

と云つて、芥川氏を救つてゐるが、これは結局宮本氏が芥川氏と共通な苦惱を持ち、共通なインテリゲンチャであるといふ所から出た同情ではなからうか。たとひ芥川氏が「他のブルジョア・イデオローグに比して、廣汎な社會的關心を持つてゐた」とは云へ、それはブルジョア社會への關心であり、來るべき階級社會への關心は極めて薄かつたと云はねばならない。若し芥川氏が來るべき階級社會への關心や認識があつたなら、何故彼は死に到らねばならなかつたか。この關心や認識こそ、氏の理智を救ひ、氏の自己破産を甦生せしめねばならないものである筈だ。宮本氏は、來るべき階級社會を認め、その觀點より芥川氏の文學を批判しようと努められたのは甚だ妥當であるが、自己のインテリゲンチャとしての弱味から決定的な百分比を示されなかつたのは殘念だ。氏がこの論文を結んでゐられる『我々はいかなる時も、芥川氏の文學を批判し切る野蠻な情熱を持たねばならない』ことを、氏のこの論文に痛感する。

理解あり、同情ある宮本氏のこの論文も、大部分を「敗北的行程」の現象的究明に終り、批判の乏しさを憾みとする。芥川時代の苦悶を越えて來たインテリゲンチャとして、まだ遺產のある宮本氏を見ると共に、芥川氏へ差し伸べられた友愛の手を見る。そして、いつの時代に就ても、絶えないインテリゲンチャの惱みを宮本氏の姿に見出すのだ。集團的行動を認識し、それに參加しながら、尙且、自己の遺產的個性にひそかに惱まねばならぬインテリゲンチャそのも

のこそ『敗北の文學を――そして、その階級的土壤を（我々は）踏み越えて往かなければならない。』のだ。

プロレタリア文學の「大衆性」と「大衆化」について

中央公論所載（七月號）小林多喜二氏の『プロレタリア文學の「大衆性」と「大衆化」について』を今月に廻して論ずるのは、いさゝか月後れの感がしないでもない。だが、小林氏のこの論文は非常に同感のところが多かつた。氏は先づ『プロレタリア文學の「大衆性」及びそれにからまる雜多な問題と「大衆化」をまづハッキリ別個に見、そしてこれがプロレタリア文學に於ては、如何に緊密に統一されて考へなければならないかを明かにし』ようとされたものである。

そこで氏は、「大衆性」について――プロレタリア文學の讀書層をはつきりさせ、知識分子を淸算し、形式とイデオロギイの緊密な結合を説明し、藝術觀念の領域を解剖し、過去の名目プロレタリア文學の總決算を叫んでゐる。併し、見よ。かくも簡明に周到に論述せるこれも、「大衆性」にからまる雜多な問題の解剖であつて、そこには氏の意圖である「大衆性」の説明があまりに稀薄であることを。そもそもプロレタリア文學の「大衆性」とはいかなるものであるか、といふ疑問と期待を持つて望んだ私は、正直に云へば少し失望せざるを得なかつた。

『どの層にも同時にあてはまるやうな作品を作ることを、プロレタリア文學の「大衆性」として問題にするならば、そんなことは考へられないナイーヴな希望でしかなく、結果的には、プロレタリア文學の俗惡化（平均化）であり、又は逆に、どつちつかずの游離を來たすことになる』と云つて氏は、ルナチャルスキー、マーツアの言を取してゐるのは正しい、そして稍結論らしく出て來た所で、「プロレタリア文學の、指導的分野を受持つ文學は、だが原則的には、プロレタリア文學の大衆性と矛盾するものでない。然し、現在の階級社會、文化的に首をしめられつゝある資本主義社會のプロレタリアートについて論ずる場合、直接に大衆的ではあり得ない。然しこれは特に意識的プロレタリアート及びマルクス主義的インテリゲンチュアの間に廣く浸透し、そしてそれによつて、廣汎な大衆と結びつけられることによつて、大衆的である』とは云ふものゝこれは「大衆的」の説明である。「大衆的」といふのは後天的な性質であつて、「大衆性」といふのは先天的な性質である。そこで再び問ふ、プロレタリア文學の先天性たる「大衆性」とはいかなるものであるかと。古來「大衆性」を有する薫高き藝術作品は澤山あつた。それ等のものは決して『どの層にも同時にあてはまるやうな作品』ではなかつた。それは、いかに高踏的な藝術的形式を持つてゐても、いかに目安においた讀者層に當て嵌めるやうに燒き直しても、それの本質的價値に變化のないものであつた。藝術作品の大衆性とは『どの層にもあてはまるやうな先天的價値』即普遍性をいふのではなからうか。併し、プロレタリア文學の「大衆性」とは、勞働大衆に浸透してゆく藝術の先天的價値を指すのであるか。小林氏はいふ『大切なことは、作家がこの「自分」を知ることであり、そしてこの「自分」と「一定の層」との間に、科學的にピントを合はせることだ――各々の作家が、各々このことへ精力的に努力することによつて、プロレタリア文學は始めて、大衆の中に入つて行くことになるのだ。』と、これはかなり大衆性に接近した解剖であるけれども、この「浸透性」は

「大衆性」の一部分ではあるが、「大衆性」は「浸透性」と同時に、「包含性」をも持たなければならない。卽ち、遠心力と同時に求心力をも持たなければならない。そこで、プロレタリア文學の「大衆性」とは、プロレタリアイデオロギイによつて統制された藝術價値が、プロレタリア大衆に浸透し、且つプロレタリア大衆を包含する普遍的先天性をいふのではなからうか。

次に「大衆化」について――小林氏は、「大衆化」の職能や形態や、作家のプロレタリア化と作品の組織的任務とを說いてゐる。プロレタリア文學の「大衆性」を考察したならば、必然的に「大衆化」が問題となつて來なければならない。「大衆性」とはそれの性質であり、「大衆化」とはそれの行動である。故にこの「大衆化」を明かにしなければ、プロ文學の根本機能は片手落と云はなければならない。「大衆化」とは一寸見には、藝術の標準化であり、平均化であり、俗惡化であるやうにとれるかも知れないが、否、否、決してさやうなものではない。『ブルジョワ文化によつて、隈なく築きあげられてゐるあらゆる分野に「ねぢ込んで」行き、更に「ねぢ込んで」行つて、ダイナマイトのやうに爆破しなければならない。』この「ねぢ込み」を「大衆化」といふ氏の說は正しいと思ふ。プロ文學の「大衆化」はそれ自身の解體ではなくて、それによつて、どの層をも征服し、階級的領域を押し擴げる職能でなくてはならない。それは全線統一の爲の進軍行動を指すのでなければならない。

そして「大衆化」の形態は、『强固な、伸縮性ある「組織活動」がその機關であり、それはプロレタリアの黨の組織の仕事に從屬し、それと密接に結びつくことによつて「白蟻」のやうに、ブルジョア組織の根幹に喰ひ入らうとするものだ』

かくて、この命題から、小林氏が、プロ作家のプロレタリア化と作品の組織的任務とに結論して行かれたことは當然である。が、氏のこの結論はあまりに潔癖すぎる。といふのは「大衆化」が、啻にプロレタリア領域にとゞまつてゐるからだ。私は思ふ、現在のプロ階級戰術は、もつと社會の全般にわたつて戰陣を擴張して行かなければならないと。それからも少し眼をあげて、巧妙な敵の陣營を常に偵察して、敵の戰略に對する味方の策戰を考察すべきだと。その意味でもつと廣義の全線的活動が望ましい。その意味に於て、啻にプロレタリアの生活を描いて、勞働大衆を感奮せしめ、蹶起せしめると共に、他方ブルジョア層を疲弊し崩壞せしめる攻勢法たる敵の倒壞に着手しなければならない。

こゝに純粹プロレタリア文學の根幹が樹立しても、それが現在の社會層に順應する百パーセントの戰術とはなり得ない。それは、現在の文學需要者の範圍が、九十八%位はプチ・ブル層であることである。今日、プロレタリア大衆は、文學の刺戟によつて眼ざめイデオロギイをつかみ、階級鬪爭に參加するものは極めて稀である。階級鬪爭に資する文學の力の稀薄なことは、今では文學が一商品に過ぎなくて、彼等の手に入ることが難しいといふこともあるが、實は文學がなくても彼等は境遇上必然に蹶起して來るものであるからだ。そこで、階級戰に於ける文學の使命は、當面の讀者層に向つて進出した方が効果的であると思ふ。その意味に於て、プロ作家は、黨の機關たる以外の雜誌・新聞等――卽ち「文壇」に進出し、これを獲得することの必要を感ずる。プロレタリア階級戰の全線活動に百%の効果あらしめよ。

エロチシズムとイデオロギイ

今日我々の心に何等かの摩擦を與へる文藝作品は、イデオロギイを持つか、エロチシズムを含むかに依る。これは現代の最尖端の方向である。かゝる要素を含まないものは、ウエフアスか泡雪かの如く、何等腹たよりにも代用食にもなりはしない。

最初、我々の認識は、自然主義に毆られ、次に後期印象派に打のめされ、更に未來派構成派等にお灸をすゑられて來た。かゝる我々が唯單にお茶菓子に過ぎない泡雪やウエフアスに、いかばかりの關心と認識を深めることが出來ようか。遺憾なく官能を開放された現代人には、感覺の鋭敏なものほど、入射角は大いのである。そこで感覺の極端なるもの即ちエロチシズムが、現代文學の主要素となつてゆくのである。これは、社會的階級的に安定した方面の傾向である。又、イデオロギイが我々の心を捉へるのは、それの持つ認識が我々を指導し、奮起せしめるからである。これは社會的階級的に安定がなく、闘爭によつてその安定を得んとする、新興する方面の傾向である。今日我々が、エロチシズムに據るか、イデオロギイを振り翳すかは、その所屬する階級によつて決定する。

凡そ、いつの時代でも社會的階級的に安定を得てゐる時は、その文化は感覺的に、展開し、深刻になつてゆくものである。エロチシズムを好むのは、偸安時代の人間の性癖である。文明の爛熟は常にエロチシズムをクライマックスとしてゐる。そこで、あらゆる感覺の洗濯が行はれ、理智と野蠻なる情熱の時代になると、必然的にエロチシズムへ傾かなければ、その時代人の心を摩擦することが出來ないのである。エロチシズムを含む藝術は、唯物論的根據に立ち、理智であり、ダイナミックであり、粗野である。纖細な毛筆畫ではなく、ブラッシで毆りつける油繪である。近代性とは文化と野蠻の二方面を含むと云ふが、理智的な近代人がエロチシズムを好むといふのは、かうした方面から來るのであらう。それにエロチシズムは感覺活動の最尖端である故、それが末梢神經を經て中樞神經へ報告するものは、より深い認識である。エロチシズムを多分に包含するところの現代文學は、蓋し、認識活動の動向を示すものであると云へよう。これは、舊來のイデオロギイを排除するブルジョア美學に據る藝術の尖端的傾向である。從つてこれの社會對象とするところは、インテリゲンチヤ、プチ・ブル層以上である。

新興階級プロレタリアの文學傾向がイデオロギイを含むことは、必然的な勢である。新興階級を力づける爲に、それを指導する爲には、目的的であり、功利的であり、宣傳的であり、煽動的であることは藝術の本質である。それは將來のブルジョア美學の卑しみ排除して來たところのものをすべて內包してゐるが、プロレタリア美學の根據によれば、かゝるイデオロギッシュな藝術こそその本道と云はるべきである、それは唯心論と唯物論との差である。唯物論に於て重んぜられるのは、感情よりも理智であり、氣分よりも物質であるこれの藝術的根據は、たゞに感覺へ訴へて來る藝術的媒介素ばかりでなく、政治性、社會性、階級性、經濟性等のイデオロギイを含む故に唯物論的美學に立つ藝術は須くイデオロギイを持つべく、それの多少と鋭鈍とは、その藝術價値を決定するといふも過言ではない。イデオロギイの母胎は理智であり、理智の世界は物質であるから、我々はこの世界にある時、唯心論的な含羞や、偏執や、卑下を一切放棄しなければならない。

イデオロギイの持つ强味は、目的の透徹であり、時代の統制である。そこには、プランと功利と法則と均衡と充實と經濟がある。それは、新興階級の尖鋭な意力の旗標である。イデオロギイが我々に直接訴へて來るところは中樞神經であるのだから、巧みな藝術的媒介素が末梢神經を刺戟しなければならない。幾らイデオロギイが尖鋭であつても末梢神經の活動を無視した時、これの藝術的價値はよほど低いものとなるからだ。何故ならば、エッセイ的價値が藝術的價値とはならないからだ。

そこで、プロレタリア藝術を見るに、あまりにイデオロギイにのみ意力をはせ過ぎて、感覺活動を忘れる傾向が多い。イデオロギイを嵌め込まうとすると、目的を急いで、效果の思慮を缺くと見える。これは反省するところがありはしないだらうか。エレンブルグの「トラスト、D、E」には、あの强烈なイデオロギイを、巧みに藝術的媒介素で醱酵させた、效果から來る目的の貫徹を見る。日本のプロレタリア作家は、カロリイをあげることにのみ性急であつて、味の素を贅澤視するのだらうか、私は決してさうだと信じたくない。

エロチシズムの藝術は、イデオロギイを持たない唯物論的美學の上層であり、これが決して唯物論的美學の本道ではない、唯物論的美學はイデオロギイを持つてこそ本道であり、プロレタリア美學の領域に這入つてこそ正道である。然して、エロチシズムとイデオロギイとは反撥するものではなくて、唯物論的美學の併せ持つべき二大武器である。

文學の滅亡？

藝術至上主義滅び、美學の根底が群雄割據的なる今日、もはや藝術の永遠性は愚なるものとして笑殺されるであらう。早急なる人々はすでに文學の滅亡を説いてゐる。然らば、文學は果して滅亡するものであらうか。今日の文學が、いかなる人々の領域にあるかといふに、上層のブルジョアはもはや顧みない。下層の勞働大衆も讀む人は極少數の者である。たゞ、中間層のプチ・ブル、インテリゲンチヤ等の中の又一部分の文學青年(老年?)等位の領域にとゞまる。上層ブルジョアは、もどかしい文學に耽つてゐるよりも、その上層文明の高速度な娛樂を追つて走つてゐる。曰く、ドライブ。曰く、トーキー。曰く、レビュー。曰く、競馬。曰く、空中飛行。等、等……。そして下層勞働大衆は、今や階級鬪爭の意識が尖鋭になり、ひたすらその方面に沒頭してゐる故、心身に一分の餘暇もなく、又今日の文學的效果といふものが、どの程度まで彼等の鬪爭を助けるものであらうか。なるほど現今プロレタリア文學なるものの漸く地盤を固めんとしつゝあるが、これが文學的領域を浸潤してゆく範圍はやはりプチ・ブル、インテリゲンチヤの領域をあまり出てゐない。それは左翼劇場などを見て、舞臺と觀客とが完全に融合し(?)吶喊し、共鳴する樣を見て心强くは感ずるが、それはインテリ層のほんのちよつぴりな急進派であつて、勞働者らしい者も見受けない――といふと、或は誰か、劇場にまで菜葉服は着て行かないと云ふかもしれないが――勞働者に讀ませたい、或は見せたい藝術を、インテリ層の昂奮劑や觀念の遊戯やスポーツ的快味を滿足させるにとゞまるのは甚だ殘念である。現在のプロレタリアートにとつて、階級鬪爭の指導と助力は大いに必要であるが、藝術的效果が階級鬪爭に於て、何パーセントの役割を持つか。すると又誰か、遠いロシアの例をとつて來る人があるかもしれないが、ロシアだつてその革命を

遂行するに、百人の文學者よりもたつた一人の指導者レーニンの方がどんなに大い支柱だか解らない。私は思ふ、今日のプロレタリア文學は、勞働大衆をあまり益してはゐないと。なるほど、そこには勞働者の生活を摘出して憤激を喚り、指導精神を含み、階級鬪爭のイデオロギイがありはする。併し、文學の領域が、どれほど敵の陣營を見拔き、どれほど味方の戰略を洗鍊せしめるか。一篇の小說よりも、一日を勞働者と行爲を共にする方が有意義のやうに思はれる。プロレタリア文學に於て成功と見る作品も、多くの讀者領域はインテリ層であると思へば、甚だ內心落莫とせざるを得ない。

今日、階級鬪爭に參加するものは、徒らに警官と戰ひ、工場長と爭つても仕方のないことである。(一寸待つて下さい、何も私はこの爭議や鬪爭が惡いといふのではない、それはそれで宜しいが――)先づ、大局から敵の陣營を見拔かねばならない。今日の高度の資本主義の發達してゐる時、一九一七年のロシア革命と同じ戰術や時代觀を持つてゐては何の役にも立たない。今や、世界の不戰條約同盟が成り立ち、加盟國四十六ケ國をホワイトハウスに集めて、愈々全世界の平和的根據が確立したかの如く見えるが、事實は全く正反對だ。不戰條約によつて、表面的な平和の裏に、各資本主義の國家は益々盛にその帝國主義の觸角を揮つて、經濟的侵略を意の儘になさうが爲に他ならない。現代では植民地を持つといふことがもはや何の役にも立たない。といふのは、資本主義的帝國主義は、他國の植民地へどん／＼經濟的に侵入して完全にその地の支配權を持つやうに至つた。例へばカナダに於けるアメリカの權力、オーストラリアに於けるアメリカの威力等は、經濟といふ武器によつて、完全に英國から離脫せしめて、自國の從屬國の地位に置いてゐる。二十世紀の帝國主義は、經濟的侵略によりて、自國の猛威を示さんとしつゝある。ブルジョア國の巨頭、アメリカ、イギリスは、もはや生產品のみによる世界の獨占にとゞまらず、金融資本によりて世界を獨占せんと行ひつゝある。アメリカやイギリスに勞働貴族たる變形的勞働者の現れるのは、國外に投資する金融資本の餘剩にあづかり得るからである。現代に於て『帝國主義を特色づけるものは、決して產業資本ではなくて、金融資本である。』(レーニン『帝國主義』一三一頁)

かゝる帝國主義の狀勢のもとにあるプロレタリアートは、益々その階級鬪爭の困難なることを認めずにはゐられないであらう。今では、民族自決による社會改革は行はれない。これは表面上の政治が君主制から民主制に遷つても、事實上の經濟の獨立が出來ない時はそれは他國の植民地と化し、その帝國主義の支配下にあることゝなるので。だから、ロシアの東方政策は皆失敗したのだ(アフガニスタン、印度、最近支那に於ける數々等…)

『帝國主義とは、獨占と金融資本との支配が成立し、資本輸出が顯著なる意義をもち、國際的トラストによる世界の分割が始まり、且つ、最大の資本主義諸國の間に於ける地球の全領土の分割が完了してゐるところの、かゝる發展段階における資本主義である。』(レーニン『帝國主義』一二八頁)だから、プロレタリアートの戰法は、政治的進出のみでなく、政治の根本効力ある經濟方面へ進出しなければ駄目である。然らば經濟的進出とは?　それは、勞働大衆が經濟的に結束することである。資本主義經濟に參與したり、それに挑戰する所の諸々のプロレタリア企業である(その方法はこゝでは省く。)

かうした考察から來ると、階級闘爭に資する文學の力が、いかに微々たるものかを思はざるを得ない。永遠の生命のない文學（その時代の社會階級によつて文學の價値は常に變るものであるから）、一商品に過ぎない文學が、敬意と尊稱を受けることは、明にブルジョア化した非階級性のものであると斷言して、誰かこれを駁するであらうか。中間層になるゴム風船みたいな文學の滅びるのは、植物が退化してゆくのと同じ理屈で悲しまないが、新興階級に資しようとする文學が、これ又あまりに無力であるといふ事實は慨嘆せざるを得ない。我々がプロレタリア文學（廣義に）を撰ぶのは、階級的正義心と、勃興する時代精神から來るのである。えは新興プロレタリアートへ差伸す友誼の手であり、彼等に味方する旗標に過ぎない。

これからの世の中で、眞に大衆を指導し、益するのは、端的にイデオロギイの把握できる論文である。これに人心の傾くのは必然である。論文こそは時代の主勢力となつて、堂々と統制し、指導してゆくであらう。やがて、プロレタリアートの長い闘爭の歴史が赤く輝いて、安定した彼等の時代が來た時（私はその時代の一日も早く來ることを希望して止まない）大衆は文學なんて冗慢なものを果して顧みて呉れるであらうか。彼等の讀書は、主として論文、技術書、科學、歴史等が占め、一方一日の正課たる勞働に疲れて歸ると、組合へ行く、會合へ行く、キネマへ行く、遊園地へ行く、娯曳へ行く……等々の繁忙な生活の中で。

附記——今月は遥かに規定の紙數を突破したので、「文藝評價の規準」と月評をお預りしておきます。尚、個々の題目を前後してかいたので、重複した點のあるだらうことをお詫びします。

六號雜藁

桂八重

ある好奇家から地獄の圖を縮寫したものを贈られたが。地獄とは此世の姿である感を深くする。炎熱の暑中、世相はさながら焦熱地獄の釜中である。我としても生の苦惱は此世からなる倒懸地獄である。

三月十七日ごろその妻子を殺し、五月中旬に自殺した人が一家揃つて白骨になつて現はれた事件は、自殺者の持家であり、郊外の人家と離れた場處であり、遺書もあり、やがて自殺するからと打明けられた實兄が口をつぐんでゐるだけが不可解な心裡として取りあつかはれたが、妻がヒステリーだつたとふ莫然とした言ひかたと、夫が肺病だつたといふだけでは領けないものがある。複雑な、何らかの心裡葛藤がなかつたのではないか。猶それより不可解なのは九州大學の造船學講座擔任の助教授某の自刄である。この青年は非常に煩悶したと見え神戸の某說教所を訪れて見たり、自殺しやうとしたのも寺院の境内であつた。敎養ある青年紳士が出刄庖丁で頭や胸を斬つたり、罫紙や銘筆をかりて、

人間として最も卑しい根性を持ちました。
眞に自責の念に堪へませぬ。ここに最も劣惡な最後を皆樣に見て頂きます。

と書き破つて捨てたり、懊惱の極を示してゐる。夏期休みに學生をつれ、吳海軍工廠に

見學にいつたそれが因をなしてゐるといふが近親は姉や弟が胸の病ひをし、おなじ患があるので神經質だからといつてゐる。

◇

復興七ヶ年、大努力の結晶は都市の完成と共に復興局の解散が明春にせまり、二千四百名の失業者が出來上る。ところでまた、この八月上旬正確な統計として、今春大學專門學校卒業生二萬人の就職は約一萬人位だとある。大學にまでゆかれる人の多くは、直には困らない者が多いであらうが、其の中でよい就職口のあるものは質のよいものといふより、ヒキのよいものが多い。親が重役なら悴の大學卒業生の席は用意されるのにたいした氣苦勞はない。資本家級には閻魔樣もなく脫衣婆もない。飜つて下層級を見ると生地獄の活畫である。一家五人、三人の心中はいくつかあり、親子五人が水ばかり飲んでゐて、祇園祭の日に糧を得やうと出かけて自働車に轢き殺された辻占賣の少女もある。母のない彼女は父を助け三人の弟妹の爲によく働いた。

卅七になる明石市の大工さんの細君が、貧乏には飽きたと口ぐせに言つてゐたが、本當に四人の子供を捨て家出をしてしまつたのもある。働けど〳〵孝養ができないと劇藥自殺した廿四才になる職工もある。老い病める兩親が郷里でどんな氣持ちで其知らせを受取つたであらうか。ある眞夜中に、郊外尾久町の路上で八ツと六ツの男の子が抱合つて泣いてゐた。妻に死なれ幼い子を二人も連れた土工がどうして此日を過してゆかれやう。父親は妹をたよつて子供をあづけにいつたが　彼の妹も深川の木賃宿にゐる身分だつた。子は父戀しさに探しに出て疲勞と餓のために倒れてゐたのだが、父はまた、二人の子の飢を思ひ病ひながら浮浪者として警察に拘留されてゐた。銀座では道路におちた西瓜を拾はうとした飢餓にせまつた老人が、うつむいた刹那に、自働車が老人を轢殺してしまつた。なんと、悲しい人世ではないか――。

◇

暑さと生活難が狂人の洪水時代を造り、危險性發狂者數六千八百九十二名の收容力が三千六百名だけしかないといふ。これは東京だけで病院の數は十五、島流しにも出來まいと警視廳醫務課では新聞に話してゐる。

◇

二條公爵家の襲爵爭ひは、頭の古い人たちばかりでやつてゐるのかと思つたら、若い青少年も交つてゐる。二條でなくつても、八丈でも、九町でも自分に自信があつたら、家柄なんぞほんとに家の殼だらうに、よくよく重荷を負ひたがるものだ。

さて地獄の圖ではじまつたから本願寺で結末をつけやう。國寶となる前に三十六人集を賣つた、否賣らぬ、二萬圓づつの學校寄附金に對して六十四萬圓分お禮に差上げたのだといふ。いづれにしても前記の貧乏人が聞いても本氣に出來ない。これは一條院の中宮彰子が宮中に持つていつたもので卅六歌仙一人づつの集である。以前にも信實描く卅六歌仙が一ツづつバラになつて世論を起した。この時も骨董家益田男爵の肝入りだつた。また今度も同じ人の斡旋で「貫之集」「伊勢集」が十頁づつ卅二に切放されたのだ。そして買手の顏ぶれもおなじだ。皇室から頂いたものをとの非難に對して大谷尊由師はいふ、「死藏するより育英の資にする方が好い」と。ところで思ひだすのは宗祖親鸞を句佛師がよんだ句がある。

有難や祖師は紙衣の五十年

坊さんは教育家ではない、社會事業家ではもとよりない。財寶をもつてるのからして妙な氣がする。そんな事をいふのは野暮だ、お有難ではもう絞れないが、女子大學ならば全國の信徒の娘が集まる。あんなにゐるのに勿體ない、他校へやつてしまつては？

末世、末世、末世！　一方句佛師の本願寺には親子財產爭ひの訴訟さへある。

巴里、日本畫展覽會場印象

長谷川春子



乙女　一　松園女史

一體何處の國だとて、譬へ此の佛蘭西といふ總ての人間が多分の藝術的素質と敏感性とを持つて居る國だからとて、見馴れないものの中から傑れた者をすぐ見分けられるといふ譯はないから――何れかと云ふと傑れた者は大抵最初は少しの識者を除いては專門家だからと云つてすぐには解し憎いものだ。一方受けるこつと觀覽人をよく呑み込んだ才人の作者は識者をさへもちよつと騙してしまつて一般にはあつと云はせる――あとでは見ざめのする一時受けの中に面白い畫を作るものだ。

それからそれ以下の普通の人間の作る只工手間ばかり矢鱈にかけた淺間しくも體裁よく出來た平凡なものといふものは觀者へは別に働きかけても來ずに音無しく多くは手奇麗で――或るものはわざと少し奇嬌だつたり、汚なかつたりして、いづれにせよ頭に來ないから疲れないで一般觀覽人には快いから、面白いから、まして此處では物珍らしいから――何處の國だとてさういふ見物人が展覽會の切符を買ふ人の多くなのです――まだ〴〵キモノと手踊り、提灯、櫻の花、等々、みんなボンボニエールの樣に可愛い小ぢんまりした東洋の美術國から來たと云ふ故、入場者はフランス人特有の過大な形容詞で、無論日本展ばかりではなく彼等は萬事萬端にそれ等の形容詞を用ふので、さつさと見て廻ると云ふ口の下からすこしは知つた振りの連中は東洋はより遲れてゐるといふ觀念の西人の事なれば、獨創、現代の思想、物體感、等々の缺除して居る事を云ふ。数へられるもののない事を云ふ。それは解りきつた事で、參考品は先づ別として、我等はすでに帝展の謂ふ所の中堅なる人々の畫に何か同樣なものを期待しませうか。

然し古人が歐人に日本人の傑れた藝術的素質を示しておいてくれたおかげで、此の展覽會は他のスウィーデン其他外國將來畫展中で異常の好成績――稀に見る營業成績であるようだ。

兎も角、先づ會場一、二室邊へ並べられた中堅作家の作品は、實在ではないやうに芒と影の薄いことであろ。高價な美しい壁紙のようである。肉と脂で成つた、立體的なものを見馴れた人間には私よりなほ其の感じがするだらう。だから彼等の中の呑氣な人間はまだ東洋はファンデジイに滿ち滿ち

た地だと思ひ込んでゐる。全く此等の畫を見てゐると激しい現在にもまだ昔の平家の落人が作つたと云ふ山の中の別天地の人間のように時代離れのした——者のように呑氣に生きてゐる人種が日本には東京には住んで居るのだと思ふからには新興の勢の盛んな日本を頭へ浮べることは出來ない譯だ。

未だそれでも花鳥は丁寧に描き込んでゐるから裝飾布として反感もないが、其の時代の面影さへ再現して居ない大和畫や大和畫式に描いた二、三ののつそり大きく無意味に簡單な線と只平べつたく塗つた繪畫の人物畫—巴里で見ると無のように見える。もすこし確りした人物畫が欲しい——もつとも帝展並びに現代日本畫には殆どないそれだが。

さて其の中で平福百穗氏の鴨の圖とか松岡映丘氏、鏑木、土田、榊原の諸氏とかは私には眼につく——巴里人には見つけないから玉石混淆、見わけもつかぬらしい。平福氏の昔の渡邊省亭を偲ぶ巧妙な筆技の畫や、前記の人々達などは、亡き吉川霊華氏、冨田渓仙氏等も加へて五六人の展覧會を畫廊でやつたら味ふ人もあらうと思ふ。

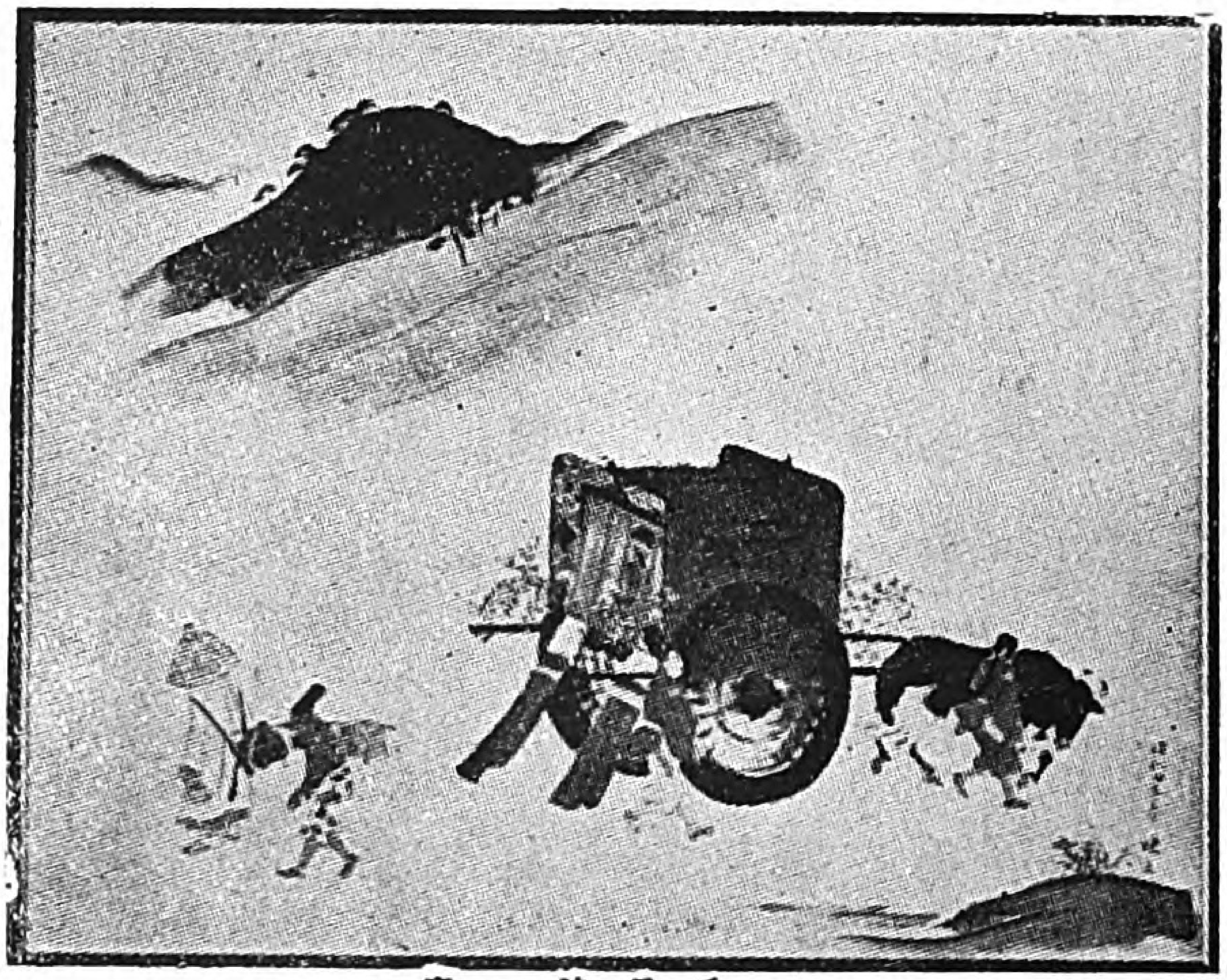
堂本氏の畫がふと眼に入つた。一體何の眞似でもやつて見せられる此才人は遂に自分の畫はすでにやゝ疲れたようにも思はれる。頭と技にはもう創り得られないのか知らん。本當の帝展の中堅であるべき才を澤山持つ人の爲にすこし惜しい。松園女史の娘の振袖、は染色と模様が優美に美しい。

參考品は流石に此處へ持つて來ても、よく見れば惡くないものも多いが、撰擇はあまり上手かつたとは云へない、其等の中できつく光つてゐるのは春草の黑き猫と靭彦の守屋の大連とである。此れは一昨年東京の傑作展に於て見た時と少しもよさと强さを減じずに光つて居る黑き猫は——柏の木はすこしも感心しないのだけれども此の久しき以前に描かれた黑猫は、巴里途上で見る毛並のいゝペルシャ猫の眼にも負けずにキツイ眼をして會場に光つて居る。

守屋の大連もよき西歐人の顏にも劣らず相當深い味の顏をして確りと劒を持つて立つて居る——背後の靭彦風の兵隊は此處では甘すぎる。百穗氏の豫讓、思ひ付きの奇抜さがやゝ少し露はに見える此の畫は出品當時文展で受けたように、受けてゐる——一見面白いから。然し私はこの畫境で畫材をとり畫を作る事は贊成しない。

其他の右、現大家のものは鰯の頭の如く迷信がつけば成程そうかと有難く見えるものらしい。

會場に藤田嗣治氏の二枚の大きな群像の對作が水と油のやうに眼立つ。日本人だから日本畫かも知れないが全然別のそれである。葛藤して居る人間の群れた此の圖はいゝと云ふ在來の言葉の意味には適しないが、彼の描かんとした意圖も、彼と云ふ人物——ヘロイズムでアムビッシユウな現代の天才の彼が畫面からよく解る。例の灰白色地に細い細い鋼の樣な線と極く薄い影で隈どつてある其の畫面の前へ來ると初めて稀薄な幻しの中から漸く現代へはつきり戻つて來たような氣がする。



草一　映丘氏

人から聞いた話

秋子——みどり——素子

黴びた西瓜のたね

大沽路までできたとき蒸々してゐた曇つた空から急にバラバラ降つてきた。ポプラの貧弱な並木が騒ぎ出したと思ふとひどいシケになつて雨脚がコンクリートの路面に沫（しぶき）をあげて、英租界の跑馬場の芝生が雨の中に煙つて見える。劉森はあはてて雑貨屋の軒下にかけこんだ。けれども雨だれが肩から洋袴をぐしよぐしよに濡らし、雨はいよいよ募るやうに見えた。幌を下した黄包車（ワンポーツ）が瀧のやうにふる街角を行きなやんでゐる。「香煙！」劉は頰杖をついてセントラル・ダンスホールの建物の石段に雨をさけてゐる若い斷髪の姿に見惚れてゐる番頭に吐鳴りつけた。

番頭は劉の渡した銅片を丹念に數へると、一番廉い紅錫片（煙草）を默つて出した。

「降るわね」下婢らしい色の白い圓ぽちやな女が、佛蘭西租界の苦力マアケットの歸りらしくもやしや豚肉をいれた籠をさげて、焦つたさうに木履をがたつかせ、唾をペッペッと吐いてゐた。が、すぐ諦めてコケテッシユにシナをつくりながら劉の脚をつゝいた。「見知らないいいひと、妾と行かない？」さういつてほんの鳥渡紅くなつて嬌笑つた。劉は見知らない女の手を握つて「諾々、どこへでも」。こんな風に成立する男女は裏通りの安宿に三十仙位の寝臺を借りれば、どちらも名前を告げることもなしに、責任や義務や商取引の觀念もなしに一再會（左様なら）してしまふ。

劉はフイリッピンから歸つてきた。上海にきて見ると白崇嬉が特別市長になつて青天白日旗が街中にひるがへつてゐた。蔣介石は將軍のやうに自動車を飛ばしてゐるのを一度劉は眼で見た。ボロヂンは飛び出したし、軍閥や政治家は一向民衆をかまひつけなかつた。劉は頭をかしげて南支那の正體をみやうみやうと眼をみはつた。そして大いそぎで故郷の福建省に歸つた。

劉が南洋で發洋財（ファンヤンサイ）（金儲けをして歸る）したといふ噂がパッとたつた。せまい街のことだ。故郷の町の理髪屋の隣りの土壁作りの料理屋の蒸々する窓から瘠せた畑が見えた。埃のういた食卓に肘をついて、劉はうまいものを喰つた。ならず者や政治癖のある若者を饗應した。

「吾々は——」劉は麺をすすりあげながら囁いた。「思明を占領しなければならない。」思明、一般には厦門（アモイ）といはれる。江蘇の上海、福建の厦門、廣東の香港といふまでもない南支の三港のひとつ、東洋では一番ふるい歴史をもつ海港で茶、煙草、蔗糖、雨傘、樟腦、などの交易で織るやうに殷賑を極めた美しいみなと。海關税でも年に數百萬弗はとれる筈だ。劉は、このあがりを手に入れやうとしてゐる。

劉はみづから革命家をもつて任じてゐるが、それは兎に角として彼の抱いてゐる野望が途方もなく大きいことだけは確にちがひない。劉が最初厦門を狙つて見事失敗した時は、厦門は孫

傳芳の配下の冒険人がそこを地盤にしてゐた。比律賓へ行つたのはその失敗のあげくの脱走だつた。發洋財をねらつて南洋にわたる支那人、支那流にいへば華僑である。
「なあに華僑が大ぜいゐるんだから何とかなるさ。」劉はとぼしい銀貨をふところにしての旅だつた。だが現實はいつもさうであるやうに彼を傭ふとする主人公はなか〱見付らなかつた——美しいシンガポールの海よ左様なら。劉は平野の方に行つた。砂糖蔗の畑、土人が裸で畑を掘つてゐる。彼は空腹でよろめきながら河へ水をのみに下りて行つた。百姓が收穫してゐる。甘藷だ。木の根のやうに長いイモ。「それ、なに？」「イモだ」「うまい？」「欲しいんだらう、そらかけらを遣らう」なるほど、河の水をのみ、百姓の歸つてしまつた畑から諸をとつて喰へば、そして黍畑の中に寢れば、人は生きてゆかれる。劉はその通りにした。ある夜、シンガポールの支那街で彼の前を行きすぎる一人の男の後姿を見た。洗面器を背中へ後生大事と背負つてゐる。黃君に似てゐるがなあ」然しあの男なら「北京警察官吏學校」を卒業したはづだが……。街角の灯が男の横顏を照したとき、劉はぽんと肩を叩いた。
「黃君！」「えつ!?」と男は振り返つた。そして呻くやうに「救星」と呟いた。(不意に出會はす幸運)、こんなふうに、妙な處で再會した彼等は苦力のゆく麵屋の腰掛に据つた。黃は溜息と一しよに洗面器を下した。洗面器の中には涼餅(リャンピン)が轉つてゐる。「この涼餅をうつて暮してゐるんだ。」何と情けない再會——。劉は妙に嗤ひたい氣がした。悲しいロマンテイストだ。南洋で金を儲けやうなんて。とまれ脂肪のういた美味さうな廣州麵が胃袋の中にトロリと重みをかんじたとき、黃はふところが空つぽになつてゐることを劉に告白した。
「だが、君に出會つたからにはもう安心だ、君は僕を救つてくれるだらうからなあ」と嘆願をこめて呟いた。秋の夜だ、表に出た。「ね、黃君、云つておくが僕は君以上に素寒貧なんだよ」「げえ！おいほんとか？」「うむ。」
「この野郎、ぢやどうして麵を喰やがつた!?」氣の小さい黃は洗面器を小便のながれてゐる甃石の上において氣色ばんだ。
　だが、劉は偶然の幸運でシンガポール・タイムスの記者となり、その次にはまもなくボルネオのミリ市にあるペトロレム石油會社の社長の秘書に入りこんだ。彼は日本語はもとより英、獨、佛、西語を自由自在に操りエス語をもよくするし土語も話せる。語學の天才である。彼は信用を得てくると土人の下僕をうまく買收する事にした。彼の目的へいそぐ爲めに——。
「サヤオレンアジア、アンカウサマサマオレンアジア」から下僕にある日囁いた。サヤは私、私はアジア人、アンカウは君、サマサマは同じ、君も同じ東洋人だ、一肌ぬいでほしいと劉は下僕に談じこんだ。油坑閉鎖計畫書が欲しいのだ。劉はアングロ・サクソンの東洋における帝國主義を眞に憎んでゐた。一泡ふかせる考へがこびりついてゐる。まんまと盜み出させた書類を持つて劉は、印度に行つた。「被壓迫民族同盟」支那も印度も全く同じだ。國民政府は印度の亡命者をひそかに養つてゐる。
　さて、再擧を計畫してゐた劉は福州と厦門の中間、山岳地方の奥地に横はる街、永春に手兵を養ふことにした。永春から河の流れについて下航すると仙游がある。これは交通の要路だ。
　厦門の國民軍海軍司令林國賡(リンコンコン)の海軍は殆ど實戰の經驗がなく兵器はあるが戰法はまづいといふ噂がきこえた。劉は仙游から厦門をついて一擧にその地を占領しやうとまたしても決心をする。こんな野心家があちこちに

爪を磨いてゐる中國ではある。とは言へ、厦門に永く住んでゐた高木といふ、日本人の骨董商がある。この人以前から軍器の密輸入をやつて儲けてゐた。劉は情を明してたのみこんだ。高木はひそかに臺灣の基隆に向け大金に懐ろをふくらませて出發した。春はたけなはである、河畔の桃李はいまを盛りと誇りかに咲き、太平の夢は原野の羊群のやうにねむつてゐる。劉の便衣隊は各地に斥候してゐた。すると、仙游城外三十支里の地點にある國民軍の兵營に多量の武器彈藥が何月何日かに運搬されてくる筈だといふ情報が齎らされた。基隆からは何の音沙汰もない。ままよ！劉は密謀をこらした。

楊柳に白い花が咲き、音もなく散る。土手の草や灌木を羊がむしやむしや食つてゐる。その中に便衣隊は散兵線を布いた。やがて遠くきこえてくる艀の櫓の音、物悲しげな船うた――狭く濁つた河である。劉は合圖のピストルを空に向けてうつた。パチパチ、パチパチ、ひとしきり白い煙が岸をこめた。つゞいて小銃の音！

しかし艀は案外警戒嚴重で兵はなかなか降參しない。降參する分別も出ないほど驚いたのかもしれない。無茶苦茶に應戰する。沈んで行く艀、岸づたいに脱れて行く船夫、……晝頃になつてやつと便衣隊は艀を占領した。だが、何といふことだ。積載した彈藥といふのは案に相違でほんのぽつちり！だが負けじ魂の劉のこと、運は天にありといつた構へで福建獨立軍といふとてつもない看板をかけた。

仙游の城外にたむろした劉軍は土匪やならず者等々の集合である。ある夜、歩哨は草の上に疲れて長々とねむつてゐた。匍ふやうに黒い影が近づいてくる。それが國民軍の奇襲隊と機關銃である事など文字どほり夢にも知るはずがない。氣のついた時は劉の軍營は敵の包圍をうけてゐた。黎明の冷い空氣、夜はまだ明けやうともしない。劉は寢臺から飛びおりて夢中で走つた。轟く砲聲と草に映える赤い灯が前にある。機關銃だな！しかし間一髪でそこへ躍りこんだ劉と手兵は、あまりにも短距離なために折角の機關銃の威力が何の足しにもならず、忽ち潰走してしまつた敵陣を、思はぬ命拾ひをした上に占領した偶然の幸福で呆然と顔を見合せた。

勿論、こんな出鱈目な軍隊がまもなく増援隊の送られた國民軍の前に一たまりもなかつたことは、當然である。劉は逃れて上海に潜りこんだ。

上海は軍閥の苛酷な徴發と土匪の横行におそれをなした大家族主義の集團がぞくぞく入りこんでくる。それと貧農の都市集中といふわけで明け暮れ船といふ船、汽車といふ汽車から吐き出される新らしい住民で、落ち散つた西瓜の種子のやうに雜踏してゐる。

上海の下層民は不機嫌に怒りつぽく、血の氣を失つてほうつき歩いてゐた。群集のマッス！自轉車が轉つてもいつぱいの人だかりだ。そして譯もなく昂奮し合ひ嘲笑し侮蔑し唾を吐く。

劉は民衆を見極めやうとした。この人だかりが何を欲しがつてゐるか。だがそんなことが劉に判るだらうか。

いま、彼は日本へきてゐる。偶然の機會で會つた時の身の上話にすぎないのである。（秋子）

アンコロワットの王宮

カンボチヤの王宮を見に行くと、まづ守衞に名刺を見せてそれから金二十五錢也の木戸錢を拂ふ。この王宮には勿論王様が

住んでゐますよ。

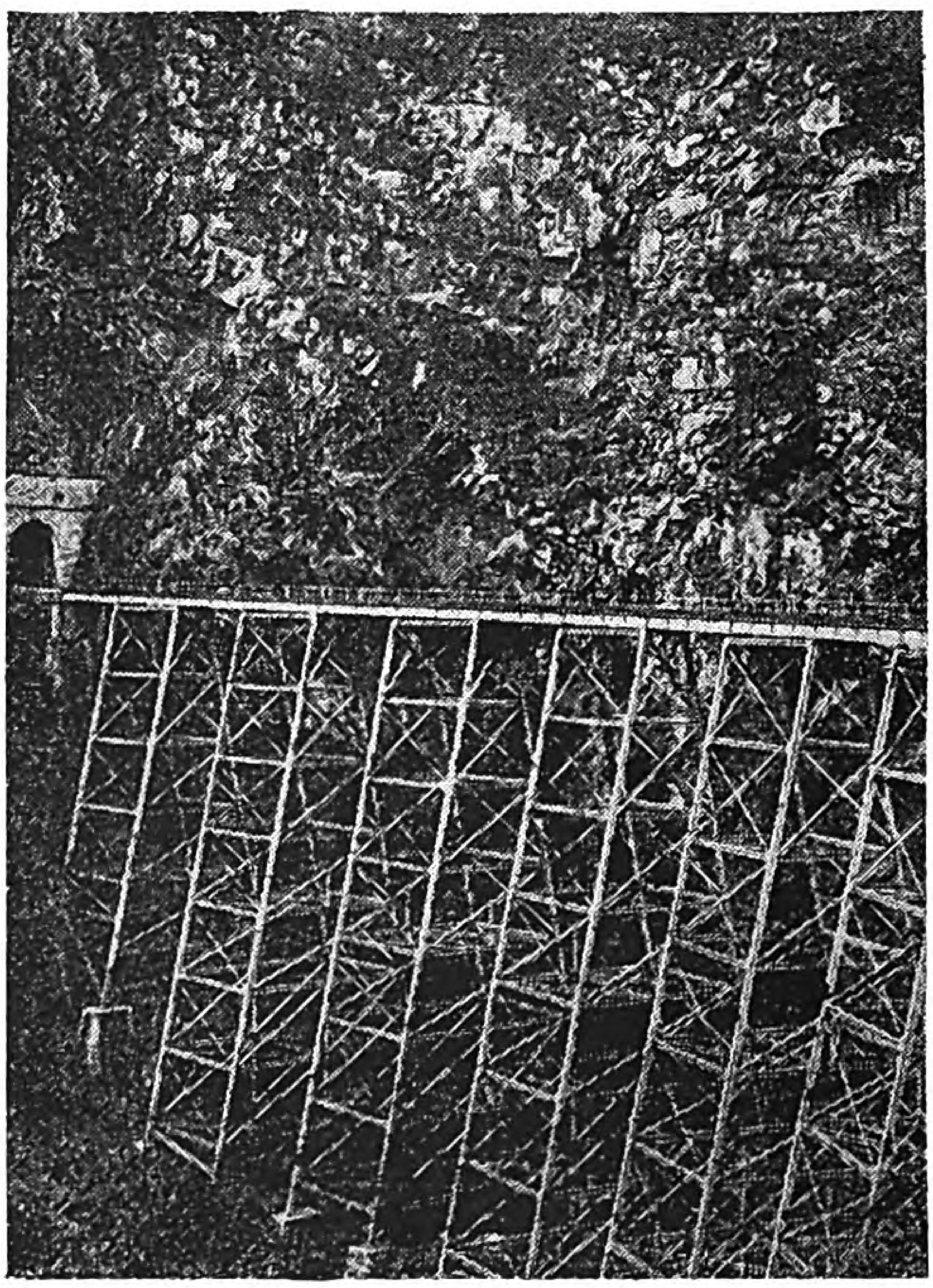
サイゴンから汽船に乗つて朝たつと、夕方トンレイサブの湖のプノンペスの都につく。ここが即ち王宮のあるところです。

ここも非常に美しいがここへ來る途中が又すてきに綺麗なんです。普斷は廣い平原と森林とが雨季になると、(雨季は丁度七八月頃です)メコン河の水がふえて森林におし寄せて行つて一面の湖になる。

水の色はまつさほで、椰子とマングローブの葉の緑だけが兩側に何里と續いて、浪の中にゆれてゐるのが見える。その中を汽船が通つてゆくんです。

有名な平原で木の間から土人の家屋が高い所に見える。之はふだんは住まないので、ニッパ(椰子の葉)で屋根をふき、椰子の丸太で小屋を作つてある。――つまり特別な時、雨季だけ住む樣に、そして水におそはれても壁なぞの樣な溶解性のものをつかつてないからとける心配もないといふ至極便利に出來上つてゐる。

トンレイサブから都に行く方法と、も一つ途中から船を乗て象にのつて行くのがある、之もとてもいい景色で私なぞはこつちの方がすきだが、象にのらなくても、水牛のひく牛車もあるし。路々象や水牛が子供達と遊んでゐるのが珍らしく面白い。ここは佛蘭西の保護國だが日本の三四倍の面積は持つてゐる。



雲南鐵道

そこでいよいよ王宮拜觀と、名刺を通じて木戸錢を拂つて中に入ると、西側の方に印度式の大理石のドームの佛殿がある。實に綺麗で立派で、光線の取方なぞの美しい事といつたら、高い建物の窓が七色のステンドグラス、床が銀の延板、正面には佛陀の等身大の黄金像。像に二百萬圓位のダイヤの白毫が赤青紫と輝いて居り、周圍は熱帶の白日光と菩提樹の緑。そのコントラストが實に素晴しい。一種の不思議な光彩を出してる

印度の女は日本の女より綺麗ですね。(ホエダー族なぞは日本人より色が白い)宮殿には白人の歌姫が居て、酒地肉林の宴のために用意されてある。之は十一二の子供の時から宮中に養成されて、宴の時には金銀珠玉をつけて舞殿でをどる。

宮廷には孔雀がかつてあつて(鳥はすべて極樂鳥の様に色彩が濃く美しい。)手を出すとそこに來て、御愛嬌にパッと翅をひろげてみせる。

都から四十哩はなれたシヤムとカンボチヤの國境にアンコロワットといふ現在使用されてゐない修道院がある。之は今から四十年以前フランスの探險隊によつて發見された。

アンコロワットは龍を表象した建物ですべてが石造。周圍をヤショダラの池が取つてゐる。

四町四方の三方形の三階建で四角にヤグラがあつて、眞中にピアナカ（天宮）がある。約七百哩から一千哩の林海が池の周圍を更に取り卷まいてゐる。

アンコロワットから五、六哩はなれてアンコロトムがある。之もアンコロワツトと同樣なものであるが、こわれてゐる。

三代將軍家光の時「印度の祇園精舍をたづねて來い」といふ命令が出て、長崎の大通辭島野領寛が行つた。その時に印度の祇園精舍は跡かたもなくなつてゐたのを氣がつかずにどん〳〵進んで遂に印度支那に入り、サイゴンからアンコロワツトに入つて、之こそは印度の祇園精舍なりとして、見取圖を持つて歸つてきた。この事は最近まで解らずに、あくまで印度の祇園精舍と信じられてゐた。

この大理石の修道院は印度から流れて來た彷浪の王子が、今から千五六百年前に此處で足を止めて國を作り、二代目の阿育王（アイク王）が殿堂を作りはじめ、完成するのに千年の歳月を費やしたものである。

殿中の石壁には一面毛彫の壁畫がある。猿と蛇が女を爭つてゐる東洋的なすごいのもある。之等の修道院は山田長政がシャムへ行つた時代にシャムから占領され、宮殿としてのアンコロワットを壞して修道院としてしまつた。（三百年前）

現在フランスが三十萬フランの修善費を毎年出してゐる。しかしここよりもジャワのジョクジャカラタ（ジャワサラサの出る所）のボルボトル――おしやか樣の齒をいけてあるといふので佛石がおいてある方が世界的に有名である。

王宮も年々フランスから年金を貰ふ、人口は六百萬人。

メコン河を更に逆上つてゆくとクロコダイルといふ獰猛なワニがおどつてゐる。こいつがすごいんで人をみればガブリと喰ひつく。

螢といつても東京邊のやさしいのとは違つてまるで豆電氣の樣なのが一ぱいとんでゐる。

とかげも五色のエラのある一尺位の奴がする〳〵と走つてゐる。

農業國で、砂糖は世界最初に發見されて作られた。甘蔗で作る方のサトウの產地としては世界最古といはれてゐるエヂプトナイル河の上流地域よりはるかにはやい。ペートル大帝が貴族達の集りの時にサトウをなめさせて、少しづゝ分け與へたといふはなしが殘つてゐる。

佛人は二萬人位で（印度支那全體として）米作は土人、製米は支那人の手によつてなされてゐる。南洋の經濟界は主に支那人の手に握られてゐる。

佛領印度支那の王國は、安南ラオス、カンボチヤ等でラオス王國は周圍に一萬呎の、連峰が續き　之を越えねば入國は出來ない。日本人は殆ど居らず、たまたま七人の女が、支那の隊商とフランスの軍隊について入つて行つたのに逢つた。

雲南の海上にベタロン（海龍）といふ斷崖絶壁をもつ島々がある。その數は三千餘島で、コロンヌ――巨柱島――は高さ千尺頂上には雲がかゝり、禿鷹がとび、まつさほな海の色にはえてあくまで奇勝、松島なぞは位べものにならない。この澤山の島の間を、支那のカントンから出て、安南にゆくいかだは、長さ二町でその上には家あり、畠あり、豚小屋あり、人は生れて又人は死ぬといふ一つの生活をしてゐる。

カクバ島といふ島には眞黒な猿ばかりゐる、又鹿ばかり居る島もある。ここの海は潮香が非常にたかく、潮の渦卷もある。

ホンゲイには世界で　名な無煙炭の露天堀がある。

島には湖がある。それは長い間海の水が島の底を洗ひ、洗ひして、いつか穴をあけ、そこから水が入つて湖となつたもので

支那人が眞珠をとつてゐる。
對ひの陸地は東京の三角洲でトンキンデルタの平原で、ペルチウツリイ——倭樹——の眞蒼なのが廣がつてゐる。

縦横にある運河にはマングローブがゆれ、沿岸の椰子の木は勢よく綠をはびこらしてゐる。

マナシカゴ、安南からくるもので竹かごを船の形にして間に漆をぬつて運河で釣をしてゐる。

雲南地方は秋がよい。ラオスと雲南の連峰の空が眞靑で何ともいへず美しい。

雲南の鐵道の枕木はすべて鐵材をつかつてある。白アリのため木の枕木をつかふことが出來ないからである。

雲南鐵道はハイホン、ラオカイ、アメイ、ウンナンフジョウ（雲南府城）と通つてゐる。そしてこの汽車は決して夜運轉されない、それはラオカイからは斷崖とスレスレの所を通るので夜は危險なのである。そして此の線は片一方は斷崖絕壁でありながら片一方は廣い平原で秋などはすゝきのほがみわたすかぎり波の樣に展がつてゐる。といふ極端な對象の面白さを持つてゐる。（みどり）

インドの革命家

印度の獨立革命運動の首領ガンヂーの翼下には、熱烈な革命精神に燃えた多くの人々が集まつてゐます。ガンヂーのあのかく灼とした勢力は、反抗意識にもえた民族の支持と共に、翼下の人たちの素晴らしい力が多大に反映されてゐるといつても間違ひではないでせう。それはまたガンヂーその人の偉大な人格の反映でもあるでせうが——。

とにかく、シーさんはガンヂーのお弟子さんで、眞面目な、如何にも東洋人らしい淡白さを一面に持つた熱情家でした。印度の獨立運動が漸く勢力をふるひ初めた時、イギリス帝國の激しい壓迫はシーさんを亡命の餘儀ない立場に追ひ込みました。シーさんが日本を訪れたのは、二年程前の事で、名目は佛敎の宣傳云々といふのですが、事實は亡命の借り名にすぎませんでした。新宿のパンや中村屋の養子が印度の志士だといふ話は可なり有名ですが、東京にはさういふ人たちが二十幾人もゐて、時時の集まりにはシーさんもその人達のお仲間の一人でした。

東京では社會民衆黨の宮崎龍介氏を賴つて來た關係上、緣故を辿つて、スコット家の可愛らしいお孃さんベッテイさんの英語の先生をしながら、そのお兄さん達から日本語を習つたりしてゐました。

勿論、佛敎の宣傳云々とは云へ角袖の徴行が絕えず見えかくれ隨いてゐる事は云ふまでもありません。

先生としてのシーさんは單純と情熱と誠實とを持つたおとなしい、いい先生でした。

併し、沼頬女史のシーさんの話が語つてゐるやうに、彼は時時行方不明になるのです。

五月頃、庭先きから覗き込んだり、それとなく垣根の外をぶら〳〵歩きしてゐる徴行を見事にまいて、北海道へと云ひ殘して仙臺へ走りました。そこで旅裝をとゝのへたシーさんはやがて天津の街に現れました。普通南京へ入る人々とは全く別の道を通つて、南京に現れ、腕車を馳けつて今を時めく國民政府の總指令蔣介石の玄關先に立ちました。國民政府政治部の黃氏の手引きだつたといふ事です。豪壯な蔣介石の邸宅の門前には美麗な自動車が幾臺かたてつらねて用意されてゐました。そこへ見すぼらしい辻やとひの腕車が止り、シーさんは丁重に蔣介石

の室に案内されました。「うちの自動車で來ればよかつたのに」とは蔣介石がシーさんに最初に云つた言葉だつたさうです。英語の出來ない蔣介石の秘書兼通譯は有名な宋美齡夫人でした。夫人の美しい笑顔と、流暢な英語とは何を蔣介石とシーさんの間に取り次いだでせう――。

支那國民政府と印度の革命運動と蒙古の提携。そこには非常な重大性が含まれてゐることは常識の想像でもかたくはないでせう。蔣介石は僅かに出來る一言二言の日本語を繰るだけで、一切は宋美齡夫人を通してゞした。あでやかで、ある限りのぜいたく品を身につけた夫人は、一面中々切れ者の秘書でもありました。シーさんは名利に淡白な人間として、美貌と才氣と、全くどん慾なまでに豪奢を求める宋美齡夫人の素晴らしい生活力に、無邪氣な敬意をさへ感じて、非常に親しくなつたのでした。かんざしの玉程もある金剛石をつらねた首飾りも、たゞ非常に美しいものを見た驚異を與へられただけで、その中に支那幾千萬の民衆の血と汗が含まれてゐるかを考へてみない程單純でした。素晴らしい飾り付け、ぜいたくな食卓、一切は、宋美齡夫人の望むがまゝでした。

××の政府が、某重大事件に關連して、三十萬圓の大金を蔣介石のポケットに秘かに送り込んだ事は知る人ぞ知る秘密です。單に日本ばかりでなく、今全世界の注目の的になつてゐる謎の國支那の權力を把持する蔣介石に、策動飽くなき各國から秘かに送られるポケットマネーの莫大さは、一寸見當がつかないといふ事です。そしてそれ等はひとへに宋美齡夫人一人を滿足させるために湯水と蕩盡されるのです。併し蔣介石が夫人に惑溺してる氣持には、彼の女が孫逸仙の夫人宋慶齡の妹であるといふ事が、大きな原因をなしてはゐなかつたでせうか。そしてそれは可なり彼の勢力に役立ちました。

だが今は？

南支那の先進的な青年達はすつかり蔣介石から離れて、別個の運動に全身を投じてゐます。

蒙古は？多くの聯邦からなりやゝ日本の德川時代のやうな狀態にある蒙古にすら、ソヴエットの潛行運動は目ざましく發展してゐるといふ。その時に、蔣介石の三國提携の運動。

三百圓の月給で自分の下に止まつて與れといふ蔣介石の言葉に對して、師ガンヂーからは何の返信も得られませんでした。

シーさんは一ヶ月の南京滯在から漂然と日本へ歸つて來ました。

身ぶり手まね、ふだん無口なシーさんの、お話しだけは巧みなものでした。快活でユーモアがあつて――、スコットさんの大きい令息と、ベッテイさんを前にしてシーさんは雖のまへでも容易に語らない樣々な話を聞かしました。

今度蔣介右から手紙が來たら行かなくてはならない。といつてゐた彼が、暑いから一週間ばかり英語の教授を休ませてくれといつて、四五日すると、二度行方不明になつてしまひました。一週間したら南京へ行くのだと云つてゐた事もあり、別な所ではハルピンへ行くと語つたと云ひますが、蔣介石の下へ走つた事は疑ふ餘地はありません。

再度の蔣介石訪問が何を洩らすでせう。

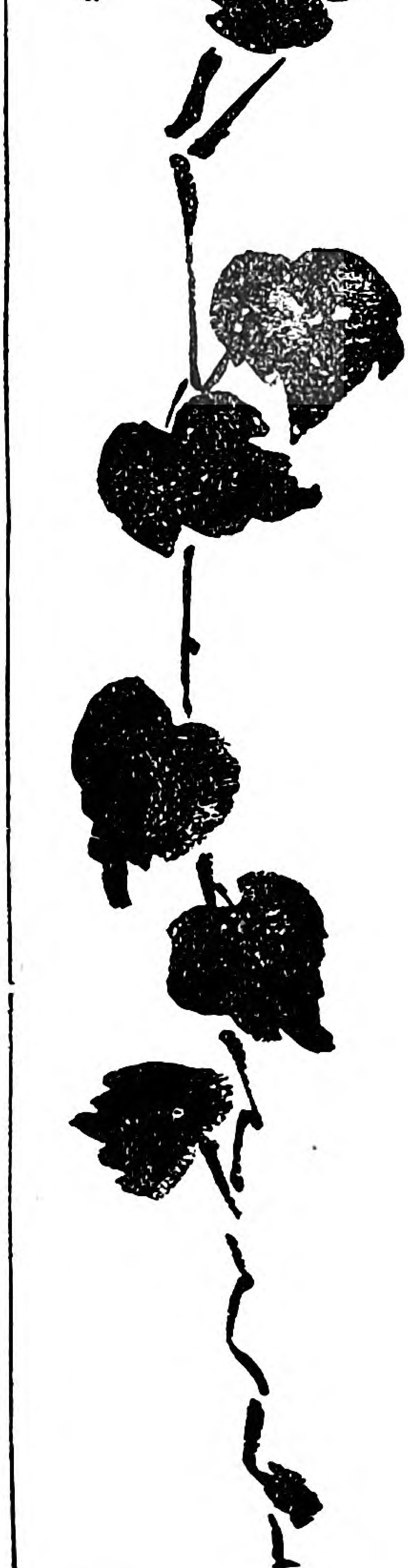
彼が再度日本へ現れたら、今度こそ直接本人にあつて、も少しつかみ所のある話を聞き出したいと思つてゐます。

（素子）



午　後

武内あけみ



しやぼんの泡の水たまりから
蒼い空ののぞいてゐる午後
しんしんと
葱ののびる音がします。

太陽は黄色くぼやけて
若い未亡人の
乳房のかんかくです。

ガタリゴトリ……
荷馬車が魂をきしませながら
ゆきすぎました

ころがつた馬ふんは
まだピクピクと動いてゐます。



ナゴデン（不良少女）

京芙美子

ナゴデン！　ナゴデン？
畜生
さあ、幾らでものゝしるがいゝ。
からだ中ヒリヒリ痛んではゐるが私は決して素直にはなれないよ。
　お月樣が土の中から生れても
　地球が三角にとがつても
素直なんて吹き飛ばしてやるわ。
反抗！
反抗が惡いつて？
誰れがどいつが反抗を此の胸に
植ゑつけたかい。
ナゴデン！



ブラックリストのナゴデン！
胸に百十五號の　記號入りとは
なんてまあ！　素晴らしい罪人だらう、だが畜生
誰れがどいつが　浮び上れない生活を知らせてくれたのかい、

仲間は昨夜のからだの痛さに疲れて眠て居る。
眠つた顔ばみんな優しい。

私だつてあの頃は
世の中の嘘つき達が一番ほしいと云ふ純情さを
はちきれるほど此の胸に盛つて居た可愛い娘さんだつた
純潔な血の吹くたましひを
犬めにふみにじられたあたしだ。
　きりきり胸にもえ上る反抗が
今では強く強く私を生きさせてゐる。
私は闇に生きるナゴデンだ。

ロシアにおける勞働婦人の近狀

山川菊榮

一九二三年現と比べると、次表の如く、勞働者數は男子七五・九％女子八四・三％の增加を示してゐる。（單位千人）

	男子	女子
一九二三年一月一日	一・〇七〇・四	四二四
一九二七年〃〃	一・七八二・六	七一〇・三
一九二八年〃〃	一・八九五・二	七八三・八

戰前に比較して産業上に、おける女子勞働者の變化如何は、一九一三年—一九二八年における數箇の産業部門に傭はれてゐる女子の率を示す次の表に明かである。

産業	一九一三年	一九二八年一月一日
金屬及び機械	四・八	八・九
木工	八・二	一六・七
化學	三四・八	三五・〇
食料品	二一・四	二六・四
綿業	五六・一	六一・一
羊毛	四一・一	四九・二
絹	六七・六	六四・四
製紙	三一・四	二九・五
亞麻	五三・九	六四・六
印刷	九・一	二二・〇
製陶	三六・八	三九・三
硝子	一九・四	二六・八

この數字によつて、産業勞働に從事する婦人の減少を非とする勞働組合の政策は功を奏し、多くの部門で婦人が增加してゐる事實が認められるのである。

同等の資格又は同等の勞働能力ある場合は、婦人も男子と同率の賃銀を仕拂はれるので、賃銀が廉いから婦人勞働者が增加するのではない事を知つておかねばならぬ。

一九二七—二八年にかけては婦人勞働者の技術的能力を高めるために非常な注意が拂はれ、この結果は工場學校の女生徒數及び女子見習工の數に表はれてゐる。一九二七年七月一日には、工場附屬の學校の女生徒は一萬五千四百三十三人、即ち全生徒數の二六・九％で、女子見習工は一萬八千五百八十一名、即ち總數の二六・九％であつた。然るに一九二八年一月一日には、工場學校の女生徒數は一萬八千四百七十八人即ち二八・一％に增加し、女子見習工の數は一萬九千百六名、即ち二七・三％に增加した。この外に技術學校、工業學校、中央勞働學校の特別講習會、失業者教育のための勞働紹介所の短期講習會などに出席する婦人の數は極めて多い。

サヴエート同盟內における女子勞働者の平均賃銀は、一九二四年三月現在の二七・五ルーブルから一九二八年三月には五四・八ルーブル、即ち九九・三％だけ增加した同時に、婦人は、その資格が向上すると共に、賃銀率も引上げられる。例へば一九二五年三月には、女子勞働者全體を通じて、六〇ルーブル以上の賃銀を支拂はれてゐる者は三・八％にすぎなかつたが、一九二八年三月には、三九％にまで增加した。一九二四年六月の女子の平均賃銀は、男子の平均賃銀の五一・％であつたが、一九二八年三月には、六二・二％に增加した。一九二

七年度の最後の三ケ月間には、大産業における勞働賃銀は、戰前の賃銀より二七%だけ増加してゐたが、女子の賃銀は五〇%の増加を示してゐた。

次の表は一九二八年三月における、數箇の産業の平均日給である。

	男子	女子(單位コペック)
植字工	三八九	三三四
文選工	二八九	二七〇
織工	二二六	二三二

これによつても明かなように、特殊の資格を要しない業務に於ては、男女勞働者の賃銀は略ぼ同等であり、織布業に於ては女子の方が高給である。

一九二三年の女子勞働者の勞働時間は、平均九・九時間で、鑛業の方向では一〇・一時間であつたが、今や七・五時間又はそれ以下に短縮されてゐる。

勞働組合、協同組合、及び政府の地位に對する婦人の昇進は、その一般的かつ技術的進歩と精密に關聯してゐる。この點ではかなりの困難があるにもかゝはらず、過去二年間における婦人の昇進は著しいものがある。一九二七年には、レーニングラードだけでも、行政官に任命せられた婦人が百六十五人に達してゐるが、之は同市における昇進者總數の四三・九%に當つてゐる鐵道從業員組合中央委員會の資料によれば十五の鐵道線路を通じて驛長及び助役、及び監督に任命せられた婦人が百廿四人に達してゐる。紡織勞働組合の報告によればその組合に屬する婦人の內、モスコーで工場長、及び副工場長に任じた者九人、レーニングラードで七人、ヤロスラウルで二名である。

勞働組合における婦人の增加は次の如くである。

	男	女	對比
一九二四年十月	四・七九八・九〇〇	一・六三一・六〇〇	二五・六
一九二八年十月	八・〇五八・九〇〇	二・九二五・七〇〇	二六・七

勞働組合の初步的な仕事をする團體の內部では、婦人は非常な活動をしてゐる。一九二七年一月一日には、組合の役員總數の二二・八%が婦人であつたが、一九二八年四月一日には、二三・四%に增加した。工場委員會に列してゐる婦人の數は、一九二六年一月一日の一九%から、一九二八年の二〇%に增加した。

婦人が總數の五五・一%を構成してゐる紡績勞働組合では、工場委員會の婦人委員は三〇・三%を占め、縣委員會では三九・八%、州支部では三六・四%、工場委員會の設けてゐる種々なる委員會では五〇%、紡織組合中央委員六十一名のうち、十名は婦人である。

サヴエート同盟勞働組合中央委員會は、保健衞生、食料、被服、紡織の如く、極めて多數の婦人が從事してゐる產業で、組合大會に婦人代議員を送る數が、その組合の婦人員數に相應しない事實を指摘し、選擧制度に違反しない範圍で、當該勞働組合における諸機關及び組合大會における婦人の數をその組合における婦人の數に比例させるように訓令を與へた。

その結果一九二八年十二月に開かれた、サヴエート同盟の第八回勞働組合大會の代議員千五百五名のうち、婦人は一八%を占めてゐた。前回には僅か七・五%にすぎなかつたものである。

序でながらこの大會では、飮酒、賭博、婦人の虐待等、勞働者の間における帝政時代の遺習に對して、一層徹底的な戰ひを行ふことを決議した。

(最近に人民委員會議(即ち內閣)は飮酒癖と戰ふ法律を通過した。その新しい法律によれば、地方の行政機關は、休日及び休日の前日にはアルコール性の飮料の販賣を禁じなければならぬ。もし勞働者が地方の酒店の閉鎖を要求するならば、地方サヴエートはそれを閉鎖しなければならぬ。新法令によつて、公立食堂、公立飮食店、クラブ其他の公共的な場所で

は酒類の販賣を禁止せられた。都市及び勞働者のセツルメントで、新しい酒店を開くことは禁ぜられた。アルコール性飲料に關する廣告も禁ぜられた。國民經濟の發達の五ケ年計畫の中には、ウオツカの製造販賣ははいつて居らぬ)。

同大會では一層多くの勞働婦人をクラブその他の敎化的活動に引入れることの重要さを力說し、そのためにクラブに兒童室を增加し、裁縫のクラス、談話會、新聞閱讀會などをふやすことを提案した。(サヴエート同盟勞働組合公報に據る)

臺灣より

日種明子

長い旅を終つてやつと臺北の宿に落着くことが出來ました。私の室は奧まつた一室で三方庭に面してゐて可成り涼しいです。その庭の一方から土人街(臺灣人の街のことです普通人々がこう呼んでゐるのです、土人といへば野蠻人、未開人種の樣ですが、實は土着民族のわけですから)が眺められるのです、私は此の庭の椽に置いてある籐椅子にかけて街を眺めようとしました。しかし困つたことに此の庭の木々は街を完全に見せる事を拒むかの樣に繁つてゐるのです。私はゴムの木とつたの間に方一尺の隙を見出して其處からやつと眺める事を餘儀なくさせられました。ところが此の恩惠にも少し無理があつて蔦が風の吹く度に私の方一尺の限界を妨げるのでじれつたい樣な氣がするのです。何でも此の宿の周圍は深く堀の樣に堀られてゐるらしいです。

私の方一尺のスクリーンの中には木造の綠色のペンキで塗られた家とその小さな庭此の庭には南國の赫熱の色を匂はせるカンナと眞赤なサンゴ樹と高い椰子樹と芭蕉と見られるのです。此處で此の若い私は感傷家にならざるを得ないのです、「おゝ南國の情炎こそ我等に萬丈の障壁を打壞せしめ、荊の道を突破せしむる唯一の武器である」と…實際南國に來てあの佛桑華とサンゴ樹とカンナの花を見るならば私共は失ひかけた情熱を取返す事が出來ると思ひます。此の家の隣は亭子脚を持つた赤煉瓦造りの家で××法律事務所の上板が掲げられてゐる、此處で、も少し私が頭を左へ傾けますと汚い箱や芥の堆高く積まつた貧民窟の側面を見る事が出來ます。

右の樣な背景を持つた私の方一尺のスクリーンの中に活躍する處の役者を私は選び出さなくてはなりません。併し私はその苦勞だけが不必要である事を發見しました。それは豫期せずして人々が不斷に現はれるからです。

灼熱の情緒を匂はせる庭の柴折戸からヒヨコの一群が出て來た彼等は古代猶太人の樣に歩いてゐる、それは宛も何かの樣に團結してゐるのです。ところが此のヒヨコの猶太人達はランニングをはじめました、私は「オヤ〳〵田中の親父のあやすガラ〳〵に興じて自己の存生を忘却してゐる赤ン坊達の病氣がヒヨコにも感染したかなあ」と思ひました。併しランニングも食べなければ出來ない……ヒヨコ達は早速角を生やしていつの間にか喧嘩を始めてゐるのです――四のミ、ズのために。

私はヒヨコの諍を見るよりも未だ〲珍らしいものを見出しました。それは纒足の婆さんです、ヒヨコ〲と傘を杖に歩いてゐるその足取りは硝子のカケラの上を爪立つて歩く樣な恰好です、彼女の足は私の握り拳の大きさで美しい花模樣の入つた靴を履き、髮には赤い簪をさして黑いつやのい支那服を著てゐます。婦人を完全に束縛した時代の遺物だと興味深くみました、さつきのヒヨコ達のランニングとは全く別々の對照ではありませんか。

突然私の眼界に眞黑な燕の樣な小鳥が現はれて私の視覺を幻惑さして何處かへ去つてしまつた！跡にはお河童の土人の子が二人仲好さゝうに歩いてゐる。

人力車が幾臺も通る。臺灣には未だ電車がないのですから。客を乘せて走る車夫の赤銅の樣なぶ厚い皮の面に汗が幾條も光つてゐる。引續き白髮の餘程腰の曲つたお爺さんが汗と垢に色あせた破れ支那服を著て萎びた手に杖を確乎と握り乍らヨボ〲と歩く姿は現在の矛盾社會に活きる人の苦しくも哀れな姿をまざ〲と見せられるのです、此の老人の腦裡にはあの桃源の國に遊んだ若き時代の幻が髣髴することでありませう！老人の跡に腐れた藁束を引ずり乍ら薄汚い着物を著たギナ（子供）が行く、あちらからは野菜籠を擔つた女が來る自轉車が二臺走る、スクリーンは一寸賑やかだつた、しかし乍らそれは一陣の風に吹きあげられた塵埃のため、霧の中行く人影の樣に消えてしまひます。時折街の端に干された洗濯物が私のスクリーンの一隅に現はれるのです。

私は藁束を引いて行くギナに何故か興味を覺えさせられました、彼女は猫の尻尾か豚のそれの樣に一寸ばかりの髮の毛を持つて色黑く、だが眼が大きくて可愛いゝ顏でした。彼女が藁束を縛つた綱を肩からかけて引いてゆく姿に勞働美か……藝術美か…：或は生活美か例へ樣のない美しさを味ふのです。

私はかつて或鐵工場を訪れた事がありました、その時半裸體で薄暗い仕事場に燒け爛れた鐵をもつて働く勞働者の姿をみました。眞黑な背中に漆黑な髮、そしてはちきれる程のシッカリと固まつた肉づき…そ
れが息づまる樣な空氣の中を動くとき、石炭の焔が反映して何とも形容の出來ない美しさに醉はされたのでした。私はその時の美しさに似た樣で又別の美しさに見入つたのでした。

それから數分の後私はギナの號泣を聞いたので驚いて何處かと四邊を見廻しましたすると先刻のギナが二人のリーヤに追廻されてゐるのでした、彼女は遁場を失つて貧民窟のそばの箱の中にもぐりこんだ樣でした、すると一人のリーヤが彼を引ずり出して足蹴する、今一人のは棒切れでなぐる、その度に彼女は大聲あげて泣き叫んで見物の人に救ひを求めてゐるのです、人々は誰一人として彼女を助けやうとせず唯ぽんやりと眺めてゐるのです、私の室に風が吹き込む度に棒切れが彼女の軀にあたる音が慘めな呻吟と共に聞えてくるのです…噫！

あたりの人も去つて亂雜に取散らされた箱の片隅に彼女はうつ伏してゐる、そよ風に彼女の上衣の裾が搖れてゐるばかり…

私は午後の太陽の直射を避け乍ら並木路を歩いて圖書館に行きました。可成り廣い處でした、婦人室は對立を隔てゝはしつこにありまして、机は縱三尺橫四尺位のが四脚あるばかし、女學生が二人來て婦人雜誌を讀んでゐました。新刊書が網棚に並んでゐるので書物が來るまでそれを見てましたが餘り大したものもないが主に國文學書が多

い樣でした。前田河廣一郎氏の全集物があつたやうでした。注文の本を受取つて婦人室に來ると涼しい風が吹き込んでくるので結構々々。いゝ氣持で私の義務を遂行しました。時に六時過ぎ。早速宿に歸つて調べたものをまとめましたのが左の通り。

昭和二年度總督府調査に據る臺灣の工業狀態に就いて左の統計を見ると職工數五萬

	工場數	男工	女工
機械器具工業	一六五	二、四九九	四四
纖維工業	八二	六五八	二、〇八〇
化學工業	八九〇	一一、六八八	二、五三三
飲食料品工業	三、〇四八	二三、二一〇	六、九六〇
雜工業	六四一	五、〇七八	三、三三七
特種工業	七六	七〇七	三五
合計	四、九〇一	四二、八〇〇	一四、八七八

七千六百七十八人となり、工場數、四千九百一となります。尙百人以上の職工を使用する工場を擧ぐれば

	男工	女工
基隆船渠株式會社 牛稠港工場(代表木村久太郎)	一九三	
株式會社臺灣鐵工所(代表泉量一)	三三	一
臺灣蠶絲業株式會社 生絲工場(代表杉森與吉)	九	二三〇
樋口兄弟商會宜蘭工場(代表樋口久吉)	五	一〇七
北投製蓆工場(代表許德定)	五	二〇四
臺灣織布株式會社臺南工場(代表小原富太郎)	六	一三七
臺北製壜株式會社工場(代表後宮信太郎)	一一七	一六
臺灣煉瓦株式會社		
圓山工場	一三四	七六
杉山工場	一五三	
三西製線株式會社工場(代表鈴木梅四郎)	一三三	一八
臺灣製糖株式會社(代表武知直道)臺北工場	一六〇	八
埔里工場	一〇三	五
車路墘工場	二九八	
三崁店工場	三一〇	
灣裡工場	一四八	八
橋子頭工場	四三五	四七
旗尾工場	二三三	一〇
阿緱工場	二七二	
後壁林工場	二八四	一六
帝國製糖株式會社(代表松方正熊)		
新竹工場	一二〇	
臺中第一工場	二〇八	一四
臺中第二工場	八五	
潭仔墘工場	一七四	一六
中瀧工場	一〇六	
苗栗工場	一〇六	
新高製糖株式會社(代表野村健)		
彰化工場	三四四	
嘉義工場	一三三	
明治製糖株式會社(代表相馬半治)		
南投工場	一八〇	
渓湖工場	一三一	七
馬樹林工場	二三八	一
南靖工場	二四〇	五
蒜頭工場	二三三	
大日本製糖株式會社(代表藤山雷太)		
馬白工場	一一六	
眉山工場	一八〇	
斗六工場	一二〇	
虎尾工場	六八八	
北港工場	二八三	五
合資會社三五公司(代表愛久澤直哉)		
源成農場製糖工場	一〇九	三九
鹽水製糖株式會社(代表入江海平)		
渓州工場	一三九	
新營工場	四四〇	
岸內工場	三二四	
壽工場	一三三	
大和工場	一三七	

以上

外製油工場が數百とありますが何れも少數の職工を使用した家內工業で、それ等は主として本島人の經營せるものです。右の統計で大工業の大多數は內地企業家の經營になるもので我が國資本主義の殖民地に持つ

勢力はざつと此の位でせう。●

農業は大平野に惠まれた處とて何處を見ても果しもなき綠の海原の樣に稻が波うつてゐます。あを〳〵した此の大平野も大小地主のものであつて澤山の小作人が汗を流して每日働かせられてゐるのです。內地では一年に一回しか收穫がないですけど、此處は年に二回ですから本島の小作人は內地の小作人よりも二倍の勞働を餘儀なくさせられてゐるのです。米の外甘蔗だの茶の栽培も盛んで、甘蔗は各製糖會社が懸賞金付きで良種の甘蔗を得ようと努めてゐるのです、彼等は甘蔗栽培の改善に努力して少しでも性質のいゝ砂糖を造り出し他の會社を壓倒する程の販路を求め樣と焦つてゐるのでせう。此懸賞金付の甘蔗栽培の改善は成功するか否かは後日の問題として之が小作人のためどれ程の利益になるでせう？結局地主のもうけになるのは當然でせう。未曾有の旱魃に米の不作が報ぜられる地方があるが小作人の惱みが又一つふえた譯です。

ところが悲しい事件が起つたのです、農村都市に於て苛酷な勞働を强ひられる小作人のため橫暴な地主と斗つてゐる農民組合が官犬のためにぶつつぶされてしまつたんです。それは全島に渡る組合員の大檢擧でした。理由は例によつて不穩文書！そのため農民組合は死滅の外なき狀態になつてしまつたのです。私が聞いた話では不穩文書は內地の農民組合からのレポートだつたさうです。唯單にそれ位の事で大々的檢擧をしたのは旱魃のため米の不作に生ずる小作爭議を未然に防ぐ地主達の奸計と思れます杖とも柱とも賴む彼等を奪はれた小作人達は路頭に迷ふ小羊の樣にあすの命も保證されない程の生活の脅威に襲はれるでせう!!

私が渡臺しましてから此農民組合の活躍振りは實際羨しい限りでした、が……とう〳〵あの赤煉瓦の小さい窓を持つた臭い未決監に投げ込れてしまつた！私共の同志達はあの薄暗い室のモー〳〵する獨房に蒸せかへつてゐるでせう、嗚呼！風よ願くば彼の正義の鬪士達に每日凉しい姿で小さい鐵の窓から見舞つてくれ!!……回顧すれば去年の三月以來民衆の大切な同志達の血を啜つた憎むべき、呪はしい赤練瓦が私共の前に完全に開放されるのは何時の日だらうか

私は階級鬪爭の第一線に立つて活躍する臺灣の同志達のメーデーに於いての活躍振りを回顧してみませう。

基隆では文化協會の一味の同志達が示威運動を計畫して檢束された、又民衆黨員が煽動演說をしたとあつて之又檢束。

臺北では文協主催の講演會が午後七時といふのに解散を命ぜられ、會員二名檢束。新竹臺中は忘れました共に可成り戰鬪的な地方で新竹は御存知の通り爭議を起した處、後日くわしく取調べてお報せするでせう。

臺南は臺灣工友總聯盟臺南區主催で講演會を開催し、五名の辯士が交々立つて氣焰をあげましたが無屆辯士が出た爲午後九時半解散を命ぜられました、五名の被檢束者があつたとか。

高雄では農民組合、文化協會高雄支部合同で記念講演會を開催、十名の內一名の婦人辯士も交て熱辯を振つたが數名中止を命ぜられ午後八時半解散を命ぜられました。

右の鬪士の內、內地人は一人もゐませんでした、全部本島人ばかりです。私は亡き渡×正×助氏の事を思ひ出して今更眼が熱くなるのです。在島同志の御健鬪を祈つて止みません。

臺灣の首都臺北市は流石に大都市で、美しい道路を持つてゐます。大きく廣い道に二條の並木が道路の中央に一間位の間隙をおいて植ゑられてゐます、之を三線道路と

呼んでゐます。此の木蔭を人々は救はれた様に歩いてゐます、建物も內地の様に瓦葺は官舍に見る位で殆ど亭子脚を持つた赤煉瓦又はコンクリート式のものです、唯電車がないのが物足りないだけで外は別に不自由な處もないのです。

當市の城內は臺灣が未だ日本の領地にならない以前から可成り賑やかな處だつたさうです、今日も東京の銀座位に賑やかですつて來まして夜店も出る等なかなか繁華で城內ブラといつた様に人々は各方面から集す。今は本島人の商店は殆ど全部驅逐されて內地の大中小商店、もしくは××大商店大會社の支店といつた様なものがズラリと軒を並べてゐます。私は城內を橫切つて場末の町に行きました、此處は殆ど本島人の店で冷しビーフン、氷屋、アイスキャンデー等の出店が亭子脚の下に出張して、多くの苦力のお客様を歡待してゐます、內地の五厘饅頭の様なもの落雁等を賣つてる店もあつて、牛車を挽いた黑焦げの勞働者、人力車夫、汗ダクダクの荷車挽き等の野外休憩所みたいです。彼等は樂天下のやうにはしやぎ廻つてゐるのです。私は此の炎天下に傘もさゝずして澤山のちつちやい子供を引連れ手に調度品を抱えた一家族の者達に會ひました、彼等の中の五歲位になる子が物慾しさうに土人達がビーフンを食べるのを見てゐました。彼は親に叱られるのか、親に金のないのを知つてか觀念の眼を閉ぢて行き過ぎました。何處に住んでも生活の安定を得ずしさ迷ひ處々方々を步き廻る家族のものをよく見うけるのです。被支配民族でない自己の本國にゐてさへ生活苦に喘ぎ、親子心中をもしかねない人々もあるのに此等被支配民族の窮地は如何ばかりでせう、あらゆる方面から直接、間接に壓迫され乍ら何處かに生活の糧を得て一日でも生き長らへやうとあせる彼等の悲慘な有様は全くの生地獄といへるでせう。「起て！若き人々よ！そして汝等の同胞を救へ!!」と新高嵐が叫んでゐやしないか!?

夕陽が落ちて空に一抹の輝やかしい雲が棚引く南國の夕暮れ、佛桑華は萎み、夕顏は開き、肌寒い涼風に吹かれ乍ら鐵道線路の近くに散步に出かけました。或官舍の軒から山梔の咲き亂れたのがのぞいてゐる、私はその香を深く吸ひ乍ら步きました。

バラッ車が夕靄の中に動いてゐる、私はそれの側近くに步いて行きました、バラッ車には澤山の苦力が乘つてゐました、彼等の中には年頃の婦人も混つてゐます、此のバラッ車は終夜――つまり徹宵働かなくてはならないのです、それに婦人勞働者が乘る等意外な氣がします。

本島婦人の職業は主として工場の女工が大部分を占めてゐる様ですが外に洗濯女といつて內地人官舍等の洗濯物を洗ひ一ケ月二圓內外の賃金をもらふさうです、その外帽子を編む仕事があつて、それは帽子一個に付き三十錢の賃金ですつて、その他公學女學校の先生も少數はあります。小作人の家族の者は主に野良仕事をします。甘蔗、茶の栽培は婦人が多い様です。

或役人の話ですが、本島中流以下の家庭の娘は常に賣淫をして生活の糧を得てゐるとか、故に女の子を賣買する習慣があるさうです一人當り三十圓が平均價格ですつて・・・?

か様に婦人の賣買が容易に行はれる爲に本島人で少しでも金を持つた男は、妾を持ち全くの體一貫といつたプロは三十歲を越しても獨身でゐなければならないといつた様な矛盾があるのです。

戀なれば詮すべもなし。

婦人がパンの糧に貞操を賣るは婦人として最も恥づべき罪惡でないでせうか！

一九二九・六・一二―F九十五度の炎下にて

北緯五十度以北を観る

中本たか子
戸田豐子

評判がとても惡いので、そのつもりで見に行つた。第一、時節柄暑苦しいのでおしまひまで見なかつたことを最初に自白しておく。朝日誌上で（七月廿九日）村山知義氏は「小林多喜二氏の『カニ工船』の增補脚色であると宣傳されたが、兩者にはほとんど何等の共通點も見出せない程の雲泥の相違がある。この脚本にあるものは、興行的な役割りと、ほとんど勞働者に對する侮べつとさへ思はれる安つぽい上つ面な描寫とである。」と云つてゐるが、先づ、興行的な場割りを嵌め込んだことは、素人の私には面白いと思はれた。あれが五幕通してカニ工船のことばかり見せつけられたのでは、觀てゐるのにとても苦しくてやりきれないだらう。會社の內幕を見せ、經濟的方面を加味したのは、脚色の成功であると私は云ひたい。主題を誤らなければ、作者はかなり冒險に立體感を出すやうに苦心すべきである。殊に敵の陣營を見せたのはうれしかつた。

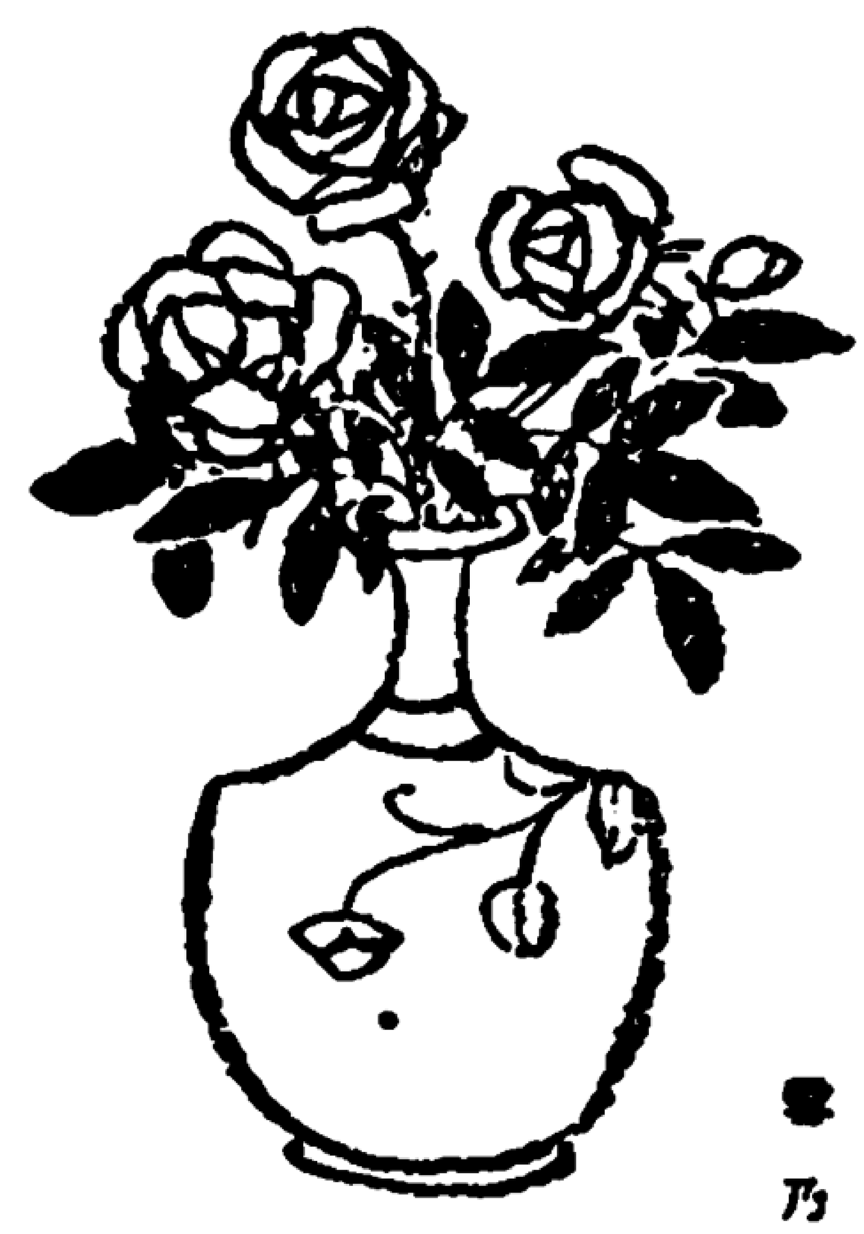
原作「カニ工船」を讀んでゐた者には、ひとしく「安つぽい上つ面な描寫」といふ印象を舞臺から受けるのは無理からぬことと思ふ。第一、あの「描寫樂」のやうな小說を、まとめるのにはかなり苦心したであらうと思ふ。それで舞臺に出て來てくるものも非常に「描寫樂」といふ所が多かつた。第三幕三場（?）の殆どパントマイムに近い動作と效果とのみで一場面を見せてゐるのはよかつた。だが、こゝでは舞臺に水を撒くのは、時節柄であらうが、初期の自然主義劇のやうに思はれた。

全體として、「カニ工船」の側からのみ見れば失敗に近いが、社會の經濟機構を橫斷して見せた所に脚色者の誤らない意圖と卓見があると思ふ。私はこの脚色をかなり成功に近く考へる。演技としては效果にあまり意を注ぎすぎ、俳優は非常に不慣れな場面が多かつた。演劇の效果が脚本と演技との二要素に俟つものであるから、蓋し、これの成功が相殺されたと思はれる。（たか子）

この芝居は小林多喜二氏の「蟹工船」を材料にして、一層大掛りに練り上げたものだといふが、それにしても、も少し原作の味に徹底して貰ひたかつた。この芝居の薄つぺらな擴がり方は、原作者の主眼とした「カムサツカの荒海で、帝國の權力を背後に控へて資本家の『節慾の餘地なき』搾取の手に酷使され欺瞞されてゐる蟹工達の非人間的生活狀態」を、ごく通り一遍にしか見せてくれなかつた。三幕目のお終ひで「ストライキだ！ストライ！ストライ！ストライ！」と殆んど自然發生的な叫びを上げるまでを、觀客を息づまらせる程に「漁夫等の無氣力」、「抑へられた憤惡」の堆積、加速度——で引摺つてゆかなければならない。監督はもつと頑固に獰惡に見えなくては不可ない。彼の根性を入替へてやるより、頸をしめてやつた方が一層手つ取り早いと思はせる樣な無智な信念にこり固つた男に見えなくては不可ない。重役連の奸策泥仕合を曝露するため、北海漁撈會社社長室」をちやんぽんに挾んでいつたのはよろしいが、キネマと異つてその轉換に頗る間が伸びるため、理屈ではなるほどと思つても、ピリ〳〵感じに訴へて來なかつた。それに、「一方の「博光丸」の場に較べて此方は、不釣合な程、動きも速度もないので、單に說明として役立つてるとしか思へなかつた。

（我々は第三幕限りで、この芝居をボイコットしたので、奸胥の場面を見落したのは殘念だつた。いづれ、左翼劇場の「蟹工船」に期待したいと思ふ）

（豊子）



コンパニオネート雜感

二神英子

社會學博士木村松代先生の「結婚生活の新形態」を英學塾の會報で拜見して以來、試驗結婚だのコンパニオネートだのと云ふ字が頻りに私の眼をひく。婦女界の三月號の座談會の速記で見ると、市川源三先生はコンパニオネートを友情結婚と譯していらつしやる。デンヴア少年審判所のリンゼイ判事が、コンパニオネートを提唱した理由は全然安部磯雄氏と同樣で、簡單に云へば、早婚せよ、そして適當の時期迄、避姙せよと青年に忠告を與へたのである。マルサスの產兒制限法は結婚延期と獨身生活であつたが、リンゼイ判事は自身が多年の不良兒を扱つた經驗から、マルサス式の禁慾說が却つて醜業婦の增加と性病の傳播を助けるものである事を痛感した。實際現今の社會では大多數の青年は經濟的の事情から婚期の遲れる傾向がある。その結果は神經衰弱が年々殖えて行く。もつと惡い場合には不義に墮胎プロステイチユーシヨン性病、なぞと云ふ不幸な問題が起つて來る。青年の名譽健康幸福を妨げるかう云ふ厄介な事を起さぬ爲に又社會生活を清淨にするにはコンパニオネート即ち一種の準備的結婚を行はせるがよい。コンパニオネートは男女が互の生活を樂しくする爲に避姙法（墮胎法に非ず）の完全な知識を以て行はれる結婚である。元來子供を持たぬ決心で始められたものであるが經濟上の問題の解決さへつけば當事者同士は何時でも友情結婚を永久的の家族結婚に變へてよい譯である。併しウエルスに云はせると避姙法は周到な注意を以てすれば先づ大抵の場合その目的を達せるが、夫れは絕對的のものでないから、コンパニオネートを營む者の何パーセントかの人はそんな意志は少しも無かつたのに自分達が普通のフアミリイマレツヂの夫婦になつてるのに氣が付くであらうとある。是はコンパニオネートを輕率に營まうとする人、殊に女性によく御注意願ひたいと思ふ。產兒制限反對論者の想像する程避姙法は放縱な者を增長させるものではないらしい。ミセス・バートランド・ラツセル、ドロシイジユーソン等とともに英國の產兒制限委員會の委員たるH・Gウエルスから避姙法が必ずしも安心出來るものではないと云はれると、コンパニオネートの成立も甚だ危いものになつて來て贊成するのをためらひ度くなる。結婚試演と云へば三ケ月毎に戀人をとりかへるとか傳へられる米國の大學生の話が聯想され

て随分不眞面目なものに思はれる惧れがあるけれど若き女性よ、ウェルスの忠言は兎に角忘れないで下さい。

併し避姙法を全然諦めて仕舞つてはいけません。安部磯雄馬島僴共著「産児制限の理論と實際」(文化學會出版)はこの方面の一般的知識を得る爲によいと木村松代先生が推稱していらつしやる。何卒それをいて戴きたい。

コンパニオネートなんて子供を拵へない丈けに結局女が手輕に棄てられて損をする丈けだと云ふ人もある。併しつひ先頃(昭和四年六月二十四日)の讀賣の婦人欄に別れ話や慰藉料の訴へは逆に男から女へ!と云ふ見出しで、東京市の人事相談所や警視廳の人事相談係りへ離婚の相談に來た男女の統計が出て居たが、近頃の傾向を語る例としてある義太夫の女師匠が夫の働きの無いのに愛想をつかして別れ話を持ち出した所、手切れ金千圓をよこせと云ひ出して今現に裁判沙汰になつて居ると報じて居る。東京市の人事相談所へ行く人と云へばまさか高等教育を受けた人ではないであらう、その人々の間にさういふ傾向がある位故、高等教育を受けた一人立ちの出來る女性が結婚に不滿を感じた場合何を望むかは容易に想像出來る。しかも何と思つた所で、子供があつては手も足も出ない。小島政二郎氏の「心の青空」のふみ子はさう云ふ立場の女性として恐らくこれ程よく書かれた作は未だ無かつたと思ふ。

ふみ子はフラヂャイルな女性である。それが一人生んでまだ全く身體が恢復し切らないうちにまた一人生まされた。ふみ子がもう厭だと云ふので良人は知人から避姙法を聞いて來ると云ふ。併し夫れは口約束に過ぎなかつたのですぐ末の男の子が生れた。「今度生されたら私離緣戴くわよ。」とふみ子が念をおして置いたのに。私は此處を讀んだ時、同時代に生れ乍ら、ふみ子と同樣に女流作家である小金井素子さんが子供はもう純子樣一人で澤山と云つていらつしやる事、小金井博士も當事者たる夫人を困らせて迄その上お子さんをお望みにならないと云ふ事實を思ひ出さずには居られなかつた。夫れは兎も角、ふみ子は經濟上の餘融を得る爲作家志望で並木氏の弟子となつて出入りして居る中に、愛妻に不滿を覺え初めた並木氏の戀人になる。是はミルが後にミル夫人となつたテイラア夫人に對する樣にプラトニックラヴであるが、その後ふみ子はまたまた姙娠して今度は流産をする。[illegible]に理解の無い旦那樣であると思ふ。

私は此頃讀む小說をコンパニオネートと結びつけて考へる癖がある。今の「心の青空」の主人公並木にしても、若しコンパニオネートマレッヂを營んで居たならふみ子と結婚出來るものと同情する。けれどさうすると傑作「心の青空」が生れない事になるから、是は餘計なお世話と云ふものである。

三宅やす子女史の「三つの遺骨」(改造六月號)も最初の二三度は泣いて讀んだのに、若しも笠原夫妻が、結婚の初めにコンパニオネートと云ふ程度に止めて置いたなら、「自然が我々の性慾に課した天罰なんだ。皆何も知らずに性慾のとりことなつて、あとからこんな罰に遭ふんだ。」とうめいて終夜不眠で神經衰弱になる事もなかつたらう、と考へて見るのである。「只私はあなたや二人の子供の命を短くしたものが所詮は生活苦だつた事が口惜しい。私達の健康まで、どん底に苦しめて、最後に私の抱いたものは、三つの遺骨でございました。」と云ふ女主人公の言葉も日本の社會にコンパニオネートの存在を早くさせる意義ある一句として私には貴く思はれる。併しその後へ續く「私達の子供だけは、ほんとに生きさせませう。乞食になつても、賣笑婦になつても、自分の生きる道を行かせませう。」と云ふのは實感だとはうけとれない。夫から、

「君が原稿料をとる樣になつたのは愉快だ。大の男のボーナスより多い金をとる女房を、

僕はとも角尊敬する」と云はれて居た女主人公が何故賣春婦になつてもなどと考へるのだらう。非常に不自然な唐突な言葉に思へる。

廢刊された「平凡」三月號に「結婚生活の十年の間の、最後の滿一年位は私の收入だけでも儉約にすれば葬せないことはないだけになりました。いはれる儘に雜誌に短篇その他を寄稿をしたり地方新聞の連載小說を書いたりする仕事は、病弱になつて家庭的勞働の出來なくなつた、私には樂しみな仕事でした。だから突然の家事の此の場合に私には經濟の心配はなかつた。今迄通りに仕事をして居れば母子三人が暮す事はちつとも骨の折れる事ではないと思つて居ました。」と三宅女史は書いていらつしやるので此樣な事も云ひ度くなる。

それから此小說の初めの方に

「子供が二人になつたら、もう「淑女の友」の方はよしますわ……一人の子ならまだ出來ます。これから二人になつたら仕事のために子供を病氣にしてしまひさうでね」とあるが、全く妻の働く無產者の家庭では、思慮深く多產を避けて結婚生活を營むに越した事はない勿論與謝野先生や中河幹子夫人の樣な例外もあるけれど筆を持つ婦人の多くは資產家の夫人でも先づ一人か二人のお母樣である。產兒制限はこれ等の方々には一向新しいものではないであらう。そこで私は再び理學博士の笠原誠一氏の家庭で何故產兒制限を實行しなかつたかを不審に思ふ。

女人藝術五月號所載「くに子の自殺」（辻山春子氏）では血統の惡い家に生れたくに子が姉や兄と一生獨身を通す事を誓つて居たのに戀人を得たので、結婚したくなる。兄は戀人に遺傳の事を打ちあけよと云ふ。くに子が思ひきつて戀人に打ちあけると子供の作れないやうな結婚だつたら、いやだと云つて棄てられる。既に姙娠して居たくに子は絕望して自殺するのである。くに子は姉が結婚を反對した時、「子供は必ず出來るときまつて居ないし又ぜひ作らねばならない事もないでせう。避姙法もあります。もし出來たとしても現代の醫學は母體に何の影響も與へないで解決して與れるわ。」と云つて墮胎も辭さぬ口ぶりである。だが姙娠してから如何にかしたいと思つたつて相當の金持ちか醫師に特別の緣故のある者の外は何の策の施し樣もない。醫師が流產を許す場合は先づ何より夫の許諾を得た人でなくてはならない。夫れから流產が姙婦にとつて本當に必要か如何かを診察するのである。くに子と戀人とは相許した仲だつた事は判るが避姙法を行つたか如何かは確かでない

姉には避姙法と云ふものもあると云つてる位だけれど、或はウエルスの云つた樣に不義者が安心して增長出來る程現今のバースコントロールは信賴し得るものではないと云ふよい例なのかも知れない。くに子は戀人に背かれた上姙娠して居たので自殺したが、若し背かれなかつたらその姙娠の始末は如何つけたのであらうか。戀人にもくに子にも流產をさせる丈けの勇氣があるだらうかお金があるだらうか。放つておけば月が滿ちて子供が生れる、その子供が又くに子と同じ惱みを味はねばならぬのである。くに子の父母が產兒制限を行はなかつた結果はかくも悲慘である。產兒制限を最も必要とするのは惡い遺傳の保持者かも知れない。

コンパニオネートに反對する方は結婚愛を人間の最高の德と御思ひになるからであらう結婚愛は勿論單なる性慾を意味するものではない。人間には純粹の性慾なんて云ふものは無いのだ。必ず精神的の情感、愛の刺戟を受けた想像の飛躍が伴ふ。それ故にこそ美食とか飽食なんぞより高いものになるのである。抑も子供と云ふ事が當事者の念頭に浮ぶずつと前に、男女の間には性愛を超えた心のゆきかひがある。二人を包む魔術、賞讚、何とも云へぬ喜び、未知の世界に對する危惧、友情その數々の好もしさが育つて愛となる。から

云ふ根ざし深き愛のみが幸福な夫妻を作る。強き賢い子供を生む。結婚愛は此地上で最も優しい思ひである。愛の完成は恐らく互の青春を費して努力しなくてはならない。或種の果實の如くその愛の熟する爲には日光の外に寒氣も嵐も必要であらう。で、結婚愛が一朝一夕にして完成されぬものなので、夫婦と云ふものは無暗に周章てゝ離れてはいけない。兎にも角にも一緒になつて行く樣に二人の習慣、利益を一つの解けぬ束に括る――子供の望ましい所以である。結婚愛を地上の最高の德と思つてる人が避姙を喜ばぬのは避姙が非常な不誠實に思へるからである。コンパニオネートはその取消しをする人が無暗に出やしまいか、若い者の頭に淺薄な不純な考を植ゑ附けやしまいかとさういふ人々は案じる。だがリンゼイ判事はコンパニオネートは青年にその情操生活の當初から一生の光りを初めさせるので、却つて晩婚にこそ醜關係とか性生活を輕んずる虞れが多いと云つて居る。

何のかのと云ふものゝ、コンパニオネートはプテイブル根性が苦しまぎれに考案した結婚の變態に過ぎぬかも知れない。私は終に慶應の高橋敎授の人口學說と經濟思想（成人第二卷八號）の一節を拔いて皆樣の御參考に供へる。

一昔のやうな小さな自足自給の經濟生活を維持して居る時に於ては人口が殖えると飢餓襲來の虞がある。人口增加の力そのものは一つの國家的勢力となつてこれが世界に覇を稱する所以になるのであります。（中略）勞働者の中などでもさうであります。たゞ勞働階級の個人的利益だけを考へて、成るべく豐かな生活をさせたいと云ふ考を持つてる者は產兒制限などを主張したがるのであります。けれども勞働階級の貧困そのものゝ力に依つて現在の世界を征服して行かう。さうして資本主義的社會を乘取らうとして居る人は產兒制限に反對する。勞働者は愈々貧乏にならなければならぬ。愈々貧乏であると云ふ事に依つて、愈々大なる力を養ひ得ることになる。若し彼等の生活が樂になつて貯蓄でも出來るとプロレタリヤたる性質を失つてブルジョア化する事になる。これはいけない。積極的態度を執る者は產兒制限などと云ふ事には反對しなければならぬのであります。」云々。

九州誌友の御厚志を謝す

林芙美子、八木秋子兩女史過日早大學生主催夏期講演團に加はり、九州地方巡遊の節は、諸方面の御款待をうけ、特に福岡聯盟支部にては「女人藝術」座談會をさへ開催され、兩女史の感激のみならず本社一同深く感謝いたしをります。

ここに謹んで右お禮申上げます。

世評と彼女

——林芙美子のために——

平林たい子



友人林芙美子の詩集に對する世評は、私を佗しがらせる。今まで私が觸れた範圍では、彼女といふ、女性としては實に特殊な性格とそれをつくり上げた過去の境遇とに對する興味以外を少しも出でない批評が一番多かつた。次に多かつたのは、彼女の作品に現れた彼女の性格の弱さに對する個人的な同情であつた。そして第三は、お追從。それはいつのどんな場合にでもあるもので、問題たり得ない。私は、今までも一人の作家の出現に對して幾度か〱これに類似した批評が横行するのを經驗した。自分の場合でも。今度の彼女の場合では幸か不幸か、活字になつた批評は大して多いとは言へなかつた。ことに、私が、彼女の場合を問題にせざるを得ないのは、彼女が、どうなつてもどつちでもいゝ詩人の一人でないこと、似た環境に浮んで來た自分として、實に冷淡に通り過ぎられない氣持と、そして、これからの、すべてのこんな場合の爲にといふ氣持とである。

今までの女には到底出來なかつた事を、ある一人の女性が臆面もなくやつて見せたとしたら、それは興味があるに違ひない。だが、芙美子さんに對する場合では、一般的にさういふ風であるばかりでなく、ことに、女性の興味を多く惹いたらしい。それがなぜであるかといふ事を私は考へた。一般に、理智的な勞働婦人は、彼女の詩のある部分に對しては非常な反感を持つた。しかし、中間階級の婦人の間ではことにその部分が拍手喝采された。何故喝采されたか。理由は簡單である。彼女の詩が、沒落に瀕した一部の中間階級の婦人の同感を買つたのである。これは當然である、實際彼女の詩は、どれをよんでも〱血で塗つた樣な痛い程の文字で、中間階級の下層に屬する婦人の生のなやみが刻まれてあるのだ。この部分に同じ層の婦人が共鳴するのは當然であるし正しい。だが、しかし、彼女のさういふ詩の要素はそればかりではない。彼女の詩では、さういふ境遇に處するに、あらゆる現存の規準を破壞した所の、奔放といはうか、自由といはうか、アナーキスチックといはうか、とにかくそんな風な、人生觀に非ざる一つの人生觀が織り込まれてあるのだ。

それを愉快がつて拍手喝采してゐる女どもの心理は、自分の慘忍性を滿足させるために安全な見物席で、鬪牛をけしかけてゐる人間の心理と寸分かはらない。自分がやつてみる

のはいやだ。こわい。被害が多さうだ。だが、誰かゞやつて見せるなら、自分の中にあるさういふ要素が非常に滿足するので、うんと痛快にやらせて見たい。――我が林芙美子が、その、意氣地なしで、物事を決定的に考へる事の出來ない、しかも、頭の中では始終生意氣な事ばかり考へてゐるプチブル婦人の中から勇敢にバツと着物を脱いで、淵の中へ飛込んでしまつた。卑怯な女どもよ見るがいゝ！

　彼女の性格は、人の同情を買ふ程、それ程弱い。しかし、仔細に觀察したなら、その弱さが天性から來たものでなく、環境に揉まれた磨滅から來てゐるものであることを發見するだらう。私は、實際、彼女の性格の弱い部分は尊敬できない。だが、だが、私は知つてゐる。この性格が、どんなに非難すべく、また、進展しつゝあるこの社會に不必要なものであつたにしても、それが、プチブル性を缺ける所なくそなへた、食ふに困らない層の中から發生したものでなくつて、つねに岩角に頭ばかり打ちつけなければならない環境にある層から生れ出たものだといふことを。さう考へれば自ら考へ方がちがふ。

　所が彼女の性格の弱さを好むある層の女達の心理には、優越感以上の何物もありはしないのではないか。

　そして、以上の二つが彼女の悲劇的な舞踏を、さらにけしかけてゐるではないか。

　彼女が、日本の女性に稀に見る天才的な詩人であることは、誰よりも先に私が言ひたい。だが彼女が現在踏んでゐる地面が決して、いつまでも踏んでゐてはならない地面であることを、私は敢えて言ふ。私を一番憤慨させたのは、彼女に、その一言の忠言を出す者が、どこにもゐなかつた事だ。それは彼女を喜ばせないに違ひない。しかし、彼女を喜ばすことばかり言ふ女達は、皆、彼女に、もつとその悲しい踊りをつゞけさせたい仲間であることを彼女よ知るがいゝ。

　それは苦しい事である事はわかつてゐる。一度完成したものを打ち壞して次の進展の途上に、新しい完成をつくり上げることは。

　しかし、日本の詩人でも、階級的な立場で立たうとする人は、幾度か失敗しながらも、皆それを企てゝゐる。上野壯夫氏や岩淵威夫氏中野重治氏、今村恒夫氏、長谷川進氏。私は彼女の失敗を望まない。だから、その點では前人の轍を踏ませたくない。彼女は、今迄もあんな所に生きて來た。一面からいふと、それは實に强い生き方であつた。私は彼女にどんなに敎へられたか知れない。彼女は、方向をかへなければならないといふ事だけを知りさへすれば、自分で一番いゝ途を探し出すに違ひない。彼女のことだから。

　誰よりも私がそれを待つてゐる！

ジヤバより

森三千代

支那に四ヶ月香港に一ヶ月新嘉坡に一ヶ月半、そしていまはジヤバに來ました。

　フランスへにじりせまるこの旅はなか〳〵一寸やそつとの苦勞ではありません。

　新嘉坡ではあちこちで女人藝術の花が咲きました、なかなか有名です、私は夢中になつて南洋の詩をかいてゐます。

　タヒチのゴーガンのやうに（なんてをこがましい言葉ですが）あふれてくる力に打たれてゐます。

　私はフランスへいつてから御妹様にお目にかゝるのを樂しみとしてゐますが。私がやつと向ふへ行きつく頃にはもう御歸りになるのではないでせうか、

　夜です。

たわ〳〵となつたマンゴスチンに露が光つてゐます、南洋ホトトギスが可愛いこゑで鳴いて渡りました。

全女性進出の歌第一回成績發表

曩に五月以來募集した行進曲は成績あまり香ばしからず八百餘編のうち目ぼしきもの左の數通を得たるに過ぎません。取敢ず掲載して讀者の批判を乞ひ更に締切り日を延し、十月末日を第三回締切りとし、最後の成績を正月號にて發表する事にしました。

古川陽子（福島縣）

若き叫びは
自由のために
いざ立て　いざ立て
わが姉妹(はらから)よ
若き叫びは
未來のために
進めよ　進め
力あるもの

若き叫びは
結合のため
すゝまん進まん
旗おし立てゝ

米田三千枝（東京市外

新らしき生命(いのち)はぐくむ
地平をゆすり
聞け
響き來る鐘の音高し。

解放と
自由を告ぐる
女性の門出
いざ、讃(たた)えん
われらが黎明。

おうらかに空(そら)晴れて
歌ごゑ響く
仰げ
かがやく我太陽を。
健康と
明日を呼びかくる

女性の表徴
いざともゝゝ
讃へよ輝かん。

坂本　春枝（神奈川縣）

讃めよたたへよわが友よ
理智に希望によみがへる
我等が前に光りあり
陽は燦爛と輝けり。

喚、星をいただきて
土にしたしむ農村の
女よ強く胸をはれ
陽はさんらんと輝けり。

開け、エンヂンのとどろきも
自由を叫ぶはらからの
目覺めし聲はさまたげず
陽はさんらんと輝けり。

ちまたにみちしわが友よ
重き鐵鎖をひきちぎり
今ぞ目ざせる道に行け
日はさんらんと輝けり。

落合　百合（札幌市）

鐘の音ひゞき
大ぞらのやみの彼方に
黎明の光ぞ湛ふ
いざ起たん光りをあびて
いざ行かん鐘の音のかた
　陽は照る陽はてる我等が上に
　鐘はひゞく　鐘はひゞく

時は來れり
吾等みな一つとなりて
大いなる力となりて
今ぞしる我等が力
大いなる女性の力
　陽は照る陽はてる我等が上に
鐘はひゞく　鐘はひゞく

希望はもゆる
雄々しく叫び立てるとき
我等なすべきこと多し
よろこびの歌うたひつゝ
大空をゆく陽のごとし
　陽は照る陽はてる我等が上に
　鐘はひゞく　鐘はひゞく

友永　初代（上　海）

あかつきのむら雲はれて
日は出ぬ大海の彼方
新らしき女性のあぐる
産聲ぞ高き

正しき使命を知りて
進み行く吾等女性の
眞上にぞ陽は輝く
燦々と爛々と

九州旅だより

林　芙美子
八木　秋子

呑氣者二人、素的に長閑な旅です。私は今食堂へ行きました。八木さんが酒を呑めと云つて聞かないのです。トロリトロリ、トウトウタラリ何も思ふ事御座なく候。八木さんはブリッジのとこで足を上げたりするのであぶなくてなりません、あゝ此まゝの狀體でいきます様に、さて午後一時です。靜岡をすぎました。社の皆様によろしく、少しモウロウとしてあぶのうござります。（芙美子）

辨天島もすぎて一路名古屋へ向つて居ます。空は快晴、――車窓からは靑い風がのぞきます、ほんとうに東京におられる人達がお氣の毒のやうに――林さんはまだこのところ神妙にして、鹽こんぶばかり空しく嚙み、私はうつらうつらと意久地なく舟をこぎつゝあります。午後二時半車中にて。（秋子）

ロオマンス、ウイスキイ、名古屋の私の愛讀者がくれました。彼女はモダンで脊が高くて、女人藝術もこんなケンコウな讀者をもつてゐるかと思ふと嬉しくなりました。

ウイスキーは半分たいらげてしまいました。大阪で一時間半を利用してドウトンボリを歩く。アズマ壽司をたべて、美人座といふカフエーにはいつてみる、旅のはぢはかき捨てだそうな、大阪から始めて特急に乗る。二



テンコツさん一家

――日本橋――6

時雨

――老母よりの書信――

鼠小僧の家は、神田和泉町ではなく、日本橋區和泉町、人形町通り左側大通りが和泉町で、其手前の小路が三光新道、向側――人形町通りを中にはさんで右側大通りが堺町、及がくや新道。水天宮は明治七八年から芝三田邊より來られ候。

三光新道が鼠小僧の家、母親と妹がすまつて居て、妹には旦那があつて、その旦那の來てゐる時は、表のこうし戸の前に萬年草の植木鉢が出してある。鼠小僧は小がらな、うすあばたのある、ちいさなよき男のよし、其母は引廻しの日にとうといお寺へ參つて坊さんになつたさうです。祖母さんの若いころには堺町に芝居が三座あり、其外人形座もあり、かげま茶屋といふものもあつたよしに候。

私は微笑した。こんなつまらない事ではあるが、他人のいつた事が正しいやうな氣がして無意識に從うことがある。實は、前號の末に書いた鼠小僧のくだんの中に、神田和泉町と書いたのは、何處かに目に殘つてゐた文字をそのまま書いてしまつたのだつた。講譯本からかも知れない。或は戯曲の臺本などからかも知れない。

人はなればなれ、兵隊さんがモーションをかけるのでつねつてやつたら、それきりで、私もよくねむれた。時々ポケットをおさへてみます。スリに用心しなくてはね、彼女は、はるかならしろで美青年とならんでねむつてゐます。ウラヤマシ。なつかしい尾道の海です夜中。（芙美子）

ともかくもこのはづれまで來ました、汽車の中は全くの焦熱地獄でふたりとも夢心地でした。けふこの樣に素晴しい溫泉に浸ることが出來て、學生さんたちとポスターなどを書いてゐますと疊の上のありがたさが身にしみて來ま、、東京の暑さはどんなでせう、しつかりねがひます。（秋子）

御體を大切に――。遠くへ來ると妙に手紙がかきたくなります、これがつく頃本が出るでせう、早く見たいものです。それから私の詩集の會の寫眞が出來ましたら、一枚留守のうちへ送つていたゞけませんでせうか、喜ぶでせうから。又冷かされそうですが。

八木さんは元氣です。かへりは二等だそうです、安心してゐますがね、こちらへ來る時はマゴマゴして一寸辛らかつたのよ、一生懸命で話して來ます。（芙美子）

けふこの武雄の町へ降りました、まだ辻山さんには會ひません、明夜八幡十六日福岡と進んで行きます、ビラを出來次第どうぞ辻山さんあてにお送り下さいませ。凉しい溫泉町の旅館に事務的な話をしてゐます。（秋子）

とても暑いんですが元氣でやるつもりです。南國のみどりはいい氣持です。海月の酢

和泉橋は今でも神田と下谷にかけてかゝつてゐる。和泉町といへば神田の方がゴロがよい、といふわけでもあるまいが、日本橋區內の和泉町は知る人がすけない。そこで、ちつとばかり古い事を並べて見ると、本編最初からお馴染になつてゐる大門通りは、廓の大門の通りなのだから大門とよんでください。芝にも大門があるがあれは大門である。

日本の首都である東京の日本橋の中央の大問屋町が、遊女屋町吉原の大門通りであつて堺町、和泉町、浪花町、住吉町、大阪町でとんで伊勢町など、みんな關西から出稼ぎ――遊女屋の出身地だとばかりはいはれまいが――人の地名から來てゐる。長谷川町は大和からの名であらうが、其處には長谷川といふ大きな木綿問屋が現今でもある。

葭町を廓の中心地とすると人形町の名がどうやらわかつてくる。別に人形細具師のあつたこともきかないから、この人形商はおやま商業であつたことがわかる。親父橋が渡しで廓がよひに不便だらうと、遊女屋側からかけたので、遊人それを德とし、その特志家を――實は商業上手を、おやぢ〳〵と尊稱した名が殘つたのであると記錄にもある。このよし原が淺草田圃に移され、新吉原となつてからでも享樂地としては人形町通りを境にして葭町、堺町、葺屋町側に三座の櫓があり、かげま茶屋、色子、比丘尼が繁昌した。今では反對の側住吉町、浪花町の方に藝妓屋がある。

新吉原は淺草公園を外苑地帶として根を張り、あとから移轉していつた芝居――山之宿の市村座、鳥越の中村座など、激しい時代の轉歩にサッサと押流されて昔日の夢のあとはなくなつてしまつたが、堺町、葺屋町の江戸三座が、新吉原附近に移るには間があつた。古い廓のロマンスといふやうなものが殘つてゐたかといふと、私が知つてゐるのは禿が池といふのが大門通りの突當り、住吉町の地尻りにあつた。今でも何か神社が殘つてゐるであらうが、かなり廣い池をもつた社で、神樂堂が池の中にあつた。昔日はもつともつと大き

のものを戴きました。隨分遠くに來たものです。此寫眞を見て下さい。此町を見て下さい。お伽話のやうに美しい湯にはいりました。

南國です私は此すばらしい風景に醉つぱらつて、この狀體で樂しく東京に歸　たいと思ひます。(芙美子)

とうとうこんな處まで來ました、おむかへの方達に逢つて、元氣が出ました。酒どころではなかつたんですよ、ついたら二日も汽車に乘つたので、顏がまつくろ　今日は休んで明日十五、八幡です、大いに馬力をかけてやります。淋しい氣がヒヨコヒヨコしますが、すべてはお靜かにいたしております。これは鍋島氏の別莊です。ここへドライブしました役の行者の芝居に出て來るフドウ様もみました。でもなぜか淋しかつた。

此おくの役の行者が爪でほつたといふ岩石はすべて安山岩だそうです。私は只うぐひすの音をきいてるばかりです。(芙美子)

今おきたところ、これから八幡に行きます。十何年ぶりで父にあふので胸がなります。生活に思想にソシキだつたところだそうです。眞實を以て話そうと思つてます　八木さんが一切金の方をやつて下さるのでノンキです。淋しくなつたり、はしやいだりしてます。遠くへ來ると皆が戀しい、よくも來たものかな。(芙美子)

辻山さんの處へ今つきました。八幡では十七年ぶりに父にあつて、八木さんと二人で父と一緒に連日酒を吞んでユカイでした。うちの父親は四十八ですが、三上於菟吉氏の愛讀

な池だつたときいてゐたが、埋立られて、淸元家内太夫の家や、藝妓屋や、お妾さんの家がギッシリと建つてしまつた。向側に粹なうなぎやがあつたが、さうなつては掛行燈の風致もなにもなくなつてしまつた。この池に悲しい禿が沈んだのだといふことが子供心を滋らせたに過ぎない。

テンコツさん一家に對して、あまり長い前置詞であるが、この池尻りの向ふ一帶が、松島町といふ細民の部落で、その附近にこの一家が散在してゐたからだ。

とはいへ、私は松島町の姿を多くは知らない。よく見ておくべきだつたが、子供心にはそんな欲心がない、中島座といふ小芝居が非常に繁昌した——それも目で見たより、家の人がいふのが耳に殘つてゐた方がかつてゐる。

テンコツさん森口嘉造氏はそこら一帶の大屋さんで、口利きで、對談事、訴訟にもおくれをとらぬ人。故松助演じるところの、鰹は片身もらつてゆくよの型で、もちつとゴックした、ガッチリした才槌頭である。テンコツさんのいはれは知らない。一度何のことかと父に訊いたら、拳固をかためて頭のところへもつていつたやうなことをしたが、私にはなんのことなのか分つたやうで譯らなかつた。たぶん、頭がかたい——頑迷だといふのかも知れない。

テンコツさんの住居は、中島座の通りで、露路にはひつた突當りだつた。露路口に總後架の扉のやうな粗末な木戸があつた。入口に三間間口位な猿小屋があつた。大猿小猿が幾段かにつながれてゐて、おかみさんが忙しなく食ものの世話をしてゐた。人參やお芋を見物のやる棒のついた板の上に運んでゐた。私ははじめ猿芝居かと思つてゐたがさうではなく、といつて、見物に小錢で食物をやらせるのばかりが商業でなく、猿を買出しにくる人

者だそうで、うれしくなりました。八幡の製鐵所は夜は火事場のやうです。實さいものすごいものです。辨當を持つて行くお上さんが皆まつくろなのでどれが自分の御亭主かわからないんだそうです。職工は割合有福な者が多くて、職夫となると、みじめな生活だそうです。こちらは民政系が多いです、今バン市の公會堂です。一生懸命やります。福岡は暑くて、汗がリンリと流れます。（芙美子）



手拭でうしろはちまきして汽車に乗つた姿なり。今日は辻山さんの家です。本が出ましたか、まことにすみませんが二册左記へお送り下さいませんでせうか、八幡市中本町五丁目宮田麻太郎方、おねがひします。八幡での第一回は少なかつたがチョウシウが眞面目です。そうとうな人ばかりでした。話が出來ました。よろこんで下さい、私の愛讀者を一人發見しました。八幡にポスターをおきました。本屋に五册づつ來てました。平均三册うれるそうです。親の所では底ぬけに酒とビールで夜を明かしました、私の母といふのが、一つちがひの人です。今日は福岡市の公會堂です。手紙をかくのもやつとです。疲れてヘトヘトです。皆さまによろしくよろしく、私のマンガがなつてゐないが、まづこの狀態です。（芙美子）

もあつたかも知れないが、貸猿がおもなのだから、猿廻しの問屋とでもいつたらよいか所知れない。

ざわ／＼と人の多い、至るところ細い道だつた。毎年多になると鯨の味噌漬の樽がテンコッさんからの到來ものだつた。大橋の下へ船がついたからとりにいつてくれといつてよこした。で、このせまい町から、ある年の冬火事をだしたをり、荷物は大橋から船へ積めと手傳ひにゆく者たちはいつてゐた。

其時の火事は大きかつた。江戸時代の殘物で、日本橋區内のコブであつた汚ない町が一掃されたが、哀れな燒け出されも澤山あつた。一度眠つた私の家が叩き起された時は、大門通り一ぱい火の子がかぶつてゐた。家々では大提燈を出して店の灯を明るくした。酒屋はせはしなげで、蕎麥屋は火をおこし、おでんの屋臺はさかんに湯氣をたてた。纒がくる梯子がつゞく、各組の火消（ひけし）が提燈をふりかざして續いてくる。見舞人が飛ぶ。とても大通りは通られはしない。

子供たちは角に立つてガクガクして飛んできておちくだける火の子の華を眺めてゐた。火喰鳥が空をまはつてるから此火事は大きくなるなどとろくな事はいはなかつた。でなくても此火事は、あるべきものとして此近邊の者には豫想されてゐたのだつた。松島町の方に火柱がたつといふことは毎夜噂されてゐた。祖母をさすりに毎晩交替でくる、榮良だの榮信だのといふ小あんまたちまでが、自分たちも見たやうに咄すのだつた。私たちも怖々夜更けに出て見たことがある。さういへば氣のせいか、下の方は見えないで、一抱え以上もある火氣が――丸い柱が、ボッと立つてゐるやうに思へたのだつた。

書生たちは早くからあつまつてきた。河岸を廻つて細川樣（濱町清正公社）のさきから、火事場の裏からでなければはひれまいと父も洋服を着て出ていつた。（その前までは刺つ子

東京の暑さが思はれて、皆樣に萬腔の御同情を寄せてゐます。

さて、私達はまことに愉快な天眞ランマンな旅をつゞけてゐます、昨十七日の女人藝術聯盟支部主催の座談會、辻山さんの御努力はとても言葉につくせません、聯盟はみんな若い女性ばかりですがいい人達です、九大や女專が休暇中なので婦人が十五六人に男子が十二三人といふわけで、何しろ、歡談湧くがごとし、笑聲堂に滿つといふ有樣で涙がこぼれさうでした。どうしても汽車で立たせないといふ濡場を無理にふりきつて別れを告げたといふ素晴しい人氣、これひとへに林彷浪詩人の德のしからしめるところと、私も光榮身にあまつて、それこそ赤ん坊のやうに皆さんの好意に溺れたわけでした。

九州は愉快なところです、戀人のやうな感じのするところです、もしこの戀人を惡くいふ者があつたら私は敢然として起つだけの勇氣は持ち合せてゐる事を自覺します。

林さんは、それでも時々里心がちらついて、一脈の哀愁を見せる時があるから有がたいことです。八幡市では林さんが別れて十七八年目の父上樣に再會といふ、泪の一幕がありましたが、それが實にまた朗らかな、天眞ランマンなもので、泣きながら。

一この十七八年の養育費をそろばんにはじくと何千圓になるでせう、だからお父さん、今度はうんと御馳走してねー とニコ〳〵しました。はじめてのお母さんといふ、うら若い人がお辭儀をなさいました、すると

を着るのだつたが）火事場の中には、テンコツさん一家の一人に、肺病で寢てゐる、來春大學を出る（法律書生の、父のたつた一人の甥もゐたから、家のものは案じきつてゐた。

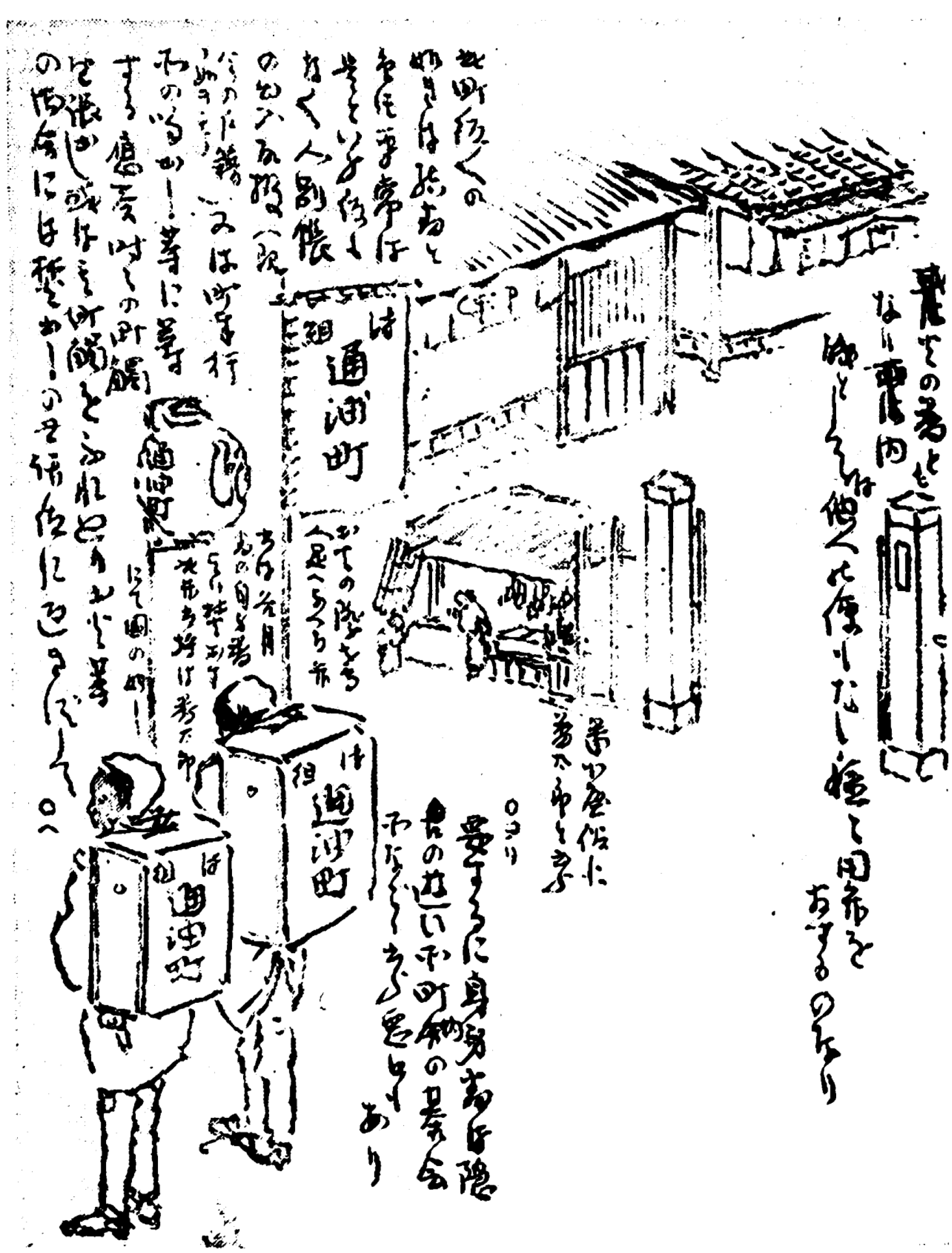
と、大通りの勢ひのよい人達に突きのめらされながら、薄いきもの一枚で、葛籠を肩にした靑い少年がフラ〳〵と現はれた。待ちには待つてゐたが、手厚く連れてこられるものとして待ちかまへてゐた女達は、それを見ると戰慄(ふるへ)た。長病の少年が――火葬場(やきば)の檗まで



「あゝあなたはお母さんでせう、どうもさうぢやないかと思つた、でもねえ、さつき停車場へ出迎へて下さつた時は愛讀者かと思ひましたよ、へえ廿八、ぢや一つちがひねわたしと、素敵だわ、私が男なら惚れてしまふんだが――」といつた調子でお父さんの若い時の道樂話やら、林さんの實のお母さんの話やら、實に朗かにはじめ出すのです、お父さんもいい方で、にこ〳〵きいて、おふたりで杯をさしつさゝれつ、――私も眞底唄をうたいたくなりました。

辻山さんのお宅へ一晩御厄介になりました。あんないい御夫婦は世の中にないと、ふたりは早速神様に感謝の祈りをさゝげずにはゐられなかつたのでした、四つと二つのお子さんがあつて、あんなにも親切で、勉强家で――昨夜は佐賀の講演をすませて十里あまりの平野をドライヴしてこの武雄へ着いたのは一時近く、すぐさま温泉へ飛びこんで髪を洗ふやら、洗濯をはじめるやら、隣の部屋では五來早大教授が雷のやうな鼾をたてゝゐました。この教授は去年の總選擧に見事落選して、また今度の解散には色氣を見せてゐるやうです、林さんはぬけ目なく今度の應援演説に參加を申込んで、五來教授は大滿悦、何しろ辯士のしやべり賃はどの位かなあと、そつと胸算用をしてゐるのですから大抵、そばに控へてゐるものは頭が下りますわ。

九州よいとこ、すきなとこ、これで壇上に立てば二人とも虹のやうな、しかも優しい氣焔をあげて言ひたい放題をいふのですから、



もらはうといふものが、この夜寒に、――しかも重い病人に、荷物をもたせて、綿のはいつたものもきせずに――

母一人子一人なのに――なにがほしいんだ、祖母はグッと胸に來たらしかつた。全然肌合のちがう嫁ではあるが――祖母には、その少年がたつた一人の男の孫であり、その子の母親は私の父の兄の後妻であつた。父の兄は維新後の世の中のゴタ〳〵のころ、懷に金を

何ほありがたくなります。
女人藝術のポスターはあちこち貼られました。プラボー、女人藝術　七月十八日
時雨先生御滯在なれ　あき
かごしまを止してかへります。あれやこれやのてちがひだそうです。五來さんも止めたので早岐まででかへります。
祇岡は愉快でした。レンメイはせいかいでした。ペントウの木の匂ひにもアキアキしました。二人鳩のやうにならんで東京を戀しております。
五來氏がハイクを作つて盛に私に見せに來ます。いい方です。温泉だけがたのしみです。汽車にものりあきました。土産ものあんまりあてにせずに下さい。少し心細くなりましたから、でも猫の人形を買ひました。早く會ひたい。こちらはあつい。本は出來ましたか、



入れて出たまま行衞不明になつて、幼子と後妻だけが殘つたのを、家を賣つた金や殘りのものと一緒に實家(さとかた)の兄(あに)、テンコッさんの近くへいつてゐた。

少年は暖かい床に入れられ、私の母に靜かにさすられてゐた。祖母はやがて歸つてくる自分の子にも、少年が背負されて來た葛籠は見せたくなかつた。

「おやそ、こんな葛籠はなぜ燒いてしまはなかつた。お前はなぜ、猪之(いの)をおぶつてすぐに來なかつた」

と、少年の母が來るとすぐ祖母は激しくいつた。だが、いかにも後家相をした、色の黑い、小慾で眼の光つてゐる、瘦(や)せた長顏の、綿入れを三枚重ねて着て、もてるだけの荷物の包を兩手にさげて、轉がつたら最後燒け死んでしまひさうなかたちしたおやそさんは、いまや息子のことよりは荷物だつた。

「葛籠はまゐりましたか？」

と洒然として訊ねた。

哀れな少年猪之さんは寒夜の火事と、重い葛籠が災ひして死んでしまつた。

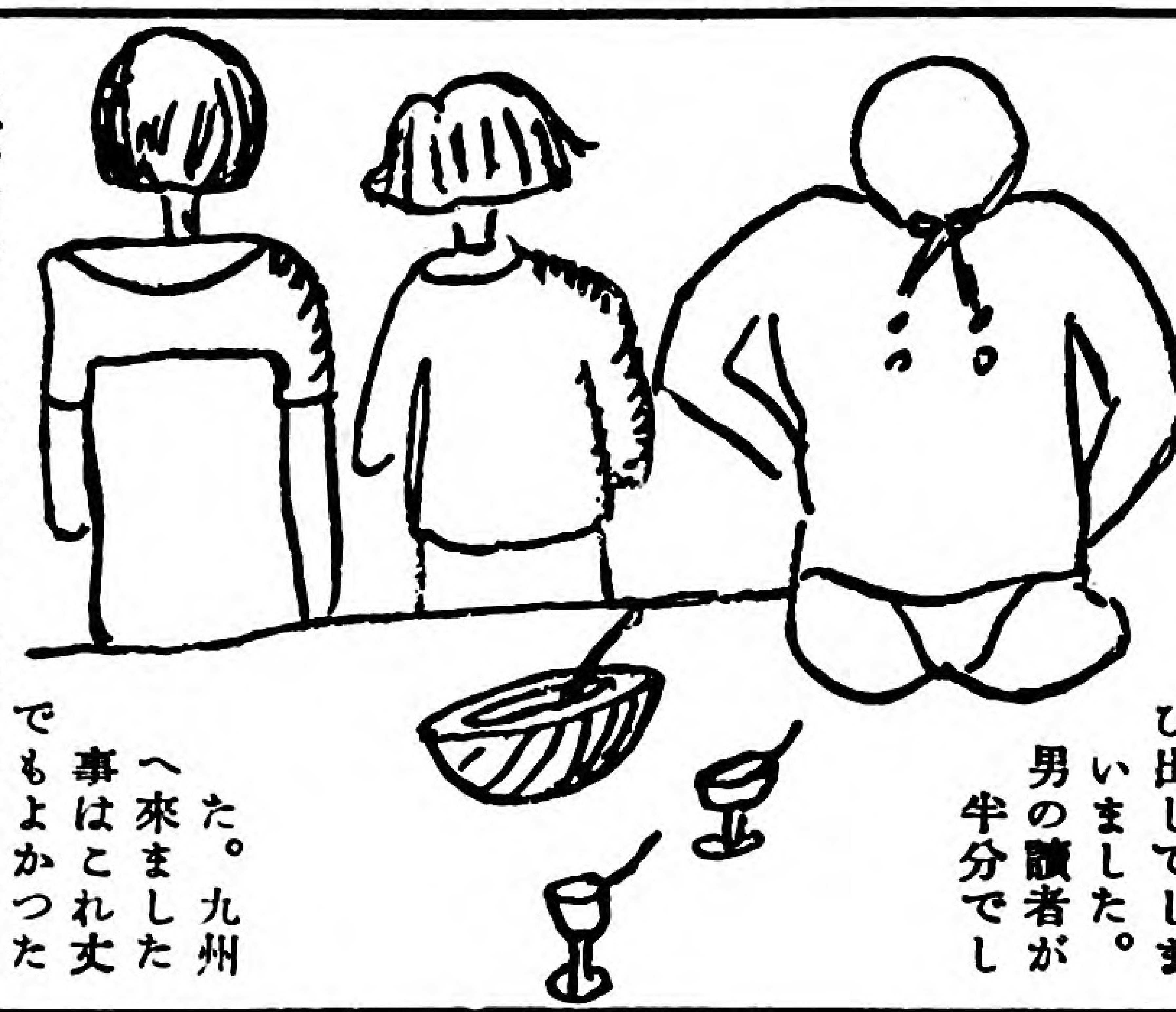
テンコッさんは大屋さんから立派な家主さんに代つた。人形町通りも半分燒けたので銀座に似た煉瓦建になつた。その幾軒かはテンコッさんの持家であつた。住居も紳士風にした。石のやうな羊羹を紙に包んでくれなくなつた。

大きな納屋――物置きが母屋から離れたところに出來たと思つたら其隅に床をつくり、疊を二疊ばかり敷いておやそさんの居るところが出來た。澤庵桶(たくあんおけ)や漬け菜との同居である。あんまりの事に、こんどは私の母が不服だつた。

一家(うち)からの仕送(しおく)りが毎月行くのに、まるで……」

かへるまでここから方々へゆきます。

明日は近代女性の告白なんてのをやりますが、とに角我ながらあつぱれきもの坐つた事です。福岡のレンメイの時は大したもので大もてゞした。皆愛して下さいました。警察の人二人來ましたが之も一緒にワツハワツハ笑ひ出してしまいました。



男の讀者が半分でした。九州へ來ました事はこれ丈でもよかつたと思つております。辻山さん御夫婦にはひとかたならぬ御やつかいをかけました。わたる世間に鬼はなし、變な言葉ですが旅の情は眞實嬉しいものです。貧乏の旅も之だから面白いと二人元氣です。（芙美子）

海、廿日のたより、早岐に來ております。

そんな年齢でもなかつたであらうに、おやそさんは鼠の骨のやうにほしかたまつてゐた。でも何かあると、例の葛籠の中に燒けのこつた裾模樣の派手なのを着てくるのではたのものの方が困つてゐた彼女の嫁入り衣裳なのだから、いかに黑の紋附でも悲慘だつた。

おやそさんは忠實に雇はれてきた。夜でも急用があるといへば、巾の廣い木綿じまの前掛けをかけて、提灯をさげて、坊齒をならして、謹しやかに通つてきた。袋物商の娘だつたので、袋ものをキチンとつくつた。私たちのお辨當箱の袋や、祖母の巾着を氣に入るやうにつくりあげた。或日、そのおやそさんが、クドクド祖母や母を說いてゐた結果が、六つの年からあがつた長唄の師匠をとりかへられる事になつた。おやそさんの姪が、杵屋勝梅といふ名取りになつたが、まだよい弟子がないのだといふのだ。

私の長唄のおしよさん六喜美さんは、眼玉にホクロのあるやうな目で、背中が丸くて、猫がコウバコをつくつたやうなお婆さんだつたが、後取りにする內弟子のふうちやんより名取りのおなつちやんより私を可愛がつて、御自慢で附合浚ひに連れ廻つた。鐵砲町の百瀨といふ接骨醫の裏にゐたが、半片を三角にきつて煮附けたお菜をわけてくれて、繪硝子のはまつた行燈のわきで一緒に御膳をたべさせるのを樂しみにしてゐた。お浚ひの時は、二間の戶棚を開けはなし、中央の柱を上だけぬいて山臺にする。十錢札や二十錢札——此間中あつたのとは違つた——が廢められる時、戶棚の方へむかつて、そつと勘定してゐたが、部厚なのを見せて、誰にもいつてはいけないよといつた、大きな、どてらを着てゐた背中を忘れない。その親しみのある人から離さうといふのだから、私は厭だといつた。では、どつちのおしよさんにもやらないと母は叱つた。

浪花町の裏にゐた勝梅さんも燒け出された一家だから、三味線よりほかなんにも持たな

和製ベニスのやうにいい町です。夜講演がすむと月をあびて海水浴をしました。宿では田中さんといふ學生さんと四人で木曾をどりやおけさや珍げい百出、五來素川氏のおはこ相馬ぶし一ふし。

相馬中村の深港模か焼ける。寝てゝ金とるそのばちだ。

農村の女がいいをみだと唄つたものだそうです。青々とした海です。東京者はゴクツプシが多かたいナアつて子供たちが云つてます。まことにしかりですね、早岐では三百人はいりました。もう東京が戀しい頃ですが田舎は野性テキです酒を呑まぬ爲數日、淋し、かへつたらうんと呑ませて下さい。(芙美子)

きのふは長崎縣の早岐の海へつき出た旅館の一室で頬かむり、おけさを踊るやら木曾ぶし伊那おどり、おまけに月の海へはゐりこんで危く呑まれさうになつたり、——警察から中止をくつたのも昨夜でした、とてもひどい彈壓でした。林さんはだいぶお酒に御ぶさたなので今晩は有田の町のブルジョアの別莊で久しぶりに醉はせやうではありませんか、と私もたのしみです、何しろ、かうして人の後をとこ〱修學旅行よろしく彷浪して歩けば空も海も青くて——、廿二日に長崎へ一走りいつてきたいものです。(秋子)

林さんは門司から下關へ出かけてひとり宿屋の部室に寐てゐます。少しばかりおなかをこわしたので、——きのふ有田を最終として八幡の町に歸りました。そしたら門司の五來教授の所から電話があつて、廿六日の朝日新

かつた。兄さんは叔母のおやそさんそつくりの人で肺病かもしれなかつた。だんまりで袋物の細工をして、時折トントンと小さい木槌の音をたてるばかりだつた。母親がおやそさんやテンコツさんの姉さんで、額の大きい、落ちくぼんだ大きな眼——此人は美人だつたと思はれたが、しどく〱貧乏にやつれて、骸骨みたいな顔をしてゐた。おきねさんといふ娘は父親似で、大きな、ふつくりした顔とフンダンな髪の毛をもつてゐたが、人がよすぎてポンとしてゐた。父親の善兵衛さんは、名の通りの人物で、今なら差當り、クラシカルなモデルにでも役にたとうが、そのころでは高い鼻と鬢頬とのもちぐされで、水鼻をたらして、水天宮様のお札を製造する内職よりほか仕事がなかつた。

「六喜美さんは好いお弟子が澤山あるけれど、勝梅さんはお前がいかないと困るのだから。」

と說きおとされて厭々通ふことになつた。最初は何も教へてはくれなかつた。毎日一二段づつお浚ひのやうに唄はされた。まあ、助六を知つてゐますか？　ではそれを——勸進帳も？　牛若も？　まあ、あれも？　これも？　いい聲だ〱だとそやされて無中になつて唄つた。しまひには、兄さんが體がわるいので氣むづかしいが、やつちやんの唄をきくと大層よろこぶからと——これは體のよいおとりで、窓はいつもあけはなち簾だけにしてあつたから人だかりがした。そのうちポツ〱お弟子が出來てきた。

お弟子の種類が所がらで面白い、水天宮様のおきよめ——門前で五の日〱に、神前へそなへる小さいお供餅を細い白紙でちよいと結んで賣る商賣、中には名高い女もあつた。年増の藝妓の手ほどきなどで、其うち裏から表通りへ越すやうになつた。階下が住居で二階が稽古場、壁が汚ないので古新聞紙を一ぱいに善兵衛おぢいさんが張つてくれた。勝梅さんは色白の毛の薄い大あばたで、眼が見えないから、壁の汚ないのは平氣だが、子供のく

開主催の講演會に出るやう、そして廿四日午後一時下關出帆の朝日新聞發起の朝鮮見學團に加はるやうお勸めを受けたので林さんが今その相談にいつたのです。（秋子）

御無沙汰おゆるしあれ、實に曲りなりな旅でしたが、どうやらかへれそうです、朝鮮沿岸旅行だといふので大阪朝日の婦人見學團へ計つたのですが乘つたと思つたらねむりこけて、おきたら又門司で驚きました（註この二人は近海見學團となつた見學團に入つて、玄海灘中ねてゐたものらしい）話澤山あります。皆さんによろしくおつしやつて下さい。（芙美子）

時雨先生　七月廿五日朝

風ふくがまゝ、陽あしのうごくがまゝといふ世にものんきな旅をつゞけてきのふ門司まで歸りつきました。林さんが八幡へ歸つての話がどうやらまた不安だつたのできのふ二人で門司に出かけて校友の人達に直談といふ始末でした。ところが廿六日夜の講演は大朝主催で朝日會館でやることになり、ビラもポスターも、すべての新聞に宣傳が出來てゐるので、ふたりは顏見合せて、よろしくとお辭儀をしたわけなのです。

きのふ午後、海上見學團に加はつて田舍ものゝお上りさんよろしくで乘船しました。始め朝鮮見學といつたのが、朝鮮近海見學となり、結果は玄海灘近海といふことになつて、のりこむや否やぐつすりねむりこんだ二人は、眼がさめてみたら夕方の下の關が前に待つてゐたといふまことにだらしのない見學で

せに潔癖性で氣味惡げに私が見廻すので、來なくなるといけないからと、大ふんばつで張つてくれたのだつた。

三味線が二張に見臺。そのほかは壁の隅に天理王を祭つた白木の小机があるだけ。私はお稽古を待つてゐるうち中、うらさびしさにボンヤリしてゐた。六喜美さんのところは上り口に赤い鼻緒のポックリが足も入れられないほど並んで、入口の三疊でふうちやんが下ざらゐをしてゐるし、八疊の隅でなつちやんが出來ない子に撥をもつてやつて敎へてゐるし、おしよさんの前にはあとから／＼とおじぎをして出てゆくし、私は傍側で、千なりほうづきをとつたり、石菖に水をやつたりして怒られたり褒められたり、お手だまをとつたり、みんなで鞠をかゞつたり、千代紙で疊んだ香箱へ、唄の出來ないところへ貼りつける細かい紙を刻んだり、おちぢれをこしらへたり、お三寶だの菊皿だのと、時間なんて氣にもしなかつたのに——だが、古新聞はそれらにました悦びを與へた。あたしは善兵衞さんに手傳つて、いつになく機嫌よく壁張りの手傳ひや見物や助言をした。それは逆さまだこつちの面へ糊をつけた方がよいのと。

古新聞が壁にはられてからあたしはせつせと稽古に通ふやうになつた。番がきても中々座らない。おまけにお弟子がすけないからいつも私の番がすぐにある。私は這入つてゆくにも足音を忍ばせて、こんちはも言はないで壁にゆく。勝梅さんは內職の毛糸の編物をしてゐるが、勘のよい盲目さんでニヤ／＼笑いながらいつた。

「おやつちやん、はじめませうよ。」

あたしの背の——目のとゞくところのうちは無事だつたが、とう／＼天理樣の机がもちだされることになつた。それでたりずに見臺まで、鼠がひくやうにひつぱつた。勝梅さんが不思議がつて探り廻しだしたのに吃驚した私は二ツ重ねた足臺からおつこつて、階下の

した。一昨日八幡市ではじめて女人藝術におめにかゝり昂奮を感じました。今まで讀んでゐたところ、九州の北部へはずゐぶんと女人藝術の印象を深くしたやうです。これはあながち私達のうぬぼれだけでもなささうなんですから。有田の有志は來年の春頃、女人藝術の皆さんにぜひ揃つて講演に來て頂きたい、費用はこちらで持ちますからとお傳へ下さいとたのまれました。

福岡門司いづれも新聞紙が必ず好意をもつて後援してくれることを確めたのです。

何よりも福岡市の聯盟支部の盛會だつたこと氣持のよい會であつた印象は忘られません男の人も女の友達も、また來て下さいと心から手を握りました。みんな熱心な女人藝術の支持者です、どうしても今後の宣傳は關西から九州方面だと、ひそかに感じたことは間違ひあるまいと思はれます。

若い學生達との旅行は至るところさん／＼の態でさすが好々爺の五來教授も早岐を最終として佐世保長崎から南部を敬遠したのですから――。それだけ珍談奇談はとても背負ひきれないほど、何しろ私達三人は搾取されたプロレタリアとして結束して、文なしの學生達に要求條件を出した、出さうとしてアヂッタのですから。

林さんは昨夜おそく電車で八幡のお父さんの所へ歸りました。お父さんの所にはお酒がまつてゐる。けふは直方あたりの親戚まはりでせう、私はひとりこの旅館に納まつて隣りの三井物産の硝子窓にうつる紺碧の空の色を

人を驚かせ、二階へ駈上らせた。勿體ないといつて盲目さんは泣いた。階下からは兄さんが、かはりの讀物をかしてくれた。「都の花」といふ都新聞の附錄だつたが、苦しい生活を知らないあたしは遠慮もなく頁をあはせて立ちきつてしまつたので、コチ／＼の兄さんが癇癪玉を破裂させて梯子段からどなり上つて來た。だが、何が彼をそんなに怒らせたのか分らなかつた。

「都の花」は近所からの借ものだつたのだ。あたしはまた高いところの古新聞を讀んだ。厠のはどうにもならないが、梯子段の近邊は手すりにのぼつた。窓の近くは窓にのぼり、欄間に手をかけて屋守の這ふかたちでした。向側のキリ昆布屋から危なくて見てゐられないと苦情を申込んで來たので、また兄貴が呶鳴つた。翌日ゆくと、善兵衛おぢいさんが股の間へ摺鉢を入れて、赤つぽい大きなお團子をゴロ／＼やつてゐるので、摺鉢をおさへてやりながらなににするのだときくと、たゞニヤ／＼笑つてゐたが、やがて、古新聞がお團子色にぬりたてられた。

兄さんが死んで、おきねさんが三ッ輪に結つて、淺黄がのこをかけてお歯黒をつけて、どこかみだらな顔つきになつたが、それも見えなくなつた。骸骨の顔に大きな即効紙を張つたおばあさんも死んだ。善兵衛さんはどうしたのか、勝梅さんは天理教をやめて耶蘇になつたといつた。外國婦人につれられて歩いてゐるのを見かけたといつたものもある。

おやそさんに、も一人の姉さんがあつた。矢つぱり近所に住んでゐたが。みんな後家さん――後家さんはお母さん一人で、あとは老嬢だつたのかも知れないが、女ばかり四人してキチンと住んでゐた。母子なのだか姉妹なのだかアンポンタンにはわからないほど、梯

見あげて、またしても今日の熱さを――。
少し本を讀まうか、海水浴にゆきませうか、廿六日の夜講演をすませて直に下關から夜行でたち岡山と大阪へ一寸寄つて歸ります、風のやうに颯サウと、ほろ醉ひきげんで歸つてゆく日をお待ち下さるやうにお土産もバスケツトの中にチョンと坐つてゐます。（秋子）

二伸

佐賀の武雄の宿で學生連と別れる前の夜、私がみんなと話しこんで床の中へ歸つたら、相棒がとてもおこるの何の、二時間近くも私に空閨を守らせて、何て薄情な奴だ――なんて、まあさら怒るなよと優しくなだめたら、すぐ妥協してしまつて「おい亭主こつちへ來なよ」と甘つたるいこえを出すのです、そして手枕をして私を抱いてくれました。私はうつとりと抱擁の中に夢見ごゝちでしたが、どうにも熱つ苦しくてやりきれなくなつて匆々彼女に背いて逃げ出しました。之はナイショ。有田の宿は陶器で名も高い香蘭社の主人公深川氏の別莊、きれいな女中さんが眼八分に黒塗のお膳をはこんでくるのです。けふはちつと平素の行ひを愼しまんと、と私が囁くと、相棒は合點して、ウンヨチヨチ。劇場の講演は立錐の余地もないほど。會がすんだのが十二時近く、それから深川氏の催しで山の中へ河鹿のこゑをききにゆく、谷川へ張り出した亭に提灯の灯がゆれ、つめたい風が額をなでてゆきます。三十人近い人々がビールに醉つて唄ふはおどるは、東京のお客がたあ、うんとのんでおくれんしやい、こりずにまたきとくれんかんた、なたあ。（秋子）

子段のやうに、だんだん年をとつた四人だつた。一番若い下の娘だけが廿二三でもあつたのだらうが、一體に黒つぽいおつくりの時代で、ことにテンコツさん一家だから花の香はなかつた。大きいおうるどみすがおとよさんといつて學校の先生だつた。中位のおうるどみすも教師だつた。下のミスも先生になりかけてゐた。お母さんだけが臺所をしてゐた。この女ばかりの家は用心堅固で、貧乏が入りこまないやうにしてゐた。大きいミスの名が通りものになつておとよさんの家と呼んでゐた。

善兵衞がおひとよしだから姉さんはあんなになつてしまつてと、おやそさんは言つたが勝梅さんのお母さんよりおやそさんの方がよつぽど貧乏性だつた。

おやそさんは、あたしの祖母がなくなつたとき、寐棺が來たら葢をとつて見て、

「まあ結構な――どれまあ。ちよいとお初に入れて見せて頂いて――どんな具合だかおあんばいを―

と中にはひつて横に寐て言つた。

「なんて樂なことで御座いませう、お布團はふく〳〵して、なんともふされないよい氣持ちで御座います。おばあ様にあやかりまして、私も極樂往生いたしますやうに。」

なまいだ、なまいだ、なまいだと、棺から出てきても空念佛を言ひつゞけてゐた。

おやそさんが、漬物桶と同居して死んだ時、十本の指に十本、手首にも結びつけてゐた紐がある。その紐はみんな寐床の下から出てゐた。死體を棺に入れたら床の下からずる〳〵と幾つもの巾着が引きずられて疊を這つた。貸金の證文、鍵類、お札のいれたの、銀貨の入れたの、銅貨の入れたの、穴のあいたビタ錢のまであつた。大概のものは棺の中へ一所に入れて、現金は何處へか寄附された。

栗の落るところ

村田千代

これは——秋にあつた事件——事件などと堂々語れる話では有ません。ほんの栗程の小さな事であります。

垣根の際の栗の木は、庭中の雑木におされて、道の上にばかり枝を張つて居ます。此の道を殆んど毎日十回以上は通つて、近所の世話をやいてあるく、世話やきタツと言ふ男が有ます。

櫻の枝が五十糎ばかり伸び出ても、傘をさして通つたら、さわつたとか、笹が少しばかりはみ出すのでも、新しい足袋がよごれたとか、直に注意にやつて來るのに、痛いイガのある迷惑ものの、こればかりには、全く一言の世話にも及ばないのをおかしく思つて居ました。カタ〳〵と下駄の音を忙しく運んで來たものも、カタツトその邊でふみ止まつてのケハイを、私達は家の中でおもしろがつて居りました。

するうち、何年かぶりで栗の落る頃遊びに來た叔父が、「垣根の外の栗は一つも拾はないと、そんなヅクのない事でどうする、それでは俺が拾つてやる」と、何かの話の折、そんなことを言ひ出して、それからは、まだ眞暗の頃から拾ひに起きるやうになりました。

ところが四五日そうした朝のこと、又矢張りむつくり起きて手さぐりに出て行きました。が、「行つたと思ふと、ぢきにそーおつと歸つて來て、もとの寢床の中に、默つて入つてしまふでは有ませんか。私はこれはヘンだと思つて聲をかけましたら、叔父は、やつと低い聲で言ひました。

「何、慾と言ふものは、つく〴〵恐しいものだと思つたよ。髮の白い、もう餘程のばあさんが、丈の長い寢間着のまゝで提燈を地べたにつけて、自分の顔も土の臭をかぐ程にして……あの年寄で今頃あゝまでして來てくる心理を考へると……拾はせてやらにやあ氣の毒だ。俺は自分の方が惡い事をした思ひになつて、びく〳〵歸つて來た。」

此處らで髮の白い老人は、世話やきタツさんのお母さんきりでした。それにこのばあさんは常に、「わしは夜ねて居る時二度三度は、屹度痰がつまつて、グーとそのまゝになりそうになつては、タツに水をのませてもらつて、やつとなほる、もう一月位しか命はないはな」と、弱々しくばかり言つて居るのです。私は何時もなら、これからも一と寢入りする所を、此の朝ばかりは妙に、早く明るくなるのを待ちました。

朝食の時、叔父は、「……その心理を考へると……もうどん

な事があつても垣根の外のものは自分のものだと思はん方がいゝぞ……その心理を考へると……と、全く眞劍になつて、おかしい程、皆にくりかへしくりかへし話しました。

その中に私は考へて居ると、あのばあさんが、あの弱々しいなりで、そんなことをしようとは、どうも判斷がゆきませんこれは叔父が拾ふことがいやになつてこんなことを言ひ出したのではないかと思ひつきました。

翌朝は昨夜からの緊張に四時に氣がつきました。床からぬけ出したまゝ、椽側から庭下駄で出かけました。もう家の庭中に居る中から、襟や裾への冷たい風が切ない氣分にさせました。水鉢のひかる水にもハツトしながらそれでもまさかと言つた安心のやうな氣分で門からのぞくと、オーもう確かに提灯があるのでは有りませんか。私はふるへをかたまらせながら、見つめました。

間違ひないタツさんの母さんでありました。拾つてはビクに入れるその動作。決して普通のばあさんで有ません。かゞんで提灯を前に置いて、棒切でイガの中のも出す樣子。その落ち着きには感心より外、何の感情もなくなつて、私は歸りは落着いて歸つたのでした。

五厘切手

大谷藤子

一九二六年九月十日。色の褪せた洋傘をさして、よろめくやうに町を歩いてゐた。すべてのものが無關心に、一瞥の視線さへ私に送らうとはしなかつた。疲勞に二本の足が生えたやうな撒水夫が、車と一緒に蝸牛のやうにノロノロと街路を行過ぎる。その男の馬糞色の横顏から、私は三月前に死んだ夫を思ひ起した。夫は町の製粉會社に雇はれてゐた。

三月前までは町を歩くと、製粉袋を滿載した運送馬車を引いて行く夫に出會つたものだ。その顏が、眠つた猫のやうに從順げに見えるのであつた。しかし、かれは家へ歸ると大きな八ツ手の葉のやうな手で、私を擲るのだ。私は知つてゐた。夫は私を飼つてゐる重荷に苛立つてゐたのだ。そこで私は、萬年筆工場に通ひ初めた。間もなく夫の運送馬車が自動車と衝突した。馬がゴム毬のやうに跳ねあがつて、夫を刹那に蹴殺した。自動車は狹い人道を突き飛んで、洋品店の飾窓へメリメリと喰ひこんだ。そして運轉手が重傷だ。乘つてゐた若

い令嬢は氣絶しただけであつた。

——わたし、あの時の氣持つたらありませんでしたわ。

遭難の令嬢は修飾された寫眞と一緒に、新聞で、こんなお喋りをした報酬に素晴らしい嫁入口を拾ひあげた。私は夫の遺骨を持つて郷里へ歸り、廿日ほどして出て來てみると、疾うに萬年筆工場から追ひ出されてゐた。私は仕事を探し初めた。夫の弔慰として目薬にも足りない金を會社から貰つたが、それは一錢も餘さず姑の財布に吸ひこまれた。

——伯母に頼んで急場だけ助けて貰はう。

さう考へた時、私の小さな蟇口には切手代もなかつた。二錢の銅貨は、現在の私の全身を支へてゐるのだ。これは四日も五日も費さなければ效果の現はれない葉書のために、使ひ捨てるほど悠長な金ではないのだ。と、さう考へてゐたのであつたが、しかし、どうしても伯母に頼まなければ私は身動きが出來ないのであつた。私は空腹に神經を疲らせながら、三度も郵便局の前を行つたり來たりした。葉書を買つたら、私の空腹はどうなるのであらう！ 今更、誰が二錢の錢で食事らしい食事をとらせて吳れると云ふのだ。だが、せめて安パン一片ぐらゐ口に入れたいではないか。では、胃袋に落しこむだけの酸つぱいパンを買ふことにしやうか。さうすれば、もうお終ひだ。いよ〳〵仕事探しに着て歩く最後の單衣を、質屋に投げこむ決斷が必要だ。

——葉書を一枚下さい。

弓弦を引きしぼつた心であつた。

——葉書一枚？

物質のやうに無感覺さうな女事務員が、私の言葉を繰り返した。

——一枚では都合が惡いから、二枚買つて下さい。

——え？

——二錢ではお釣がありません。

私は、ぼんやり聞いてゐた。

私は、二枚なんか要らないのです。

——では、お釣に五厘切手をあげます。

馬鹿な！ 私は五厘切手を使ふ用はないのですよ。

——だつて、五厘の釣錢がないから仕方がないぢやありませんか。

女事務員は、それきり口を噤んで腹立たしげに卓の上をみつめた。五厘切手を買ふ！ 何のために？ こんな併らない話があらうか。恐ろしい冗費だ。

——あなたは何故、私に要りもしない切手を賣りつけるのです？

私は空腹のために抑制を失つて、噛みつくやうに女事務員に向つて喚いた。

——私は五厘切手なんか、一生使ふことはないのです。

しかし、誰も素知らぬ顏をしてゐた。私の喚き聲だけが、奇怪な懸かしさを以て小さな郵便局で響き渡つてゐる丈だ。

やがて私はソッと右手を差し出して、先刻つき返した食べられない五厘切手を摘みあげた。しよんぼり、郵便局を出ると磨り減つた下駄の固い感觸が、ズンと私の頭まで泌みとほつた。

納戸の話

山川朱實

私は九つの秋から、母方の祖母の家で三四年すごした。祖母の家には奥の間といふ暗い納戸があつて、納戸の中の大きな古い長持に、『春秋』だの、論語、孟子などと、いつぱい入つてゐたが、其の中に田舍源氏やくさ草紙などといふ繪の本が何册か交つてゐた。今から考へると可成りひどい春畫風のもあつたらしい。そのせいか此長持の中を見せる事を嫌つて、

「女學校卒業するまで見てはいけないもの」

として納戸に入ることを嚴重に取りしまつた。でも一度蟲干しの時見た昔風の繪に心惹かれて、人のいゝ祖母の眼をぬすんでは禁制の納戸に入つた。そしてやたらに手を擴げてゐる繪や、小さな釣り上つた眼、前髮を渦卷きのやうにした色刷りの繪を、むさぼるやうに見たものであつた。

私は其の朝、祖母がお彼岸のお團子の粉だといつて、重い石臼を廻してゐたので、安心してそつと又納戸に入つた。

いつも明けてある中窓の雨戸があけてないので一寸不思議には思つたが、晴れた空の洩れ日で薄暗く部屋を照らしてゐた。この部屋の中に布團が一枚ひろげてあるのに氣がついた

「お祖母さんが布團を干すのを忘れてゐるんだわ」

と思つたが、見つかると叱られるので、そつと足をしのばせて、布團を踏まないやう通つてゐた。と私は「おや！」と思つて薄暗さに慣れた眼をみはつた。そこには足の裏を見せた大人の足首から先きが二つ並んで、布團からでてゐるのであつた。「誰か寢てゐるのかしら」と考へたが、見當が着かなかつた。祖父はゆうべから大勢の人と海に夜鱚を釣りにいつて留守だし、こんな納戸に寢るやうな人を思ひ出されなかつた初めは氣味の惡かつた私も、だん／＼平氣になつて、多分の好奇心と、性來の茶目がむら／＼と起つて來て、もうさはげば納戸に入つたことを叱られるのも忘れて了つた。唯寢てゐる人が誰であるかゞわかる興味に引きずられて、足の裏をくすぐつてやることも面白いし、布團の上にいきなりのつかつてやることもいゝなどと、今から起らうとしてゐる結果の面白さを享樂して、暫く茶目らしく笑つてゐた。と布團が少しむくむくと動いて、片方の足が引つこんだ。私は急いで、勇敢に力を出した。

「わあ！」

といつて布團の片方をめくつた。そして喜んで手を叩からうと

したのは

ほんの瞬間であつた。布團の中からは、私の驚きに數倍した驚きで、男と女の人がはね起きたことであつた。そしていきなり

「誰だい？」

と呶鳴つたのは、昨日まで西側の部屋の建增しに來てゐた大工の弟子の勇さんであつた。女は急いで身づくろひしてゐた。

勇さんも呶鳴つたものゝ小さい私が、大きな眼を見はつて叩きかけた兩の手を擴げたまゝ立つてゐるので力拔けがした。

「あゝいとさんか」

といつて、二つに折れた布團の上に腰掛けて息をついた。女の人はおちてくる後れ毛をしきりに兩の手でなであげてゐた。うつむいて顏をあげない。

私は餘りの驚きに泣き出しさうになつた。そして子供心にも大變惡いことをしたやうで、悔ひと慚恥で堅く〳〵結んだ脣がぶる〳〵ふるえてゐた。逃げることも出來なかつた。と勇さんはちらつと白眼を見せて私をねめつけたやうに思ふと、私は一たまりもなく大聲を出して泣きだした。

「私長持の中の給本見にきたのよ」

となさけない聲を出してやつと言わけをした。勇さんはむづかしい顏をして

「あちらにお出なんし」

と命令でもするやうにいつた。私はふと勇さんの態度に輕い反抗心を起して、すなほにそこを出ないでやつぱり泣いてゐた。

「人の家へ來て晝間ねてゐたくせに、自分こそ出てゆけばいゝ」

と泣きながら思つてゐた。

が勇さんにしてみれば、いくら子供でも癪に障つたのであらう、折角駈落ちまでして來た二人の布團をいきなりめくられては。

これは駈落ちであつたといふことは、ずつと後で祖母から聞かされたことであつたが、勇さんが駈落ちして來て、是非一晩かくまつてくれと晩方まで說き伏せられ、では祖父の歸らぬうち出ていつてくれ、といふ約束で、夜の明けかゝつた頃に一先づ納戸に休ませたのださうである。そして

「子供もゐることだし休むだけで、決して寢てはいけない」

と言ひ渡してあつたのを、勝手に布團を引き出して寢たのであつた。

祖母があとで

「あの時程腹が立つやら、可笑しいやら、一生のうちにあんなことはないよ」

といつては笑つた。

祖父が黃色い日をあびて、靑光りのする鯖を澤山釣つて歸つた時、勇さん達は窓からでて裏口からそつと出ていつた。

私は其の女が赤い腰卷を出して、着物を端折り、姉さまかぶりに手拭を被つて、女竹の生垣から消えていつた後姿を、今でもはつきりおぼえてゐる。

シーサンの土産話

沼　蘋

帝都の夏は暑い。

ベッテーの英語の家庭教師シーサン（印度人）は突然姿を消してしまつた。北海道にでも避暑に行つたのでせうとは周圍の人々の言葉だつた。

丁度一ケ月間も過ぎたかと思ふ七月初めに突然彼は姿を現はした。

中華民國蔣介石のもとに遊んでゐた事は彼の物語に依つて知る事が出來た。

蔣介石の寫眞。軍服纏ふた女性の將校。

馬上の將校婦人、部下などの色々國民政府の近況寫眞を擴げて彼は語り續けたのであつた。彼の蔣介石が素晴らしい翼を擴げた支那に於ての絕對的權威、王者を凌ぐ豪振り、宋美齡に對しての溺愛、彼女の化粧の莫大さ、夜會服に散簇たダイヤモンド、首に掛けた大粒のダイヤモンドのレース、晩餐會のテーブルの整ひ方、イングリッシュスピーチの流暢さ彼女の美しさ明るさのすべてを赤き眼を輝かしながら如何に痛快に物語つた事よ。

話し終つた彼は彼の首領ガンジー氏に送るべく蔣介石の脂肪に膨らんだ寫眞を封筒にして出て行つた。

息詰るかに聞き終へた私は何かしらん頻りに腹立たしさが一時に湧き上つて來た。

口には中華民衆の爲め！

或は社會平等の說を叫び！

自由公論を得々としてゐる彼の蔣介石！

やがては宋美齡の爲めに支那民衆の國庫を明け渡すであらう！

七、一九

一インチの傷痕

大田洋子

廣い庭の中に、ぼうつと白いコスモスが群れ咲いてゐた。私はその花蔭に、じつとしやがんでゐた。私はさうやつて、戀故に受ける、盲目的な監視をされてゐた。

遠く〳〵コバルトの大空の中腹に、山峡が浮び、白蛇のやうにうねつた道が、村から町へ流れてゐた。其の山なみを越えれば、青い海原が展けてゐるのだ、そして、その海ぞひを走る山陽線のH市には、私の愛人が、私のために苦惱し乍ら狂ひ乍ら、私が、監視の中から拔け出てゆくことを待つてゐるのだ。私の胸はふく〳〵と涙してゐた。

だが私には、なか〳〵脱出の心用意が出來なかつた。一切をかなぐり捨てゝ子供をさへも、空漠とした不幸と惡の中へ突き落して、私の胸を目がけて來た彼の、變質的な情熱に、私は、暗い恐怖と不安を感じた。一日の內に、二度も三度も手紙が來た。

その度に私は魂の底から、血の出るやうな戀愛苦惱にゆり上げられた。

ふと私は、黃いろい波のやうに稻の穗が、はためいてゐる田の向ふの街道を走つて來た自轉車が、私の家へ入る石段の前で止つたのを見た。自轉車に乘つてゐた少年は、やつぱりそうだつたのだ。愛人のゐた社の給仕なのだ。私はさつと立ち上つて、兩手をさし上げて振つた。

——達者でゐる？ね！どうしてゐた？　私はその少年から愛人の消息を嚙みしめるやうに聞き取らうとした。

——え、毎日、あなたから手紙の返事も來ないし、あなたも來ないと云つて、昨夜はお酒をおのみになつてゐました。

そう云ひ乍ら、少年は厚い手紙を私に渡した。私は又、コスモスの花の下にかくれて、手紙を讀んだ。私はわつと泣いてしまつた。

——ね、すぐゆくから怒らないで頂戴。だつて、そんなに一思ひに、母を捨てゝ出てゆくわけには行かなかつたのよ。昨日も今日も、一緖になれないのなら、死んでしまへばいゝのだと思つてゐたのです。

日がとつぷりと暮れてしまつた。星空が氷の面のやうに冷めたかつた。私は、奧の座敷で少年を前にしてさん〴〵と泣いてゐた。母がやはり眼を赤くしてお祭のお餅を燒いて部屋へ入つて來た。

——とにかくその手紙を渡こておいて下さいね。洋子さんもあきらめてくれなければね。つらいことは分つてゐる。二

人が考へてゐるやうな、そんな無理なことをして、結婚して見ても、長くはどうしても續きはしない——。とにかくに、私は父の前で書いた愛人への絶緣狀を少年に持たせて、明日の未明に歸らせた。彼からは、折り返して、厚い呪ひの手紙が來た。封じ目からは、惡魔の神經のやうな一筋の髮の毛がはみ出てゐた。それはかつて、私がまだ何も知らないで彼との生活に甘へてゐた日、彼が私の體から持つて行つた、私の髮の毛なのだ。手紙の中にも二本の毛ピンが入つてゐた手紙は血みどろだつた。

幸福であれ、すこやかであれ、俺と別れることが、幸福なら、俺は別れてやるより外はない。お前の云ふ正しいものが、これからの生涯に一度でも惠まれるならば、俺は互ひに持つてゐた宿命を喜ぶだろう。

——その夜ふけ、私はやつと母を說いて、郵便局まで出して貰つた。赤い提灯の灯をゆら〳〵とゆり乍ら、女中がうしろから、ついて來た。

——もしもし、もしもし——私は、Ｈ市の心當りの家へ片つぱしから電話をかけた。そのひとは幾度もゆき遊ひになり、先き廻りをして私の親戚の家で待つてゐた。

——仕方なしに、父の前で書かされたのですよ。もう一度私を呼んで下さい——

だが彼は、醉つて醉つて、ろれつの廻らないやうな聲で答へた。

——俺は死にもの狂ひだ。もう何も云ふことはない。もし云ふことがあるならば、この家の犬が子を生んだことだ——

——もう一通話なさいますか——と女の聲が流れ込んだ。

私は右手に、灯を受けて、冴々と光るかみそりを持つてゐた。私は最上の痛心の中で、左手首の動脈にかみそりを當ててすうつと力を入れて引いた。

丁度その頃、電話口で酒に醒めた彼が、タクシイを飛ばして、山を廻れば二十里の道を、一筋に私の家へめがけてやつて來てゐる時だつたのだ。

だが、そうしたものも、結局、破れる時は破れるものだ。あれから四年の後、私たちは形の上で家庭を作りはしたが、そして彼は、私を、風呂に入れて洗つてくれ、足の爪を斷いてくれ散步の草履の鼻緒をつけてくれたが、そして私は彼をこの世の中の何ものよりも愛しはしたが、やはり風の吹く秋十月、私は彼の許を飛び去つてしまつた。私を愛する前に、私に打ち明けないで持つてゐた、彼の家庭生活の尾が、げんぜんと冷酷な呪咀を持つて二人の生活へつきまとつた。

私が彼のところを出た時、彼は意地のやうに私の逃げた都會へ保護願ひを出したりした。その人相書きの一條に、左手首に直徑一インチの傷痕ありと書いてあつたのを、私は微笑ましくも讀み返したのだ。

鼠色の外套

川島つゆ

故沼波瓊音先生が、一時凝って居られた信仰生活から、再び筆の世界に立戻られた頃であつた。その頃、角田家との間に俳誌刊行の企てがあつて、その晩は元の「俳味」の殘黨や、竹冷畑の人々が、竹冷氏の遺孤である竹涼さんの根岸の宅に會したのであつた。

その席にひよつこり顏を見せたのは、思ひ懸けなく中谷德太郎さんであつた。自分は中谷さんとは三四年も逢はなかつたのであつた。小杉未醒畫伯に初めてお逢ひしたのもその晩であつた。畫家と云へば、長髪白面の青年か瀟洒な大人を、いつとなく豫想の中にこびり付かせて居た私は、畫伯の野性的男性美とでも云はうか、がらりとした風格殊にその十能のやうな大きくたくましい手が素晴らしく印象された。

中谷さんは前垂れをかけて居られたかと思ふ。若し左様でなくとも、木場育ちの氏は、それに近い砕けたところとカツチリとしたところを一つからだの中に持つて居た。

到着順といふ程のこともなく、極めて自然に、長尾素枝さん、私、中谷さんの順に坐ぶとんが並べられた。長尾さんと中谷さんとは隨分親しかつたが、中谷さんの酒家に反して長尾さんは全くのおしるこ黨である爲に、他に話し相手とてもないその夜の食膳では、是非とも私が接伴といふやうな役廻りとなつた。幸なことに私の膳に配られた猪口が非常に小さかつたので、私は日本酒で、可なり長い間麥酒のお相手をつとめることが出來た。「女に負けちや殘念だ」そんな風に云ひながら、中谷さんはしきりと手酌であふりつけて居た。

その晩少し作つた句の中に、中谷さんのも二つばかり覺えて居る。

怠業の今日も晴れたり草の花

虚空來に迫り來るもの星月夜

虚空來の句を披講の時には、皆して譯もなく笑つたのであつたが。

そのうちに、一同の食事が濟んで座談に移つた頃、中谷さんはふいと腰を上げて「僕、お先に失敬させて頂きます。急に歩きたくなりました。」と。それが餘りに唐突であつたので驚いて見返ると、氏の引しまつた顏には、俄に肉體的の温味や希望を根こそげ攫はれて澄んだ淋しさと、それ故に人に迫る一種の殺氣をさへ含んで居た。

「もう少しいゝでせう。僕たちも家に歸りますから。」

瓊音先生に何氣なく云はれて、氏もさすがに一端腰を落されたが、もうそれからは殆ど無言であつた。それが不知不識一座の氣分に響いたかして、間もなく打揃うて戸外に出た。

晩秋の夜氣がほろ醉うた頰を薄ら冷たく撫でて行つた。十數人の連中がわやくやと喋舌りながら、根岸から坂本の通りに出て、踏切に近付いた時に、中谷さんはたゞ一人踏切を越えて上野の森に向はうとした。

「一緒に來ませんか。」

別れしなに、並んで歩いて居た氏は、私の方を振向かずに聲だけでそれを云つた。それは確かに云つた。

若し左樣でなければ、その時私は餘りにも明かに氏の心の聲を聞いたのであつた。そして、その時の氏の心身の何處にも謂はゆる不純な分子なぞ全々なかつたこともハツキリ感ぜられて居たのであつたが。

然し、突嗟に何をなすべきであつたらう。未だ若かつた私は明かに慌てゝ、自分のそばを歩いて居る當時早大生の某に何か聲高に話しかけたように覺えて居る。そして中谷さんはそのまゝ踏切の方へ、闇の中に吸はれて行つた。暫時私の瞳に、鼠色の外套のうしろ影がふわ〳〵と芒を曳いて居た。

これが現世に於ける中谷さんと私との最後であつた。それから二ケ月程して、或朝の新聞記事で、私はこの不遇な文壇の俊才の死を悼まなければならなかつた。

送り狢

伊福部敬子

低き山うしろに負ひて
淋しくたてる白壁の家
つぶらなる目のうなゐは
髮白き祖母とその家に住めりき
…………

夕闇ほのにゝほへば
野を越えてとほき
あなたの村居する家々の灯の賑ひ
………
………

幼子は草にねて
はてもなき物思ひにたよりなく胸を抱けり。
…………

山を拓いて中腹に建てられた家、青石の石段を百歩ふんで下りた所に白い往還が通じ、物見のやうな座敷の櫺形窓にともる灯は、野を越えたとほいゝ村からは、華やかに夢のやうに見える。晝は晝でうる〳〵盛りあがつたやうな翠の間に眞白い壁倉が陽に映えて、道ゆく人を仰がしめた。

けれども、その中に住んでゐた祖母と垂髮の生活は淋しいものであつた。うしろの谷に、シヤロロ、シヤロロとむせぶ

水の音に、ねむられぬ夜がつゞいた或時、不意にこの家に婚禮があつた。私が六つ位の時の事らしい。その時分のことは、自分で「見た」のと、他から「見たのだ」と云はれるのと、交りあつてどこまでが本當かわからない。そして今もわからない、その家にゐた人は、私一人が殘つてゐるだけだから。

不意の婚禮、私にはさう思はれた。一度か二度見た事のあるその家の主人である叔父に、お嫁さんが來るのだ。

町からは料理人が大勢來、ふだんは明けた事もない外倉から稻穗の紋のある膳椀が積み出された。

式臺には燭臺がならび、待女郎になつた本家のお姉さんともう一人の女が、そのあかりの中に立つてゐた。石段の下にも高張をもつた人が五六人立ち、村境には供をつれた男たちが出迎へにいつたやうであつた。

暗くしづかな夜を、明るく賑やかに待つてゐる、たゞ〳〵それは不思議な光景であつた。

やがて、澤山の道具がかつぎ込まれ、それから、大分たつて、數臺の人力車が夜の往還をはしつて來た。人力は石段の下でとまり、男や女が大勢下りた。紫色の振袖をきた人が車をおりる時、口紅がきらりと光つて、脛が蠟燭のやうに白かつた。

それからどれ位たつて、どんな事が行はれたか、廣間の方が賑やかになり、お酌の藝者が廊下を頻りにゆきゝする時分になると、庭の方から頓狂な叫び聲が聞えて來た。

「おーい、みんな、出てみろい、八猯を見つけたぞ」庭の見廻りなどに出た人が見つけたのだらう。山寄りの離室になつてゐる祖母の居間の緣下に八猯がゐるといふのである。

「八猯が來たとや」

臺所の方にゐた若者や料理人はすぐがや〳〵かけつけた。竹切、鎌。槍槍と叫んで長押から槍をおろすものもあつた。廣間の方からも、何人かの足が庭に向つて來た。

亂暴な賑やかな騷ぎがあつて、結局は誰かのえものに仕止められて、猯は緣の下から引きずり出された。さしつけられた裸火で見ると、犬位の大きさの、毛深いものが、頸の邊に血を流してゐた。

「フム、汝や花嫁御をつけて來たな」

一人の男が竹の先でその腹のあたりを弄りながらいつた。

何か寒いものが、ぼんのくぼのあたりをはしつた。

ふと氣がつくと、まつくろな夜氣が、この騷ぎをつゝんでゐた。そして裏の車井戸がキ、キ、と空鳴りをした。

その夜明祖母がほろ〳〵と涙をこぼすのを、東の山の端の明りで見た。

翌日、裏の谷をこえ、お嫁さんの配り物のお菓子の鯛をかざりながら鈴木の原にゆくと、何と、榧の森でふちどられた廣い〳〵傾斜は、一面燃え立つやうな薄の穗で、すきとほつた風がその波をみだして逃げていつた。私は、ほんの一瞬間前、そこを狐がとほつていつたやうに思ひ、逃げて歸つた。

叔父は家にゐなかつた。お嫁さんは、よく出入の若い男女と畑へいつた。

「大きな狐を見ましたぞい、お茶にかへらうと思うて槌谷をとほつて歸つて來ると、沼森の三本杉の根方に、大きな奴が

白い腹を出してねてゐるんでやす」
本家の下男の三造が笑ひながら言つた。
上段の間と臺所と、そのまとゐを照す釣らんぷの影で、お嫁さんは黒塗の椀に煮ぞうめんを盛らうとしてゐて、パツと顔を赤くした。

何故か、私には、白い腹を出してねてゐたといふのがそのお嫁さんの事か、それともお嫁さんが狐と一緒に晝寝をしてゐたかのやうに思はれてならなかつた。

祖母の離室の窓外を、秋の風が芋莖をふるはしてとほりすぎた。

夜中の訪問者

埴原久和代

秋にあつた事件？　さあ何があつたか知ら去年の秋？去々年の秋？それが身邊にかそれとも世間にか、勿論世間には秋だつて事件は澤山あつたであらう特に人が記憶してゐる樣な事件も、併し私は片端から忘れ易いので一つだつて覺えてゐることゝはない、自分の身邊にもあいにく此所に書いてでもみたい樣な事件には近來一向ぶつからない、と言つてしまへばまあそれまで、だが何かから去年の秋の病らひにとでも言つた樣な事件はなかつたものかなあと頭をひねつてみるそれは或る年の恰度中秋の夜中であつたので想出した——晴れ渡る明月といふ程でもなかつたけれど濃いちぎれ雲を縫つて時々みせる月の光には、流石に滴るやうな豁けさがあつた、何といふこともなく夜更かしの癖を持つ私はその夜も月見の人々も大かた戸を閉めて世間がひつそり靜まつた頃から漸つと自分の机に向つたのだつた、そして今夜ももう大分おそいなとおもふ時分ふと塀の外に砂利を踏む人の足音の樣なものを耳にした、今ごろまだ何人か月でもみてゐるのかしらとおもひながら時計をみればかれこれもう二時に近い、變ね、と言ひながら立つて雨戸を一枚くつて見ると大分傾いた月は背のまゝ晴れきらぬ雲間に明滅してゐる、そして別に人のゐるらしいけはひもなかつた、夜ふけはもうめつきり肌寒むかつた、で戸を閉め樣とする途端、モシモシと塀の外から突然聲をかけるものがあつた、ギヨツとした私はあはてゝ電燈を消した、そしてジツと耳をすましてゐると今度は門の方へ廻つて戸をコト〳〵させながらまた、モシ〳〵と呼ぶ、それは何うやら邊りをはゞかつてでもゐる樣に聲を押しつぶしてゐる、私はこれは余程變つた訪問者だ、と思ふと突差の間にいろ〳〵空怖ろしいことばかりが想像されるので

あつた。
　とにかくこれは隣へ通じて置くべきだと思案してまづ女中を起し用意してゐると
　またモシモシと頻りに呼び續ける、そのうちに迫るやうな今度は私の名を呼びはじめたので、オヤ私の名を言つてゐるのよ浪人が名を呼ぶなんておかしいねと私は女中と顔を見合つてプット吹き出した、もしかしたら浪人ぢやないかもしれない兎に角もつとよく様子をみて見様とまた椽側の雨戸をおしあけてこは〴〵併し何氣ない風に、何方？何のご用？と聲をかけてみた、と門の外の人は割合にはつきりまだ若いらしい男の聲で、大變に晩くとんだ失禮ですが何うぞY子に一寸お會はせ下さい、と出しぬけに言はれたので今度はほかの意味で私はびつくりしてしまつて、エ？Y子？然ういふ人私のところに居ませんが、といふと、ハイ、それは然う仰しやられるとはおもつてまゐりましたが決してご迷惑はお掛けしません、ほんの一寸此處までY子に出る様に何うぞ仰しやつて下さい是非話して置かねばならないことがあるのです、でもほんとにそんな人は居ないんですよ、何か間違ひでせう、といふと、イエ確かにお宅へまゐつてゐる筈です、といふその言ひかたが余りはつきりしてゐるので愈々これは何かの行違ひでゝもあらうと思つたがそれにしても時分が時分なので油斷は出來ない、一體貴方は何方です？と私は自烈たく　問するとその人は、實はといつてしばらく考へてから、實はその名前を申上げなければなりませんが……あのことではY子は全くお宅へまゐらないと仰しやるのですか……でも……とまた暫時思案でもしてゐるらしかつたが突然、では大變お騒せしてすみません失禮しました、と言つてすなほに一歩行きかけてまた、でも若しも明日でもY子と云ふものがまゐりましたならばあの——Tといふものが來て、逢う〳〵教會（協會といつたのかもしれない）を放逐されたとお傳へ下さい、然う言ひ終るとその人はあはてた様に門を放れて行つてしまつた。
　あすあたりY子といふ婦人が來るかもしれないさうしたら何もかも解るだらうといつてその夜は氣味わるく過ぎた、そしてあしたになつても三日たつても十日過ぎても然んな人は來なかつた。そのうちにこの夜の事件を忘れてしまつた。

百貨店

戸田豊子

百貨店は薄氣味の悪い眼を持つてゐる。トンボのやうに複眼で、そのうへ鋭い嗅覺を備へてゐる。百貨店の看視は空氣

を含んで窒息しさうな顏をしてゐるし、私服は磁針のやうに後手をひく／＼させてゐる。ハンケチ一枚買つても嫁に叮嚀にお叩頭して、口の隅で笑つて、鼻を歪めて、後を向いたら早速舌を出す店員。水のみトンボのやうに顏を近づけて、ふら／＼特賣品賣場をさまよう樣なお内儀さんたちは、自分の背中を刺す視線の留針を氣の毒にも鈍感にも更に氣付いてをらない。百貨店の商品は商品であると同時に被害品なのだ。數へ上げたら限りがない。百貨店は資本主義のカンヅメだ貧乏人は、こんな社會では到る所で反抗心と憎惡を育てられてゐるが、百貨店なども、結構な培養床である。或日、百貨店へ防水マントを買ひに出掛けた私は、入口で木下といふ知人に遇つた。彼は恐しく憤慨してゐた。萬引と間違へられてひどく屈辱的な取扱を受けたのだ相である。

「バツバツバカにしてあがる」――彼は少々吃りなのだ

「しかし、その風體ぢやね、」

私は遠慮なく評價した。彼は女物を仕立直した樣な變な柄の袷を、紐のやうな兵古帶で括つてゐた。兩方の袂は錘りのやうにぶらんと垂れてゐる。彼の説明によると、石鹸、手拭、敷島、賣れない五十枚の原稿、マッチ、胃散、その他の實に夥しい物品がその袂に充滿してゐるのだ相だ。

「貴方なんか一寸風體が過激だから、まあ、餘りこんな處へ立寄らない方がいいのよ」

有難いことに、こんな無遠慮なことを言つても私は、頬つぺたを擲られないのである。貧乏人といふ同類意識の外に、彼が私に目出度き關心を持つてゐることは疑ふ餘地もないのだが、今時、個人的成功を夢みてルンペンな生活を送つてゐる彼であつて見れば、どう問題にしようもないではないか、――これは餘談。ところで私の風體も余り上等ではなかつたらしい。第一、私はダンサーの足駄を穿いてゐた。

「家にダンサがゐましてね、馬を食つた樣に口紅をはみ出して、ダンスの個人教授だとかつて、家へも澤山男の人を連れて來ましたが、とう／＼夜逃げをしましてね、こんな足駄だとか、七輪や鍋なんかを置いて行つたんですよ。まあ、お宜しかつたらお穿きなさいよ」

下宿の小母さんがさう言つて借してくれた足駄なのだ、こんなのを穿くには可なり敢然としなくては穿けるものではない。へん、へん。私は自分の屈辱感をそんなにも短かく表現して、内職の針仕事で得た金は、足駄を買ふ代りに子供の防水マントを買ふことにした。

――あれは雨降りでもいそ／＼と學校へ出てゆくだらう。

偶然にも、同じ日警戒中の私服の磁針を狂はせたのは木下ばかりではなかつた。便所を出て、エレベーターの方へ歩いて行つた私はモシ／＼と呼び止められた。私は可笑しさをこらへながら言はれるままに隨いていつた。

テーブルを挾んで、その私服と對き合つた。男は私が買つた許りの防水マントを擴げて見たり、風呂敷を解かせたりした。

「いや、どうも、手間取らせて氣の毒でした。別にあんたを疑つたといふわけぢやあないんですが、近頃店員の中に客の棄てゆく買上票を惡用して不正行爲を働くものがゐるのでね。迷惑でも時々、かうして調べさして貰ふんです」

鬚の中に黒子を持つ相手の顏をまじ／＼と見乍ら、私は何時までも笑つてゐた。

地獄の反逆者

＝人生記錄＝6

松村喬子

相談

　今日から亦、改めて新規蒔なほしで商賣をやるのだ――と開業の時の樣な氣持が皆の頭にあつた。主人の氣嫌もよかつた。

　その三つ輪家から、小町に連れられて誰よりも先に歌子は歸つてきた。拍子拔がした程、いつもの陰險な主人の顏が明るかつた。

「歌子はん、どうぞ、」

　おかみも何となく、いそ／＼として座ぶとん等を勸めて出した。

「長いこと、あんた達にもいやな思ひをさして、あんなせまいとこへ入れときましたが、今日はいよいよ皆さんの歸つてきやはる日やナー、まあ／＼とにかくすみまへんやつた。それについて、今迄は、かるたはんとあんたは一番仲よしやつたので、一軌に、あんたが智慧づけした事やとばかり思つてゐたんやが、小町さんの云ふのには決してあんたが煽動したんやない歌子はんはちつともそんな事しやはらへん、それにあすこに居る間も、おとなしかつたし今度歸つたら一生懸命働かはる人やと云つてゐた、ナ、小町さん、そうやろう」

　小町の方へ顏を向けて目で合圖をした。小町も、すぐうなづいて

「えゝ私はいつも言つてまつしやろう、この人は、決してそんな事しやはらしまへんと」

「そう／＼、あんたは始めから云つてゐやはつたナ」

　おかみも口ぞへした。

「うむ／＼」ときげんよく木浦は聞いてゐた。「それで、外からも度度そんな事を聞いて、わしは、一寸でも、あんたを疑つた事を濟まんと思つてゐるのや、あんたも、私の云ふた事を氣にしてゐるやろうが、もう、水に流してどうか、今日から、新規蒔き直しで、元の樣な、大阪時代の樣な腕をみせとくんなはれ、ナ、今日呼んだのは別に用やおまへんけどそれを一寸話さうと思つてゐましたんや、まあ／＼更めて云ふ迄の事はおまへん、あんたなんか、學問はあるし腕は人より、エ、のやすかいに、一生懸命に働きさへしたら、すぐ三千や四千の借金はぬけるのやすかい、それからナ、一寸注意しときますが、友達だけは、エ、のを撰ばんといけませんで、何しろ、自分では、少しも惡い事に氣がつかん樣でも、不知不識の間に、友達が惡いと、その仲間に入つてしまつてゐるのやよつて、小町さんや愛之助さん達とさへつき合つてゐれば決して間違はおまへん」

　子供だましの樣な事にのつてたまるかと歌子はおもつた。自分に都合のいゝ人ばかりが、エ、人で少しでも、骨のありそうなのは惡い人間だと云ふ、自分勝手な木浦が、おかしかつたが、おとなしく聞いてゐた。おかみは、大きな枇杷などをお盆に一杯盛つて持つてきて、再三歌子にすゝめた。

　幾月ぶりかで自分の室へ歸つてくると、なつかしい氣もするが、またこの室でいやな思ひをしなければならないかと情けなかつた。

　どうしたらこの室をのがれ、この柴樓を出るか――

　彼女にとつてそれが一番の大きな問題であつた。外出一歩、そこには、番犬の樣に目をみはつてゐる仲居がある。夜おそく、裏の臺

所口は嚴重に閉められてある、表戸は、客がいつ歸るか解らない爲め、簡單に閂(カンヌキ)だけで閉められてあるが、二人の仲居が、當直に當つて玄關に座つてゐる。

他の娼妓の殆どが久し振に歸つてきた自分の室で改めて、キレイに掃除を濟ました後、之からより多くの客が來て、商賣繁昌を祈つてゐる時、歌子はどうしたら拔出せるかといふ事ばかり考へてゐた

榮樓に再び、陽氣なさんざめきの聲が聞えだして客と娼妓の、甘(あま)いさゝやきがもれて、廊下を二個(ふたり)連れの影法師が、行つたり來たりする樣になつた。

去年と變らない夏が訪れて、毎日寂しい日がつゞいてきた。かるたもすつかり體が全快してみると、毎日何の的もなくブラブラしてゐるのは心苦しい事であつた。まして、ぬけ出す事は、始めに苦しい體驗をなめさせられてゐる丈け、躊躇されて、どうしても一人で出る事はいやだと思つた。それに、歌子も、新高も、必ずやる、とは云つてゐるものゝ、いつの事だか解らないので、それ迄遊んでゐるにしても、小づかひもなく、冬の物は全部なくしてゐるのに、どうしてよいか的はなく、心細くてしかたがなかつた、今更、働き度いとも主人の方へは云ひかねて居たが、若し、主人の方から他へ住替はせずに、このまゝこゝで働きなさいとでも云はれたら、働いてもいゝと思つてゐた。中年の性のなやみと云つたものをハッキリと自分で意識しなくともどこかにその閃(ヒラメキ)はあつた。時折白粉をつけたり髮を結つたりした。

「かるたさんは、色きちがひみたいに、あんなにやつしてゐるわ」

その頃からまた時々かるたの兄から手紙が屆いた。けれど、今度の手紙は、誰にも見せないでゐた。

川柳と高奴と歌子とは、廓淸會から出てゐるパンフレットを見てゐた。三人の額には、少しではあつたが、輝きの光りがさした。歌子は「婦人公論」を二人にしめした。そこには、娼妓の自廢についての記事がのつてゐた。筆者は片山哲としてあつた。

「いよいよ行くとすれば、東京の方が好いワ、それに、私なんとなく、救世軍や、矯風會より、片山哲と云ふ方の方へ行つた方が好い樣に思ふのよ、それに、大阪へは私は行けないもの。だから、東京へ行くつもりよ」新高は、大阪へ行き度いのであつた。それが爲めの冒險ではないか。大阪の元の夫の許へ行き度いばかりに、危險をおかして、幾度もこんな恐しい事をやつてきたのだしもう一度やらうとしてゐるのだもの――

「川柳さんとあたしは大阪へ行き度いのやワ」思ひ切つて歌子にその事を打あけた。「そうや、なー、あんた方は、お互ひに「好きな人」があるのだから好いワ、どこに居たつて、だけど私は、自活して行かねばならないのだから、そんな譯に行かない、私は、どうしても東京へ行きます。かるたさんもキット私と東京へ行くでせうから」

三人が、人を憚(はば)かつてヒソヒソと相談してゐた時、慌だしい足音がして、小波が入つてきた、ユカタを引かけたまゝ、いつも手に餘る多い髮の毛を、無雜作に櫛卷きにしてゐるが、一度横になると、すぐとけて肩にかゝつてゐるのであつた、それをなほさうともせず平氣でゐるのがクセであつた。房房とした、少し赤い毛は肩のあたりまで垂れてゐる。

歌子を呼び出して、引きつけの八疊の廣間にチャブ臺を中にして二人はさしむかひで座つた。立膝をしてチャブ臺に片ひぢついた小波の形は、年増女の色氣をみせた

今、私(うち)の兄さんが來たんやワ、そして、今度の營業停止の話やらいろんなこの頃の私の體の惡い事を話して、もしかしたら、私も思ひ切つて、飛び出さうかと思つてゐると、云つたら反對はしない。お前だつて、體も强い方ぢやないのだから、よく考へてお前の好い方法をとつた方がいゝ、何をするにも金が大事だから、何とか小遣位は心配してやるからと親切に云つてくれたんで、私ほんまに助かつたわ、私もあんたと一しよに行くから、仲間に入れて欲しいわ」

歌子がどんな返じをするかと、歌子の顏色をうかゞつてゐた。

「そう、よく理解してゐるのネー兄さんは、そりや、どうせ、私も一人で行くよりも、二人三人とよ

けいに多い程、私達も心丈夫だから、ほんとうに決心してゐるのなら、一しよにやつてもいゝわ」
「エ、、決心するもしないもないわ、私だつて始めつから、にらまれてゐるのやもの」
一小波さんも一しよに行くからと云つてゐるわ、いゝでせう」
　歌子の言葉に二人は一寸返事をしなかつた。またそんな事云つて中途で寐返りを打つのぢやあるまいか、それ共、三人の心を引きに來たのぢやあるまいか?、どうしてそんなにたやすく歌子は人を信じるのだらうか、と——歌子にはそれと察して、小波からの話をそのまゝ、二人に説明してやうやく納得させた。
一そうと決まれば、何日がよからうか」
「なるべく早い方がいゝわ」
　四人は一生懸命にその事で頭をなやました。
「いくら早い方がいゝつても、まさか一錢なしでは行かれへんよつてに金をこしらへる事を考へなければ、——」
　小浪は皆に相談して、
一とにかく、どうせ、出て行くのやから、一枚の着物だつても、持つて行かれへんし、ほんとうに着のみ着のまゝなんやから、簞笥の肥料にするのも、勿體ないから、あるものは全部質に入れる事にしようか、そして、多少でも金を持つてゐなければ、いつ落付けるか解らへんのやし、私の樣に、病氣のある人間は、どこで倒れるか解らへんのやから、藥代位はどんな事があつても離されへんワ」
「さうや、かまふことあるもんか一枚だつておいとく事あらへんワそうしよう〳〵」
　川柳が一番先に賛成した。然し歌子には、質に入れるにも品物がなかつた。夏の明石が一枚と平絽の中あがりと、ジョーゼットの、彼女の一番好きな絣があるつ限りそれに、お召の品の好い單衣と、結城お召だけで、冬物全部は夏になる前これ等の夏物と入替に大阪の質屋へ送つてしまつてあつた。
一妾、何もないのだもの、夏物位全部入れても知れてるからネ。來月の始めには、丁度、良ちやんも學校へ歸るのでお別れに逢ひに來るから、その時五十圓程貰ふことになつてゐるけど」
　新高も一人當にした客があつたこの家を出る事は云つてなかつたが、是非金が要るから、三十圓ばかり都合してくれないか」と相談を持ちかけたら、ほんとうか嘘かすぐ引受けた、そして、之も五月の五日に送つてくる約束であつたと小波は、
「まあ、兎に角、誰もが、全部なげ出して、入れて見よう、出來るだけ拵しらへておかんと困るからそして、その上で、客から呉れたら、これにこした事はないからもらつて行つたらエーワ、だけど、客のは當になつてならないのやから余り當にせん方がエ、からネ、それにしても時日は、いつ頃がエ、やろうかナー質に入れたりなんかして、あんた達もその客に逢つて行きたいやろうし、それぢやこうし樣か、九月の七日が日がエエのやから七日に行く樣にし樣よ今日はもう卅一日やから、一週間ナ、」
　一番最后に加はつた小波が一人で定めて了つた。なんでも、一たん、こうだと云ひ出した事は、どこ迄もやり通さねばすまない氣質の彼女は、もう、ずつーと以前からああでもない、こうでもないと計畫ばかり建てなほしてゐる三人を、グン〳〵と引張つていつた。そして、九月七日と云ふ事に定めてしまつた。
　なるべく人にさとられない樣にと云ふので室の中も余り、片付けないで只いつもの通りにしておいた。三日の晝頃いつになく歌子の室には若い連中が集まつてきた。千葉縣の生れで若春と云ふ八木節の得意な妓が、こし巻一つで入つてきて、京都から住替へた、肺の弱い作榮や、土佐の產の榮やら、余り、すれてゐない年子やら羽衣やらを前において、面白い手つきで八木節を唄ひながら笑はせてゐた。ヒョーキン者の若春は、榮が面白がるので、よけいに足つきや手ぶりを滑稽にして踊つた。何も忘れて、若春の身ぶりに興がつて笑つてゐる處へ、
「エライ賑やかだんナー、マア、若春さんの格構は……」
　と云ひ乍ら入つてきたのは、榮樓の姉娘の絹子であつた。

親の因果で、こんな女郎屋をやつて、人を慘酷に使ふ家は必ず片輪が出きる。そうしてその片輪の子が生れたら、必ず亦其家は繁昌すると廓の迷信家達は云つてゐる

このせむしで、少し頭の悪い絹子が生れてから、グン〳〵とこの家が繁昌したので、この家の寳だと云つて、兩親がこの娘を大切にするのだと、古い仲居が話した。

「あんな鬼の様なおやじが、この娘だけは大切に可愛がつて、もう目の中に入れてもいたくない程だんネー」とも云つた。

二十四にもなつてゐたが、十二三の小娘の様な小さい體を、着飾つて入つてきた。孔雀の様な美しく着飾つた、輝かしい人よ、今迄すべてを忘れて笑ひ興じてゐた者の目が集まつた。指のダイヤにプラチナの腕時計、彫刻丈けでもよほどの金が支拂はれたであろう、大さなバラの花に蝶が戯れてゐるサンゴの帯メ、笑はしてゐた若春も踊りを止めて、そこへ座つた。

「娘さん、何處へお出かけだつか」

若春は大きな目をみ張つて聞いた。

「エヽ、お母ちやんと歌ちやんと伊藤サンへ買物へ行くのやワ」

伊藤さんとは名古屋の人の呼ぶ松坂屋である。外のどんな大きな店でも、サンづけはしなかつたが松坂屋だけは、昔から名古屋では伊藤サンと呼んでゐた。

「よろしふおまんナ、あんた達はそんなにして毎日、遊びに行つたり買物に行けたりして、私も一と月でエヽよつてに、娘サン達の様な身分になり度いワー」

作榮は心の底から、そうなりたいと云つて羨ましそうに、歌子の室のまん中に座つてゐる絹子の傍を、いぢくつた。

「私、三日でもいゝわ」

と誰かゞ云つた。それに和してすぐまた

「私は三日ではいや、やつぱり一と月位は、なり度いね、遊びにも行かんならんし、着物もあるだけ、毎日、日に二三回づつ着替へて、みんなあるだけきてみたいもの、その變りあとは、どんな貧乏してもかまはんよつてい」

「ナー娘ちやん、一と月でいゝから私と變つてあんたが娼妓さんになつて私を、娘ちやんにしてくれしまへんかー」冗談の様に、ほんとうの心が祭に、さう云はせた。

絹子は唯默つて笑顔でそれに答へた。之が無意識の中に出る言葉であろうか？亦相手も無意識に聞き流してはゐるが――三日でもこの娘がこの苦しいつとめをしたら、キット死んで了ふであろう、そうしたら、おぢやじもキット、少しは思ひ知るであろう。と歌子はその人々の話しを聞いてゐた。

自由を奪はれ、搾りぬかれてゐる事を意識してゐなくとも自然ともれるその言葉を、娘は、何んと聞いてゐるであろう？馬鹿に近い娘でも、五分の魂はあるであろう、いつかは、この苦しいうめき聲も耳に入る事であろう。

娘達は外出する時、キット着物を着替へたら一度二階へ上つて娼妓の室へ訪れた。なるべく多勢寄り合つてゐる室を選んで、娼妓達にみせびらかしにやつてきた。それが、單なる賞められたさばかりではなかつた。この娘達の着物、帯、持物が、娼妓達の虚榮心をそゝつて、欲望を起させ、それに依つて働く事を强いて、よく働いたら、どんな物でも、お前達の好きな品や欲しい物を買つてやろうと云つて働かせる主人の一つの手段もあつた。借金さへ少し減れば何んでも買つてやろうと口ぐせに云ふ樣主の娘であるもの。

酒をのみながら、娼妓を叱り、むちあてゝこき使ふ。自分の娘や妻は、數千圓のダイア幾百圓のサンゴの帯止メ流行のプラチナの時計、そして一寸外出するにも女中を連れて自働車で出て行く。二階からは、娼妓の病苦に泣き苦しむ聲、自分の身の賣れない事をかこつつぶやき、一軒の上と下とで、なんと云ふちがひ方、矛盾があるのか？

絹子をまん中にして着物の柄、指輪の値段等で話がはずんでゐたが、中働きのおますと云ふのに迎ひを受けて、絹子は出て行つた。

作榮は見送りながら云つた。

「ある處には馬に喰はす程あるのにナー」

とやけに云つた。歌子はお茶等入れて、菓子を出しながら、口を切つた。

「私も、つい、この頃おもひついたのだけれど、實際、こうして働いてゐても、いくら一生懸命になつても、少しも借金が減らないで殘つたものはかるたさんや、羽衣さんの様に、病氣位しかない、それはどうしてだろうかと云ふ事をハッキリみとめた事があるのよ、たまに體の丈夫な人で、御氣に入りの人達が、血みどろになつて働いてぺろ／＼な錦紗の着物を高く賣りつけられてもだまつてそれを買つて大切にもつてゐる位で、それから、之は商賣道具の一つとしてろくでもない、それこそ廓以外には不必要な、この簞笥や茶簞笥位のものが、借金のかたでせう。それだつて、市價の幾倍の値段で押しつけられてゐるのです。素人になつてこんな大きな女夫簞笥は入らないと思ひますわ、もし幸福にも、金のある人に落籍れて家でも持つとか、二號として納まる様な人でしたら、もつと好い物、自分の氣に入つたのをいくらも安く買へるのですもの、長火鉢？ たとへ實家に長火鉢がなくて、母さんにあげるとしても、少し釣合のとれた家の道具でもあれば兎に角貧乏世帯にはよけい他の道具が目に立つて惡い――と一つとして役に立つものはありません。それを千圓近くも借金の中に入れられ高い利子を取られてゐるのです、そして、假りに、身一杯の金を好きな人に出してもらつて歸るとか身受けされると云ふ時、それ等の室の道具を差引いてもらつて少しでも自分の好きな人に負擔を輕くさすと云ふ時主人は、買つた時の値段の半分より安い高でしか引いてくれないのです、そりや、金のある男に落籍される時なら、いくらでも、かまはないでせうが、それでも、金持と金もち同志の間に金をやりとりさせておくより、少しでも、よけいに、私達の貧乏な、國の母親達に送り度いのです、それだのに、相手が金持であらうと貧乏人で、無理算段をして拵しらへた金で、好きな女を身受けするのでも、なんでもかまはずに取るたけの金はとるのです、そんな風でこちらの利益になる事は指の先程もありません、一年二年と居れば居る程借金は殖えて、いつ出られる的もありません、それは決して人事ではない、あんた方はまだ年が若い、だからキット、私がこんな事云つてゐても心からまじめに、聞いてゐる人はないでせう、それが解る時がきます。あの若浦さんや小町さんの様に、四十に手の屆く頃まで、いやそれよりもズット先迄働ける間はこの檻の中に入れられて働かせられるでせう。あの人達は、年を取つて、どうにも借金を拂ふ丈けの自信がない。身受けする人もなくなつてゐる、だから、もうどうせ、今更、沙婆へ出て、明日食ふ米にも苦勞するよりこゝに居た方が心配はなし、主人の云ふなりになつてゐれば、大事にもしてくれるからと思つて、あんなに、主人に忠義顏して、少し主人に盾をつく者があれば、主人に代つてあの人が、いろんな事を云つてくるのです、歌の文句ではないけれど、ほんとうに「鑑札枕でのたれ死」しなければなりますまい。

今のあの絹子さんの贅澤な身なり、頭の先から足の先迄高價なものづくめ、あの品だつて決してこのお父さんが汗水流してこしらへた金で買つてやつたのではありません、みんな娼妓さん達の涙と血の塊りです、その大廣間の飾り物一つにも私達の汗と油がまざつてゐます。お父さんの居間とか云ふあの贅澤な室、飾物の一つ一つ皆、高い品物ばかりです、私なんか貧乏な家に生れて、あんな物は今迄見た事がないものばかりですわ、時々雜誌の口繪などで、そんなものもあるのか知ら位にしか思つてゐなかつたものです、それが娼妓すればこそ、近い所で人の居ない間に一寸手もふれてみられますが、あんなものにしましても私達の血や肉の變化なんです、私達が親や兄弟の悲しい訃報に接しても行けないで泣いてゐる時、あの娘ちやんやおかあちやん連は、芝居見物に行つたり、賣出しだと云つて、松坂屋へ買物に行つたりしてゐるのではありませんか。こんなつまらない、情けない事がありませうか、そして、おしまひに、惡い病氣で死んで了ふか、目がつぶれてしかたなく歸すといふのですもの散々儲けておいて、そのあげ

く死體になつてからか片輪で使ひ道がなくなつて歸される時でも、親の方に少しでも、何かゞ取れる見込があれば、月々くづしで借金を入れさせたり、差押へをやつたりすると云ふのではありませんか、皆な考へませう、少しは强くなつて下さい。いつ迄もそんな弱々しい事ではいけません。だから、惡い處や氣に入らぬ處は、どし〱とそれは一人ではだめです、皆が力を合せなければならないんですがお父さんの處へ云つて行くのですそして、惡い處はなほしてもらふ樣にするのです、今だつてたくさん惡い處はある。

一、借金が少しも減らないから、利子は取らない事

二、病氣の時は絶對に客を取らさない事

「尤も、皆、なじみ客は大切だと云つて、自分からなじみの客は取る樣にしてゐますが、決してそれはいゝ事ではありません、主人はそれでつけ上がるのです。ですから病氣の時は絶對に客をとらぬ樣にする事」

三、病氣の時はすぐ醫者を間に合してくれる事

四、月々の賣上は月々ハッキリと書きあげてどれ丈け入用でどれだけ借金へ繰り入れと明記してくれる事。

五、賣れる人も賣れない人も時の運だから、差別をしない事。

六、住替したい人は自由に本人の意志に任せる事。

七、本や新聞は自由に讀ませる事

八、月に二三度位、外出を許す事

九、重い病氣の時は根本的の治療をさせてくれる事。

十、親の死報に接した時は心よく親元へかへす事。

等、まだ〱多くさんありますがそれだけでも一時も早く皆で頼めばキットその中の五や六つは聞入れます、」

皆默つて聞いた、尤もだと思つてゐる者もあつたし、恐ろしい事の樣に思つて聞いた者もあつた。

歌子は何となく胸がすいた樣に感じた、かつて今迄にない雄辯を揮つた樣な感じがした、誰も何んとも云はない事が濟まない樣な氣がして羽衣は

『ほんまにそうだんナ姐ちやん、そうすれば私達はどれ丈け助かるか解りません、私の樣な身體の弱いものは、どんなに樂になるでせう、少し位惡い人間と思はれたつて叱られたつてかましまへん、恐いけど、辛棒して私一番先にお父さんの前へ出ますわ」

と答へた。

「あたしも出まつさ」

若春も答へた。紫は勿論、第一の賛成者ではあつたが、その時は何も云はなかつた、川柳や新高が第一に脱走した時、かげになり力になり助けてやつたのは、その紫であつたから。

「だけどそんな事は、餘り人に云はない方がいゝわ、ほんとうにやらうと言ふ時にでないとネー、中途でもしおやじの耳に入ると、うるさいから」

それから、話をかへて、再び面白く何事も忘れて笑ふ樣な話にうつそうとしたが始めの樣な興は誰の心にも浮かなかつた。夕方になつて、皆晩のお化粧でそれ〲自分の室へ歸つた。

中働きのおますと云ふ女が、その夜おそく小波の室へ泣いてやつてきた。丁度川柳も歌子も新高も居合せたので。

「どうしたの、何か奥で叱られたの？」

と聞いた、彼女は、泣きじやくつてゐて、言葉が出なかつた。

「どうしたの、泣いてゐたんぢや解らないぢやないかネ。何か云はれたの」

重ねて小波が聞いた。彼女は、いかにも口惜しさうに、どうしても止まらない泣きぢやくりをしながら、きれ〲に。

「私が一寸、奥さんの湯呑茶わんに口をつけてゐるのを奥さんがみてゐて、それから呼びつけて、大分叱られたんや、そして、明日からヒマを出すから出て行けつて、いはるのや、そればつかりならかまやしまへんけど、……この頃、お前は色氣づいてゐる、そして、白粉ばかり、こて〱つけて、人に聞いたのやが、娼妓になるとか云つてるそうやが、お前みたいな女は、どこへも抱へる處はあらへん、化物屋敷でも行くのやらう」、と云はるのや、私、そんな事云つた覺えはおまへんのや、それに

こゝに居て、皆様のどんな苦しい生活をしてゐやはるかと云ふこと、事もよう知つてゐますのやで、なんで私がそんな娼妓さんになんかならうと思つてゐますかい…」

泣きやんでゐた彼女は、云つて終ふと亦、泣き出した。

「そうそんな事云やはつたの、そして、茶椀をつかつただけで出て行けつて。まあ、なんてひどい人やろうナー」「おやじがおやじなら嬶もやナー。」

自分の事の様に憤慨して川柳は云つた。

「それであんた出て行くの、」

「しかたがおまへん、使はないと云やはつたら、奉公人やで、だまつて出て行かんなりまへんわ、今夜はおそいし、するよつて明日の朝早く行くつもりだす。あんた方には、いろ／＼とやさしくしてもらつてゐましたんやで、一寸別れの言葉だけ云つて行き度いと思つて、朝はどうせ、私が早いのやから、逢つてゐられまへんよつてに」

アヽこの人もこの家を出るのか金がかゝつてゐない、金儲けの爲めの奉公人でないとふふ處から、ずゐ分ヒドク手足の動くかぎりこき使はれて、一寸した事を落度にして追出されて行くのか――だけれども、もつと好い家はたくさんある。だからかへつて、こゝを出る事は、この人の幸福になるかも知れん。――歌子はそう思つた。

「そうねだけど歸つたら手紙下だいよ私もキット出すよつてにどうせ、一度は家へ歸るのやらう、」

小波はそう尋ねた。

「エヽ、たとへ亦どこかへ奉公に行くとも、一たんは家へかへりますで、そしたらすぐ手紙出しますから、皆様も手紙下さいナ、體を大切に働いて頂だいナ」

彼女が出て行つた後で、三人は忘れてゐた化物屋敷に　がうつた

世の中の、哀れなみぢ目な事を全部よせ集めた處が、この化物屋敷で涌る清洲樓の事であつた。癡れ者の片輪者や白痴ばかりを品物で云へば捨値で買つてきて娼妓をさせてある所が化物屋敷だつた。

清洲樓として、中店格の立派な表がまへに寫眞を見てゐると、決して他の店に劣りはなかつたが、一歩張店へ足をふみ入れて、始んでゐる娼妓を見ては、どんな物好きも引かへさずには居られない程で、集めも集めた二十人近くの娼妓は、二十から二十五六迄の年頃の女ばかりだが、片目の人やピッコの人、小さい時に、やけどで、片面にひつつりが出來た人と、滿足な女は一人もないのに驚ろかされるのであつた。たまに、普通の顔形で整つてゐると思へば、白痴であつたりした。街の藝者は、面白がつて客と一しよに、見せ物でも見る氣で、やつてきた。

自分達が動物園をでも見物する様な氣で、然も同性の女から進めて客が來た事を、彼女等は有難い事に思つた。一時間をいくらかの玉代で買はれて、あらゆる輕蔑の目で、見られてゐる時、親切な情け深い人として、敬ひ感謝した。客として揚る位の人も、全然、そんな處とは知らない人か、知つてゐればほんとうに、目をつぶつて性の滿足を欲する人のみであつたから、なじみになる様な人はなれつた。樓主の方でも、決して大切にはしなかつた。厄介者を取り扱ふ様な態度で、妻は女中代りに掃除から、勝手元の用事までさせたそして、本人達も、計算なんかも全く出きない人が多く、甚だしいのは錢の勘定さへ知らない者もあつた。けれども國の兩親の許へ歸つて、百姓をするより、そこに居て、晩だけでも、メリンスや銘仙の着物を着て白粉をつけられる方が、彼女等には數倍樂しい事であつた。だから一晩にどれだけ稼いでゐるかどれだけ借金が減つたかそんな事は知らなく其彼女等は平氣であつた、只此儘この家に居さへすればそれでいゝのであつた。

誰云ふとなくこの家の事を化物屋敷と呼んでゐた。亦それで、通つてきた。

あゝ、あの人達もやつぱり人の子として、地上に生れてきたのに見せ物や動物園の動物と同、にされてゐる。だが決して人事ではない、私達だつてそうだ――歌子はどうかして、あの人達をも少し何んとか教育して上げてくれる人はないであろうか！とも思つてゐた

決行

九月の四日夜歌子も、小波も川

柳も新高も、もう何も手がつかなかつた。人にサトられまい、餘り四人が一つ所に集つてゐては、怪しまれるから、なるべく寄り合ふまい、と云ひながら、いつとはなく、誰から來るとはなく、あつちの室へ集まつたり、こつちへ來て寄り合つたりしては、云ひ忘れた事や氣がついた事を注意し合つてゐた。二三日前から、一つも顏をみせないで室にばかりとぢこもつて、歌子が訪れても、何んとなく冷たくしてゐたかるたは、明日にも、皆一しよに、出ると云つて、騒(サワ)いでゐるのに、何かしら、打とけない態度をとつてゐた。そしていつになく見知らない紹介人が出入してゐたが、その夜、川柳にも小波にも、新高にも、歌子にさへ一言の挨拶もせず、亦一口も打あけないで、その見知らない紹介人に連れられて、桑棲を去つてしまつた。翌日、わざ〳〵歌子の室へは山田がやつてきて、

「かるたさんもやうやく片づきましたから、安心して下さい、あんたにもずい分、迷惑かけましたナ」

皮肉な笑をうかべながら、勝ちほこつた様に、そらうそぶいた。

「まあそうですか。いつどこへ」

彼女として、どんなに口惜しい時でも、悲しい時でも、對手に向つては、決して、そんな態度は見せ度くなかつた、けれども、餘りのとつ然さに、何んにも忘れてゐた、まして、技巧などで、そのあはてた心をかくすひまは、餘裕を作らせなかつた。山田は得々として語りだした。

「そりやあいくらかるたさんが、意地張つても、こゝのおやぢさんには、かてまへんッ」

なんだか、歌子は、自分達の計畫も凶の様な氣になつた。「さいさき悪し」のみくぢでも引あてた様に思つた。

「奈良の木辻へ千二百圓で……、尤も、いくらあの人をも少し高くで賣ろうつて云つても、年が年やし、あんなに悪い名が賣れてゐては抱へてくれる人もおまへんよつてに、尤も、外の人に對しては、一時親元へ體のよくなる迄養生に行つてゐると云はしてあるかも知れないが、今頃は、キツト、奈良で、お目見得位のところでせう」

いけない、離れた人に今はどうする事も出きやしない、四人で決行し様！、

歌子はそう思つて、小波にも、外の二人にも「かるたさん、は國へ歸つたそうですよ、兄さんが迎えにきて」とつたへておいた。自分の事で心配して人の事より重大な心配さに、深くも聞きかへす者もなかつた。歸つて、責任が輕くなつた様にさへ感じてゐる者ばかりであつた。

彼女等の約束の日、九月七日、と云ふのを一日早めて、六日の夕方急に今夜にしようと云つて、その夜にやる事になつた。歌子が主人に呼びつけられて叱られてゐたのは、六日の夜、引けてからで三時頃迄、いつもの様に、賣れない事や、かるたが出たから、今度こそ身を入れて働く様にと、クドクドしく、酒のさかなにしてゐたのに、四人の者が、厳重な戸締りと二人の當直の見張の中を、どうのがれたか――。

八日の朝は新橋驛頭に、小波と歌子の姿が、不案内の土地に、淋しそうな、不安そうな顏して現はれた。そして、川柳と新高はその頃、京都の靜かな、ひなびた一軒の家に、落ついた空氣と共に、やれ〳〵と腰をおろしてゐた。

とう〳〵私達は目的を達した。弱いものではあるけれど決行した。其手管をこそ書くべきだが。

――(完)



三白草の花

——放浪記——

林芙美子

九月×日

今日も亦あの雲だ。

むくむくと湧き上る雲の流れを私は晝の蚊張の中から眺めてゐた

今日こそ十二社に歩いて行から——そうしてお父さんやお母さんの様子を見てこなくちやあ…私はお隣りの信玄袋に凭れてゐる大學生に聲を掛けた。

「新宿まで行くんですが、大丈夫でせうかね。」

「まだ電車も自動車もありませんよ。」

「勿論歩いて行くんですよ。」

此青年は沈默つて無氣味な雲を見てゐた。

「貴方はいつまで野宿をなさるおつもりですか？」

「さあ、此廣場の人達がいいいタイキヤクするまで、僕は原始にかへつたやうで、とても面白いんです。」

チエッ生噛ぢりの哲學者メ。

「御兩親のところで、當分落ちつくんですか…。」

「私の兩親なんて、私と同様に貧乏で間借りですから、長くは居ませんよ、十二社の方は燒けてやしないでせうね。」

「さあ、郊外は××が大變だそうですね。」

「でも行つて來ませう。」

「そうですか、水道橋までおくつてあげませう。」

青年は土に突きさした洋傘を取つて、クルクルまわしながら、雲の間から、霧のやうに降りて來る灰をはらつた。

私は四疊半の蚊張をたゝむと、崩れかけた下宿へ走つた。宿の人達は、ゴソゴソ荷物を片づけてゐた。

「林さん大丈夫ですか、一人で…。」

皆が心配してくれるのを振りきつて、私は木綿の風呂敷を一枚持つて、モウモウとしたいい道へ出た。

根津の電車通りは、みゝづのやうにかぼそく野宿の群がつらなつてゐた。

青年は眞黒に群れた人波をわけて、くるくる黒い洋傘をまわして歩いてゐる。
私は下宿に、昨夜間代を拂はなかつた事を何か奇のやうに思へた。お天陽樣相手に行動をしてゐる、お父さん達の事を思ふと、此三拾圓ばかりの月給も、おろそかにつかへない。
途中壹升壹圓の米を二升買ふ。
外に朝日五ッ。
干しうどんのくづ五拾錢買ふ。
お母さん達が、どんなに喜こんでくれるだらう。ぢりぢりした暑さの中に、日傘のない私は、長い青年の影をふんで歩いた。
「よくもこんなに燒けたもんだ！」
私は二升の米を肩を替へながら脊負つて歩くので、はつか鼠くさい體臭がムンムンして厭だつた。
「すいとんでも食べませうか。」
「私おそくなるから止しますわ。」
青年は長い事立ち止つて汗をふいてゐたが、洋傘をくるくるまわすと、それを私に突き出して云つた。
「これで五十錢借して下さい。」
私は伽的な青年の行動に好ましい微笑を送つた。そして氣もちよく桃色の五拾錢札を二枚出して青年の手にのせてやつた。
「貴方お腹がすいてたんですね……。」
「ハッ……。」青年はほがらかに哄笑した。
「地震つて素的だな！」

十二社までおくつてあげると云ふ、青年を無理に斷はつて、私はテクテク電車道を歩いた。
あんなに美しかつた女性達が、たつた二三日のうちに、みんな灰つぽくなつて、桃色の蹴出しは、今は用のない花である。
十二社についた時は、日暮れだつた、四里はあるだらう、私は棒のやうにつゝぱつた足を、父達の間借りの家へ運んだ。
「まあ入れ違ひですよ、今日引越してゐらつしたんですよ。」
「まあ、こんな騷ぎにですか……。」
「いゝえ、私達が、こゝをたゝんで歸國しますから。」
私は呆然としてしまつた。番地も何も聞いておかなかつたと云ふ關西者らしい薄情さを持つた髮のうすい此女を憎らしく思つた。
私は堤の上の水道のそばに、米を投げるやうにおろすと、深々と煙草を吸つた。少女らしい涙がにじんで來る。
遠くつゞいた堤のうまごやしの花は、兵隊のやうに、皆地びたにしやがんでゐる。
星がチカチカ光りだした。野宿をするべく心をきめた私は、なるべく人の多いところへ。堤を降りると、とつゝきの歪んだ床屋の前に、ポプラで圍まれた廣場があつた。
そして、二三の小家族が群れてゐた。
「本郷から、大變でしたね……。」
人のいゝ床屋のお上さんは店から、アンペラを持つて來て、私の爲に寢床をつくつてくれた。
高いポプラがゆつさゆつさ風にそよぎ出した。

「これで雨にでも降られたら、散々ですよ。」
夜警に出かける、年とつた御亭主が、鉢巻きをしながら、空を見て、つぶやいた。

九月×日

朝。

久し振りに、古ぼけた床屋さんの鏡を見る。まるで山出しの女中さんだ、私は苦笑しながら、髪をかきあげた油つ氣のない髪が、バラバラ額にかゝつて來る。

床屋さんに、お米二升お禮に置く。

「そんな事してはいけませんよ。」

お上さんは一丁ばかりもおつかけて、お米をゆさゆさ抱へて來た。

「實は重いんですから……。」

そう云つてもお上さんは、二升のお米を困る時があるからと云つて、私の脊に無理に脊負はせてしまつた。

昨日來た道である。

相變らず、足は棒のやうになつてゐる、若松町まで來ると、膝が痛くなつてしまつた。

すべては天眞ランマンにぶつゝかろう、私は、鑵詰の箱をいつぱい積んでゐる自動車を見ると、矢もたてもたまらなくなつて叫んだ

「乘つけてくれませんかッ！」

「どこまで行くんですッ！」すべては、かくほがらかである。

私はもう兩手を鑵詰の箱にかけてゐた。

順天堂前で降ろされると、私は投げるやうに、四ッの朝日を運轉手達に出した。

「ありがたう。」

「姉さんさよなら……」

私が根津の權現樣の廣場へ歸へつた時、大學生は、例の通り、あの大きな傘の下で、氣味の照るい雲を見てゐた。そして、その傘の片隅には、シヤツを着たお父さんがしよんぼり煙草をふかしてゐた。

「入れ違ひぢやつたそうなのう……。」もう二人共涙である。

「いつ來た！御飯たべた！お母さんは……」

矢つぎ早やの私の言葉に、父は、昨夜×××と間違へられながらやつと來たら入れ違ひだつた事や、歸へれないので、學生さんと話しあかした事なぞ物語つた。

私はお父さんに、二升の米と、半分になつた朝日と、うどんの袋をもたせると、汗ばんでしつとりしてゐる拾圓札を壹枚出して父にわたした。

「もらつてえゝかの？……。」

お父さんは子供のやうにわくわくしてゐる、

「お前も一しよに歸へらんかい。」

「番地さへ聞いておけば大丈夫よ、二三日内に又行くから……。」

道を、叫んで行く人の聲を聞いてゐると、私もお父さんも切なかつた。

「産婆さんはお出になりませんかッ‥‥どなたか産婆さん御存知ではありませんかッ！」

九月×日

街角の電信柱に、始めて新聞が張り出された。

久し振りに、なつかしいたよりを聞くやうに、私も多勢の頭の後から、新聞をのぞいた。

――灘の酒造家よりの、お取引先きに限り、大阪まで無料にてお乘せゐたします。定員五拾名。

何と素晴らしい文字よ。

あゝ私の胸は嬉しさではち切れそうだつた。

私の胸は空想でふくらんだ、酒屋でなくつたつてかまふものか。

旅へ出やう。

美しい旅の古里へ出やう。

海を見て來やう――。

私は二枚ばかり單衣を風呂敷に包むと、帶の上に脊負つて、それこそ漂然と、誰にも沈默つて下宿を出た。

萬世橋から乘合馬車に乘つて、まるでこわれた羽子板のやうに、ガックン、ガックン首を振つて長い事芝浦までゆられた。

道中費、金七拾錢也。

高いやうな、安いやうな、何だか降りた時は、お尻がピリピリ痺れてしまつてゐた。

すいとんーうであづきーおこわー果實ーこうした、ごみごみと埃をあびた露店をくゞつて行くと、肥料くさい匂ひがぷんぷんして、築港には、鷗のやうに白い水兵達が群れてゐた。

「灘の酒船の出るところはどこでせうか、」

飛魚のやうに、ボートのいつぱい並んでゐる小屋のそばの天幕の中に、その事務所があつた。

「貴女お一人ですか‥‥。」

事務員の人達は、みすぼらしい私の姿をジロジロ注視した。

「え、そうです、知人が酒屋をしてまして、新聞を見せてくれたのです。是非乘せて戴きたいのですが‥‥國で皆心配してますから。」

「大阪からどちらです。」

「尾道です。」

「こんな時は、もう仕様おまへん、お乘せしますよつてに、これ落さんやうに持つて行きなはれ‥‥。」

ツルツルした富久娘のレッテルの裏に、私の東京の住所と姓名と年と、行き先きを書いたのを渡してくれた。

これは面白くなつて來た。

何年振りに尾道へ行く事だらう。あゝあの海、あの家、あの人‥‥お父さんや、お母さんは、借金が山程あるんだから、どんな事があつても、尾道へは行かぬやうに、と云つたけど、少女時代を過ごしたあの海添ひの町を、一人ぼつちの私は戀のやうにあこがれた。

「かまふもんか、お父さんだつて、お母さんだつて知らなけりや、いゝんだもの？」

鷗のやうな水夫達の間をくゞつて。酒の香のなつかしい酒荷船へ乘り込んだ。

七拾人ばかりの中に、女は私と、いゝ取引先のお孃さんであらう水色の服を着た女と、美しい柄の浴衣を着た女と三人きりである。その二人のお孃さん達は、靑い莫座の上に始終橫になつて、雜誌を讀んだり、果物を食べたりしてゐた。

私と同じ年頃なのに、私はいつも古い酒樽の上に腰かけてゐるきりで、彼の女達は、私を見ても一言も聲を掛けてはくれない。

「へエ！お高く止つてゐるよ。」

あんまり淋しいんで、聲に出してつぶやいてみた。

女が少ないので、船員達が皆私の顏を見る。

あゝこんな時にこそ、サンゼンと美しく生れて來ればよかつた。

つかい古した胡弓のやうな私。私は切なくなつて、船底へ降りると、鏡をなくした私は、ニツケルのしやぼん箱を膝でこすつて、顏をうつしてみた。

せめて着物でも着替へやう、井筒の模樣の浴衣にきかへると、落ちついた私の胸に、ドツボンドツボン波の音が響く。

九月×日

もう五時頃であらうか、樣々な人達の物凄い寢息と、蚊にせめられて、夜中私は眠れなかつた。

私はそつと上甲板に出ると、ホツと息をついた。

美しい朝あけである。

乳色の凉しいしぶきの中を蹴つて、此古びた酒荷船は、颯々と風を切つて走つてゐる。

月もまだ寢わすれてゐる。

「暑くてやり切れねえ！」

機關室から上つて來た、たくましい菜つ葉服を肩にかけた船員が朱色の肌を擴げて、海の凉風を呼んでゐる。

美しい風景である。

マドロスのお上さんも惡るくはないな。無意識に美しいポーズをつくつてゐる、その船員の姿をぢつと見てゐた。

その一ツ一ツのポーズのうちから、苦るしかつた昔の激情を呼びおこした。

美しい朝あけである。

淸水港が夢のやうに近かづいて來る。

船乘りのお上さんも惡るくはないな。

午前八時半、味噌汁と御飯と香の物で朝食が終る、お茶を呑んでゐると、船員達が甲板を叫びながら走つて行く。

「ビスケツトが燒けましたから、いらつして下さい！」

上甲板に出ると、燒きたての、ビスケツトを兩の袂にいつぱいもらつた。お孃さん達は貧民にでもやるやうに眺めて笑つてゐる。

あの人達は、私が女である事を知らないでゐるらしい。二日目である、一言も聲をかけてはくれぬ。

此船は、どこの港へも寄らないで、一直線に海を急いでゐるのだから嬉しい。

料理人の人が「おはやう！」と聲をかけてくれたので、私は昨夜寢られなかつた事を話した。

「實は、そこは酒を積むところですから蚊が多いんですよ、今日は船員室でお寢なさい。」

此料理人は、もう四十位だらうか、私と同じ位の脊の高さなのでとてもおかしい。

私を部屋に案內してくれた。

カーテンを引くと押入れのやうな寢臺である。

その料理人は、カーネエションミルクをポンポン開いて私に色んなお菓子をこしらへてくれた。小さいボーイが、まとめて私の荷物を運んで來ると、私はその寢臺に長々と寢そべつた。

一寸頭を上げると圓い窓の向ふに大きな波のしぶきが飛んでゐる今朝の美しい機關士も、ビスケットをポリポリかみながら一寸覗いて通る。私は恥かしいので、寢たふりをして顏をふせてゐた。

ジユンジユン肉を燒く油の匂ひがする。

「私はね、外國航路の厨夫なんですが、一度東京の震災も見度いと思ひましてね、一と船休んで、こつちに連れて來て貰つたんですよ。」

大變丁寧な物云ひをする人である。

私は高い寢臺の上から、足をぶらさげて、御馳走を食べた。

「後でないしよでアイスクリームを製つてあげますよ。」

眞實、この人は好人物らしい。神戸に家があつて、九人の子持ちだとこぼしてゐた。

船に灯がはいると、今晩は皆船底に集つてお酒盛りだと云ふ。

料理人の人達はてんてこ舞ひで急がしい。

私は灯を消して、窓から河のやうに流れ込む潮風を吸つてゐた。

フッと私は、私の足先きに、生あたゝかい人肌を感じた。

人の手だ！

私は枕元のスイッチを捻つた。

鐵色の大きな手が、カーテンに引つこんで行くところである。

妙に體がガチガチふるへる。どうなるものか、私は大きなセキをした。

カーテンの外に呶鳴つてゐる料理人の聲がする。

「生意氣な！汚ない眞似しよると承知せんぞ！」

サッとカーテンが開くと、料理庖丁のキラキラしたのをさげて、料理人が、一人の若い男の脊を突いてはいつて來た。

そのむくんだ顏に覺へはないが、鐵色のその手にはたしかに覺えがあつた。

何かすさまじい爭鬪が今にもありそうで、その料理庖丁の動く度びに、私はキャッとした思ひで、親指のやうにポキポキした料理人の肩をおさへた。

「くせになりますよッ！」

機關室で、なつかしいエンジンの音がする

手をはなすと、私は沈默つてエンジンの音を聞いた。



長流記（その十四）

山田邦子

小説家E氏―即ち江木恭が代々木の小さい家に越して來たのはストリンドベルヒの小説の飜譯を引受けて定收入があるやうになつてからだつた。

間借生活は何となく窮屈で不便があつて自分の仕事―小説を書く事―を亂されがちに思はれてゐたが定まつた收入がなくてそれが出來ないでゐたのが此度の仕事が定まつて急に家をさがす事をお慶さんに賴んで來たのであつた。お慶さんは代々木の自分の家の近くに手ごろな小さい借家のあいてゐたのを直ぐに借り受けてそれを江木氏に報じてやつた。江木氏は、愛人であり許婚の間がらの看護婦の梅子も此度は日曜毎に心おきなく來る事が出來ると思つて大喜びでやつて來た。お慶さんも佐千子も其日には行つて水を汲んだり雑巾を持つたり、友達の越してくる時のやうに手傳ひをした。……さゝやかな道具が運ばれて江木氏はそこの小さい庭に面した障子のそばに机をすえて其日から飜譯にかゝつた。許婚の看護婦は日曜を待ちかねて小さい花束を持つて嬉しさうにその家にやつて來て小さい鍋で鳥を煮たりバケツに水を汲んで雑布がけをしたり、お慶さんや佐千子に紹介されたり、まめに忙しい一日をすごして歸つていつた。

江木氏が代々木に越して來た事が殆んど一つの動機となつて佐千子とお慶さん川端氏の三人の心の關係が動いて來た……一人由井氏は前と同樣、獨自の歩みやうを無意識――無關係につゞけてゐた。

前にも述べたやうに、川端氏とお慶さん、佐千子の三人は藝術家としてたつ野心があり、藝術を愛する者の心をもつてゐた。物を觀るにも味はふにも遊ぶにも働くにも此感が必ずついてまはつてゐた…然しそこに由井氏が一人まじるとそこの氣分を圓滿にしやうとすれ

ばどうしても共通の事で飽きないおもしろさの續く事を選ばなければならなかつた、その事が四人の交渉を勝負事（と言つてもお金をかけた譯ではないが）に引ばつていつてそこに息づまるやうな遊惰な日が重なつていつたのだけれど、しかもそれを四人はめいめい各自の悲しみやうで實は悲しんでゐたのであつた。さういふぐうたらな生活を切り上げてもつと新鮮な本當な生々とした日常生活を開き度い願ひは時に佐千子の心に强く湧き上つて來るものであつた……由井氏は由井氏ではじめから自分の爲にさうした無理な現象がおこつて來る事などは全く氣がつかないで、たゞ毎晩つゞく夜ふかしからのがれてのうのうと寢てみたい氣持から此お花を打ち切ろう事を思ふのも事實であつた。然し此生活もよくよくたんさくしてゆくと佐千子の心に觸れて來るものゝなかに、それは由井氏との調和の爲にさうした勝負事にはゐつてゆくやうな氣分が最初おこされたとは言へ、又一つにはその頃のお慶さんが創作的心理に一寸行き詰りが來てゐて、其可成り堅實な作風も思ふやうには認められてゆかないし、さりとてお慶さんの氣性としておいそれと時の流行に投じて淺はかに時代色をつけた、即ち人道主義の小說は書けないし、靑鞜社の連中にまじつて五色の酒を飮んでみやうといふ若々しい新女性の心持にも氣恥しくてなれないし、……といふやうな、ごちやごちやした雲のやうなものに心が包まれて一寸拗ねた心の傾きがあつて本も讀まず、會合にも名を出さず其自分の拗ねた氣持に押されるやうにお花などに其日々々を消して行く……といふものがないではない、ものが佐千子には感じられてゐた、しかも其お慶さんは、それを同じやうに佐千子に强いて來たのではないけれど、どういふのか佐千子はそのお慶さんの氣持が賴まれもせぬのに自分を押して、自分も出たいと思ふ新らしい人々の會合にも出ないし、本も讀まないし、といふ日が自然に重なつていつた。靑踏で新しい會員を募集する時、佐千子にあてゝ誘ふて來た時も佐千子は入會したかつたけれど、前から寄稿家であるお慶さんが、あの人たちと一緖に行動するつもりはないと言ひはつてゐるのに押されて、私は會員になります、とつい言ひ切れないでそれをやめてしまつた。さういふ弱さが佐千子にあり、さういふ强さがお慶さんにあつた、言葉で言ひ合つたのではないけれど……。お慶さんの方から見ると佐千子は「きようらく的」な仕末におへない處の性分を持つてゐる人と思つてゐた事であつたが……兎に角、さうした事から傾き切つた遊惰な生活に一つの轉期が來たのであつた。

江木氏が代々木に移つて來てから新らしい藝術をとき其勉强ぶりを見せたので、丁度いぶつてゐた木にマッチをすりつけられたやうに佐千子の心が解放されて動きだした……お慶さんは丁度郷里の母親が世を去られて、あはたゞしく歸國した後で佐千子は心安く近い江木氏の家をたづねて泰西の名畫を見、その說明をきゝ、トルストイやドストエフスキーの著書に親しみ、埃に埋れてゐた聖書をいま

一度取りだして讀み更けるやうになつた。

さういふなかに相變らず訪ねて來る水木氏は何となく急げきに方向を轉じてしまつた代々木の空氣を追ふやうに佐千子をつかむやうに迫つて來た。

「オヤ……どこかへ出るの」

風の吹く晩に尋ねて來た水木氏は今日こそ佐千子にいろいろ話さうと思つて來たのに外出の着物を着てゐる佐千子を見てがつかりした。

「エ、江木さんや川端さんと一緒にYの講演をきゝに行くの……」

「Y……あんな男…　つまらない、およしなさい、風が吹いてゐますよ」

「かまはないわ……Yさんの講演は立派ではありませんか、……私もあんまり遊びすぎたからこれから本氣で勉強しますよ」

さう言つて佐千子はコートを取りに次ぎの間に立たうとした……と水木氏は迫つて來る感情に押されるやうに前の火鉢に身を伏せるやうにして。

「寂しい！」

と低い苦しさうな聲で言つて顔を上げなかつた、……佐千子は水のやうな瞳をしてそれを上から立つて見てゐた。……水木氏はそれで代々木へ來る事をやめてしまつた。

佐千子にしてみれば水木氏にはずゐぶん親しい氣持を持つてゐたし、水木氏の性質が多分に世人に誤解されるやうに出來てゐる、さういふ誤解も同情が出來て嫌つた感情なんか出したくはなかつたけれど、水木夫人が佐千子の事で非常に苦しんで、いつか佐千子が鼻たけを切る爲に病院で小手術を受けた時、水木氏が付添つてゐてくれた、それが丁度水木夫人が風を引いて熱を出した日であつた、その事を日を經て偶然電車のなかでおち合つた由井氏が水木夫人に「先日は水木君に付添つて頂いて……」とお禮を言つたのではじめて知つた夫人は非常に怒つて家庭でコカインを飲まうとした騷動があつたといふ事が佐千子の耳にはゐつて、佐千子はもう水木氏に家へ來てもらふ事を斷はらうと思つてその機會をさがしてゐた心持もあつた……それで水木氏との交際は絶えてしまつた。

江木氏は白樺派の人々のとなへた人道主義を例によつて誇張的に力説して自然主義小説を盛に罵倒した、M、H氏やT、K氏などは不倫の點に於て地獄へ落ちるべきものだ、と、ブレークの「地獄へ落つる人」といふ繪に出て來る人々にその名をつけて罵つたりした佐千子は曾ては江木氏がT、K氏の玄關に寄食してゐて、その美しい姪の人に艶書を送つた事がばれてそこを追はれた話をお慶さんから聞いてゐたので、江木氏のT・K氏に對する罵倒にはその鬱憤があると思つて心で一寸笑つたが、現在男の手で水を汲んだり煮たきをしたりして一心に藝術に精進してゐる江木氏の生活に心がかへると笑ひは忽ち引こんでしまふ……といふやうであつた。

江木氏に言はせれば川端さんが病氣に甘えてろくな勉強もせずお慶さんに働かせて平氣でゐるのは、實に夫として愛の足りないやり方だと言つた、由井氏が佐千子の我儘を許してゐる事も愛が足りないのだと言つた、自分が看護婦の女を愛人に持つのは不幸な一人の女性を救ふのだとも言つた、川端さんは此江木氏の攻撃に一も二もなく降參して、非常に自分を不眞面目な男と考へ、自分の過去の戀愛なども一應お慶さんに秘さずに打ちあけてすつかり許してもらつた上美しい愛の夫婦生活を初めやうといふ氣になつて、病身の身にどてらを着て毎日机に向ひ、鄕里に歸つてゐるお慶さんの歸京する日までに細々と自分の一切を懺悔する手紙を書いて途中まで持つて行き、汽車のなかでそれを讀んでもらつて、そして許してもらつて新しい愛の生活をしやうと希望を持つてそれをはじめた。

佐千子は佐千子で自分たちの夫婦生活がぴつたりとゆかない事をなげき、由井氏が眞實の生活とか愛の生活とか言つても一向あこがれを持たないで

「江木やなんかおれは大嫌さ、あんなひよろ〳〵した文士の言ふ事がなんだ…第一あの切るやうなおじぎの仕方はいやだ」

さう言つて夫婦生活をあらためるでもなく相變らず馱じやれと遊びと粗暴な言動で日を送つてゐるのを佐千子は一面で嘆き一面で、さう言へばひよろ〳〵した處のない由井氏のどこかにより頼み安さがあつた。由井氏が切るやうなおじぎと言つて笑つてゐる事は江木氏が由井氏のやうな實生活の强力者の前に出ると自然に、一方から首をなゝめにさげて顏をあげる時相手の顏色を一寸見て又なゝめに顏をあげるおじぎの仕方で之は江木氏も期せずしてさうなるらしいがそれはたしかに神經のヒヨロ〳〵してゐる事を證明するやうな、弱い者のする陰險さのある、諂らひ味のあるおじぎであつた。…特にへつらふ氣がなくても自然に强いものゝ前に出た弱いものゝそれであつた。

お慶さんの歸京する日が來た。…川端さんは途中浦和までむかへに出て汽車のなかで例の手紙をお慶さんに渡す爲に、晝頃から家を出かけてゐた。江木氏と佐千子は日暮里の驛まで行つてそこのベンチで汽車のつくのを待つてゐたが、佐千子はその間も惜しいやうに持つていつた本をひらいた。

「熱心ですね、僕は此頃の貴女の勉强ぶりを見ると自分がおくれてしまふやうな氣がするな。」

さう言つて江木氏は口をきつとむすんだ、佐千子は一寸てれてしまつた。そこへ汽車がずつと這入つて來てお慶さんが窓から半身を出すと自分で汽車の扉をあけて…その頃の汽車はボギー車でなくて、ところ〴〵に扉があつて出入が出來た…まづプラットホームへ降りた、續いて降りた川端氏の顏は緊張して少し暗くなつてゐた川端さんは汽車のなかでお慶さんに其手紙を渡すと。

「兎に角よんでみてくれ」

と口を添へた……代々木の此頃の空氣を知らないお慶さんは驚いたやうに顔をあげて

「家へ歸つてからでもいゝでせう」

と、いつもの氣持で言つたけれど川端氏がいつもにない緊張した顔をしてゐるので、仕事かと胸を轟かしてその手紙をひらいて讀みはじめた、愛する慶子よ、といふ書きだしにまづ面くらつてしまつた……それまで、夫は主人らしく氣むづかしくなるばかりで優しい甘たるい言葉なんかだん／＼聞かれなくなつてゐたのが、急に今まで もない事の書き出しである……それから先きも驚く事ばかりであつた、前の戀人……さういふ人の事を今更わざ／＼何故書いて自分に懺悔する氣になつたのか、お慶さんの心はぐる／＼手紙の文句に引まはされて動いてゐるうちに汽車が止まつて日暮里驛に着いてしまつたのであつた。

兎も角も汽車を降りやう……さう思つてお慶さんは自身扉をあけて外に出た、そこへ佐千子がかけて來た。

「お慶さん！」

さう言つて近づいた佐千子の手に、見なれない何か新刊の厚い書物があつた、お慶さんはそこでも亦ギヨッとした。……自分が一ケ月程田舍で暮してゐた間に……葬式とか、友達まはり、親類まはりなどをして呑氣な日をすごしてゐた間に、何か代々木の空氣が自分をおいてきぼりにしてふつと方向を轉化してしまつてゐるのに氣がついて何とも理由のない口惜さを感じる氣持が動いた。

家に歸つてから川端氏にくはしい事情を聞いてお慶さんの心もふるい立つた、自分も眞心から川端氏を愛して愛の夫婦生活を建てやうと正直に決心した。そして或る期間川端氏との折合がうまくゆかぬ爲に無爲に遊び暮した自分を悔いて、自分が曾て川端氏と結婚しない前に川端氏に戀愛を持ちながら、それとは異つた年下の者を可愛ゆく思ふやうな氣持で愛らしく思つたＨ氏への氣持もきれいに告白してしまつた。お慶さんの處は二人が藝術家であつたからかうと思へば氣を揃へてどんな理想の國でも空想の國でも一應建てゝみる道順はつくのであつた。

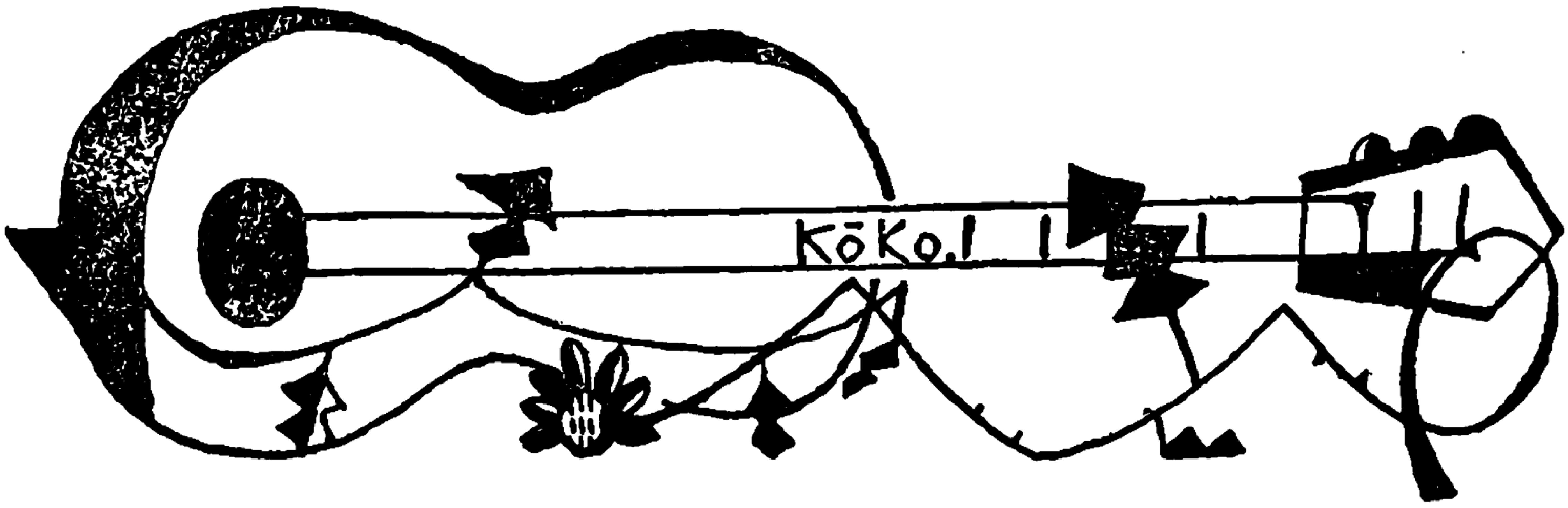
お慶さんは翌日いろ／＼な氣持を持つて佐千子を尋ねてきた……と玄關に見なれた江木氏の駒下駄があるのを見てフッと不快な氣持がした。……「江木さんをとられたくない……」

そんな、實に自分自身すらあきれるばかり、戀愛もないのに湧く嫉妬に似た感じであつた。

座敷へあがると江木氏は

「借りたい本があつて今來た處なの」

と言はないでもいゝ言ひ譯をした。それを聞いて佐千子は不思議な氣がした、……をかしいな、何も江木さんが朝から來てゐる事をかくす必要はない、そんな明るくない交際は自分は望まない……」佐千子は心で非常にいやな氣がした。



十月小說號豫告!!!

恒に女人行進の尖端を歩むわが社は、十月を期して全女性小說特輯號を發行しようとする。新らしき思想の山頂をよぢ、新らしき感覺の光耀を浴び、勞働の苦難に生き、戀愛の酣醉に溺れ、眞に生活し眞に渇望する現代女性の人生記錄の集大成だ。近代苦、近代愛、近代神經、近代思想、近代惡の最大な交響樂、女性の優雅、殘忍、哀傷のとり〴〵な獨奏曲、すべてをそこに讀者は發見するであらう。熱讀を望む。



喚く

―(濟南事件異聞)―

高橋鈴子

ベットの下に蹴りこんだウイスキーの空瓶が金屬の何かにぶつゝかつて無氣味な破裂の音響を立てゝゐる。

「三等症の部屋だ」

池田看護婦はその狹い部屋の前を蹌踉めきながら機關室の方へ下りて行かうとした。

どどどつゝと大浪が第二甲板へ胴體をのさばらせた。

船體は三十度の角度で操縱されてゐる。船尾は暴風雨の浪の底を潜り續ける。

宙に浮いた身體全體、爪先が踏場を失つて池田看護婦は垂直の掛梯子から機關室の横側になつてゐる輕病患者の部屋の中へ轉落されて行つた。

浪と暴風雨の凄氣を帶びた聲が、池田看護婦の耳の傍から次第に遠く遙かに意識を失つた熱病患者のように朦朧と遠ざかつて行くような氣がした。

劇藥の爆發の音響が船全體に驚哭を投げたかと思ふ同時に、激浪はその後からすぐそれより鋭い唸りを甲板に叩きつけてくる。

「あらしだぞッ　おーい　今の間に×をやつゝけろ、ワハ、、、××はどうしたい、牛巾

に切つてしまつたといふんかい？」

「池田看護婦、氣を付け、足踏み！」

「あらしだぞッ　危險だ、大島看護婦、お前は俺の傍へやつてくるんだ」

「池田看護婦、直立！　足踏み？」

朦朧とした意識が呼醒まされてくると上長の命令が耳の傍で早鐘のやうに尖鋭に苛立しい音調でガンガン響いて來るのだつた。

寺島婦長はけんのある鋭い瞳を池田看護婦の叩き潰されたやうな身に注ぎかけてゐた。

聲だけは素晴らしく張のある奇怪な威嚴を含んでゐたやうだつたが、事實池田看護婦より小柄で、華奢な身の寺島婦長は激しい動搖の度毎に廻轉ドアのやうにくるくると危險な足場で鐵柱に寄りかゝつた身をのめらせ續けて廻轉した。

もう一つの聲は精神科の狂卒の聲だつた。

そして此處は病院船××丸の船底だ。

激しい動搖で乘組員全部は死者のやうに疲勞し船暈ひで吐き續けた。吐くものがなくなつたからつぽの胃から、多量の血が吐き出され、生きた地獄が展開されてゐた。

水氣の凋れた看護婦等は衣嚢に取縋つたまゝの身を船の運動につれて船底の部屋の中を自暴自棄に叩きつけてゐた。

「氣を付け！直立！」

が寺島婦長はカンカン黄色の聲を張り擧げて喚きつゞけた。なぜなら彼女は職務勤勉の札附きで××から囑託された名婦長だつた。

池田看護婦は幽靈のやうな青褪めた身を起上らせて、あらしの釣梯子を登つて行つた。足は骨抜きの海鼠のやうにふらついてゐた。

登りついた部屋はあまりに陰慘だつた。泣くにも泣けないむごさの中で一人の友が息を斷たうとしてゐる――

大島看護婦は自身の華奢な身を知り乍らも今度の事變に參加した

「命を賭けても助け合ふんだ。大丈夫、あたしがついて居れば、さう、養蠶に失敗した位のお金、あんたの今度の勤務でおつ母さんにもあげられるんだわ」

二人は貧乏な農夫の屈辱と悲慘を浴びながら同じ村で娘になつて來た。飢餓に慣れて大きくなつた。

納税を順延させた爲に元氣な因業な赫ら顔の執達吏が村の中を横暴に蹂み荒した記憶も持つて成長して來た。

その執達吏の記憶は、大島看護婦の少女時代の悲しい烙印の印象を持つたものである。大島看護婦はその少女時代、封印された貧しい家具の中に坐つて一日中泣き續けた。

「あたいのお祭のべゝ、赤いべゝ、嫌あ、嫌あ……」

祖母は孫の悲しみを黒砂糖でこねた一文駄菓子で慰やさうとおろおろ走り廻つた。少女は一徹だつた。只何よりも祭の赤い捺染の着

物を失ふ事が悲しかつた。

「阿呆！　もつとえゝのん、お父うが買つてやる」

變な怒氣を帶びた父親の言葉の中には娘に言ふか、また第三者に叩きつけるか、或反感をもつた佗しい虚勢の響を含んでゐた。

母親は低い聲で一言二言何か言つた。と父親は「うるせえ」と睨む樣な眼付で母親を付き飛ばした。

娘は父親の佗しい力强さの威嚴と、怒氣を感じると默らねばならない一方、父親に對する氣の毒さを感じた。

其の夜少女は母と夜中默り切つて霧の夜道を歩いて行つた。

足の踵が腫れ上る程痛み通した。

母親は時々これだけを言つた。

「脊負つてやらうか？」

少女は祖母と母親が薄暗くなつた土間で不安な空氣の底にひそひそ語つてゐた一家の事を感じてゐた。母親を困らせてはならないと思つてゐた。

月が落ちてしまつた。

夜が白々と明けて山陰の町へつく頃二人は空腹と渇で浮浪人のよ うな足どりで町の中を歩いて行つた。

税金を借りる爲に父親の妹が町で魚商をしてゐる處へやつて來た。

「人樣に貸すために働いてゐる阿呆はこの世智がらい世の中にはありませんよ、それともあんたが嫁入りの時の一張羅でもかたに持つて來たんですかい？」

結ひ上げた丸髷のびんが光つて伯母の顔が强く恐ろしく見えた。

「着物があつたらお金なんか借りに來まい」

少女は伯母の矛盾が腹立しかつた。

無駄足をふんで山を越して來た母親は直ぐ盲腸炎で斃れた。

柩に寄り添つて俯向いた父親は、そつと手のひらで幾度も涙を拭つた。その手は二日前に母を付き飛ばしたひゞの入つた恐ろしく頑丈な黒い手だつた。

執達吏と夜霧の山越えと、母親の死と、大島看護婦は少女時代の要求全部は金の欲しいといふ觀念に支配されて大きくなつた記憶が未だに烙きつけられてゐた。

「出るか」

「行かう」

「船の勤務は陸の三倍あらいと言ふこつちや」

「大丈夫、あつしや大丈夫だ、その代り戰時手當が大きい」

池田看護婦と大島看護婦は卒業の年、植付の最中に濟南事件救護班の希望を打合はした。

「夏蠶だつて買へるし、秋の種だつて買へらあなあ」

「今度こそおつ母あに百圓位やられる」

通風器が死にかゝつてゐる大島看護婦の頭の上で無氣味な化物のような動揺を續けてゐる——それは船の動揺につれて一番動揺され難く縛りつけてあつたから。

吐血した血液の中に顔を埋めた大島は池田を見ると心臓部をしつかり抑へて眼を上げた。

「傳染病室の細菌媒養器、それから…フ、フランケの處置をたのむ」

傳染病室は大島看護婦の擔任區域で其處には重要な高價な器具が設置されてゐた。

「しつかりして頂戴よ、あたし引受けてあげるから」

池田はポケットの食鹽注射を大島の上膊部に、機械的な敏速さで二本注入した。

「死なしちやならない、助かるんだぜ」

心の中では或偉大な存在に心から祈つた。

こなごなに粉砕された硝子瓶や試驗管の破片の中を泳ぎ切つて傳染病室に入つた時、池田は一つの動揺と同時に器具の前に叩きつけられた。腰骨が粉砕された程強く毆打された。

急に起上る事の出來ない無氣味な靜寂の間、砂の中に埋蔵された劇藥が爆發して、ドロドロ泡立つて流れるのを呆然と凝視した。

手を差延べて砂の中へ押込む勇氣さへ已に失はれ様としてゐる。

次は大浪のグロテスクな笑聲の中から、あわたゞしい一種の笑聲が池田看護婦の耳へ傳はつて來た。

カランカランと動いてゐる乾干びた笑聲だ。

「洗面器だ！」

綱で縛り付けた筈の洗面器は自然の大浪の力から逃れて、自由に甲板の滑走を試みてゐるのだ。

もう一つの強い動揺が傳染病室の入口にぶつ倒れた池田看護婦を一番奥の薬品戸棚まで強い傾斜で滑走させた。

劇藥は砂の外で燃えてあぶくを立てゝゐる。

「次のゆれまでに」

細菌媒養器と消毒器へ匐ひながら近寄ると衰弱した腕一つぱいで頑丈に縛りつけた。

「これでいゝ、それから、フランケ、フランケだ」

取殘されたフランケの處置が終ると池田看護婦は完全に疲勞し切つてグッタリと自暴自棄に床に倒れ伏した。が二本の腕はいつの動揺にも叩きつけられない用心で一本の鐵柱を確かりと捉へてゐた。

「俺をこんなところへほり込んで如何うするんだ、出せ、出せ、出さんか、大島、大島、お前までこんな慘酷な眞似をする…」

狂人は浪と大風の中で叫喚をあげ續ける。

甲板の洗面器は哄笑を續けながら滑走を續けてゐる。

病卒も看護婦も、醫員も、船員も嘔吐と、煮えかへる暑氣に苦悶し續けてゐる。

無氣味な靜寂の中に火玉の樣な眞赤な大きな太陽を窓から見た。

池田看護婦は呆然とした空洞のような瞳で再び靜かな太陽を凝視した。

と池田看護婦は大島の冷い手首をしつかり握つて脈搏を數へながら大島の傍に倒れてゐたのだつた。傳染病室を夢中で匍ひ出した自身を知らなかつた。大島を看護する意志だけが知らず識らずの間に大島の傍へ近寄つて來てゐたのだ。

あらしの聲も風も雨もが靜まつたらしい樣子だ。

「いけない、死んでゐるのか、いや助けてやる」

池田看護婦は大島の呼吸が肺臟から吐き出される事だけを祈つた

三本の注射は大島の身の中へ漸く滲透して行つた。

微弱ではあるが一つ、一つ、血液は運動を始めた。

池田の口うつしの赤酒が大島の頬を蘇生させて來た。

凪いだ海は多くの假死狀態の人間の乘つてゐる船を靜かに汰沽(タークー)へ運ばせてゐた。

池田看護婦の窓から見た眞赤な太陽は、汰沽特有の蒲の穗から出て蒲の穗へ沈んでゆく月光だつた。

陽のように眞赤に燃えて大きく輝くのが汰沽の月の姿だつた。

「お月樣見せてあげようか、素晴らしいんだつて」

「うん」

「甲板までおぶつゝてやらうか?」

到底助かるまい衰弱の大島に生きてゐる間の最後の月が拜ませてやりたい、センチメンタルな氣持が起つた。

大島は死んだように元氣がなかつた。

池田の手からグタグタと辷り落ちて衣嚢の上に倒れた。

輕い咳が出始めた。

鮮血が火花のように飛散して池田の白衣を眞赤に染めた。

吐血だと思つてゐた血は、大島の肺を破つて流れ出た。もう秒一秒衰弱してゆく友を凝視するより術はなかつた。

「ゲ、ゲラチンの注射して……」

これだけ言へば鮮血がまた飛散した。

「口を利かしちやならない」

池田のポケットは空つぽだ。

「一杯の食鹽水でも、飲ませてやりたい」

不思議に涙は落ちなかつた。

「大島が危險です……」

恐ろしい威嚇をもつた池田の聲が船内に響き渡つた。

が假死狀態の人々は船が幾何か平靜になつて靜けさの中で身動きもしないで呆然と聲だけを聞いた。

「が自分等に今何が出來る?」

「く、くるしい、くるしいつたら」

大島は池田の手を力一つぱい握りしめてドロドロの血液に塗れた口で言つた。

陰慘だ！

凄氣を帶びた顏だ！

悲壯だ！

大島の手は尖鋭な猫の爪の先端のやうに池田の腕に喰込む程强く鋭い力で骨を刺した。

「死ぬのはいや、生きさせて、助けて」

必死の鋭い號泣と叫喚が死にかゝつてゐる女の全身から溢れた。

消えかゝつた燈明の火が一つ揺れた――脈搏が一つ流れた。

と火は刹那的に燃えた。微弱な脈がコトンと落ちる樣に打つた。

消える――消える、あゝ消えてしまふ。

たゞ動いてゐる丈の大島の口から無言の遺言が傳言けられてゐた

「お金は、おつ母さんにやつて、あたしのものみんなも」

池田も口が利けなかつた。喉が涸れて堰が作られたやうに硬直して震へた。四つの瞳だけが何もかも完全に應答した。

呪咀をもつた大島の瞳の中に一つぱいの涙が溜つてゐた。池田看護婦はその目から反けたかつた、それはこみ上げて來る哀れさに堪えられなかつたから。

そして反らした目で無關心な燃えるやうな月が丁度蒲の穗の中へ落ちてしまふのを窓から見た。

或靜寂が船の中を流れて擴がつた。

一人の女の死は大きな濟南事件の中ではほんの些細な一小事件にしかすぎなかつた。がこの斷末魔の苦しい呪咀と反逆の眼が池田の網膜の中で動いてゐた。

「やれつ、やつてしまへワハヽヽヽ」

狂卒は自由に饒舌つて高らかに奇怪な聲を擧げて笑つた。

「大島！大島！可愛い大島、俺を出してくれ」

狂卒は哀願的に大にかう叫んだ。

血に塗れた大島が臟物のやうに池田の傍に轉つてゐた。

「大島！大島！」

狂卒は叫び續けた。池田は狂卒の聲からはつきり大島の死を意識した。そして船の中で喚き上げた。狂人のやうに喚き廻つた。

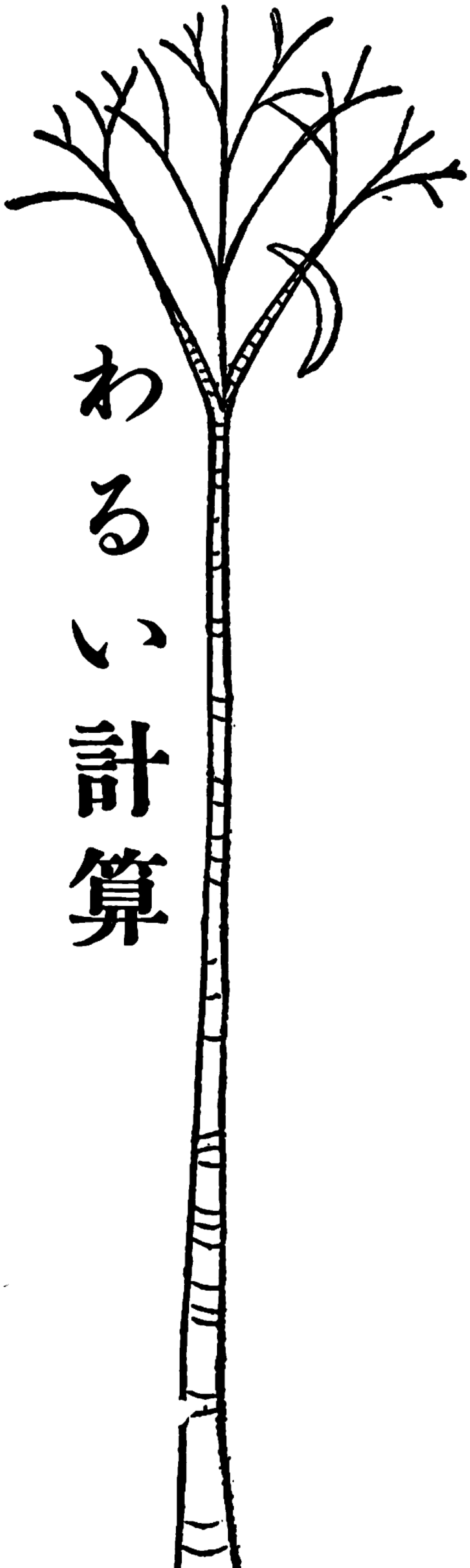
「死んだよ、死んでしまつたよ、大島が死んだ、死んでしまつたよ……」

疲勞し切つた船と人の中を、狂人の奇怪な聲と、悲壯な池田看護婦の叫喚がいつまでも續いて響き渡つてゐた。

油の煮えるやうな激しい暑氣が船内に漲つてゐる――その中から一齊に大島の死について喚き上げたかつた。

「××××××××か、××を呪ふんだ」

と。月のない海上は眞暗だつた。



わるい計算

合屋コズエ

一

その頃T町は、北九州の一劃にしよんぼり肩をすぼめて、たゞずんだやうな、さゝやかな町であつた。

この町が以前の村落から少しづつ進化してやつと、町といふ呼び方に改められるまでには、その間に、牛のやうなのろい歩みの永い何年かゞ流れて來てゐるのであつた。

この町に住む人々の生活のすべてが、言ひ合したやうに消極的で怠惰なのは、遠い村落時代の生活の香氣さと、その頃の無智とがこの町の底を流れてゐて、何年かを經て來た今もなほ、すべての人の上に對外的な働きを封じてゐるからであつた。

ふるくから、この町に住んでゐるもので、家につたはつたどれだけかの財産を傷つけないやうに要心ぶかく活きて行けば、その家族は喰ふに困るやうなことはなかつた。けれども、さうした家族の生活狀態といふものは、何十年前の人達の生活から、半歩も脫することはむづかしかつた。食べものゝ營養價がどうの、子供の教育がどうのと、そんな生意氣なことを言ひだしたら、ひとたまりもないといつていゝ僅かな財産にすがつて活きてゐる人達の方が多かつた。

なかには、さうした生活から反動的に、中途半端な財産の一切を投じて何かの事業を計劃してみたり、商賣に手をだしたりして、經濟生活の革命をやつて見るものもあつたが、それ等の人達は大方、無經驗のために失敗に終るものゝ方が多かつた。

すると町中のものは、さうした人達のことを捉へて、何か自分達の町に災の種を賣り歩るく疫病神か、異端者のやうな取り扱ひをするのであつた。

あくまでも、消極安全主義のこの町にも、どうしてもまぬかれることの出來ない脅威があつた。それはこの町の、そこゝの家に赤ん坊が産れて來るといふことであつた。産れた赤ん坊は、やがて大人になり、大人になるといふ事は、それだけ、この町の人口が增加してゆくといふ事であつた。限られたこの町の經濟力は、どこかに赤ん坊が一人産れる每に、その負擔でおびやかされるのであつた。

それまで、古い湖のやうに沈んで動かなかつたこの町全體の神經が、やうやく落ちつきのないものになりかけて來たのはそのためであつた。

西の空にひろがつた美しい夕燒雲の姿が、かき消されると、間もなくあたりは靜かな夕闇に包まれて來た。晝間どこかに隱れてゐた蝙蝠が思ひだした樣に、夕闇の中を軒から軒に飛びまはつてゐた。

敦子は裏の井戸端にかゞんで、翌る朝炊く米を、ばけつに入れてゴシ／＼洗つてゐた。濃い乳白色の水が、暗がりの中でうすく消されて行くのを惜しむやうにだまつてみながら想ひはそれとは何のかかはりもない、遠い方へのびて行つて、あることに打つつかつたまま、重苦しく停滯して動かなかつた。

その日の夕方、敦子は何氣なく、行水をしてゐる母親の裸體からある異狀を發見したのであつた。

子供として、自分の母親の、しかも裸體の下腹部に、するどいほどのひらめきの視線を送つたその瞬間のとがつた氣持が、敦子には何か知ら母親に對して申しわけのない、すまないことをしたやうにとがめられた。けれども、そんなことよりも、もつと大きな現實、それは今自分達の家に、この上に、もうひとつ他の生命が加へられるといふ運命が、すでに母親の胎內で決定されてゐるといふことであつた。それはたしかに、この家族全體のものを、この上になほ、おびやかさうとする冷酷な宣言に等しいものであつた。

十八の敦子を頭に七人の子供の、どこまでものびやうとする根强い生命を與へるには、あまりにこの兩親の腕は細く疲れすぎてゐたそれでも五六年前まではまだ、その頃四五人の子供を養ふことに、さう豐ではなくとも、不便を感ずるほどの生活ではなかつたが、つぎ／＼に産れて來る子供達の遠い將來のことなど考へてゐると、今のうちにどうにかしておかねば、とても追つつきさうもない家の經濟狀態に見越しをつけた父親が、思ひ切つて、年々どれだけかの小作米のはいつて來る田地を賣り拂つて、それを商賣の資本にしたのが見事に失敗してから、敦子の家庭は急速度に轉下したのであつた。そして父親が商賣替へをすればする度に、敦子の家の生活線は一段づつ低下していつた。

ある時は蒸し菓子の製造業もやつた。又通りがゝりの人を相手に小さな飲食店をだしてもみた。それからまた、八月の太陽が、人々の頭の上に小さい火柱のやうな熱線を投げおろすはげしい炎天のもとで、敎子は父親の手傳ひをして、露店の氷店で一杯何錢かの氷水を客の前に運んだこともあつた。

車の轍が深いぬかるみにはまり込んだやうなかたちで、その後も敎子の家庭はなか〳〵浮び上れさうもなかつた。あらゆる自分の力をためし盡してしまつたやうな父親の顏色は、陰鬱に蒼ざめて來た。その間に二度程お産をした母親は口數少なくやせ細つて來た。

何も感じない小さい子供達だけは、粗末なものを著て、ありたけのものを喰ふと、夜が明けるとから暮れるまで、暗い家の中の空氣にはふれやうともせずに、明るい太陽の下で元氣に愉快さうに飛びまはつて來ては、疲れると罪のない水のやうになつて眠つた。だが敎子だけはさうした中で、乙女としての一切の夢も情熱も忘れて、不遇な兩親とともに、貧乏を背負つて立たねばならなかつた。

家の貧しさのために、誰よりも一番先に、直接に惱まされるのは臺所の仕事をひとりで引きうけてゐる敎子であつた。

暗い臺所のすみの、古ぼけた二斗入りの米びつに、一斗以上の米が殘されるといふことは、この頃よほどどうかした、いゝまはり合せの時でなければ見られなかつた。常に一尺位から上はめつたにかくれたことのない米びつの上の空間が、珍らしいほど時たま、一二寸位にまで縮められるやうなことがあると、敎子はその二三日の重い鎖から解かれた時のやうな心やすさを味ふのであつた。

けれども、姉のさうした心遣ひに何の容赦も持たない子供達は、圓い食卓を取り圍むと、蚕のやうな勢で、泣きたいほど多くたべるのであつた。夜になつて、子供達が寢込んでしまふと、家の中には死んだやうな空氣が流れた。

油の切れた古風な柱時計が、この家全體の疲れた呼吸の樣な弱い音を狹い部屋中にきざみ込んでゐた。近所の家でたいたらしい蚊やり火の煙の、かすかな殘りの香ひが、フラ〳〵と搖れながら裏の緣側でぼんやり考へ込んでゐる敎子の鼻先を、すうと通り過ていつた。

夕飯がすんでから、そのまゝどこかへ出かけたらしい父親は未だ歸つて來なかつた。燭光のにぶい電燈の下で、うつむいたまゝ默つて他所の仕立物をしてゐる母親の、あきらめたやうなさびしい姿をみてゐると敎子は何とか言つてその日の夕方の自分の氣持が母親に對してわびられるものなら、わびてしまいたかつた。

この上に子供を產むといふ事については敎子が考へるまでもなく、母親自身で、とうに考へて惱みぬいたあげくであらう、そしてどうにもならない宿命の前に、おとなしく觀念したやうな尊い母親の姿を、ほんの瞬間にもせよ、かくれた意識の上で、冒瀆した自分の輕卒さを敎子は心のうちに悔ひた。自分達の家に食べるものが乏しいといふことの爲に、何も知らずにこの世界にのび出やうとしか

けてゐる自分の弟か、妹かの、小さい罪のない生命をまで、憎みかけたといふ事も敦子は自分ながら、みじめで情けない事だと思つた。

敦子は自分のさうした閉された氣持を、母親の傍に行つて、何か母親に優しく話しかけることによつて、まぎらせやうとした。

敦子が傍にゆくと、母親はそれまで、止めやうか、どうしやうかと迷つてゐたらしい縫ひ物を再び持ち直して、

『ついでに、ぬいあげておかうかのう、あしたが樂ぢやろうけ』

敦子に向いて、いふともなく、ひとりごとゝもなく、さういふと母親はまたせつせと縫ひつゞけた。

あかるい、はなやかな色彩の缺けたこの家の中で、不調和にひとつ飛びはなれた、やはらかい美しい布は、母親の膝から胸の方にまで這ひあがつて、母親が手先を動かすたびに、こぼれるやうな、鮮やかな色彩の波を、そこら中に惜し氣もなくまき散した。

敦子は、うつとりと母親の手許をながめてゐた。誰かの若さと、美しさを飾るためのものであらう、かうした高價な織物と、自分達の生活との緣遠さが、敦子の胸にハッキリと感じられた。

目鼻立のとゝのつた十八の自分の娘の身邊に、何時見ても、娘らしい赤い色彩のひとつも添へてやることの出來ない親の不甲斐なさを、何かにつけて思はされてゐるこの母親に取つて、かうした晴衣を、まざ〳〵娘に見られるといふことは、おとなしい娘から、無言のうちにとがめられてゐるやうで、母親には何か知ら心苦しいものがあるに違ひない――さうした母親の氣持は、敦子にすぐひゞいて來た。母をいたはるつもりで傍に來てゐながら、不用意に一寸した自分の感傷を、そのまゝ顏に現はしたために、母親をそんな氣持にさそい込んだことを敦子は二重の罪に思つた。

何とかして、敦子は母親の氣持を、この場合一寸でも明るいものに開放してやりたかつた。

『おつ母あさん、もう止めなさいや、さうしちよるところ傍から見たら、まるきり、かたき打ち行くときんごたるばい』

わざと敦子は、輕くおどけた調子で言つて子供つぽく笑つた。母親は何も言はずに眼で靜かにわらつてそれに答へた。そんな時の母親に敦子はいつも吸ひ込まれるやうな暖かい親しみを覺えるのだつた。

どんな貧しいものにでも朝の太陽は、ほがらかで美しかつた。

街はづれにある大きな銀杏樹の背後から健やかにのび出た新鮮な光の波は、町も、家も、人も、犬も 塵箱も、一緒に、靜かに抱いてやがて深く包んでしまつた。

敦子は弟妹たちの着汚したものを、毎日のやうに一かゝへづつ持つては、近くの川まで洗ひに出かけた。

頭の上にひろがつたすが〳〵しい蒼空は、遠い世界にまでつゞいてゐた。空氣は何のこだはりもなく、思ひきり深くいつぱいに呼吸

された。着物をからげて、水の中にはいり込むと、冷たい快よい感覺が、からだ全體にやはらかくつたはつた。常に何かに壓へつけられたやうな日頃の生活を敎子はこの快よい水の中に、あとかたもなく忘れ捨てゝしまひたく思つた。

敎子は、自分の小さい弟妹たちが可愛かつた。母の手にあまつた弟妹たちの世話を敎子は若い母親のやうな心遣ひで引きうけてゐた勝氣な敎子は、自分の家の貧しさや、みすぼらしさを、出來るかぎり子供達の身邊からかばつてやりたかつた。敎子は子供たちのために、たとへ木綿ばかりの着物ではあつても、せめて、あかのついたものは着せてやるまいとして心懸けた。けれども敎子自身のことになると十八の娘として、まだ、化粧品にどんな名前のものがあるかといふことすら知るだけの余裕がなかつた。

貧乏といふものを、人生の大きな宿命に考へてしまつてゐる敎子には、ブルジョアだのプロレタリアだの、階級だのといふむづかしい言葉の意味は、何もわからなかつた。たゞ自分の家が、もつと金持になればいゝ、金があるといふことが、人生の一番大きな幸福だといふ風に考へてゐた。

二

空の色に、陽の光に、夏はいよ〳〵深くなつて行つた。木々のみどりは油をとかしてぬりつけたやうに黒く光つて來た。

母親の體は日一日と、重く不自由に動けなくなつて來た。父親は何の當もなく毎日外に出歩いては、空しく歸つて來るのであつた。

敎子は母と二人で、他所の仕立物に、夜も晝も、時間の許すかぎりを費して一生懸命になつた。その日敎子がちよつと、きりのついた縫ひかけの針をおいて中食の支度に立たうとしかけた時、額にあせを滲ませた父親が胸を大きくひらげて、少し赤味がかつたむぎわら帽を、右の手にもつて、それを扇のやうに使ひながら戾つて來た

何時も困つたやうな浮かぬ顏をした父親がどうしたのか、その日は何時になく元氣さうに見えた。母親も敎子も同じやうに、父親の口から、どんな吉報がもたらされるかと待ちかまへた。

『オイ、この町にYのごたる製鐵所がでけるちゆうぞ、さうなりや景氣もようなつて來うしの、まあ一時辛棒ぢや、そのうち見ちよつてみい、俺がなんかするけ、そいでも資本が一文もねえけのう』

父親は、自分が最初に失つた商賣の資本を今更の樣に惜しんだ。

どんなかたちによつてでも、この凍りついたやうな町の空氣が、動かされるといふことは、その中から、敎子にも何か齎れて來さうな期待がもたれた。『おつ父さん、その工場が早やうでくりやいゝばいなあ、まだ何時頃かわからんとな』

敎子も遂ひ父につり込まれて口をはさんだ。

『なあに、もうぢき一二ケ月のうちにや工事にかゝるちゆうこつぢやぞ、××の海岸から埋め立てちいくさうぢや』

それからのち、せまい町は、よるとさはると新らしく出來るといふ工場のうはさ話で持ち切りとなつた。

なかには、工場地域と決められてゐる場所で店をしてゐるものでその邊の商店は土地の買ひあげと同時に相當な移轉料が貰へるといふことを聞き込んで、それまで商賣が面白くゆかないので、何處か場所を替へやうと云つてゐたのが急にそれを見合せて、移轉料を當にしてゐるものも多かつた。

移轉料は會社の言ふ通りにまかせておくのは馬鹿だ、それよりもこちらからうんと要求して頑張りさへすれば、向ふは弱身だ、こんな時にこそ一儲けせねばと、早やくから會社と喧嘩腰の慾深い連中もあつた。

うはさは架空なものではなかつた。

ある朝、敎子が家の中で、夏から秋に少しづつかたむきかけた澄んだ空をみてゐると、つるはしを肩にした五六人の、頑丈さうな男が表の通りを何か知ら大聲で話しながら通りすぎて行つた。

午後になつて、それが會社の工事でこの町に入り込んで來た人達だといふことを、父から聞かされた。

その日から、それまで死んでゐたやうな町中の空氣が急にムクムクと動きだして來た。何のかゝはりもない町の人達の顔にまで、どことなく活氣が現はれて來たやうに思はれた。

四五日で、海岸から町はづれの廣つぱに向けて二筋の線路は無雜作に敷きのばされた。その上を、砂利や土をいつぱいに積みあげたトロツコが、ゴロ〳〵音を立てゝ三四人づつの人に後を押されて通るやうになると、町のそこゝの角に『人夫募集、日給一圓、××組事務所』といつたやうな張り紙が眼につくやうになつて來た。

生産事業の乏しい縮まつたこの土地で、久しい間苦しい生活と闘つてゐた町の人達は、見榮も張りも捨てゝ、一人、二人、三人、と誰にでも出來る勞働に流れて行くのであつたけれども、男一人が未明に出かけて、やうやく、陽のとつぷり暮れかけた頃疲れた家に歸る時、それまでの勞働と交換される賃金は一日一圓の契約額から供給事務所の方で頭割いくらといふ額を差し引かれ、そのうへまた、仕事場の方で、小頭と呼ぶ見張り人に、何程かを削づられたあとの僅かな殘りの額しか手にすることは出來なかつた。

それでも、働く者の數は日一日と多くなつて行くのであつた。

敎子の母親が八人目のお産をしたのは、秋も終りに近いうすら寒い日であつた。

父親はどうにかして商賣の資本を造らうとして、親戚の許を馳けまはつたり、知り合ひのものに頼んだりしてゐたが、一度失敗した者は誰も相手にしてはくれないらしく、失望したやうに、ぐつたりなつてゐた。父親は、敎子や母親に對して、言分けらしく、自分が前に失敗したのは時機が惡かつたので、どうにも仕方がない今誰か

ゞ資本さへ出してくれゝば失敗を盛り返へす位何でもないことだがと、相談にのつてくれない人達の事を、却つて惡く言つたりした。

會社の工事が進むにつれて、町のそこにもこゝにも、新らしい商賣家が建てられたり、他國のものが、多勢入り込んで來たり、町の中央に公設市場が出來たりするのを見て、それまで仕方なしにあきらめかけてゐた父親は、かつて自分が商賣で失敗してゐるだけに商賣に對する野心が、どうにも壓へ切れないものゝやうに、毎日苛々してゐた。

さうかといつて、母親がお產で寢込んでしまふと、敎子一人が他所の仕立物をした位ひでは、家の中はどうにも、かうにも、ならなかつた。父親は何も彼も、思ひ捨てたかのやうに、九人の家族を重い十字架のやうに、背に負ふて、町の貧しい人達が當然なるやうに默つて勞働者の中に落ちていつた。

それから毎日夕方父親が疲れた體をさげるやうにして、歸つて來る姿をみて、敎子は痛い思ひをせねばならなかつた。

敎子の母親が產褥からはなれた頃には新らしい工場の基礎工事はすつかり出來あがつて急速度に建設工事に移つてゐた。

長い丸太を縱横に渡して組みあげた方々の足場に、蜘蛛の子のやうにとまつた黑い人間の姿が圍ひの外からも高く眼についた。

ある日の午後敎子の家から二三軒離れた近所の二階に、若い勞働者の夫婦が間借りして來た。男は、洋建築の煉瓦工であつた。陽に燒けた顏に鋭く光る眼が、ちよつと見ると恐はさうではあるが、自分の妻よりも少しばかり丈のひくい横肥りの軀を、肩で調子をとりながら歩く格好など、割りに人のいゝ親切さうなところもあつた。

丈の高いその妻君は、あまり美人ではないが、勞働者の妻としては、色の白い、眼許に愛嬌のある人ずきのする女であつた。結婚して、さう日が經つてゐないらしく、二人は仲がよかつた。この二人は、移つた翌日から町の勞働者と等じやうに、毎朝早く連れ立つて仕事に出かけては、夕方また、二人で一緒に歸つて來るのだつた。

敎子は裏の井戸端で炊事をしながら、すぐ横の道を通つて歸ることの二人を見た。はじめはその妻君と一寸眼を見交す位ひであつたが何時からともなく、妻君に逢ふと笑つてものを云ふやうになつた。

敎子はこの夫婦の生活をたのしいものだらうと思つた。また、さう思ふことによつて、この夫婦にわけもなく好意がもてた。

そしてこの夫婦を知つてから父親が勞働してゐることや、家が貧しいといふことが、さう氣まりわるく思はないやうになつて來た。と同時に、人間は働くことによつて始めて正しい活きる權利が得られるのだといふやうなことを、誰にも敎へられないで、考へるやうになつた。金がなくても、人生は、ほかにまだ幸福があるといふことが、敎子の心を明るく賑やかにした。

敎子は自分が健康であるといふこともうれしかつた。それから人間の氣持といふものは實におかしなものだと思つた。どんな人間

でも自分をみじめだと考へれば限りなくみじめになり、幸だと思へば、また幸にもなれるものだと思つた。でそれまでのやうに、兩親を氣の毒に考へるかはりに、どうして貧乏から脱れるかを、先に考へやうとした。

敎子が、仕立物の針を捨てゝ煉瓦屋の妻君とおなじく働らきに出るやうになつたのは、それから間もなくであつた。

眞多に移りかけた空には、心細い灰色の雲が低くたれてゐた。

敎子たちの仕事場は、高いところであつた。

男の煉瓦屋が鏝をもつて一枚づつ重ねてゆく煉瓦を、つぎ〳〵に水につけては取つて渡したり、傷物の煉瓦を撰り分けたり、水を運んだりして、煉瓦屋の仕事を扶るのが敎子たちの仕事であつた。

多くの煉瓦屋の手によつて、煉瓦が一段づつ積まれる毎に敎子達の仕事場は、それだけ、だん〳〵高くなつてゆくわけであつた。

二三日前までは、仕事場の横の、バラック建の倉庫の屋根に邪魔されて見へなかつた町々の家が、その日は、もう眼の下に見へるやうになつた。

敎子の町のはづれにある、大きな銀杏樹に散り殘つた黄色の葉も遠くに見へた。近所の湯屋の、高い煙突から出る黒い煙は空の風に吹き折られて、そのまゝ左に流れてゐた。町中の家の、屋根瓦の三分の一は、おほかた新しいものゝやうに思はれた。敎子は今更、急に殖へて來た自分達の町の、瓦の畑を瞰下ろした。高い空では、時々、冷たい刄物のやうな風が、骨にまで應へるやうに思はれた。

朝七時から働らきにかゝつて、正午の休憩時間までは、誰にも可成り待ち遠しいものであつた。風の當らない倉庫の陰で、たき火をまるく圍んで多勢がそれ〳〵午飯の辨當をすますと、その後に三十分の自由な時間があたへられるのであつた。休憩時間中の男達の話題は、おほかた女の事で盡てゐた。その間に、馬鹿だの、畜生だの、可成り亂暴な言葉が交はされても、さうした言葉の荒つぽさは、こゝでは誰の耳にも響いて來ない平氣なものとされてゐた。

女達も、男に負けない程の露骨なことを互に話し合つては大聲で笑つた。彼等は、さうした、お互ひの作つた雰圍氣の中では、自分自身の名譽や尊嚴などは、一切捨てゝしまつて平氣であつた。

何の學問も、敎養も享けてはゐない敎子ではあつたが、斯うした人達の中に、そのまゝ溶け込んでいつて終ふには、何んとなく考へさせられる何ものかゞその意識の中で芽生へてゐた。けれども敎子はさうしたことのためにこの人達の、率直な、そして單純な世界を決して輕蔑しやうとは思はなかつた。ただ、自分の眼にさへ、敎養のない單純なものに映るといふのは、その人達がみんな學問をしてゐないためだらうと思ふと、敎子は、自分に學問のないことが恥かしくなつた。世の中のことを、もつと〳〵正しく識らなければならないと思つた。

——人間はどうして活きたらいゝものか、人生とはどういふものかと——

午後の仕事は、午前中にくらべて、ずつと短かいやうに思はれたけれども、敎子が、煉瓦屋の妻君と一緒に、仕事場をはなれて、家に歸る頃には、たいてい町には灯がついてゐた。

家の子供達は、父親や姉の敎子が仕事から戻つて來ないうちは、母から夕飯にして貰へないので、毎日夕方、遊び疲れて腹が空いて來ると、父や敎子の歸へりを家の前まで出て來ては待つてゐた。その姿をみると、敎子は、どんなにでもして、働らかねばならぬといふ氣持が强められるのであつた。

夕飯がすむと、一日中の疲れが出て、敎子は毎日ぐつたりとなつた。湯につけると、ヒリ〳〵痛む煉瓦で荒れた手に、敎子は毎晩、ワセリンを塗りつけては寢た。

正月が近づくにつれて、寒さはいよ〳〵加はつて來た。

その日は、朝から、凍りついたやうな冷たい外氣が、人々の眼も耳も、鼻も、削いで行くやうに思はれた。高い仕事場では、頑丈な男達までが寒さのために、日頃の元氣も失つたやうに默つて、ちゞこまりながら仕事をつゞけてゐた。女達は、短かく着た着物の裾からはいる冷氣に軀中を小さくすくませてゐた。

その中に交つて敎子は、唇を紫色にしてふるへながら働らいてゐたが、その日だけは、しみ〳〵勞働が辛いものに思はれた。仕事は日頃の割りに捗らなかつた。事務所の方からは、仕事の仕揚げ期日が大分延びてゐるといふので、どん〳〵急いで來るために、皆は苛苛して來た。水を運ぶもの、セメントを練るもの、煉瓦を削るもの、人々は、こはばつた空氣の中でだまつて機械的に動いた。

敎子は、Aといふ頬骨の高い、顔のみにくい、一人の煉瓦屋の手傳ひをしてゐたが、これまでに、一度もこの煉瓦屋の傍で、仕事をしたことがないのと、それに、相手の氣分が知れないのとで、仕事の手順がどうしても思ふやうにゆかなかつた。相手は自分の苛々した氣分をそのまゝ、傍の敎子に投げかけて來るのであつた。

『オイ、氣をつけてくんなあ、おいらあ、水がなきや仕事たあ出來ねえんだよ』

時々、鏝を洗つて使ふための手桶の水が少なかつたのを、だしぬけに、斯うした切つて投げ捨てるやうな、ぞんざいな言ひ方をされて敎子はあつけに取られた。けれども、自分がうつかりしてゐたのだからと思つて、敎子は何も言はずに、そのまゝ手桶をさげて高いところから足場をつたつて、急いで下まで水を汲みに降りた。

その日は朝から、多分そこにゐる誰もが、さうであるやうに、敎子もいつになく自分の存在が情けない、さびしいものに思はれた。敎子が手桶に水をいつぱい汲んで、足場の板に片足をかけやうとした、ほんの僅かな途端であつた。高い仕事場から

『あぶない!!』とあはてた聲が半分ほどきこへた。敦子は本能的にギクッとして身をさけやうとしたが、おそかつた。上から落ちて來た二枚つゞきの大きな煉瓦は、思ひきりひどく敦子の頭に打つゝかつて、そのまゝ重く地面の上に音をたてた。その瞬間敦子は、自分の身體が大きな岩にでも突き當つたやうな氣がした、けれども、そのあとはもう何もわからなくなつてしまつた。

しばらくして、敦子は、甘い花園のやうなやはらかい香ひの中で意識をとり返へした。

敦子はその時、煉瓦屋の妻君にしつかりと抱かれてゐた。甘い花の香ひは、妻君の頭につけてあるポマードのにほひであつた。

怪我をした敦子が、あたりを見まはすと、多くの人が自分を取り巻いてゐた。その中に妻君の夫のせいの低い煉瓦屋も交つてゐた。

敦子が怪我をしたために、敦子の家の正月は皆んな默り合つたさびしいものであつた。敦子は、それが自分一人の責任のやうに思はれて心苦しくてならなかつた。それまで子供に對して、どちかと云へば寛大な方であつた父親が、どうしたのかこの頃から小さい子供にまで何彼につけて、ガミガミと小言をいふやうになつて來た。

母親は父に氣を兼ねて、子供と良人との仲に立つて常にハラハラしてゐた。子供さへなかつたら、——貧乏に苦しめぬかれた末の父親の頭に時たまかうした考へが浮かんで來るのは無理もなかつた。時には敦子にまで無理なことを言つて當る父親のことを敦子はいろいろに考へてみて、憎めなかつた。たゞ、もうすこし父親に貧乏というものを理解するだけの頭があつてくれたら、案外貧乏から容易にのがれられはしないかといふ氣がした。

敦子はいつ頃からともなく、兩親をはなれて自分ひとりの考への中で、自分を處理してゆくやうに習慣づいて來た。

傷がなほつて來ると、當然のやうに敦子は再び働らきに出やうとした。無論父も母も、それを止めやうとはしなかつた。

ながい一日の勞働を終へて、家に歸つて行く時の敦子は、いつも家中のものが一緒に集つて座るその日の夕食の情景を頭に描いてはたのしむのであつた。ところが、それがどうしたのか、この二三日毎日のやうに敦子のさうした期待は、妙にちぐはぐな落ちつきを失つた父親の態度と、敦子に對してはばかつてゐるやうな母親の態度とで、變に裏切られてしまふのだつた。

以前とはたしかに變つて來た兩親の態度が何故であるかは、どうしても想像がつかなかつた。家のために、生活の爲めに、最善をつくして來てゐる筈の自分の氣持が、どういふ理由にしても、兩親のさうした態度で迎へられるといふことは、敦子にとつては、不安でもあり、さびしさでもあり、腹立たしさでもあつた。

どんな心配事があつても、兩親が敦子に知らせなかつたことはこれ迄一度としてなかつた。貧しい兩親にとつて、敦子は完全にひと

つの力で、敎子もそれをよく知つてゐた。それが今度にかぎつて、敎子には何も話さず、自分たちだけで何かを氣にしてゐるらしいのが、敎子にはたまらなく不滿でもあつた。

兩親の間に、自分の知らない何かゞあるといふことだけは、敎子にもはつきりしてゐた。時々、嘆願的な母親の視線に出逢ふことがあつた。とらへどころのないさびしい氣持を抱いて、だまつて仕事に出てはまた、だまつて歸つて來るやうな日が何日かつゞいた。

雨が降つてゐた。部屋はうす暗かつた。仕事を休んだ敎子が、しやうことなく、部屋のすみに重つて袷のほころびをなほしてゐると母親がだまつて傍に來た。

五六日來の、兩親に對するそぐはない氣持が、母親の顏をまともに見ると、何か知ら淚ぐましく泣けて來さうなのを敎子はじつとこらへてゐた。

『──こんなことを云ふたら、おまへはわし等をつまらん親と思ふぢやろうが──』

さういつたまゝ母親は敎子の前に、だまつて頭をうなだれてしまつた。いくら待つても母親はそのあとの言葉はなか〱言ひださなかつた。それは、生れてまだ一度もみたことのない母親の態度だつた。敎子は、それきり自分と母親とが、遠くへだてられでもするやうに、あはてゝおろ〱してしまつた。

『どうしたんなあ…おつ母あさん…』

敎子は半分泣き聲をだした。

母親は、それがどんなにこの場合言ひ出しにくひものであつても言はなければならないもののやうに、心のうちで觀念したふうで.

『實はなあ敎子、おとうさんがいろ〱いふもんで、わしも考へてみたんぢやが、こんなりぢやうちの家はどうしてんたつていけんしのう、おまへにやほんにすまんが、家のためぢや思ふち奉公に出てみんなをたすけてくれんかのう、山崎の娘がいつちよるところにおまへが三年ほどいてくれりや向ふで二千圓借してくれるちゆうこつぢや…』

敎子の頭は混亂してしまつた。それまで自分がしつかり踏ん張つてゐた筈の大地が急に足許からグラ〱と動き出したやうな氣がして眼の前が、一時に暗くなつてしまつた。自分が今まで、あれほど愛し、あれほど信賴してゐたその兩親から、かうした情けない言葉を聞かされやうなどとは全く敎子は、豫期もしなければ、想像もつかなかつた。

兩親が貧しいといふことは、敎子もよく知つてゐた。貧しいからこそ、さういふことも考へたのであらうといふことはよくわかつたけれども、さうかといつて、──敎子は、兩親のやつたその計算をもう一度靜かに自分の頭の中でやり直してみた。自分が奉公に出る母の言ふ奉公といふ意味がこの場合娼妓のことであり、娼妓かどんな日常と、どんな仕事をするものであるかといふことは、仕事場で

しらず〳〵のうちに得た智識で敦子は何も彼も想像することが出來た。兎に角、自分が今、母親の言ふまゝに、娼妓になることを得心さへすれば、自分と父親が、毎日朝から晩まで働いて得る金額の何年分かゞ一時にこの家の中に入つて來る――。

　さうすれば父親はもう、あゝした貧しい格好をして、毎日働らきに出なくても濟むであらう。早速町のどこかに、いゝ家を見つけてかねて父親が望んでゐるやうに、何かの商賣を始めるであらう。父親が商賣さへ始めたら、母親は日頃あれほど苦に病んでゐる虫歯の治療も氣がゝりなく出來るであらう。妹にも、美しい着物が買つてやれるであらう。それから、弟も小學校を出たらすぐ中學校に入れてやることも出來るにちがいない。そして時々は、家中のものが揃つて活動寫眞位ひ觀にも行けるであらう。さうなれば、家中のものはどんなに悦んで敦子に感謝することであらう。

　自分の家族が、さうした明るい狀態になれるといふことは、想像しただけでも敦子には大きなよろこびであり、さう願ひたい氣持はひと時として敦子の頭から消へたことはない。けれども家中のものが、限りなく自分に感謝しながら、さうして活きて行く半面での自分自身の生活は？

　兩親の計算は十人を活かすために、一人を殺さうとした打算から產れた計算であつて、それはけつして、この人生に於いて正しいいい計算ではないといふことに敦子は氣づいた。わるく言へば、兩親の計算は自分達だけの虫のいゝ計算だとも、とれば取られた。敦子は自分の運命が、自分の知らない間に、さうした兩親の計算の中でとんでもない變なものに創りかへられつゝあつたのだといふことを知ると、それまで何もかもたゞ理屈なしに信頼して來た自分の親にでも、けつして自分の生活の全部をまかして安心出來るものではないといふ事がわかつた。

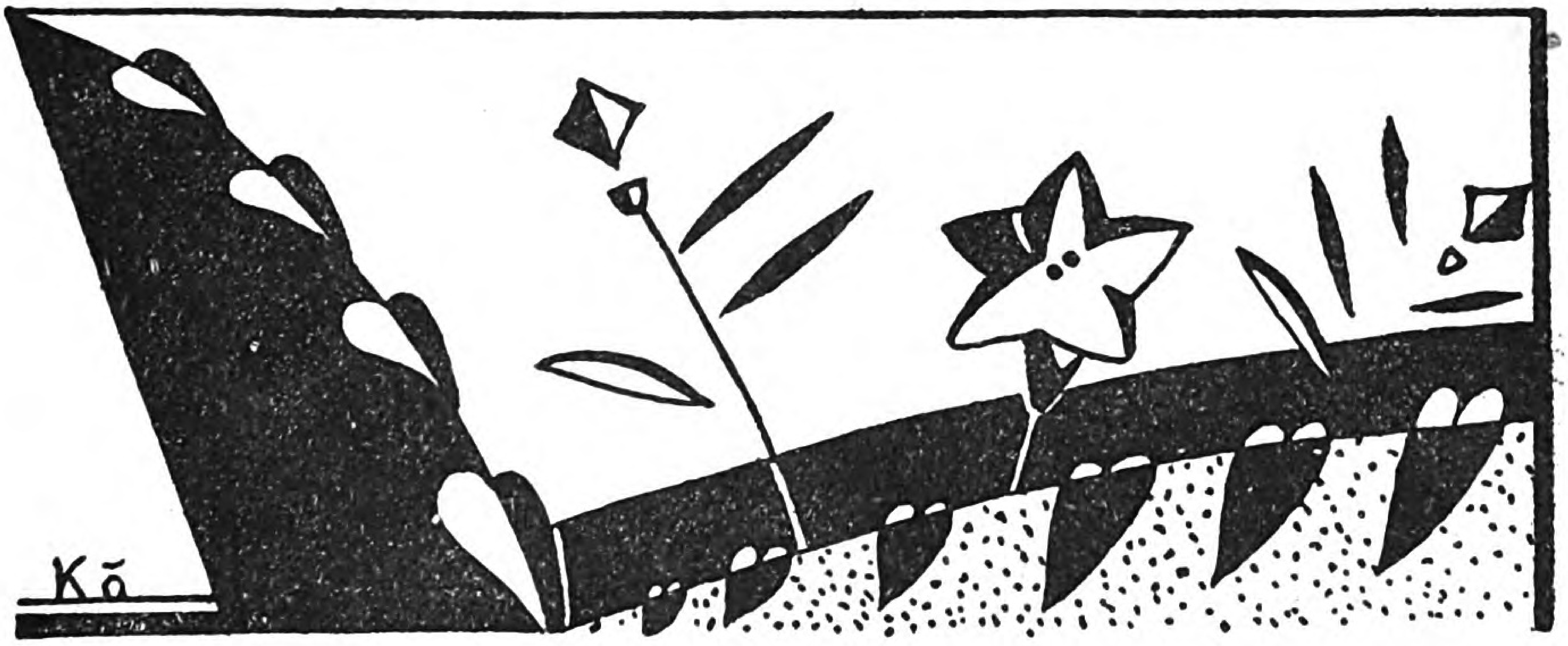
　人間は如何なる場合でも、自分の生活は自分ひとりで常にしつかりと促へてゐて、何ものにも動かされないやうに大切にしておかねばならぬものだと思つた。自分の生活が自分に大切なより以上、けつして他人に大切であらう筈はなかつたからであつた。敦子の魂は、落葉のやうに悲しく、さびしく閉された。こんな風に兩親をハカリにかけてみなければならないのが情けなかつた。

　父も、母も、子供達も、寒い夜の中に深かく眠つてゐた。時々重い寢息をフトンの外にもらす疲れ切つた父親の顏と、貧しさにおとろへた蒼い母親の寢顏を敦子は心臟を千切つて捨てるやうな想ひで眺めた。眠つてゐる皆のものに心のうちで侘びた

　戸外には雨あがりの白い月の光が、敦子の黑い影を地上に映じて何時までも默つてゐた。

　私は活きて行かう。正しい心に!!。

　眞つ裸體のままで地球の上に突つ立つ決心をもつて――



最後の睡眠劑 —三幕—

辻山春子

時　現代、春から夏まで

所　或る病院の一病室

人　石橋　廿七八歳

秀子　廿二三歳

光子　十四五歳

內田芳子　廿四五歳

お松　五十四五歳

その他

—第一幕—

春の午前

二人の若い看護婦がガランとした病室を掃除してゐる。入口に大きな風呂敷包その他二三個が今持つて來たといふ體でおいてある。暫くすると車夫體の男が白い浙圖をかゝえて入つて來る。それをベツトの上において出て行く。

看護婦一　ね一寸、又此處にはフチヂスの患者さんがはいるんだつてね。

看護婦二　ええさうよ。

一　どんな人なの。

二　若い女の人だつて。

一　可愛さうにねえ。

二　ええ。

車夫體の男、メリンスの赤い模様の蒲團をかゝえて來てベツトの上におく、すぐ出て行く。

一　（腰を叩きながら窓の方によつて外を見る）いい病室ねえ、肺病患者にはあつらへ向きよ。

看護婦二も雑布を手に持つたまゝ窓へよる、掃除はもうすんでゐる。

二　他の室より何だか暖かね。

一　陽がはいるからよ、でもあたし、暖かで明るいけど何だかこの室は嫌い、はいると身がすーんとするわ。

二　そりやこの室にはいつてた患者さんが一番澤山死んだつて事が頭にこびりついてるからよ。

一　そりやさうだわ。

二　柴田さんに關野さん——

一　それから飯塚さんも——

二　關野さんはきれいな方だつたわね、あたし、もらはれるんだつたらあの人の目をもらふんだつたわ。

一　（笑ふ）又始つた。

二　だつて本當よ、死ぬ人にはいりやしない。

一　美人薄命て本當ねえ。

二　（氣取つた聲で）美はしくかしこき人を侵すてふフチヂスよ！汝は——

石橋入つて來る、看護婦二、あはてて止める、看護婦一、忍笑ひする。

石橋　すみましたでせうか。

一　ええ、やつとすみました。

石橋　どうも御手數かけました。（見廻して）氣持のいい室ですね、暖かでせう。

一　はあ、暖かです。

石橋　今日から妻が御厄介になります、どうぞよろしく。

一　え、行きとゞきませんけど——

石橋　いたつて我儘の方ですから、きつと御手數かけるでせう。

一　ひどく御惡いんですか。

石橋　ええ、いいえ、一時は惡るかつたんですが、どうやら取止めました。

一　まあ、さうでしたか。

石橋　五月六月つて頃が危險な時ださうですから實はまあ用心まで
に入院させるんです、その方が安心ですから。

一　やつぱり御入院なすつた方が手當が行きとゞきますから――で
はすみましたからどうぞ。

石橋　どうも有難う。

看護婦二人掃除道具を持つて退場、石橋、壁ぎわの荷物に近づいてその紐をとく、一寸中を見るがそのまゝにして窓の方へ行く。

（間）

看護婦内田芳子、手に紫陽花の一枝を持つて入つて來る。

芳子　あら、御免下さい。

石橋　いいえ。

芳子、柱の花瓶に花をさし枝の形を直す。

石橋　（暫く彼女の横顏を見てゐたが、はづんだ聲で云ふ）あ、芳子
さん。

芳子　（驚く）まあ、石橋さん（思はず彼に近づく）

石橋　久しぶりですね。

芳子　本當に――

石橋　驚いちやつた。

芳子　あたしだつて――

石橋　どうしてゐますか。

芳子　どうしてつて御覽の通りですわ。

石橋　何時だつたかそんな噂を聞いた事はあつたが此の病院とは思
はなかつた。

芳子　さう、御存じなかつたの。

石橋　知つてたら玄關ででも尋ねてみます。

芳子　あの、どなたか御入院。

石橋　ええ――妻が。

芳子　まあ、奥さんが御惡いんですか。

石橋　ええ少し――

芳子　さう、いけませんわね、――あたし、この室に今日入院があ
るつて事だつたから何の氣なしに花をさしに來たんですよ。

石橋　紫陽花ですね、どうも有難う。

芳子　きれいでせう。

石橋　ええ。

芳子　奥さんはまだいらつしやらないんですか。

石橋　もう來る頃です、紹介しませうか。

芳子　どうぞ。

石橋　貴女とはまるで反對の女ですよ。

芳子　さうでせうね、だから貴方が――

石橋　だから平凡な女です（笑ふ）

芳子　あら、反對でせう。

石橋　いいえ。

芳子　嘘ばつかり。

石橋　（笑ふ）

芳子　だけど奥さんが御病氣じや不自由でせうねえ。

石橋　ええまあ。

芳子　早くよくおなりなされればいいんですけどね。

石橋　さうですね。

芳子　あら、まるで人の事みたいな御返事ですね。

石橋　（笑ふ）

芳子　（笑ふ）相變らずの貴方ですこと。

石橋　貴女だつてちつとも變つてゐませんね。

芳子　まあ、――だけどさうかしら。

石橋　何がです。

芳子　だつてあたし、自分では昔の氣持からすつかり卒業したつもりですもの。

石橋　まだ卒業しきつてゐませんよ。

芳子　駄目ですわ、たつた今逢つた貴方に現在のあたしがさう早く分るものですか。

石橋　いいや、僕だから分るんですよ、貴女つて者を一番よく知つてる僕が久しぶりにあつて一目で感じたんだもの、今の貴女は三年前の貴女とちつとも變つてゐません。

芳子　だけど――

石橋　だけどぢやありませんよ、さつき逢つた瞬間に昔と變らない貴女の美しさを僕ははつきり感じたんだ、――誤解しちやいけませんよ。悪口は云つてゝも貴女の魂の美しさはよく知つてるんですから。

芳子　（強く首をふりながら）いいえいいえ、駄目ですわ、貴方なんかに分るものですか。あたしが此の二年間をどんな氣持で暮して來たか分りつこありやしませんわ、云ひませうか、あたしはね、もう昔の芳子じやありませんよ、あんな感傷的な傷つき易い魂なんか豚に食はせてしまつたんです。もうどんな事にも驚かない、いいえ、驚けないあたしになつちまつたんです、貴方がどんなに昔の通りだと仰申つたつて自分でよつく分つてますから――

石橋　芳子さん。

芳子　え。

石橋　じや變つてゐないといふ證據を云ひませうか。

芳子　あら、證據ですつて、ええ、どうぞ。

石橋　貴女は何故結婚しないんですか、あれからもう二年も三年もたつてるのにまだ一人でゐるつてのは過去の事にこだわつてるからですよ。

芳子　まあ――だつて。

石橋　昔の通りの貴女だからあんな事にこだわらずにはゐられな、

んだ。
芳子　あたしは過去に こだわつてる爲 結婚しないんじや ありません。
石橋　ではなぜです。
芳子　なぜつて――結婚しようたつて相手がめつからないじやありませんか。
石橋　（笑ふ）馬鹿な事云つちやいけません、世の中に男はウジャウジャしてますよ。
芳子　でも――
石橋　負おしみはもうお止しなさいつたら。
芳子　いいわ、そんな事仰申るんだつたらあたし今直ぐでも結婚しちやうから――でもね、あたしは別に昔の失戀なんかにこだわつて結婚しないんじやありませんのよ、實際の處一人の方が氣樂なんですものね。
石橋　さうですかね。
芳子　ええ、本當ですよ、でも貴方がそんな事を仰申るんだつたらなるべく早く結婚しますわ、でないといやですものね、貴方がたの結婚生活にそんな事が影響でもしたらすみませんもの。
石橋　それそれ、もう貴女のお株が始つた。（笑ふ）だから變つてないと云ふんですよ。
芳子　あら、そんな事――
石橋　さうじやありませんか、昔云つた通りの臺辭をすつかりそのまゝ繰返すんだからな、變つたもないですよ。
芳子　あたしがどう云つたからそんな事を仰申るの、隨分ですわ。
石橋　貴女も强情だな。
芳子　よござんすよ。
石橋　（笑ふ）

間

石橋　芳子さん、おこつたんですか。
芳子　いいえ、一寸考へてたんですわ、だけどあたし今は忙しいんですからもう暫くして又參りますわ、そしてその時に奥さまに紹介していたゞきますよ、よろしくつて。
石橋　貴女が望むんでしたら。
芳子　さう、じやどうぞね、そしたらあたし一生懸命に奥さまを介抱して早くよくして上げますよ　（笑ふ）
石橋　どうぞ（笑ふ）
芳子　では又後程（出て行く）
石橋　（氣の抜けた顔で煙草をふかす）

間

石橋　（所在なげにソロソロ出て行く）

舞臺空虚、間

石橋とお松、秀子の兩腕に付添つて登場

秀子をベットにかけさせる。

秀子　あたし、すつかりつかれたわ、松や、直ぐ横になるから帯をといておくれ。

お松　はい（秀子の帯をとき始める）

石橋　おい、色が悪いぜ。

秀子　さうでせうね、乗物がゆれるもんだから氣持が惡るかつたの。

お松　やつぱり寢臺車の方がよろしかつたんですね――さあ、おやすみなさいませ。

秀子　（伊達卷のまゝ横になる）だつて寢臺車じやあんまり病人らしいんだもの。

石橋　病人じやないか。

秀子　嘘、あたし病人じやなくつてよ。

石橋　馬鹿だな。

秀子　よくつてよ、あたし病人じやないんだから。

石橋　おい、だまつて寢ないか、又熱が出るぞ。

秀子　いや、そんな事、あたしもう熱なんか緣切りよ。

石橋　だまつてねろつたら。

秀子　はいはい。

石橋　（窓外を見る）

お松　（秀子の帯をかたづけて後、包みを整理し始める）

間

秀子　ねえ、貴方――

橋石　（無言）

秀子　ねえつたら――

石橋　何だい。

秀子　こつちに來ないの？

石橋　なぜ。

秀子　だつて。

石橋　なぜつたら。

秀子　あのね、貴方の御顔がみえないから。

石橋　馬鹿だな（ベットのすその方にある椅子にかける）

秀子　そこならみえるわ。

石橋　おい、氣分はいいかい。

秀子　さうね、少し惡いわ。

石橋　じやだまつて暫くねる方がいいぜ。

秀子　ええ。

間

秀子　貴方――

石橋　だまつてゐないか。

秀子　だつてさ、ねえ、貴方、この室ほんとに感じがいいのね。

石橋　今頃氣がついたのかい、馬鹿だな。

秀子　あら、又馬鹿だつて、病院に來たら馬鹿は止す約束だつたじやないの。

石橋　うむ。

　廊下の窓から看護婦が顔を出す

看護婦　石橋秀子さん、名札をかけておきますよ（退場）

秀子　有難う。

石橋　おい。

秀子　何――

石橋　この病院に俺の知つた人がゐるぜ。

秀子　唯――

石橋　看護婦だ、内田芳子といふんだつた。

秀子　内田芳子、何だか聞いた事のある名前だわ。

石橋　そんな事はないだらう、俺の昔の友達だ。

秀子　さう、何だかあやしいわね。

石橋　馬鹿。

お松　（片付け物の手を止めて）旦那樣はまだ暫くいらつしやいますか。

石橋　うむ、なぜ――

お松　何だつたらも一度お荷物取りに行つて來ますから。

秀子　さうね、じや今の内に行つて來ておくれ、あ、そいからね、みつちやんに今夜遊びに來るやうに云つて頂戴。

お松　はい（立つ）

石橋　おい、交たいするからなるべく急いで行つてくれ。

お松　畏りました。

秀子　貴方、なぜさう急ぐの。

　お松と殆ど入れ違ひに芳子登場

芳子　御免下さい、――あの、先刻は失禮しました。

石橋　僕こそ――おい、さつき云つた内田芳子さんだ――秀子です。

芳子　お初に。

秀子　このまゝ御免なさい、どうぞよろしく。

芳子　あたくしこそ。

秀子　石橋のお友達でいらつしやるつてね。

芳子　は、あの、奥樣は御體がお惡いさうで本當にいけませんのね

秀子　ええ、すこおし、大した事はないんですけど。

芳子　早くよくおなんなさらないと困りますわね、體が惡いと心まで病むんですもの。

秀子　本當ですわ。

石橋　おい、芳子さんがお前を一生懸命に介抱して早くよくしてやると云つてらつしたぜ。

秀子　まあ、さう、ほんとによろしくお願ひしますわ。

芳子　あらいいえ、行とどきませんけどあたし出來るだけは致しま

すわ――あの、檢温に參りましたの、一寸どうぞ（檢温器を出す）

秀子　あら、さうですか。

芳子　（檢温器を秀子の脇に入れてやる）

間

秀子　（芳子の顏を盜見てゐたがふと何かに氣付いたように石橋に視線を移して苦笑する）

間

芳子　もう、よかありませんかしら。

秀子　さう（出して渡す）

芳子　（見る）お熱は余りないようですわ。

秀子　さうですかしら――あたしこれ位の氣分の時は、何時も八度近くはある筈だけど――

石橋　おいおい、お前はお馬鹿さんだなあ。

秀子　だつて――あたし、噓を云はれるのはいやですもの、――病人あつかひにされちやいや――

石橋　芳子さん、これですよ、まるで大きな赤ん坊だ（笑ふ）

芳子　いいえ本當ですわ、奥様の樣な方を病人扱ひにしちやたまりませんわ。

秀子　熱はどれ位あります？

芳子　あの、八度ばかり――でも、御動きなすつた割に出てゐませんのね。

子　ええ、でも――

芳子　ではあたくし失禮します、お務めでまだ忙しいんですの。

石橋　まあいいでせう。

芳子　え、又ゆつくりやつて參ります、あの奥様、なるべく安靜になすつてらつしやいませね。

秀子　有難う。

秀子　では御免下さい（出て行く）

間

秀子　貴方――

石橋　何だい。

秀子　あたし、今さつきやつと思ひ出したの。

石橋　何を――

秀子　內田芳子つていふ名についての記憶を。

石橋　（無言）

秀子　貴方の昔の戀人なのね。

石橋　そんな事はないな。

間

秀子　貴方は隱すつもりなの。

石橋　別に――

秀子　じやなぜ昔の戀人つて事を否定なさるの。

石橋　馬鹿だな、お前は、俺がそんな噓の云へる人間と思つてるの

かい。

秀子　だつて――

石橋　そりや暫くは隨分親しい友人だつたよ、しかしそれだけさ、――だが向ふはどんな氣持だつたかそりや知らないね、何でも後で聞いたが、俺を思つてゐたとかで俺がお前と結婚した爲、失戀して苦しんだつて噂だつた。

秀子　あたしも噂だけ聞いたの。

石橋　誰から聞いたのかい。

秀子　正木さんからだつたかしら、あの方が家を出で看護婦におなんなすつた時とかだつたわ。

石橋　二年許りも前の事じやないか。

秀子　さうね、あたし達が結婚して間もなくだつたから。

間

秀子　可愛さうな方ね。

石橋　さうかね。

秀子　あなたはなぜあんな綺麗な優しい方が嫌ひだつたの。

石橋　さあ。

秀子　ねえあなた。

石橋　お前がすきだつたからだらうな。

秀子　まあ。

間

秀子　ねえ、貴方は後悔してるでせう。

石橋　何をさ。

秀子　あの方と結婚しなかつた事を――

石橋　さあ、別に後悔はしてゐないね。

秀子　さう、――あたしね、あの方なら貴方をゆづつてもいいと思ふわ、但しあたしが死んだ後の事よ。

石橋　馬鹿、いらぬ御世話だよ。

秀子　いいえ本當だわ、どうせ長く生きられる體じやありませんもの。

石橋　だまつてねないか、安靜にしろと云はれたじやないか。

秀子　ええ。

間

――幕――

――第二幕――

夏の夜

第一幕から一ケ月半ばかり後の事、室内はすみならされて整然としてゐる、花瓶に眞白い百合がさしてある。ベットの秀子はやせてすつかり靑白くなつてゐる、枕元の椅子にかけて石橋が本をよんで聞かせてゐる。お松は室の隅にうづくまつて食事をしてゐる。

石橋　そんな場合もちやんと考へてゐます、そんな場合を百も承知で充分貴女を許せると思つて、貴女と結婚するのです、もう何も云はないで下さい、奥さんにお願ひしてもいいでせう」都は默つてゐた。「それともあなたがたつて嫌だと仰申るなら」「まあ嫌だなんてどうしてそんな、そんな」「そんなら承諾して下さつてもいいじやありませんか」「でも」都はまだだまつてゐた。管は地の上にしやがんでゐる都の肩のところをしつかり抱きながら「僕は普通りの管ですよ、貴女を普通りに愛してゐますよ、安心して僕にすがりついて下さい、ね、いいでせう、いいでせう」都のほの白い顏が木下闇の中でかすかにうなづいた。「いいんですね」「はい」都はわづかに聲を出した。「じや僕、これから奥さんにお逢ひしませう」管は、都を抱いて立ち上らせると、勇者のように玄關の方へ歩いて行つた。――さあ、今夜はここで止さう。

秀子　いやいや、ね、後生だからもう少し讀んで頂戴。

石橋　もういいじやないか。

秀子　ようよう、お願ひだから讀んで頂戴つたら――

石橋　まあ止さう。

秀子　馬鹿々々(クルリと寢返る)

石橋　(笑ふ)まるで子供になつたね。

間

石橋　おい、怒るなら歸るぜ。

秀子　怒りやしないわ(寢返る)今夜は何頁よんだの。

石橋　さあ(本を繰つて)二十頁を一寸越してるな。

秀子　たつた二十頁なの、いやねえ、一昨日は三十頁だつたわ。

石橋　そのかわり今日の所はクライマックスじやないか。

秀子　だけど都があんまり安々と救はれたからあつけないわ。

石橋　さうだね。

秀子　でも瞳つて女はえらいのね、貴方は三人姉妹の内で誰が一番おすき。

石橋　さあ。

秀子　正直に云つてごらんなさいな。

石橋　俺が女だつたら瞳の樣な風になるんだが男だから都の樣なのがいいな。

秀子　男だから瞳をすかないつてのはどんな氣持でせう。

石橋　そいつは謎だね。

秀子　あたしが云ひませうか。

石橋　うん。

秀子　男はね、理想そのものと同棲する事を好かないのよ。

石橋　(笑ふ)警句をはくね。

秀子　あたしその氣持はよく分るわ、だから貴方も善良で美しい芳子さんを捨てて理想の影すらも見出せないあたしと結婚したのでせう。

石橋　（とぼけた聲で）さうかな。

秀子　あたしは芳子さんて方を知つた後はその事ばかり考へたのよ
なぜだらう、なぜだらうつて心でいつも呟いてね。

石橋　御苦勞な事だね。

秀子　あたしは眞面目で云つてるのよ。

間

石橋　松、御飯はもうすんだかい。

お松　はい、今片付けた所ですが――

石橋　さうかい、じや桃をむいてくれ。

お松　はい（桃をむき始める）

石橋　靜かないい晩だな、おい。窓を少ししめようか。

秀子　もういつとき開けといて頂戴。

石橋　しかし空氣が冷えて來たぜ。

秀子　あなた。

石橋　何だい。

秀子　芳子さんが此の頃ちつとも話にいらつしやらないのよ、なぜ
でせうね。

石橋　忙しいのだらう。

秀子　昨日は回診の時先生についていらつしつただけよ。今日はまだ一
度も見ないわ、なぜかしら。

石橋　知らないね。

秀子　あたし不思議でしようがないわ。

お松　（桃を皿にのせて石橋に渡す）さう仰申ればあの看護婦さんは
いらつしやらないやうですね。

石橋　しかし本館の方にはゐるのだらう。

お松　あちらにはいらつしやいます。

石橋　ぢや忙しいか何かだらう。

お松　さうでせうね、それはさうとわたし一寸出て來ていいでせう
か。

石橋　うちまでかい。

お松　いいえ、そこらで買物して來るんです、食鹽と鼻紙がなくな
つてゐますから、それから果物も――

石橋　今何時頃だらう。

お松　九時位だと思ひます。

石橋　門限までには歸れるね。

お松　大丈夫ですとも、ほんの一寸なんですから。

石橋　ぢや、いつておいで――

お松　はい、奥樣、果物は何にしませうか。

秀子　何でもいいわ、バナナでも水蜜桃でも――あたしが食べるの
でなくて此の人がたべるんだもの。

お松　（笑ふ）

石橋　（桃を食べながら）葡萄はまだかな。

お松　もう出る頃でせう。
秀子　珍しい物があつたら買つて來ておくれ。
お松　はい。
秀子　松や、おあしはあるかい。
お松　まだございます、では一寸行つて參ります。（一寸身づくろいして風呂敷等持つて出て行く）
石橋　桃をむいてやらうか。
秀子　いらないわ。
石橋　（あくびをする）頭が痛い。
秀子　どうして――
石橋　何だかとろとろするばかりで夜ちつともねないんだ。
秀子　なぜでせう。
石橋　知らない。
秀子　もうずつとさうなの。
石橋　うむ。
秀子　なぜ早く云はなかつたの。
石橋　云つたつて何にもならない。
秀子　ひどい人――
石橋　お前はねむれるかい。
秀子　ええ、あのお薬を使ふようになつてからよく眠るわ、あ、貴方もあれをおあがんなさいな。
石橋　いやだ。
秀子　あら、なぜなの、やすむ前にたつた二錠のむとそりやよく眠つてよ。
石橋　俺は薬をのんでまで眠らうとは思はない。
秀子　變な人ねえ、まあ、强情はらないで今夜一晩のんで御覽なさいな。
石橋　うむ。
秀子　では戸棚のお薬を入れる所にあるから一寸取つて頂戴。
石橋　まあいいじやないか。
秀子　だつてあたしがいるわ。
石橋　（舌打して立つ）
秀子　睡眠錠劑と書いた紙がはつてあるでせう。
石橋　これだな。
秀子　二人分だから四粒持つて來て頂戴。
石橋　（歸つてくる）湯がいるだらう。
秀子　ええ。
石橋　（湯を吸口に入れてお薬と共に秀子に渡す）
秀子　（のむ）――貴方は――
石橋　いらない。
秀子　なぜよ、おのみなさいつてば。
石橋　そんな氣味の惡い薬はいやだ。

秀子　まあ、どうもありやしないわ、唯二錠のみさえすればいいのよ。

石橋　分つてるよ。

秀子　でもね、大きな聲では云へないけどこの睡眠錠劑は五錠以上のんだら死ぬんですつて。

石橋　危險だね、本當の事かい。

秀子　多分本當でせう、いつもお藥を持つて來てくれる十五六の小さな看護婦ね、貴方も知つてるでせう、あの人がいつだつたか呑氣さうな顔をしてしやべつてたわ。

石橋　困つた奴だね、つまらない事をしやべつて、――そんな事は知らない方がよかつたに――

秀子　知つたつて大丈夫だわ、あたしはまだ死にたくはないから――

――

石橋　あたり前さ。

秀子　第一貴方を殘して死ぬのはいやだわ（笑ふ）

石橋　（室の隅の疊の上に長くなる）

秀子　風邪ひいてよ。

石橋　うむ。

間

秀子　あたし、眠くなつたわ。

石橋　おねむり。

秀子　ええ。

長い間

ドアをノックする音

石橋　はい（起る）

間

石橋　どなたですか。

間

立去らうとする氣はいがする

石橋　（急に立つてドアをあける）

芳子　（ドアを少しはなれて立つてゐる）

石橋　貴女でしたか、おはいんなさい。

芳子　ええ、――先刻ばあやさんが出ていらしたやうですから、奥樣一人だらうと思つて話しに來たのですけれど――

石橋　さうでしたか、まあ、おはひんなさい

芳子　ええ、じや御免なさい（入る）

石橋　（ベットに成可く遠く二つの椅子をおく）かけたらどうです。

（自分もかける）

芳子　ええ（立つたまゝ秀子のけはひを伺ふ）

石橋　眠つてるでせう。

芳子　さう（かける）

間

石橋　あれに何か話すつもりだつたんですか。
芳子　え、いいえ——（低く）でも、あたし苦しい。
石橋　なぜです、あれに痛手を負はせる事にはなりませんよ。
芳子　ですけれど——やつぱりいけません。

間

石橋　さうですか。
芳子　免して下さい。
石橋　——
芳子　どうしても氣がすみませんもの——それにあたし今迄せつかく苦しんだかひがなくなります。
石橋　苦しんだかいがなくなるつていふと？
芳子　貴方を忘れる爲、どんなに苦しんだか分りません。

間

石橋　まるで矛盾してゐる。
芳子　さうです、——けれどあたしの理想主義が免しませんから。

間

石橋　（立つて秀子の額を伺ふそれから芳子の傍によつて囁く）
芳子　（急に立つてよろめく）
石橋　（抱きとめる）芳子さん。
芳子　いけません、いけませんてば。
石橋　たつた一度だけだ、芳子さん、キスして下さい、そして永遠に路傍の人にならう。
芳子　（狂氣のやうにすがりつく）

ベットの秀子の額が彼等の方へ僅かに動く

芳子　（直ぐ身をひるがへして出て行く）
石橋　（椅子にかけて窓にうちふす）

長い間

秀子　（かみしめた樣な歔欷がフッともれる）
石橋　（驚く、立つて行く）秀子。
秀子　え、——あ、夢を見てゐたわ。
石橋　眠つてゐたのかい。
秀子　ええ、どうして。
石橋　だつて今泣いてたじやないか。
秀子　でも悲しい夢を見たんですもの。
石橋　どんな夢なんだ。
秀子　あたし、口惜しい。
石橋　なぜさ。
秀子　あたし芳子さんから毒殺されたの。
石橋　え。
秀子　貴方を奪ふ爲芳子さんがあたしを殺したのよ。
石橋　何を云つてるんだい、馬鹿だな。
秀子　あたし口惜しくつて口惜しくつて。

石橋　さつき睡眠錠剤の事であんな變な話をしたからさ。
秀子　さうじやないわ、あの人があたしを憎んでるからよ。
石橋　おい、馬鹿な事を云ふもんじやないぜ。
秀子　いやいや、あんな人嫌い。
石橋　へえ、さつきは大層ほめてたじやないか。
秀子　嫌ひ、嫌ひ、大嫌ひ。
石橋　まるで七面鳥みたいだな、くるくる變つて。
秀子　馬鹿々々（泣く）
石橋　おい、どうしたんだ、さつきは本當に眠つてゐたのかい。
秀子　（うなづきながら）夢よ、夢が惡いんだわ。
石橋　よしよし、さあ、もう一度ゆつくりおやすみ、此處について
　るからね。
秀子　（うなづきながら夜着をかぶる）

――幕――

――第三幕――

夏の夜

第二幕より十日はかり後の事、花瓶の百合が萎れてゐる。ベットの秀子は僅かの間にすつかりやつれてしまつてゐる空虚な目で室の一隅を見つめてゐる。お松は戸棚のあたりをごとごととかたづけてゐる。

靜かではあるが落付いたとは云へない長い間。

秀子　（少しいらいらした聲で）松や、さつきから早くお湯においでと云つてるじやないか。
お松　はい、――（立つて來て）一寸片付けてたものですから。
秀子　もう幾時かい。
お松　九時一寸前です。
秀子　さあ、早く行つといで。
お松　はい、あの、何かしておく事はありませんか。
秀子　何もないつてば。
お松　さうですか（道具をそろへる）では一寸行つて參ります。
秀子　（うなづく）
お松　（出て行かうとする）
秀子　松や。
お松　はい。
秀子　お前、ゆつくり行つて來ていいよ。
お松　有難うございます（退場）
秀子　（じつと見送る、といきをつく）

間

何處かで時計の九時を打つ音がする、音の高いそして早い打ち方である。

秀子　九時だ――

間

秀子　芳子さん、優しい美しい芳子さん、あのね、今から一時間立たない内に何もかもがすむんですよ、そしてあたしは貴女に勝つんです、むら氣でよこしまな、その上肺病で死にかゝつてるこのあたしが勝利者になるのよ、おかしいわね――だから今度貴女に逢ふ時はそれはもう間もなくの事ですが、あたしは貴女を恐れませんよ、今迄は實は貴女がこわくて仕方がなかつたのです、そして又貴女もあたしをふわついた可愛らしい女位に見下してらしたでせう、だけどもう駄目ですよ、貴女の沈着も冷靜もあたしをわずらはす事は出來ません、それからあの汚れのない眞白い服もあたしを威壓する事は出來ないんです、なぜならあたしは勝利者なんですからね。

間

光子　（ドアーの外で）姉さん、はひつてもいいの。

秀子　あら、みつちやん、早くおはいり。

光子　（入つて來る）

秀子　みつちやん、もう九時すぎててよ、おそかつたのね。

光子　だつて母さんが忙しいので出さなかつたのよ、それであたし數學の宿題が分らないから一寸お友達にならつて來るつて嘘を云つて出て來たの（笑ふ）

秀子　まあさう、それはすまなかつたわね、御免なさい。

光子　そんな事ないわ、だけどどんな御用、兄さんに云はないで來いと書いてあるでせう、あたし心配して來たのよ。

秀子　何でもないのよ、ねえみつちやん、この間兄さんがね、夜眠れないなんて一寸云つてたの、本當なの。

光子　本當よ、いつも眠れない眠れないてこぼしてるわ。

秀子　まあ、やつぱり本當なの、あたし嘘かと思つてたわ、その時ね、眠れないなら眠り藥をおあがんなさいつて、あたしののんでるお藥を出してやつたけど、どうしても飲まないの、だからあたし今迄嘘だと思つてたのよ。

先子　兄さんは强情つぱりだから（笑ふ）

秀子　じやみつちやん、兄さんにそのお藥をのましてくんない。

光子　のませるわ、だけどのむかしら。

秀子　そりや唯ではのまないわ、計略でのませなきや（笑ふ）

光子　さう、じやどうしてのませるの、姉さん。

秀子　さあ、――ねえみつちやん、兄さんは今でも夜ねる前にブランデーソーダをのむでせう。

光子　ええ、毎晩のんでよ。

秀子　それじやその中に入れちやどう？

光子　ブランデーソーダの中に？

秀子　ええ。

光子　分りやしないの。

秀子　分りやしないと思ふわ、ブランデーソーダの中に入れたら藥の味は消されてしまつてよ。
光子　さう。
秀子　じやみつちやん、さうして頂戴ね。
光子　ええ、するわ。
秀子　あのね、兄さんに云つちや駄目よ、そんな事云つたらあの人は變人だから飮みやしないわ。
光子　大丈夫よ、だけど翌朝寢坊して起きて來た時云つてやるわ(笑ふ)
秀子　それがいいわ(笑ふ)――みつちやん、お藥はあの戸棚の左側に入つててよ。
光子　さう(行く)――この睡眠錠劑て書いてあるの。
秀子　ええ、十粒よ――あたしの分も十粒持つて來て頂戴。
光子　はい、――(歸つて來る)
秀子　あたし今飮むわ、みつちやん、すまないけど吸口にお湯を入れて頂戴。
光　はい(その通りする)
秀子　有難う(のむ)――兄さんはブランデーソーダを二杯のむでせう。
光子　ええ二杯よ。
秀子　じや五粒づつ分けて入れて頂戴ね。
光子　ええ。
秀子　ではみつちやん、もうお歸んなさい、あんまり遲くなると母さんが疑つてよ(笑ふ)
光子　姉さん、松やは何處に行つてるの。
秀子　お湯よ、松やがゐないからみつちやん忙しいでせう。
光子　ええ、隨分忙しくつてよ。
秀子　御免なさいね。
光子　あら、そんな事ないわ。
秀子　用心してそろそろなさいね。
光子　ええ、じやあたし歸るわ。
秀子　さうね、じやもう御歸んなさい、今の事頼んでよ。
光子　ええ大丈夫よ(笑ふ)姉さん、お大事に、さよなら。
秀子　さよなら――あ、みつちやん。
光子　(ふりかへる)なあに。
秀子　あのね、あたし一人で淋しいからみつちやんすまないけど、看護婦室に行つて內田さんて看護婦さんに話しに來て下さるように云つて頂戴。
光子　內田さん？
秀子　ええ。
光子　じや云つとくわ。
秀子　どうぞね、それからも一つ、あたし暗い方が好きだから電氣

を消してくんない。

光子 電氣を消すの（枕元の電氣を消す）これでよくつて。

秀子 有難う、色々すまなかつたのね。

光子 いいえ、じや、さよなら（退場）

秀子 さよなら――（呟く）永久にさよなら。

間

秀子 （急にせき入る、體を少し起して痰壺に黒いものをはく）

間

秀子 さあ芳子さん、何もかもすみましたよ、あのね、貴女はあたしに打ち負かされたんです、聖者の樣に立派な芳子さんが、ちつぼけな脆弱い秀子の爲にですよ、今いよいよあたしは貴女の幸福を永遠に奪つてしまひました、そして貴女の胸の中の青い鳥は羽ばたきして逃げて行きましたわ、もう何處をお探しになつても二度とその青い鳥を手に入れる事は出來やしませんよ、あのね、芳子さん、あの人は此の間あたしにこんな事を云ひましたよ、秀子お前は、お伽噺に出て來る子供のやうだ、年中幸福の青い鳥を探し求めてゐるつて、その時あたしが芳子さんはどうなのつて聞いたらあの人は探しまはるには及ばない、自分の胸に幸福の青い鳥が巣くつてゐるんだからつてかう云ひましたのよ、――だけど芳子さん、その青い鳥もとうとう――（聞耳を立てる）

間、ドアをたゝく音

秀子 はい。

芳子 御免なさい（入つて來る）あら、眞暗ですね。

秀子 ええ、だけど芳子さん、暫くお目をつぶつて御らんなさい。今度開けた時は御月樣の光でこの室の中が水のやうにすつきりしますよ。

芳子 今夜は御月樣がきれいですね（椅子にかける）あの、奧樣お一人？

秀子 ええ、そしてね芳子さん、その水のやうな中にあたしの顔が大理石の彫刻みたいに白つぽく浮んでゐるでせう。

芳子 ええ、あたしには貴方のお顔が今夜はエンゼルのやうに美しく見えますわ。

秀子 さう、あたしは今出來るだけ肅然とした顔付をしてゐたいと願つてますわ、今迄ずつと貴女から輕蔑されてましたものね。

芳子 あら奧樣、何を仰言るんですの、あたしが貴女を輕蔑するなんて、そんな、いいえ、あたしは貴女を尊敬こそすれ、今迄これつぱかしも見下した事なんぞありやしませんわ、奧樣、貴女は今夜はどうかしてらつしやいますのね、あたし貴女のお顔が恐しくなりました。

秀子 おつかないんですつて、まあ嬉しい、だけど芳子さん、貴女があたしをこわがつた夜はまだあつた筈ですよ、もしあたしが眠つてゐなかつたのだといふ事を御存じでしたらね、ほらあの晩の

事ですよ、貴女があたしに何かを御話しなさるつもりでこの室にいらしたけど丁度あの人が來てゐましたわね。

芳子　え。

秀子　そしてあの人が何かを囁くと貴女は急に立上つてよろよろなさいましたわね、あたしはもう少しで目を閉ぢるのを忘れる處でしたよ。

芳子　奥様、許して下さい。

秀子　それからあの人はよろめいた貴女を抱きとめてキスを求めましたわね、そこで貴女はあの人にキスしたんです、あたし達が結婚當時によくしたやうにね。

芳子　許して下さい、あああたし（泣く）

秀子　あたしはあの時始めて解つたんですよ、あの人も貴女を愛してるつて事をね、貴女があの人を愛してゐる事は以前からよく知つてゐましたわ、だけどあの人の方がどうなのかよく分りませんでした、それがやつとあの時はつきり知る事が出來ましたの。

芳子　奥様、止して下さい、そんな事、あたしの心はよく御分りじやありませんか、あたしの心は潔白です、ほんとに潔白なんです。

秀子　ええ存じてますとも、何もかも、貴女は寛大で親切でそして純潔でいらつしやる、あたしは本氣で云つてるんですよ、もし貴女があの人を愛してゐなかつたら、あたしは世の中で貴女が一番好きだつたでせう。

芳子　いいえ奥様、あたしは貴女から好いていたゞける筈です、成程かつてはあたし、あの方を愛してゐました、ですけれど、もう今は決して——

秀子　（さえぎつて）まあ聞いて下さいよ、それからね、芳子さん、あたしはその晩も又來る晩も來る晩もぢつと考へましたよ、考へてる内にね、あの永遠に路傍の人にならうといふ言葉がほんのお芝居にすぎないんだつて事が、まるで夜の明けるやうに分つて來ましたわ、あたしは肺病で死にかけてるんですよ、それは自分でよく知つてゐます、また貴女もあの人も知つてゐる事ですわ、唯貴女がもう少し辛抱してらつしたら萬事好都合に運んで、何のさわりもなくあの人と結婚出來た筈です、あたし正直に云ひますがね、最初の内は事を早く運ばせる爲に、貴女があたしを毒殺しやしないかとよく思つたものです、あたしが貴女の位置にゐたらきつとさうしたに違ひありませんわ。

芳子　奥様、御願ひですからもうそんなお話は止して下さい、貴女は今夜は大變興奮してらつしやいます、も少し氣持を安静になさらないとお體にさわつたら大變ですからね、何もかもあたしが悪るかつたんです、あたしお詫びしますからもうそのお話は止して下さいね。

秀子　だめです、もう少し云はして下さい、そしたらあたしは完全に勝利者になるんです、あたしは貴女の胸から幸福の青い鳥をお

つばらつてしまはねばなりません。

芳子　貴女は、貴女は(はげしく泣く)

秀子　あたしの血の中には何か慘酷なものが流れてるんです(さすがにつかれたらしくあえぐ)

芳子　(泣く)

間

芳子　奥樣、あんまりです、あんまりです、貴女はあたしの氣持を誤解してらつしやいます、どうぞ氣を沈めて考へてみて下さい。

秀子　さあ芳子さん、今あの事が行はれつつありますよ、あたしの第六感がそれをはつきり感じます。

芳子　え、奥樣、貴女はどうかしてらつしやるんじやありませんか(秀子の顔をのぞく)

秀子　いいえ、ほら、あたしは正氣でせう(笑ふ)さあ芳子さん、あたしは今行はれつつあると云つた事を話しますよ、よく聞いて下さい、そしたらね、貴女の胸に巣くつた幸福の靑い鳥が羽ばたきして飛んで行くんですよ。

芳子　あたし、あたしもう聞きません、聞きたくありません、お願ひですから何もおつしやらないで下さい(打伏して泣く)

秀子　(笑ふ)貴女は意久地なしですね、さあもうたつた一言です、お聞きなさい。

芳子　いいえいいいえ、もう澤山です、もうこれ以上意地の惡い事を仰言つたら、あたしだつて怒ります(耳をふさいで後を向いて泣く)

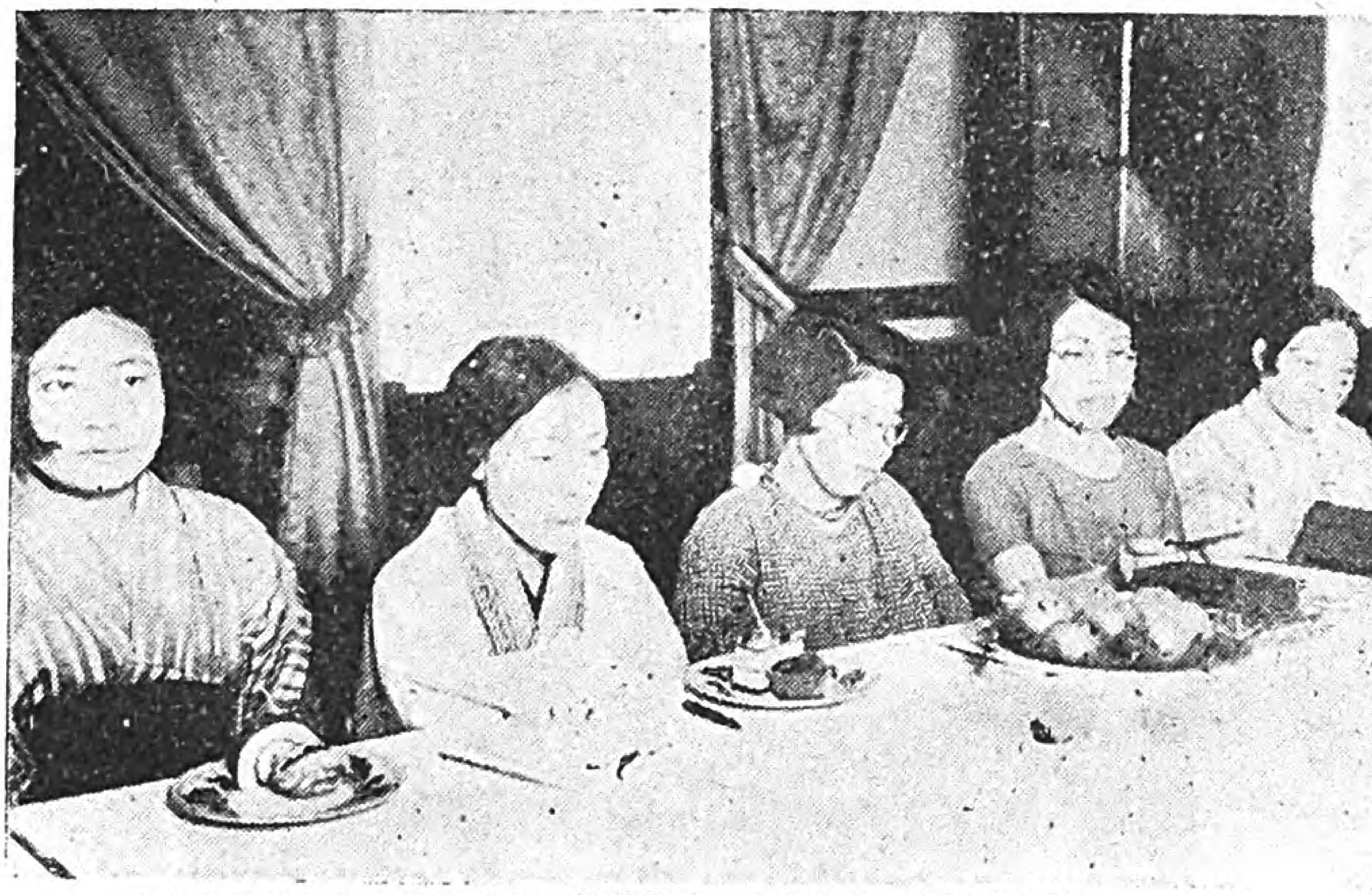
秀子　(狂的な目で室の一隅を見ながらしやべる)あの人は夜ねる前に飲物を取る習慣になつてゐます、ブランデーソーダを二杯程ですけどね芳子さん、今夜のそれには何か外のものが入つてるかも分りませんよ。芳子さん、あたしは知つてますよ、あたしがのんでるあの睡眠錠劑は五錠以上のむと危險だつて事をね、あの人はそれを十錠も飲んだんですよ、なんにも知らないでブランデーソーダと一緒にね、あの人に忠實な妹は兄さんをよく眠らせる爲喜んでそれを約束したの、だからあたしが神樣に見離されてゐない限りその事はもう行はれてゐる筈です。さあ、今こそ分つたでせう、優しい美しい芳子さん、胸の中に幸福の靑い鳥を抱いておいでの芳子さん。ああ、だけど、貴女の胸の中の靑い鳥は羽ばたきして逃げて行つたでせう。貴女は負かされたんですよ、貴女の傍で今死にかゝつてる此のつまんない秀子の爲にね。芳子さん、あたしは石橋を殺害したんです、あたしは自分の夫を殺しました、あの人が貴女のものになる日が永遠に來ない爲にね。(あえぐ)

芳子　(一生懸命に耳をふさいで泣いてゐる)

月光白く流れ入りて、秀子僅かに身を起し痙攣しつつ幽かに聲なく笑ふ。

——幕——

福岡市の聯盟支部座談會



左から山本有子，辻山春子，林芙美子，八木秋子，永嶋かつ子。

こんど林芙美子、八木秋子の二人が九州へ行つたのを機會として福岡支部では七月十七日午後一時から同市本興座の三階で歡迎を兼ねた座談會が催されました。辻山春子さんが專ら中心になつて準備して下さつたせいか、會するもの婦人廿人、男子十五人内外で同市としては殊に聯盟支部最初の試みとしては大成功でしたが、何よりも心置きない歡談のうちにいろ〳〵な意見を交換し、愉快な話に時の移るのを知らない有樣でした。

折から暑中休暇中なので女專や九大などの婦人聯盟員の見えなかつた事は殘念でしたが併し男子側からも婦人側からも面白い意見やら——質問例へばプロレタリア文學の政治的目的に對する效果の問題、または文藝の政治的價値と藝術的價値の二元論の可否如何だとかつてやゝこしい話から、女人藝術に對する希望が出るやら中に男子の方で林さんの神樂坂時代の、仲間があつて、飛んだ所で舊惡？が露見して滿場を喝采に湧きたゝせるやら、罪のない話にはさすが二人の私服も汗をふき〳〵恐縮してゐました。誰も彼もがみんな愉快で談いよ〳〵佳境に入らんとする時、林、八木のふたりは汽車の時間にせき立てられて心を殘しつゝ去らねばなりませんでした。終りに辻山春子氏、渡邊梅子氏、文子氏、永島かつ子氏、山本有子氏等の御好意を深謝、九州日報社の御後援にお禮を申上げ今後の皆樣の御努力を切望するものです。尙、今度下關、門司を合せた關門支部と、名古屋にも聯盟支部のつくられんとする事を知りました。どうか一層の御盡力をお願ひいたします。

九州の旅行から歸りて

北九州の講演旅行をすませて七月二十九日暑熱の東京へ歸りました。鹿兒島から別府の方面まで行くはずでしたが途中いろいろな都合で長崎縣早岐町を終點としてきり上げ、佐世保、長崎、熊本から先きを中止して歸る事になつたので後で佐賀縣有田の有志と、關門の早大校友會及び大阪朝日新聞九州支局の主催で俄に有田と門司で講演會を開く事になり、その間には大阪朝日新聞主催の海上見學團に加はつたり、門司の近傍を見て廻つたりする事の出來たのも望外の幸せでありました。

九州の地は一歩門司へ上るともうはつきりした色彩で現はれました。沿線につゞく大工場の煙突、

ことに八幡製鐵所の一大偉觀は殆ど想像以上で堂々たる近代機械工業の姿とそこに働く勞働者の集團とは私達に多くのものを敎へてくれましたが、一方には福岡市のあの上品な智的な市街や、おつとりと大柄なしかも明るい線の人と、それから佐賀縣武雄温泉の靜かな優雅な情調、早岐の海の面白さ――九州は近代資本主義の代表的地方であると共にまた詩の國でもあります。

この間に、私共は毎日あちこちと汽車にゆられて飛びまはりながら、殆ど言葉にもつくせない人々の温い心に浸る事が出來ました。手足を思ふさまのばして子供のやうに喜び、いひ度い氣持を憚らず朗かに語つた、ほんたうに我まゝ一パイの旅でしたが、九州の自然よりも何よりも私達が受けた印象の深さは、その地の皆様の心からの聲援でした。

最初に、まづ林芙美子さんのお父さんを擧げなければなりません八幡市中本町に商賣を營んでおられますが、芙美子さんとは十六七年振りの再會で、私達のために盡力して下さつたことは、單に父娘といふ感情以上に、私はお父さん宮田麻太郎氏の人間そのものに負ふところが多いであらう事を信じて憚りません。

それから福岡市の辻山春子さんです、最初の聯盟支部を設立して下さつた方で、お二人のお子持であるのに、御一緒に講演をして下さつたり、十七日の聯盟支部座談會のあの盛會は、みな辻山さんの獻身的な御骨折によるものでした御良人の辻山氏も私達のために九大醫學部のお仕事にも差支へはしないであらうかと氣づかはれる程多くの時間を割いて御案内下さいました。私達はお二人の御好意に甘えてゆつくり旅裝をといて泊めて頂いたりして――

佐賀縣武雄温泉の田中醇吾氏――林さんは有田でやつた樂燒のお茶碗に「偉大な人格者」と書いて贈りましたが、田中氏はむしろ至誠の人とでも申すべきでせう。私達は氏の家を「避難所」と名づけて自家へ歸るんだと喜び合ひながらどこの講演にも夜おそい汽車で歸つては温泉で汗を流し、のびのびと安心の手足をのばしました。一家三十二人、親戚何百人といふ大家族で一門を擧げてあらゆる盡力を惜まず援けて下さつたことは感謝の言葉もありません、殊に、氏の長女治子さんが私達に與えたあらゆる意味での美しい印象は、長く忘れないものである事を申上げたいと思ひます。

有田の自治研究會の有志、並に深川隆氏の御親切――自治研究會の方々は陶器の職工あり釜焚きあり、神主さんあり、青年會長ありその人とが陶器で有名な香蘭社の社長深川氏と協力して私共を應援して下さいました。私達一行は深川氏の別莊でかつて見た事もない調度や御馳走に戸惑ひし、そして樂燒の寄せ書きに興じました。深川氏はリベラリストで高雅な風采研究會の人々は素朴なしかし潑溂とした野人だつた、そのコントラストは私達が講演會のあとで招かれた谿川の河鹿をきく小亭で催された宴會に、遺憾なく表はれたそれは愉快な一夜でした。

最後に、關門の早大校友會の諸氏、大阪朝日新聞九州支局長鎌田氏などに、深く感謝いたします、あの大朝支局の講堂に溢れた熱心な聽衆――それには校友諸氏と大朝支局のお骨折がどれほどだつたでせう。去りゆく船の上から門司の街上にまたゝく灯火を眺めて、最後の大成功を祝し合つた。

九州よさようなら。九州のよき人々よ、健在なれ――（八木）

婦人彙報

◇不戰條約效力成る

「人民の名に於て」の文言の爲に紛爭を生じ、一層有名になつた不戰條約は、遂に田中內閣の咽喉笛を食ひ切つたりしたが、いよ〳〵我國でも、宣言付きで批准が濟んだので、七月二十四日から戰爭放棄の效力を發生する事となつた。各新聞では、平和將來の曙光のやうに囃し立てゝは居るが、各列强國では、表面にお互に平和を誓ひ盛んに軍備の充實に餘念のない事を私達は知らなければならない。

◇日本食の研究に米國へ

日本女子大學の研究所にあつて熱心に榮養食の研究中だつた金子哲子さんは今度母校から派遣されて、米國コロンビア大學に日本食研究のために一ヶ年間留學する事となつた。哲子さんは同校の卒業生で、日本食の科學的研究の篤志家で、日本婦人はもつと食物に對して知識を持たねばならぬ事を力說してゐる方である。

◇危險な勞働

常に割合に婦人勞働者の負傷率は少ないとされてゐるが、それは非常に危險に曝されてゐる金屬、化學産業勞働者に比較してゞあつて、事實は負傷率は決して少くない。十七日靜岡縣高岡村入山瀬、丸金製紙工場の女工鈴木よし子さんは作業中メーンシャフトに卷き込まれ、それを傍で働いてゐた廣谷みち子さんが救ひ出さうとし、二人共無慘にも死亡した。

◇豚のやうな人間生活

現內閣の旗印は、財政緊縮と社會政策で、安達內相はまづ貧民窟の改善を行はうとしてゐる。全國に散在する百戸以上の集團せる不良住宅地區は二百十七ヶ所、こゝに居住してゐる人達は實に三十一萬餘人に達してゐる。かゝる細民地區の生活狀態は、全く豫想外で東京府下三河島細民街では、疊一疊につき一人五分といふ有樣、一軒の家で、夜と晝と居住者が變り或は、木片を組み合せて雨露を凌いでゐるなど珍らしくない。東京大阪名古屋等であの不良住宅の改善のために着手し、既に收容してゐる所もあるが、僅に二百戸世帶位のもの、どの程度まで安達內相は國民に公約を果すか？

◇丸山新警視總監の大英斷

警視總監更迭の置土産として、三業地指定の許可があり問題になつたものだが、長岡四日警視總監が、內閣倒壞の餘波を蒙り、慌しく總監の椅子を去り、問題をかもす餘地もなかつた。新丸山鶴吉警視總監は前總監の置土産のない爲に手土産のつもりであるまいが、反對に昭和二年以來受けつけて積んでおいた管下二業地許可申請百五十二ヶ所の書類全部を却下する事となつた。今後も止むを得ぬ事情以外のものゝ新設或は擴張は許さぬさうである。

◇人殺しの夏

今年の暑氣は近年にない暑さの爲か昨今、家出人、自殺者、精神病者が續出する。警視廳書き入れ時の七月十四日のお盆を控へて、男四十三名女三十三名の家出人の屆け出があつた。且烏山精神病院に收容中の患者、又は非監置の精神病者が物騷にも脫出したのが十二名もあり、四谷區谷町の印東あかといふお婆さんが、發作的に精神に異狀を呈し、突然知人の玄關先きで工業用の硫酸を呑んで自殺するなどの物凄い暑さだ。この殺人的の暑さは東京ばかりでなく全國的で、弘前署の留置所の如きは、精神病患者の保護檢束で每日滿員を傳へられ、東京市外長崎町の武藏野線長崎驛構內のレールは暑さにふくれ出したとは恐ろしい

◇罪を悔いての自殺

下田歌子女史を校長とする順心女學校一年生熊坂文代さんが、學校から姿を消し、自殺した事實は問題視されてゐる。文代さんは貧しい境遇から通學してゐたのだが、ふとした出來心から級友の金二十錢を盜み、教師に發見されて叱られ、それを悔いて自殺したといふのである。學校側では、ふとした出來心はありがちな事だから將來を思ふて訓誡したまでだといふし家庭では、盜んだといふのも事實かどうかわからない。死んだ者に口無しだから泣寢入るばかりだが學校でもう少し溫い態度で接してくれたら、死ぬ程の事もなかつたらうにと學校の冷い態度に泣いてゐる。學校教師の情操に對して一種の定說のある今日、この少女の死は一條の悲劇として看過す事の出來ないものを持つてゐるといへやう。

◇三宮署の針の神經

神戶市外三宮パウリスターでプロレタリヤ移動美術展覽會開催中の七月十三日、三宮署特高係りが出張して會場內に揭出してあつた大山郁夫氏の演說姿を臺紙に張り「我等の大山を守れ！」と書いた

ものとレーニンの肖像を押收し、責任者を檢擧取り調べ中である。最近無產運動取り締りは、藝術運動に對して極度に壓迫を加へて來たが、大阪朝日新聞紙に無事掲載されたものが、プロレタリヤ美術展覽會で押收されるとは、あまりに話にならぬ話ではないか。

◇米國刑務所の破獄爭動

七月二十八日の外電によれば、ニューヨーク州のオーバン刑務所で囚徒が破獄を企て非常な爭動を引き起した。當日暴動の首謀者連は、先づ火薬庫の看守を襲撃して武器、アンモニヤ、爆彈等を奪取し、これで他の囚徒を武裝せしめ刑務所の正門目がけて爆彈を投じて破獄に突貫した。同刑務所長は直ちに看守を召集し、機關銃隊を指揮して應戰し、二名が射殺され十一名が負傷し、十一名が脱走目的を達した珍事を現出した。この亂戰のために、四百萬弗を投じて建築された刑務所は廢墟となり、破獄をしそこなつた囚徒は、庭に一夜をすごすし、四百名の軍隊は之を監視してゐる。

◇十六娘の妄想姙娠

神戸市某工場の女工阪信靜枝さんが、親の下をはなれて伯母の家から通勤してゐるが、或夜遊びに來た少年男工と戯れ、たま〳〵男工の手が彼女の局部にふれた月から月經がとまり、姙娠の症狀を呈して來た。靜枝さんは、てつきり姙娠したものと思ひ、思案にあまつて自殺しやうとしたが故郷戀しく、葺合署人事相談係りに相談を持ち込んだので同署員は說諭の上伯母さんに引き渡したが、これは少女の性的智識の缺如から來た妄想姙娠なのであつた。

◇拷問致死で署長訴へらる

警察署の拷問により夫が遂に死亡したといふので、妻の大阪市東成區中本町六三中本コトメさんが正川辯護士を代理人として大阪府中本警察署長中岡豐馬を相手取つて、大阪地方裁判所檢事局に傷害致死の告訴狀を提出した。理由はコトメさんの夫奎三氏が、同業の菓子小賣業西尾延利氏と口論したといふ廉で十日間の拘留に處せられたが、二日目に警察署から病氣になつたから引き取りに來いといつて來たので赴いた所、拘引前全く健康狀態だつた夫が瀕死の重態である。而も奎三氏は自宅に連れ歸られてからも「毆るなら毆れ、俺は死なぬぞ」と口走りつゝ間もなく死亡し、且額腕胴等十數ケ所に打撲傷があるので、警察署で拷問に逢ひ、死に致つたといふのである。

◇露支國交漸く緩和

七月十二日支那政府が露支協同經營の東支鐵道を奪ひ、暴力的奪還を企てたのから端を發し、露支國交に戰雲漲り、兩軍對峙して今にも戰ひの火蓋が切られさうにも時局は切迫して來た。ソヴエートロシヤのいつになき强硬な態度、支那の打倒侵略主義等が各帝國主義的列强の不安を買ひ、不戰條約による干渉を行つたりした。けれど飽までロシヤは戰爭か然らざれば露支の直接的商議的解決かを持して讓らないので最初から戰ひの意志なく、各列强の手先きで踊つた支那は妥協的態度に傾き、あはやに見えた兩國國交も漸次緩和され各代表を出して協議せしめ平和的問題を解決せしむる傾勢に向かひつゝある。

◇教員給料不拂ひの村

長野縣下伊那郡波合村では現在滯納額八千餘圓あり、財政が非常に窮迫し、教員の給料を三ケ月分も支拂へぬ仕儀である。それで同村小學校長宮下氏は縣當局に陳述したので大騷ぎとなり、早速同村長に對して速時俸給を支拂ふ樣、縣當局より命令を發した。

◇歌志内住友炭坑爆發

北海道空知郡歌志内の住友炭坑は、八月五日爆發し、入坑者八十四名中死體判明者二十五名、無事脫出者四名、重傷者一名で殘りの五十四名は生死不明である。原因は坑夫の煙草からといはれてゐるが、坑口には泣き叫ぶ家族達が集り、慘鼻を極めてゐる。

◇赤色記念デー

歐洲大戰の火蓋を切られた八月一日を期し、反帝國主義戰爭を率ずる共產黨示威運動の日赤色記念日は各國に於て、支配階級の嚴重なる彈壓の中に勇敢にも決行された。パリーでは警官ばかりでなく三萬の軍隊が繰り出され、飛行機が市の上空を旋回し、無線電話を据ゑつけて偵察するなど水も洩らさぬ警戒ぶり、危險と見なされた外人が四十八名國外追放をうけ、爆彈三十一個發見された。ポーランドでは五百名の共產黨員監禁され、支那上海でも多數の黨員が銃殺された。日本でもこの日未明に一齊に反戰運動の傳單が張られたが、右翼陣營が跳つてゐる昨今の事とて十數名の檢擧者があつたのみで靜ひつであつた。

× × ×

編輯後記

夾竹桃の花が赤い、百日紅も眞盛りである。炎熱九十八度、ボーッとなる時があるが、暑苦に負けて弛緩したものを讀者に渡してはならないとみんな一生懸命である。山からの便り、海からの便り、若い人たちは遊心そぞろなるも無理はない。此號が出來上ると十日ばかりを海に山に飛んでゆくでせう。私はしなくてはならない用事が山積してゐる。獨居しづかに夏を味はをう。

別紙豫告にある新秋小說特輯號を御期待下さい。今春三月の自傳的の戀愛小說號よりも一層期待されたい。猶此際培大の讀者を誌友諸氏の助力をもつて獲得したい。培數の讀者を得る事は「女人藝術」を確固たる基礎におく事になるのです。

時雨脚本集は九月上旬市に出ます。いち早く申込んで下つた誌友に長くお待たせしました。（時雨）

暑熱九十八度、まさに殺人的な暑さです。雨がなくてこんな日が今十日つゞいたら、お魚のやうに死んで浮び上るだらうと、編輯室の誰れ彼れ云ひ合ひ乍ら仕事をしてゐます。この明け放しの編輯室ですらですから、工場に働く人達や、農村の人達の辛さが思ひやられます。さういふ人達に、この盛夏に物した九月新涼號が、清氣と活力とを送り込む役目を努めてくれますやうに。（素子）

眞夏も過ぎようとしてゐる、誰も彼れも避暑に行つてわづかな時を氣安めに過して來るが、座つてゐて暑さをうけるよりも汗の流れるのにまかせて働いてゐる方が返つて涼しい事を體驗した。（西村）

いつも若いお方と御一緒のせいかお元氣ですねと私に云つてくれた夫人があつた。これは女人藝術社のおかげです。あそこで各方面の若い方々の持味を私心から禮讃してゐるのです。と私は云つたことだつた。『女人藝術』の誇りとするところはこの若さであり力である。内外ともに多大なる犧牲と辛勞とを拂ひつゝあるこの社の仕事に、私の心は、すべての苦衷と矜持とをおもふ。私は女人藝術社の社運、この『女人藝術』の名によつていとなまれること、又この『女人藝術』から出てゆく各方面への女流人材を心より祝福したい。これは永くかゞやきある女流文藝の搖籃であり、又、女流文藝の萬華鏡であり、一面婦人の地位向上の努力の船であらう。航海今すでに正午に向ふ。緊張した壯快な旅である。（花世）

だるい日もねむい日も、おひるすぎ、外に飛出してパッと傘を擴げる瞬間に、シュンと身がひきしまる。暑さ、よろしい、又一つの仕事のよろこびだ。遠い雨にこがれてゐるボテボテの路を歩きながら降りそうもない空を見上る。汗とほこりでうであげられた體を最後の努力と左内坂をのぼり、社の臺所で冷たい麥湯をコップに一ぱいグッと一息にのみほす時の氣持のよさ。人生は朗かである。（みどり）

昭和四年八月廿五日印刷
昭和四年九月一日發行（毎月一回一日發行）

送料一部壹錢五厘

定價
1部……40錢
6部….2.30錢
12部….4.50錢

一誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
一郵便切手代用は一割増の事。

發行兼印刷者——長谷川時雨
編輯者——素川絹子
印刷所——秀英舍
大賣捌——東京堂 北隆館——大東館 東海堂

發行所 東京市牛込區左内町三十一番地
女人藝術社
電話牛込(24)一七八九
振替東京 七五八二五

他より比較的風が通つて涼しい編輯室だのに、今日が立秋と云ふ日、なか〳〵の暑さだ。夕方近くひぐらしが鳴き出してやつぱり秋かなとも思つてみた。一日の編輯が終るとみんなで物干へ出る。私達のバルコニーだ。星が降る程きらめいて一滴の雨も當分落ちては來なそうだ。（熱田）

旅心のやうやく淡れかけた眼で見ると、東京の夏の雲も何と綺麗な色でせう。編輯室ではみなさん眼をくるくるして忙がしいのですが、何しろ早く編輯を濟して海へ山へ——とそれは樂しさうです。私と林さんは今度の九州旅行で十七八日を過しました。長崎熊本から鹿兒島別府などは都合上行かずに歸りましたが、各地で聯盟員の皆様にお目にかゝれた事は何より愉快です。九州は人も自然も明るさと太い線と瞭乎りした强さを持つてゐる事を殊に感じた事でした八幡製鐵所など最も印象深く感じたものです。各地に力强い聯盟支部が出來ますやうに——。（八木）

大いに期待をかけてゐた全女性進出の歌は、殘念ながら一同の高い希望には添ひかねる程度でしかなかつた。あの發表によつて再三の應募の餘儀なさを知つて貰ひ、奮つて投稿を希望する。

株式會社秀英舍印刷